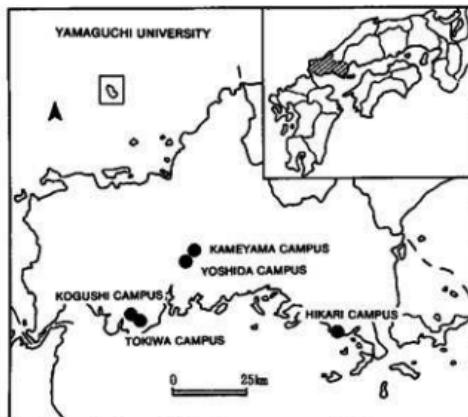


山口大学構内遺跡調査研究年報XII

1994

山口大学埋蔵文化財資料館

山口大学構内遺跡調査研究年報 XII



1994

山口大学埋蔵文化財資料館

序 文

山口大学構内遺跡調査研究年報と題するこの図書は、だれにでも分りやすいものではない。共有財産として享受すべき文化財とこの報告とのあいだには、落差と言つていいほどの開きがあるだろう。しかし、埋蔵文化財として案件となる遺跡はすでに不調を訴える患者のようなものであるから、あたかも医学における臨床のように調書、すなわちカルテを作成するところから出発しなければならない。それは、事實を正確に記述し、公表するものであるがゆえに、明晰な定義が要求され、どうしても学術書となってしまう。この点は、なにとぞ大方のご理解を賜りたく存ずる次第である。

なお、今年度に付記すべきこととして、いわゆる吉田遺跡保存地区の遺跡公園化と遺跡が埋没する大学会館の前庭部分の環境整備が補正予算で執行された件がある。当資料館の事業ではなかっただけに、遺跡保存に尽力された先人ならびに関係方面に厚くお礼申しあげたい。また兼務の館長としては、本書の作成が調査員に激務となっているだけにお詫びとお礼を記すことにお許しいただきたい。

山口大学埋蔵文化財資料館長

中 村 友 博

例　　言

1. 本書は、山口大学埋蔵文化財資料館が、埋蔵文化財資料館運営委員会の指示を受けて、平成4年度に山口大学構内で実施した調査の報告書である。また、付箇Iとして「吉田遺跡第I地区E区の調査」「吉田遺跡第I地区E区の追加調査」を、付箇IIとして「山口県内出土の紡錘車からみた弥生社会－角閃石安山岩製紡錘車の分布から－」を、資料紹介として「吉田遺跡第I地区A区出土の未報告遺物について」を掲載する。
2. 現地における調査・研究は、人文学部考古学研究室 新竹由美・安武千里、広島大学文学部考古学研究室大学院生 村田裕一氏の協力を得て、資料館員 豆谷和之・吉富紀子が担当した。また、出土遺物の整理は、同館員 則近和佳代・田崎美佐・佐野正子が行った。吉田遺跡第I地区E区の遺物整理は、同館員 豆谷・吉富・則近が行つた。
3. 調査・研究における事務一般は、事務局庶務課学事係が統括し、実施面においては、各関係部局の事務部があたった。
4. 現地における遺構などの実測は、豆谷・吉富・村田・新竹・安武が行つた。
5. 第2章の遺物実測は豆谷が行い、石器の一部を村田が補佐した。第3章の遺物実測は、田崎が行つた。付箇IIの遺物実測は、豆谷・新竹が行つた。製図は、佐野が行つた。
6. 本文の執筆は、第3章の遺物を田崎が行い、その他は豆谷が行つた。なお、資料紹介は実測・製図を含めて人文学部考古学研究室 中村幸弘が行つた。
7. 現地における写真撮影は、吉富の補佐を得て豆谷が行つた。遺物の写真撮影は田崎が行つた。
8. 石器の石材鑑定は山口大学理学部助教授 永尾隆志氏に助言を仰ぎ、懇切な御教示を得た。吉田構内農学部連合獣医学科棟新宮に伴う発掘調査の出土縄文土器について、奈良大学文学部文化財学科教授 泉拓良氏に実見していただき助言を得た。記して感謝の意を表したい。
9. 本書の編集は、豆谷が行つた。
10. 調査・研究においてはカラースライドを作成しており、出土遺物とあわせ埋蔵文化財資料館が保管している。
11. 調査担当は下記のとおりである。(平成4・5年度)

調査主体　埋蔵文化財資料館　館　長　近藤　高一 [～平成5年6月5日]

	同	中村 友博〔平成5年6月6日～〕
	館 員	豆谷 和之
	同	吉富 紀子〔平成4年4月1日～ 平成5年3月31日〕
	同	則近和佳代〔～平成5年3月31日〕
	同	佐野 正子〔平成5年4月1日～〕
	同	田崎 美佐〔平成5年4月1日～〕
事務局	事務局長	萱沼 一
本部庶務部	部 長	村上 昭生
庶務課	課 長	久保 鉄男〔～平成5年3月31日〕
	同	岩本 義男〔平成5年4月1日～〕
	課長補佐	松本 正史
学事係	係 長	池田 圭介〔～平成5年3月31日〕
		原田 豊〔平成5年4月1日～〕
		宮崎 邦雄

12. 調査・研究にあたって下記の方々の多大な御協力と援助を受けた（官職は平成4年度）

事務局庶務部	人事課長 平田篤康、同課長補佐 有吉 明、同係長 柳 洋二、 同係 村田正義、森山 謙、清廣哲之
経理部	部長 大塚陽雄、主計課長 鈴木賢男、同課長補佐 森本茂雄、経理 課長 山口 博、同課長補佐 林 宏行、総務係長 長谷知之、予算 係長 上谷克弘、監査係長 野澤章三、管財係長 末次敏男、用度係 長 有近博成、同係 須川 悟、矢野 亨
施設部	部長 柳田耕治、企画課長 長岡節也、建築課長 平峰英一、同課長 補佐 上田孝雄、設備課長 池尻安宏、総務係長 上田 隼一、同係 伊藤哲雄、企画係長 三浦幸一、建築第一係長 川西智信、同係 中 谷幸一、武市佳人、建築第二係長 小川賀津夫、同係 澤谷弘美、電 気係長 吉永峯生、同係 松田清司、岡野友資、前田康孝、機械係長 鈴木輝美、同係 鹿嶋正則、板垣健一
人文・理学部	事務長 宮原 級、事務長補佐 増谷 泰、同 田中善人、会計係長 平川和孝、同係 田坂武男、有吉義和

教育学部 事務長 西野雅博、事務長補佐 藤川年章、会計係長 荒石光明、附屬光小学校校長 岸 光城、同副校長 古谷正明、附屬光中学校校長 末廣正巳、同副校長 村永博憲、光附属学校係係長 林喜久雄、同係
樹野博之、寺西 智、川上けい子、藤本勇二、古迫芳己、南ヒロ子

医学部 事務部長 東府義之、同次長 畠西繁夫、総務課長 今里憲生、同課長補佐 原 和男、管理課長 山本尚志、同課長補佐 石崎啓介、亦野高志、庶務係長 森田義富、総務係長 伊藤篤紀、経理係長 中川憲治、施設管理係長 三原秀蔵、同係 村上民子、板井貞彦、田村勇治、建築係長 河田徹也、設備係長 山本安雄、同係 吉野高己、前田祐史、橋本一範、弘中智則、永富 保、田中武敏、田村悦夫

工学部 事務長 石川俊輔、事務長補佐 中島岩弘、庶務係長 宮部信之、経理係長 伊藤敏徳

人文学部考古学研究室

光市シルバー人材センター

作業員

<吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査>

石津京子、茨木重美、金海美代子、金子万代、金子幸江、河村伸子、栗林さつき
末広安子、杉山久枝、高野和江、高野恵子、田中博、津野田志津子、寺田秀夫
篠田慶子、中村美佐子、馬場瑞江、橋田章子、原千寿恵、原百合子、深野生恵
福田良子、赤野芳江、三浦恵己子、宮内和子、三好澤江、三好茂子、森近冴子
山崎シヅエ、山下りつ子、山田伊津子

凡　　例

- 吉田構内における調査区および層位・遺構の位置は、国土座標を基準として北から南へ1～24、西から東へA～Zの番号を付して50m方眼に区画した、構内地区割のAの24区南西隅を起点（構内座標 $x = 0$, $y = 0$ ）とする構内座標値で表示する。なお、平面直角座標系第Ⅲ系における座標値（X, Y）と構内座標値（x, y）とは下記の計算式で変換される。

$$x = X + 206,000$$

$$y = Y + 64,750$$

- 各遺構は下記の記号で表記することがある。

土壌………SK, 溝状遺構………SD

- 本書に使用した方位は、吉田構内では国土座標を基準とした真北、他の構内では磁北を示す。

- 標高数値は海拔標高を示す。なお、「吉田遺跡第I地区E区の調査」および「吉田遺跡第I地区E区の追加調査」の遺構図面に関しては、過去の調査の為すでに標高が不明となっている。

- 本文中の遺物番号は、挿図・図版・出土遺物観察表の番号と一致させた。

- 土層の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色調』(1976)に準拠した。

- 土器の実測図は、下記のように器種分類した。

断面黒ぬり………須恵器, 断面白ぬり………繩文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、瓦質土器, 断面網目………陶磁器

本文目次

第1章 平成4年度山口大学構内遺跡調査の概要	（豆谷）	1
第2章 吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査	（豆谷）	5
1 調査の経過		5
2 層位		6
3 縄文河川跡		6
4 河川跡出土遺物		12
5 近世遺構・遺物		28
6 小結		32
第3章 光構内教育学部附属光中学校武道館新営に伴う発掘調査	（豆谷・田崎）	37
1 調査の経過		37
2 層位		37
3 第2遺構面（第V層上面）の遺構・遺物		40
4 第1遺構面（第V層上面）の遺構・遺物		50
5 小結		56
第4章 平成4年度山口大学構内の試掘調査	（豆谷）	61
1 工学部プレハブ研究・実験棟新営に伴う試掘調査		61
2 工学部・工業短期大学部の改組再編・博士課程設置に 伴う建築物等の新営その他工事に伴う試掘調査		63
第5章 平成4年度山口大学構内の立会調査	（豆谷）	65
第1節 吉田構内の立会調査		
1 交通規制標識及びバリカー設置に伴う立会調査		65
2 道路（南門ロータリー）取設に伴う立会調査		66
3 ポイラー室給水管漏水補修工事に伴う立会調査		67

4 農学部附属農場ガラス室新設その他工事に伴う立会調査	68
5 大学会館前記念植樹の植え込みに伴う立会調査	69
6 泉町平川線緊急地方道路整備工事に伴う立会調査 山口大学吉田団地環境整備（正門周辺）工事に伴う立会調査	70
7 泉町平川線緊急地方道路整備工事に伴う立会調査（信号機設置）	71
第2節 小串構内の立会調査	72
焼却棟地盤調査に伴う立会調査	72
第3節 常盤構内の立会調査	73
1 工学部及び工業短期大学部職員宿舎取り壊し工事に伴う立会調査	73
2 大学祭展示物設置に伴う立会調査	74
第4節 光構内の立会調査	75
教育学部附属光中学校武道館地盤調査に伴う立会調査	75
第5節 その他構内の立会調査	76
上豎小路共同下水管布設工事に伴う立会調査	76

付 篇

付篇 I

第1章 吉田遺跡第I地区E区の調査	(豆谷) ...	77
1 調査の概要		77
2 層位		78
3 遺構・遺物		78
4 小結		104
第2章 吉田遺跡第I地区E区の追加調査	(豆谷) ...	111
1 調査の概要		111
2 層位		112
3 遺構		112
4 小結		114
5 第I地区E区の総括		116

付篇 II

山口県内出土の紡錘車からみた弥生社会	
一 角閃石安山岩製紡錘車の分布から —————— (豆谷) …	117
はじめに	117
1 山口県内の弥生紡錘車	118
2 山口県内における角閃石安山岩製紡錘車の流通	123
おわりに	127
資料紹介	
吉田遺跡第 I 地区 A 区出土の未報告遺物について	(中村) … 131
山口大学構内遺跡調査要項	
山口大学埋蔵文化財資料館規則	133
山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則	134
山口大学構内の主な調査	136
Summary	145

図 版 目 次

<吉田構内農学部連合獣医学科棟新營に伴う発掘調査>	
P L. 1	吉田構内全景（北西から）
P L. 2	(1) 調査前全景（南から） (2) 縄文時代河川跡検出状況（南から）
P L. 3	縄文時代河川跡完掘状況（南から）
P L. 4	(1) 縄文時代河川跡検出状況（西から） (2) 縄文時代河川跡完掘状況（西から）
P L. 5	(1) 縄文時代河川跡西肩・北壁土層断面（南から） (2) 縄文時代河川跡西肩・観察トレンチ 2 土層断面（北から） (3) 縄文時代河川跡北壁断ち割り（西から）

- (4) 縄文時代河川跡北壁断ち割り（東から）
- P L. 6 (1) 河川跡西壁及び縄文土器11出土状況
(2) 縄文土器11出土状況（近景）
(3) 縄文土器10出土状況
(4) 河川跡（縄文以前）流木出土状況
- P L. 7 (1) 1号暗渠（南から）
(2) 2号暗渠（西から）
(3) 近世土壤（南から）
- P L. 8 縄文時代河川跡出土遺物(1) 旧石器
- P L. 9 縄文時代河川跡出土遺物(2) 晩期以前土器
- P L. 10 縄文時代河川跡出土遺物(3) 晩期土器深鉢B類
- P L. 11 縄文時代河川跡出土遺物(4) 晩期土器深鉢C 1類
- P L. 12 縄文時代河川跡出土遺物(5) 晩期土器深鉢C 2類
- P L. 13 縄文時代河川跡出土遺物(6) 晩期土器深鉢D類・壹
- P L. 14 縄文時代河川跡出土遺物(7) 晩期土器深鉢口頸部
- P L. 15 縄文時代河川跡出土遺物(8) 晩期土器深鉢頸部
- P L. 16 縄文時代河川跡出土遺物(9) 晩期土器深鉢胴部
- P L. 17 縄文時代河川跡出土遺物(10) 晩期土器深鉢胴部
- P L. 18 縄文時代河川跡出土遺物(11) 晩期土器浅鉢
- P L. 19 縄文時代河川跡出土遺物(12) 晩期土器底部
- P L. 20 縄文時代河川跡出土遺物(13) 石匙・石鑿・各種石材剥片
- P L. 21 縄文時代河川跡出土遺物(14) 黒曜石剥片・姫島産黒曜石剥片
- P L. 22 近世土壤及び包含層出土遺物
- <光構内教育学部附属中学校武道館新營に伴う発掘調査>
- P L. 23 光構内（教育学部附属光小学校・同中学校）全景（北東から）
- P L. 24 (1) 調査区南壁土層断面（西から）
(2) 調査区東壁土層断面（南から）
- P L. 25 (1) 調査前全景（北から）
(2) 第2造構面完掘状況（北から）
- P L. 26 (1) 第21号土壤（西から）

- (2) 第22号土壤（東から）
- P L. 27 (1) 第23号土壤検出状況（東から）
 - (2) 第23号土壤完掘状況（東から）
 - (3) 第24号土壤検出状況（東から）
 - (4) 第24号土壤完掘状況（東から）
- P L. 28 (1) 土器集中区出土状況（東から）
 - (2) 土器集中区須恵器出土状況（近景）
 - (3) 土器集中区土師器出土状況（近景）
- P L. 29 (1) 第1遺構面検出状況（北から）
 - (2) 第1遺構面完掘状況（北から）
- P L. 30 (1) 柱穴群完掘状況
 - (2) 第1・2号土壤（北から）
 - (3) 第3・4号土壤（北から）
 - (4) 第3・4号土壤（南から）
- P L. 31 (1) 第22号土壤及び調査区出土縄文土器
 - (2) 第23号土壤及び土器集中区出土遺物
- P L. 32 (1) 土器集中区出土遺物
 - (2) 第24号土壤出土遺物
 - (3) 第VI層（包含層3）出土遺物
- P L. 33 第VI層（包含層3）出土遺物
- P L. 34 第1・2号土壤出土遺物
- P L. 35 第3号土壤出土遺物
- P L. 36 (1) Pit-1・2出土遺物
 - (2) 第IV層（包含層1）出土遺物及び御手洗湾採集遺物

付篇 I

- <吉田遺跡第I地区E区の調査>
- P L. 37 吉田構内統合移転時全景（昭和40年頃）
 - P L. 38 (1) 調査前全景（西から）
 - (2) 第2号竪穴住居跡（西から）
 - P L. 39 第1・2号竪穴住居跡出土遺物

- P L. 40 (1) 第3号竪穴住居跡出土遺物
 (2) 第4号竪穴住居跡出土遺物
- P L. 41 (1) 第5号竪穴住居跡出土遺物
 (2) 第6号竪穴住居跡出土遺物
- P L. 42 溝状遺構出土遺物(1)
- P L. 43 溝状遺構出土遺物(2)
- P L. 44 溝状遺構出土遺物(3)
- P L. 45 (1) 溝状遺構出土遺物(4)
 (2) 遺構に伴わない前期弥生土器
 (3) 遺構に伴わない土器
- P L. 46 (1) 遺構に伴わない土器底部
 (2) 遺構に伴わない石器
- P L. 47 遺構に伴わない石器

挿 図 目 次

<平成4年度山口大学構内遺跡調査の概要>

Fig. 1 山口大学吉田・亀山両キャンパス位置図	2
Fig. 2 山口大学小串・常盤両キャンパス位置図	3
Fig. 3 山口大学光キャンパス位置図	4

<吉田構内農学部連合歯医学科棟新營に伴う発掘調査>

Fig. 4 調査区位置図	5
Fig. 5 繩文時代河川跡実測図	7
Fig. 6 繩文時代河川跡北壁・南壁土層断面図	8
Fig. 7 繩文時代河川跡東壁・西壁土層断面図	9
Fig. 8 繩文時代河川跡観察トレンチ2（突出部）北壁土層断面図	10
Fig. 9 繩文時代河川跡の河床面土質図	11
Fig. 10 繩文時代河川跡出土旧石器実測図	12
Fig. 11 繩文時代河川跡出土晩期以前土器実測図	13

Fig. 12	縄文時代河川跡の土器出土地点図	14
Fig. 13	縄文時代河川跡出土晚期土器実測図 (1)	16
Fig. 14	縄文時代河川跡出土晚期土器実測図 (2)	17
Fig. 15	縄文時代河川跡出土晚期土器実測図 (3)	18
Fig. 16	縄文時代河川跡出土晚期土器実測図 (4)	19
Fig. 17	縄文時代河川跡出土晚期土器実測図 (5)	20
Fig. 18	縄文時代河川跡出土晚期土器実測図 (6)	21
Fig. 19	縄文時代河川跡出土晚期土器実測図 (7)	22
Fig. 20	縄文時代河川跡出土晚期土器実測図 (8)	23
Fig. 21	縄文時代河川跡の石器出土地点図	24
Fig. 22	縄文時代河川跡出土石器実測図 (1)	25
Fig. 23	縄文時代河川跡出土石器実測図 (2)	26
Fig. 24	縄文時代河川跡出土石器実測図 (3)	27
Fig. 25	近世遺構配置図	29
Fig. 26	近世土壤土層断面図	30
Fig. 27	近世土壤及び包含層出土土器実測図	31
<光構内教育学部附属中学校武道館新營に伴う発掘調査>		
Fig. 28	調査区位置図	37
Fig. 29	調査区北壁・南壁土層断面図	38
Fig. 30	調査区西壁・東壁土層断面図	39
Fig. 31	第2遺構面遺構配置図	41
Fig. 32	第21号土壤実測図	42
Fig. 33	第22号土壤実測図	42
Fig. 34	第22号土壤及び調査区出土縄文土器実測図	43
Fig. 35	第23号土壤及び土器集中区配置図	44
Fig. 36	土器集中区出土状況図	45
Fig. 37	第23号土壤及び土器集中区出土遺物実測図	46
Fig. 38	第24号土壤実測図	47
Fig. 39	第24号土壤出土遺物実測図	47
Fig. 40	第VI層(包含層3)出土遺物実測図	49

Fig. 41 第1遺構面遺構配置図	51
Fig. 42 第1号土壤実測図	52
Fig. 43 第2号土壤実測図	52
Fig. 44 第1・2号土壤出土遺物実測図	53
Fig. 45 第3号土壤実測図	54
Fig. 46 第4号土壤実測図	54
Fig. 47 第3号土壤出土遺物実測図	55
Fig. 48 Pit-1・2出土遺物実測図	55
Fig. 49 第IV層(包含層1)出土及び御手洗湾採集遺物実測図	57
Fig. 50 搅乱層出土貨幣	58
<平成4年度山口大学構内の試掘調査>	
工学部プレハブ研究・実験棟新営に伴う試掘調査	
Fig. 51 調査区位置図	61
Fig. 52 トレンチ設定図	62
工学部・工業短期大学部の改組再編・博士課程設置に伴う建築物等の新営	
その他工事に伴う試掘調査	
Fig. 53 調査区位置図	63
Fig. 54 トレンチ設定図	64
<平成4年度山口大学構内の立会調査>	
吉田構内の立会調査	
Fig. 55 調査区位置図	65
Fig. 56 調査区位置図	66
Fig. 57 調査区位置図	67
Fig. 58 調査区位置図	68
Fig. 59 調査区位置図	69
Fig. 60 調査区位置図	70
Fig. 61 調査区位置図	71
小串構内の立会調査	
Fig. 62 調査区位置図	72
常盤構内の立会調査	

Fig. 63 調査区位置図	73
Fig. 64 調査区位置図	74
光構内の立会調査	
Fig. 65 調査区位置図	75
その他構内の立会調査	
Fig. 66 調査区位置図	76
付篇 I	
<吉田遺跡第I地区E区の調査>	
Fig. 67 調査区位置図	77
Fig. 68 遺構配置図	79
Fig. 69 第1号竪穴住居跡実測図	80
Fig. 70 第1号竪穴住居跡出土土器実測図	81
Fig. 71 第2・3号竪穴住居跡実測図	82
Fig. 72 第2号竪穴住居跡出土遺物実測図	85
Fig. 73 第3号竪穴住居跡出土土器実測図	85
Fig. 74 第4号竪穴住居跡実測図	86
Fig. 75 第4号竪穴住居跡出土遺物実測図	87
Fig. 76 第5号竪穴住居跡実測図	88
Fig. 77 第5号竪穴住居跡出土土器実測図	89
Fig. 78 第6号竪穴住居跡実測図	90
Fig. 79 第6号竪穴住居跡出土土器実測図	91
Fig. 80 溝状造構実測図	92
Fig. 81 溝状造構土層断面図（E-E'）	93
Fig. 82 溝状造構出土土器実測図（1）	95
Fig. 83 溝状造構出土土器実測図（2）	97
Fig. 84 溝状造構出土遺物実測図（3）	98
Fig. 85 溝状造構出土砥石実測図	99
Fig. 86 遺構に伴わない土器実測図	101
Fig. 87 遺構に伴わない石器実測図	102
Fig. 88 遺構に伴わない石器実測図	103

<吉田遺跡第I地区E区の追加調査>

- Fig. 89 調査区位置図 111
Fig. 90 遺構配置図 112
Fig. 91 穫穴住居跡及び第1・2号土壙実測図 113
Fig. 92 第I地区E区の地形及び全体図 115
付篇 II

山口県内出土の紡錘車からみた弥生社会—角閃石安山岩製紡錘車の分布から—

- Fig. 93 山口県内における角閃石安山岩製紡錘車の分布図 123

資料紹介

吉田遺跡第I地区A区出土の未報告遺物について

- Fig. 94 A区出土須恵器実測図 131
Fig. 95 A区出土石器実測図 132

- Fig. 96 山口大学吉田構内地区割および調査区位置図 147・148

- Fig. 97 山口大学小串構内調査区位置図 149・150

- Fig. 98 山口大学常盤構内調査区位置図 151・152

- Fig. 99 山口大学亀山構内（幼稚園・小学校）調査区位置図 153・154

- Fig. 100 山口大学亀山構内（中学校）調査区位置図 155・156

- Fig. 101 山口大学光構内調査区位置図 157・158

表 目 次

<平成4年度山口大学構内遺跡調査の概要>

Tab. 1 平成4年度山口大学構内遺跡調査一覧表.....	1
<吉田構内農学部連合獣医学科棟新館に伴う発掘調査>	
Tab. 2 出土遺物観察表.....	34~36
<光構内教育学部附属光中学校武道館新館に伴う発掘調査>	
Tab. 3 出土遺物観察表.....	59·60

付篇 I

<吉田遺跡第I地区E区の調査>

Tab. 4 出土遺物観察表.....	107~110
---------------------	---------

付篇 II

山口県内出土の紡錘車からみた弥生社会—角閃石安山岩製紡錘車の分布から—

Tab. 5 県内出土角閃石安山岩製紡錘車一覧表.....	119
Tab. 6 県内出土石製紡錘車一覧表.....	120
Tab. 7 県内出土土製紡錘車一覧表	121·122
Tab. 8 山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員	135
Tab. 9 山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員	135
Tab. 10 山口大学構内の主な調査一覧表.....	136

第1章 平成4年度山口大学構内遺跡調査の概要

山口大学の関連施設は、山口市（吉田・亀山構内）、宇部市（小串・常盤構内）、光市（光構内）の県内各市に分散している。各構内には、縄文時代後・晩期から江戸時代にかけての複合集落遺跡として著名な吉田構内をはじめとして、旧石器時代のまとまった遺物が出土する小串構内など周知の遺跡が埋蔵している。山口大学埋蔵文化財資料館は学内共同利用施設として、これら各構内において現状変更を行う諸工事に対し、埋蔵文化財保護の立場から調査・研究を行っている。埋蔵文化財の調査を必要とする場合は、工事地域周辺における既往の調査結果や工事の内容、埋蔵文化財に対する影響の度合などを勘案し、埋蔵文化財資料館運営委員会の議を経て、事前・試掘・立会の三種の調査方法によって調査を実施している。

平成4年度は下記のように、事前調査2件、試掘調査2件、立会調査12件の計16件の調査を実施した。

Tab. 1 平成4年度山口大学構内遺跡調査一覧表

調査区分	調査名	構内地図	構内地図剖面	調査面積	調査期間	碑図番号
事前	農学部附属獣医学科棟新築	吉田構内	O-P-17	約500m ²	9月8日～11月13日	Fig. 96-126
	教育学部附属光中学校式道場新築	光構内	—	約500m ²	1月11日～2月13日	Fig. 101-13
試用	工学部プレハブ研究・実験棟新築	常盤構内	—	6m ²	7月13日	Fig. 96-11
	工学部・工芸部附属大学部の改組再編・地下調査設備に伴う建築物等の新築	常盤構内	—	40m ²	7月23日	Fig. 96-12
立会	交通規制標識及びバリカー設置	吉田構内	L-II, P-II, H-II, S-I, B-II	約500m ² 約7.5m ² 相当	4月20-21日 5月7日	Fig. 96-127
	道路（南門ロータリー）取設	吉田構内	H-23		4月28日	Fig. 96-128
	ボイラー室給水管漏水補修	吉田構内	P-16	約4m ²	5月15日	Fig. 96-129
	農学部附属農場ガラス室新築	吉田構内	S-13	約3.5m ²	6月8日	Fig. 96-130
	大学会館前記植樹の植え込み	吉田構内	L-M-15	約3m ²	6月9日	Fig. 96-131
	泉町平川緑豊急造方道路整備及び山口大学吉田山地環境整備（三門高辻）	吉田構内	H-11		12月4・22-24日 1月8日	Fig. 96-132
	泉町平川緑豊急造方道路整備（信号機）	吉田構内	H-11	約7m ²	3月5日	Fig. 96-133
	焼却槽地盤調査	小串構内	—		11月10日	Fig. 97-22
	工学部及び工芸部湖大学部職員宿舎取壊し	常盤構内	—	約9m ²	8月7日	Fig. 96-13
	大学蔡展示物設置	常盤構内	—	約7m ²	11月16日	Fig. 96-14
	教育学部附属光中学校式道場地盤調査	光構内	—		11月4日	Fig. 101-14
	上野小路共同下水管右設	その他	—	約7m ²	5月12日	—

平成4年度山口大学構内遺跡調査の概要

吉田構内の調査（本部、人文・教育・経済・理・農の各学部、教養館：山口市大字吉田1677-1、教育学部附属附属学校：阿古田3002番地）

事前調査1件、立会調査7件の計8件の調査を実施した。

農学部連合獣医学科棟新営予定地の事前調査は、平成3年度の試掘調査の結果を受けて行われた。構内の中央部からやや南東に位置する調査地からは、縄文時代の河川跡を検出した。河幅が17m以上と推定された試掘調査と同様に新営予定地内からは東側の川岸を検出することはできなかった。ただし、河川跡が北から西南に蛇行していることが判明した。



河川跡からの出土遺物には、ナイフ形石器・石匙などの石器類と縄文土器がある。主体となる縄文土器は、晩期中葉の時期を示すものである。これらの事実関係は、昭和62年度に調査された教養部複合棟新宮に伴う発掘調査で検出されている縄文時代晩期中葉の河川跡と同一河川である可能性を示唆する。流路方向・時期ともに矛盾はない。吉田遺跡における縄文時代の自然環境復元の貴重な資料である。

8件の立会調査は、いずれも小規模な面積の掘削に伴うものであった。このうち、泉町・平川線緊急地方道路整備工事、環境整備工事に伴う立会調査によって、地下状況のデーターがなかった正門周辺の様相が明らかとなった。地山と考えられる明茶灰色粘土層と旧水田床土の間、現地表下約130cmに黒色粘土が厚さ約20cmにわたって堆積していた。調査面積の規模が小さく、現状では包含層が無遺物層かの判断を下すことができない。

Fig. 1 山口大学吉田・亀山両キャンパス位置図

小串構内の調査（医学部、同附属病院、医療技術短期大学部：宇部市大字小串1144所在）

構内の北端で、焼却棟新営に先立つ地盤調査が行われた。ボーリング位置を確認のため、埋蔵文化財資料館が立ち会った。なお、ボーリングデーターから本地点が、2m以上の埋土に覆われていることが判明した。

常盤構内の調査（工学部：宇部市常盤台2557、尾山宿舎：同上野中所在）

試掘調査2件、立会調査2件の計4件の調査を実施した。

構内は北から南に向かって、階段状に4段にわたって平坦に造成されている。その下1段目の西端で、プレハブ研究・実験棟新営に伴い試掘調査を行った。以前この地にあった、宇部工業専門学校校舎のコンクリート基礎が検出された。この調査地周辺が構内造成以前から、削平を受けていたことが明かとなった。

構内の下から3段目平坦地の中央東側、建設工学科実験研究棟の北側グランドで、研究・実験棟新営に伴い試掘調査を行った。表土直下が、すぐ地山であった。遺構・遺物の検出はなかった。東に隣接する工学部及び工業短期大学部職員宿舎でも取り壊し工事に伴い立会調査を行ったが、同じく遺構・遺物の検出はなかった。構内の下から3段目の平坦地も、相当な削平を受けているものと考えられる。

構内造成時における削平の激しさが、明らかになりつつある。しかし、まだ構内の上1段目平坦地のデーターは乏しく、今後の継続的な調査が要求される。



Fig. 2 山口大学小串・常盤向キャンパス位置図

光構内の調査（教育学部附属光小学校、同光中学校：光市大字吉田浦1-1所在）

「御手洗遺跡」として周知されており、事前調査1件、立会調査1件を実施した。

中学校武道館新宮予定地の事前調査は、平成3年度の試掘調査の結果を受けて行われた。調査区は光構内の南端部、岐嶺山の山麓に接した箇所である。旧山口県女子師範学校の造成によって大規模な擾乱を受けていたが、破壊をまぬがれた部分で上下に2枚の遺構面を検出した。

下位の遺構面（第2遺構面）からは、土壙4基、柱穴6基、土器集中区を検出した。土壙には、混入の可能性もあるが縄文時代前期の曾畠系土器を出土するものがある。過去に知られていた御手洗遺跡の縄文土器は晩期のもので、御手洗遺跡の上限がさらに遡ることとなった。土器集中区は炭灰が充填した古墳時代の土壙を中心に、古墳時代須恵器・土師器などが散在していた。

上位の遺構面（第1遺構面）からは、土壙5基、柱穴11基が検出された。上位の遺構の大半が、炭灰を含んだ黒色砂で充填されていた。遺構内から出土する土器は、12世紀後半～13世紀の遺物である。

本調査区における遺物包含層の遺物量は、きわめて少ない。遺構の密度も希薄であり、遺跡の中心より外れていると考えられる。より御手洗湾によった地点、光中学校体育館敷地内では、多量の土師器・須恵器が出土している。また、海岸部でも古代から中世の遺物の散布がみられる。光中学校体育館敷地内付近に、遺跡の中心があったものと考えられる。

その他構内の調査

山口市上野小路に所在する経済学部職員宿舎敷地で、立会調査を実施した。雨水排水溝及び、污水析の設置に伴う幅約70cm、長さ10m、深さ70cmの掘削が行われた。現地表下60cmに地山が検出されたが、地山上面は整地層であり顕著な遺構・遺物は認められなかった。



Fig. 3 山口大学光キャンパス位置図

第2章 吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査

1 調査の経過

農学部連合獣医学科棟の新営が、吉田構内の中央部からやや南東に位置する、農学部本館棟と講義棟間に計画された。埋蔵文化財資料館運営委員会の判断により、埋蔵文化財資料館が平成3年7月22日から8月10日にかけて試掘調査を実施している。調査の詳細は年報XIで報告を行っているが、概略を再録しておく。

試掘調査は新営予定地(26m×20m)約520m²の中央部に東西幅2m、長さ13mのAトレンチ、Aトレンチと平行して北側に幅1m、長さ9mのCトレンチ、Aトレンチと平行して南側に幅1m、長さ8.5mのDトレンチ、これらのトレンチに直交する方向で東端部に幅2m、西北長さ19.5mのBトレンチと計4本のトレンチを設定して行っている。その結果、南北方向に流れる河川跡の西側河岸を検出した。河川跡の砂礫からなる埋積土中からは、縄文晩期土器や石鏃が出土した。土器は摩滅せず形をとどめるものがあることから、少なくとも縄文時代晩期には開口していたことが想定された。

試掘調査の結果を受けて、平成4年3月に埋蔵文化財資料館運営委員会で協議を行った。その結果、新営工事の際には、事前に発掘調査の実施が必要であるとの判断がくだされた。この時点において、新営の予算措置は未定であり、事前調査は先送りと考えられていた。ところが、平成4年7月に至って補正予算のため、急遽新営計画が具体化し、早急な対応が必要となった。また、平成4年度に入つてから農学部連合獣医学科棟の設計変更が行われ、要求建物の床面積が規模を拡大した。

これらのこと踏まえ埋蔵文化財資料館では、平成4年9月8日から11月13日にかけて発掘調査を実施した。調査面積は約980m²である。なお、遺構ではないため、河川跡は河床上面まで機械力で掘削し、その後は人力によった。河川埋積土の遺物採集は、丹念に行っている。



Fig. 4 調査区位置図

2 層位 (Fig.6・7)

当調査区の基本層序は、次の順である。

第Ⅰ層：明茶灰色粘質土（客土） 第Ⅱ層：黄灰色粘土（旧水田耕土）

第Ⅲ層：暗褐灰色粘質土（旧水田床土） 第Ⅳ層：地山

本調査区の現状は、駐車場として利用されるバーラス敷の平坦地で、現地表は標高21.4mを測る。第Ⅰ層は構内造成土で、厚さは約20cmほどである。第Ⅱ・Ⅲ層は統合移転前の旧水田に伴うものである。ただし、調査区の旧地形は南から北へ行くにしたがって高くなってしまっており、調査区の北3分の2は削平のため第Ⅱ・Ⅲ層が認められなかった。残りのよい南壁断面で、第Ⅱ層の上面は標高21.2mを測る。

第Ⅳ層の地山であるが、黄色系の粘土あるいはシルトが複雑な堆積状況を示し、一定していない。縄文河川に侵食されるため、調査区の北西隅にのみ残存した。第Ⅳ層の上面は標高約21.2mを測る。なお、この第Ⅳ層の直下（標高20.4～20.6m）には、白色の円碟を含んだ青色系の砂礫が堆積する。

3 縄文河川跡 (Fig.5, PL.3)

本調査区に埋没する縄文時代河川跡に関しては、平成3年度の試掘調査及び平成3年度農学部微生物実験室その他模様替機械設備改修に伴う立会調査によりある程度のデーターは蓄積されていた。それによれば、標高約21.1～21.2mを検出面として、北から南への流路をもつことが判明している。試掘調査では東側の河岸を検出することはできなかった。しかし、試掘調査のすぐ東側で実施した農学部微生物実験室その他模様替機械設備改修に伴う立会調査では埋め土の直下に地山層を検出し、河川の埋積土は検出されていない。このことにより、河幅は17m以上、25m以下と推定された。事前調査はこれらのデーターをもとに行われた。

河川跡の上面は、調査区北側については試掘調査と同じく標高約21.1～21.2mで検出しあが、調査区南側は標高約21.0mとやや低かった。これは河床の検出面についても同じで、調査区北側では標高20.4～20.6mであるが、調査区南側では標高20.0～20.6mであった。これらは試掘調査のデーターを追認するもので、旧地形が北から南にむかって傾斜し、河川跡がこれに沿って流れていることを明かにした。

今回の調査で河川跡は西南に蛇行することが判明したが、試掘調査と同じく東側の河岸を検出することはできなかった。また、試掘調査で確認したAトレンチの「y = 743.5付近での埋積土の立ち上がり」は、河川の流れの勢いが河岸を深くえぐり取ることによって

層位

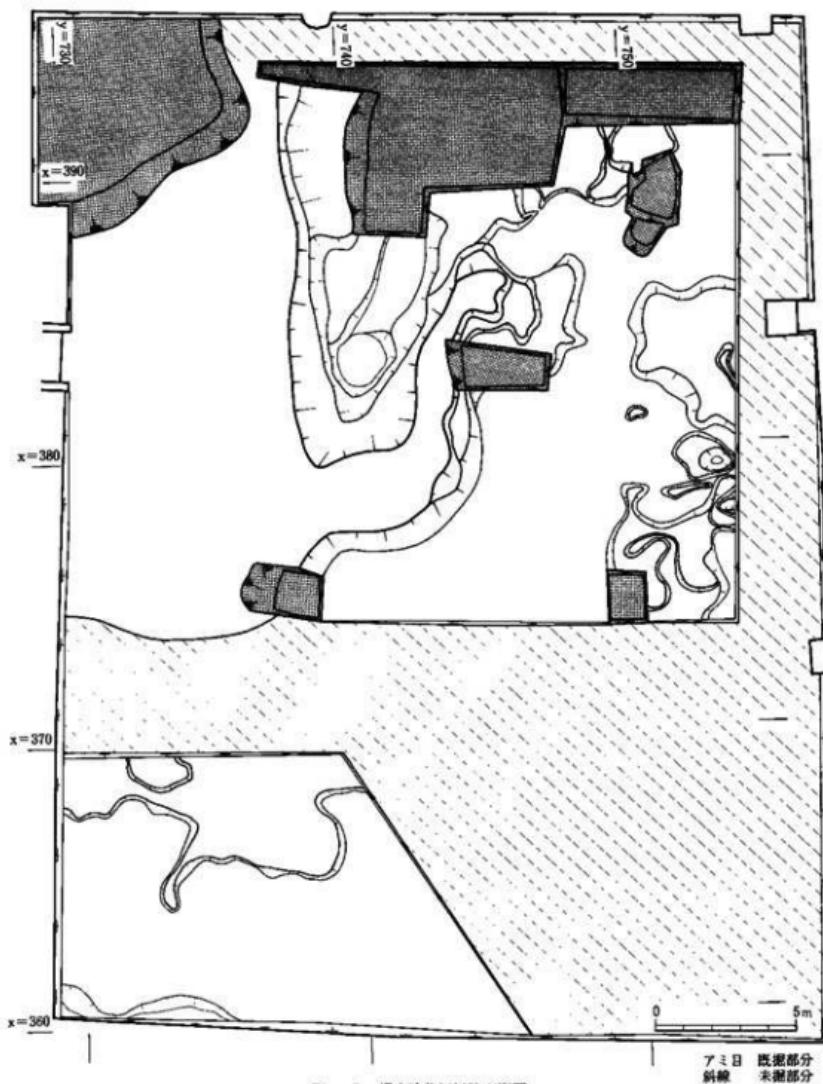


Fig. 5 横文時代河川跡実測図

吉田構内農学部連合獣医学科棟新宮に伴う発掘調査

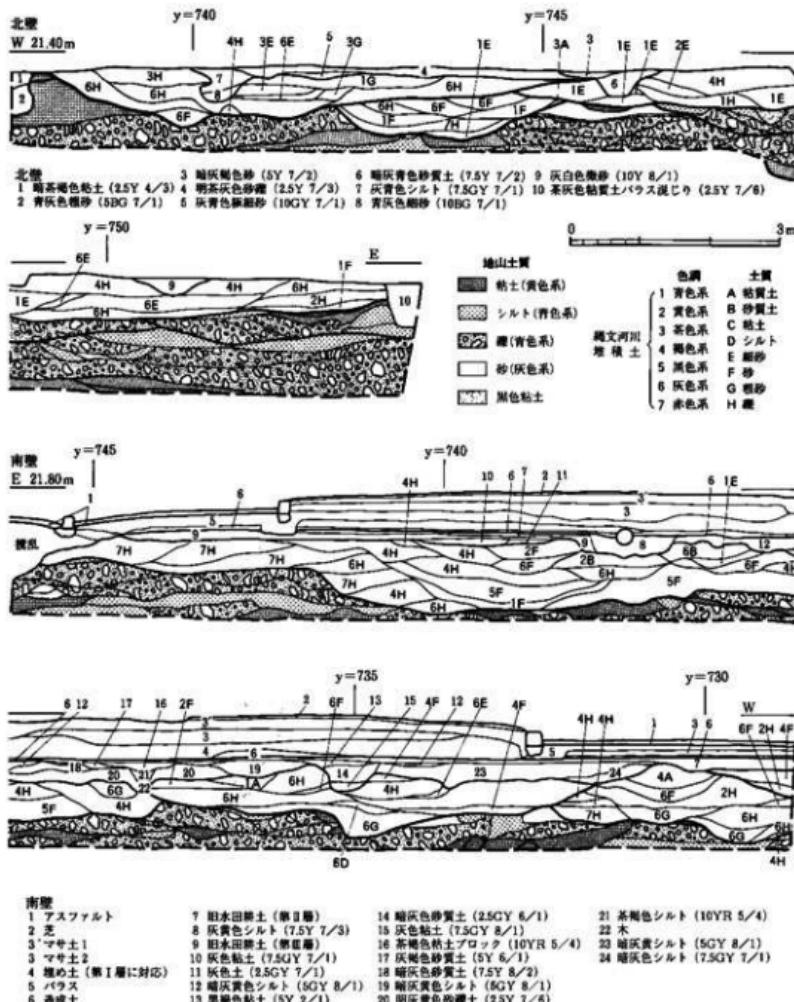


Fig. 6 縄文時代河川跡北壁・南壁土層断面図

四

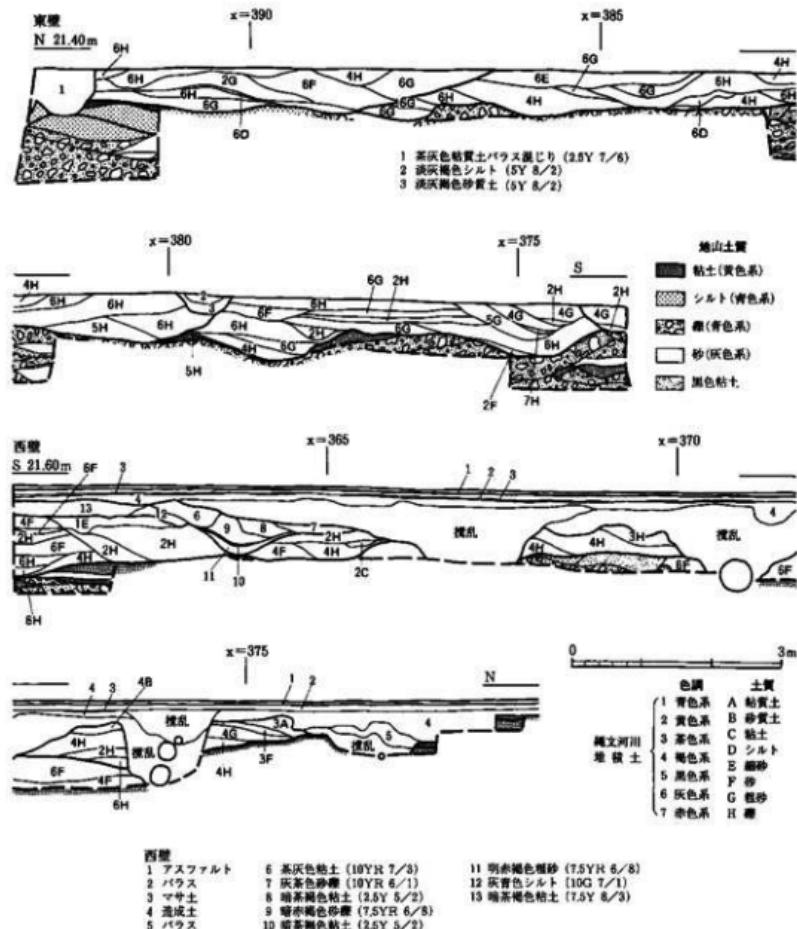


Fig. 7 縄文時代河川跡東壁・西壁土層断面図

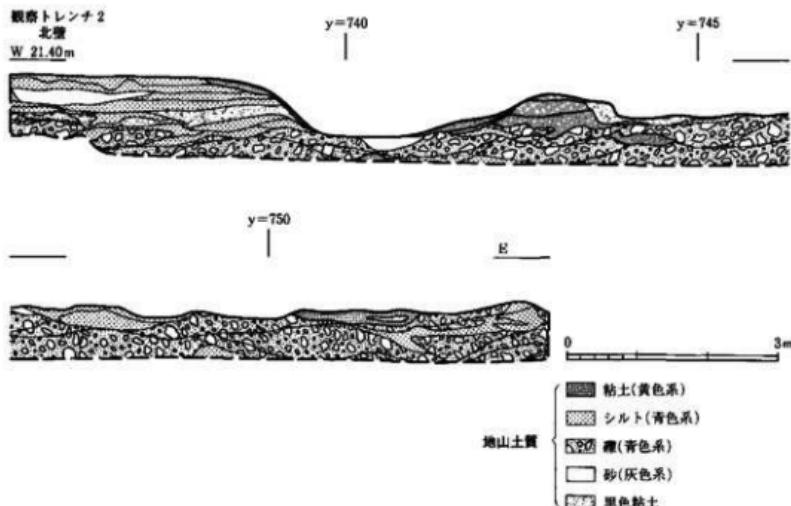


Fig. 8 縄文時代河川跡調査トレンチ2（突出部）北壁土層断面図

形成した、岬状の突出部であった。

河川埋積土は試掘調査でも確認していたように砂および礫であったが、地山の確認で問題が生じた。試掘調査では河川検出面の地山と同じく、河床の地山もまた黄色あるいは黄褐色粘土と認識していた。今回の調査も試掘調査の認識をもとに、黄色粘土層を河床として砂礫の掘削を行った。調査区北側から河川跡の掘削を始め、砂礫層中に部分的な黒色あるいは黄色系の粘土層が確認された。当初、この不安定しない粘土層は河川の埋積土であると判断し、掘削を進めた。しかし、掘削の途中でこの粘土層の一部が、岬状の突出部に連なっていくことが判明した。北壁 (Fig.6, PL.5) の立ち削り及び、周囲の深掘り部分を精査した結果、河川の肩となる黄色粘土層は部分的にシルトや黒色粘土の互層であることが判明した。

このため、安定した粘土層の検出を求めた河川跡北側1/6は、青灰色砂礫の地山を掘り抜いてしまっている。河川埋積土と砂礫の地山は、平面での区別が難しいため、岬状突出部 (Fig.8)、南壁 (Fig.6) について断ち割りを行い地山の確認を行っている。また、当報告では、河床検出面の地山の土質をスクリントーンで表示した (Fig.9)。

縄文時代河川跡

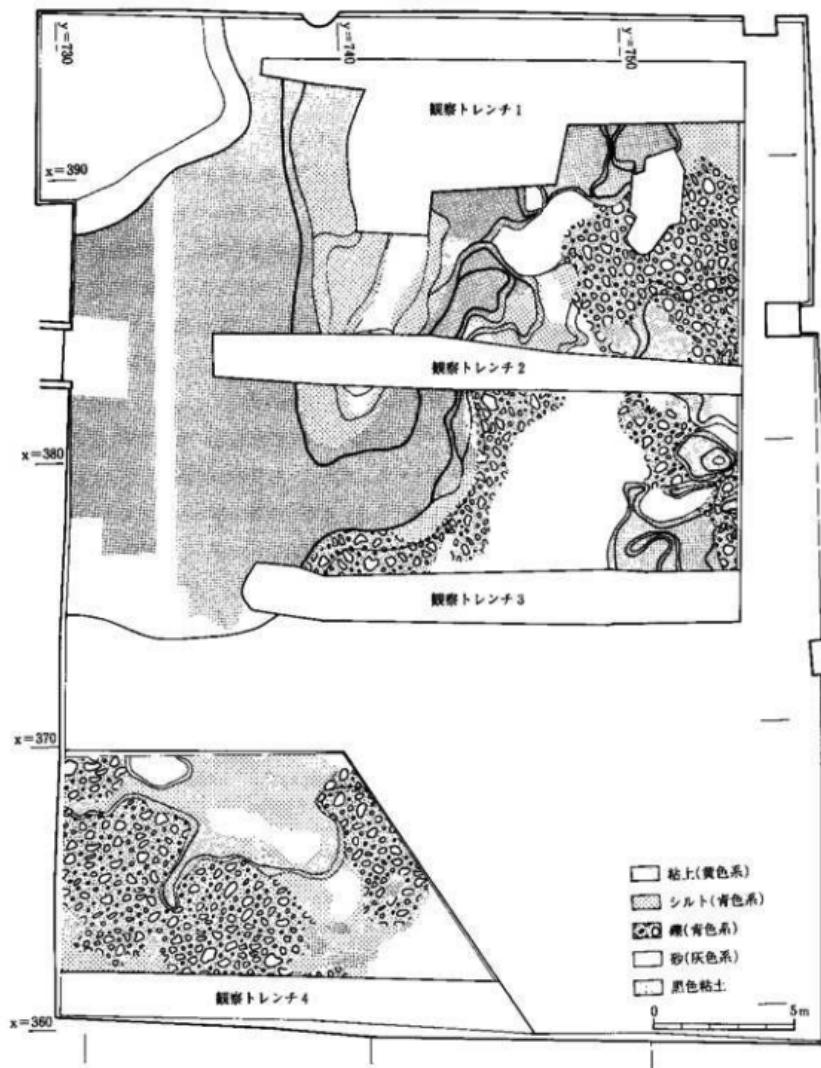


Fig. 9 縄文時代河川跡の河床面土質図

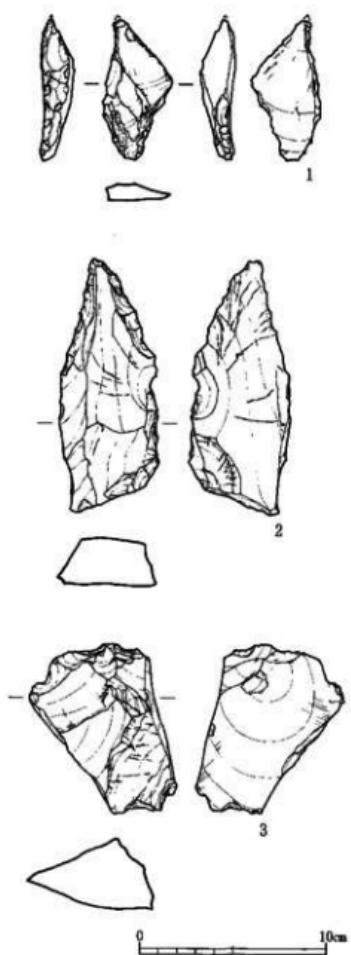


Fig. 10 縄文時代河川跡出土旧石器実測図

4 河川跡出土遺物

旧石器 (Fig.10-1・2・3, PL.8)

1は切り出しがナイフ型石器である。先端部をわずかに欠損するが、ほぼ完存。長さは約4.0cmと小型である。縦長剥片を素材とし二側縁を加工するが、素材と石器の主軸はずれる。右側縁は裏面からの調整を施す。左側縁は裏面からの調整を主とし、表裏両面より調整を施す対向剥離を行っている。左右両側縁とも調整加工は入念で素材の変形度は大きい。背面基部に自然面が残る。黒曜石製。

2は尖頭器の可能性がある。横長の剥片を素材とする。打面は、複数の剥離面からなる調整打面である。腹面は主要剥離面のみであるが、背面は4枚の剥離面からなる。この剥離作業により基部を横断面台形状に、先端部を横断面三角形状に加工する。先端部二側縁の調整加工は主要剥離面側から、弱い角度で行っている。先端は使用による摩滅があるので、錐として使用した可能性もある。サヌカイト製。1と2は全体の摩滅が激しく、上流からの流れ込みと考えられる。

3は不定形剥片。やや肉厚である。調整加工・使用痕などは認められないが、左側縁に折り取りがみられる。チャート製。1・2のように激しい摩滅を受けておらず、形態的にも旧石器としての決め手はないが、使用石材の上から、旧石器の可能性が指摘できる。

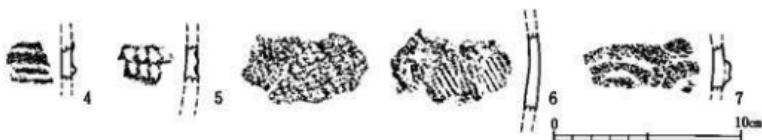


Fig. 11 縄文時代河川跡出土晚期以前土器実測図

縄文土器晚期以前 (Fig.11-4~7, PL.9)

4は外面に、断面三角形の隆帯を張り付ける。隆帯は幅4mm、厚さ2.5mmと細く、現破片では2条まで確認できる。破片は小さく、内外面ともに風化しているため、条痕調整の有無は確認できない。外面に隆帯をめぐらせる特徴から、縄文時代前期の轟B式系統の土器と考えられる。轟B式系統の土器は、山口市内では吉田遺跡より直線距離にして5kmの宮野屋敷遺跡から出土している。ただし、内面に条痕が観察できなかったことを問題とするならば、中期の船元II式のなかに隆帯をもつものがあり、注意を要する。

5は外面に、連続刺突文を有する。現破片で2段に刺突文が連なるのを確認できるが、それ以上にめぐっていた可能性がある。刺突文の一単位は、直径約5mmの円形を呈する。工具を右斜め下方から挿入して、施文している。内面は風化している。外面に煤が付着する。刺突文を施す山口県内の縄文土器として、前期の月崎下層IIと後期の月崎上層Iとが挙げられる。5の刺突文が多段構成であるという点から、前期の月崎下層IIとの関連を考えたい。ただし、月崎下層IIの刺突文は、押引きの手法をとる場合が多く、5の刺突文はこの手法ではない。また、中期の船元II～III式には刺突文を施すものがあり、4と同様に注意を要する。

6は外面に縄文、内面に条痕を施す破片である。外面の縄文はLR。内面の条痕は2枚貝によるものと考えられる。外面に煤が付着する。中期の船元II～III式と考えられる。内面に条痕をもつ船元系の土器は北部九州に見られ、本州では山陰地方に散見される。

7は外面に弧状の隆帯を張り付けるもの。隆帯は幅約1cm、厚さ約3mmと幅広い。内外面は風化する。時期及び型式名は不明である。可能性として、船元III式に伴う南九州系の春日式が考えられる。

吉田構内農学部連合獣医学科棟新宮に伴う発掘調査

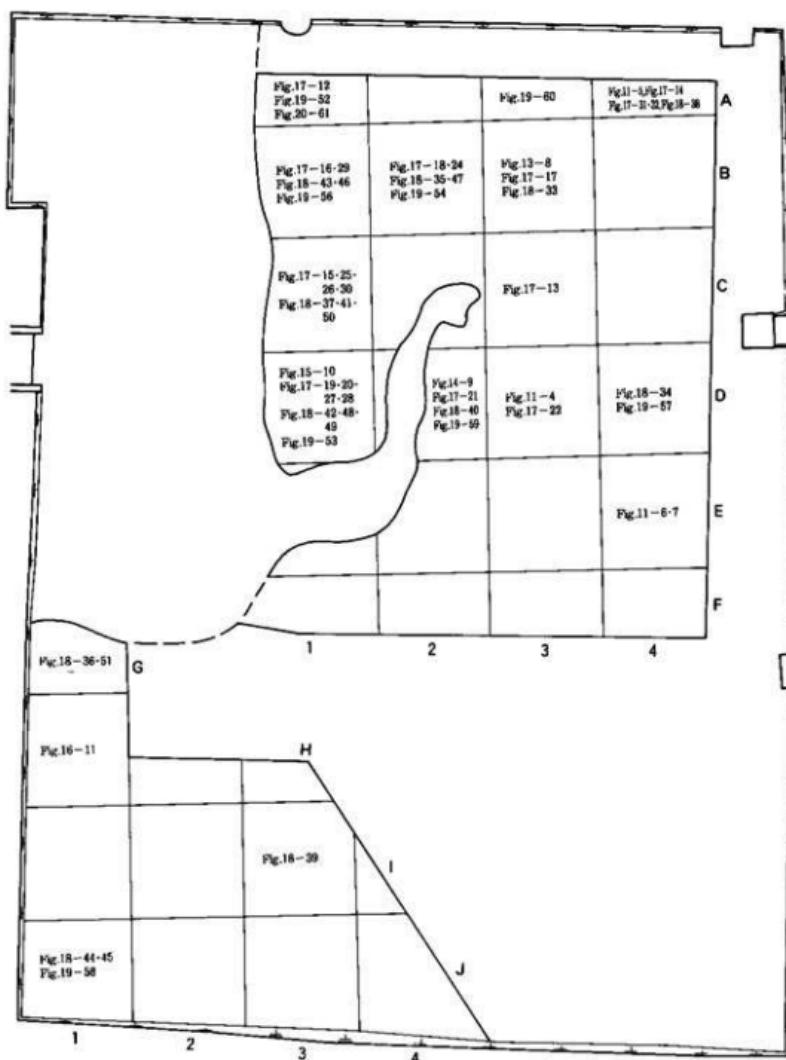


Fig. 12 繩文時代河川跡の土器出土地点図

縄文時代晩期土器

本節では、河川が開口していたと考えられる縄文時代晩期の土器に関する記述を行うが、その前に調査時における遺物の取り上げ方法を明記しておく。

「1 調査の経過」で述べたように、本河川跡の掘削は機械力をもって行っている。無論、河岸及び河床は直前で機械を止め、その後の検出は人力である。試掘調査で明かとなっていた遺物量に対する時間と労力を考えれば、機械力の導入は適切な処置であったと考えている。しかし、機械力の掘削とはいえ、遺物の出土地点を把握するため最大限の注意を払った。一回の掘削する範囲を $4\text{ m} \times 4\text{ m}$ に限定し、掘削した河川埋積土は全て目を通し、遺物の後別を行った。本報告掲載土器に関してその出土地点の表示を行ったのが (Fig.12) である。

本来ならば、河川跡出土全土器に関して個体数あるいは重量で表示を行うべきである。しかし、個体数は識別が困難であるとともに、個体によって破片の大小の差が著しいため、その表示には不均衡が生ずる恐れがあった。重量表示は試掘調査分がすでに石膏を入れており断念した。ただし、今回の報告は主要な土器片をほとんど掲載しており、全体的な傾向は示している。また、調査区の $2/3$ を占める河川跡は、その土層断面からも一時期の河幅とは考え難い。時期の異なる新旧の流路が、それぞれ切り重なって発掘調査での検出状態となっていると考えられる。平面でその切り合を判断することは不可能なため、各地点における土器の型式差から判断を試みる。

全体的な傾向として、西岸近くでの土器片集中が窺える。特に、岬状に突出した部分の内側は集中区である。本流から外れ流れが滞る場所なので、上流からの遺物の堆積があつて当然といえる。しかし、出土する破片は大きく、摩滅の少ないものも見受けられる。岬状突出部の内側から出土した土器 (Fig.15-10) や、外側ではあるが岬状突出部の肩へばかりつくようにして出土した土器 (Fig.14-9) は、口縁から胴上半部が $1/4$ ほど残存している。単に上流から流されてきただけとは考えられず、本流から外れたこの場所が、縄文時代晩期における水の利用場所となっていた可能性がある。

これに対して、河川跡の中央あるいは、東岸付近と推定される調査区東側では土器量が少なく、また出土する土器も縄文晩期以前のもの (Fig.11-5・6・7) が含まれている。上流の包含層から流されてきた可能性もあり、にわかに河川跡の上限を透らせるることはできない。ただし、西岸でこの河川跡の最も新しい遺物と考えられる夜白系壺形土器片 (Fig.20-61) が出土していることを踏まえるならば、流路は東側が古く西側が新しいと考えることは可能である。



Fig. 13 縄文時代河川路出土晩期土器実測図(1)

深鉢形土器B類 (Fig.13-8, PL.10)

8は肩部に対し、頸部をややすめることによって肩部を表現する。口縁部と頸部の境は指で強くナデられ、後をもって口縁部は外反する。口縁部内面は、粘土の折り返しが段を形成し沈線状にめぐる。口縁部端面は、ヨコナデによってくぼむ。外面には全面に二枚貝の条痕が、右から左方向に施される。ただし、口縁部と頸部の境は、指ナデによって条痕が消されている。内面は左方向へのケズリ後にナデが施される。その形態的特徴は、いわゆる岩田第四類土器Cそのものである。本報告では、これをB類とする。

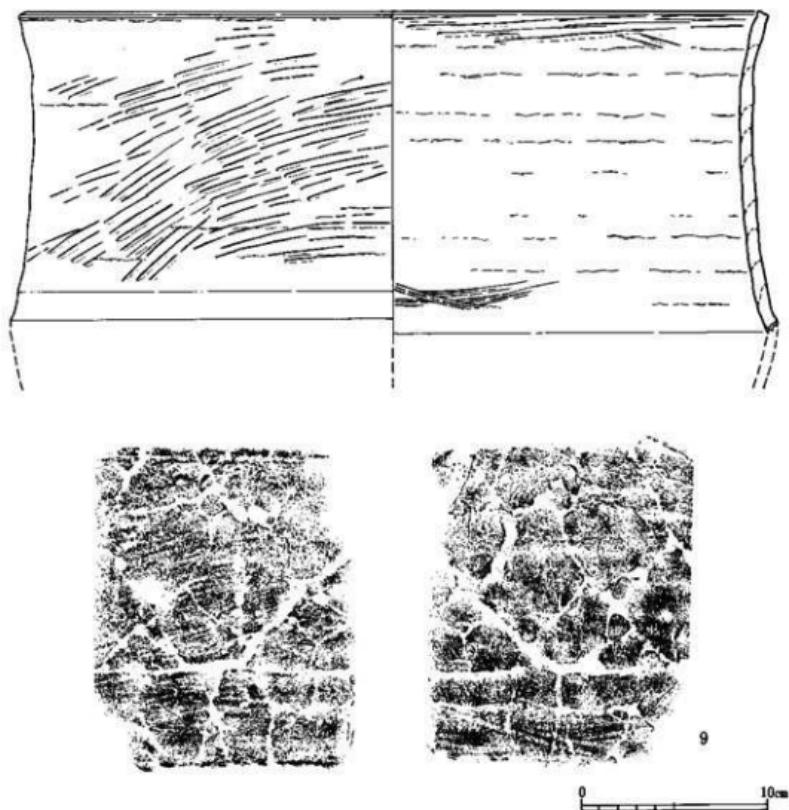


Fig. 14 縄文時代河川跡出土晩期土器実測図(2)

深鉢形土器C 1類 (Fig.14-9, PL.11)

9の口縁形態はB類とは異なり、単純に立ち上がるものである。本報告では、この口縁形態をとるものをC類とする。また、口縁端部におけるキザミの有無で、C 1類とC 2類に区別する。本例は、キザミをもたないC 1類である。

比較的長く内傾した口頸部と、屈曲した肩部をもつ。口縁端面は、ヨコナデによってくぼむ。外面と内面の口縁部付近に条痕が施される。条痕はその凹みに条線を確認することができ、巻き貝を原体としている可能性がある。復元口径は、約40.0cmである。

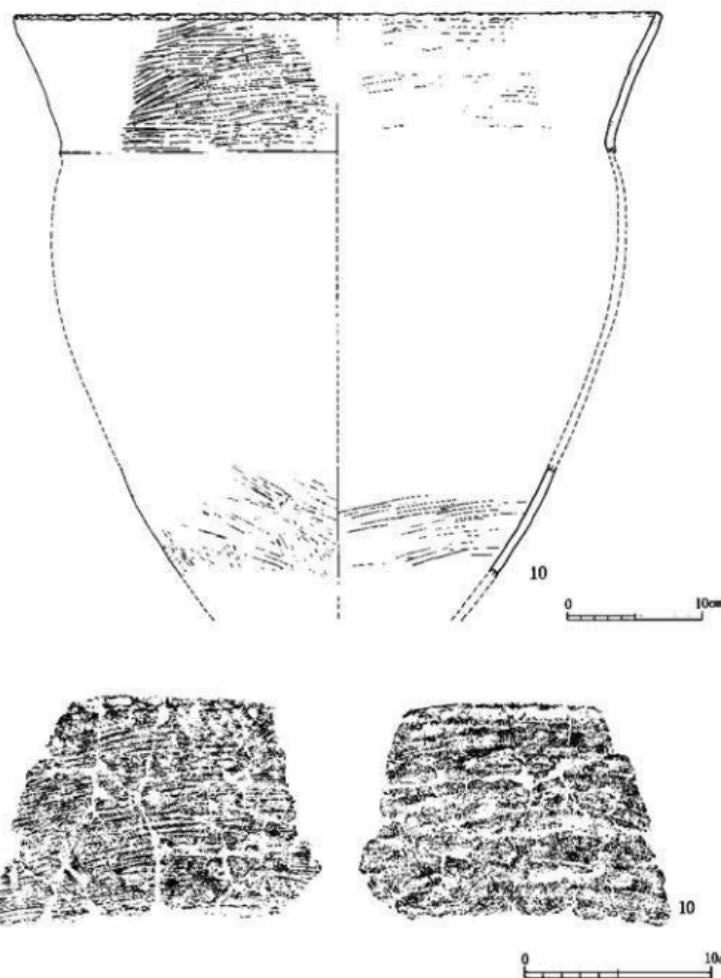


Fig. 15 純文時代河川跡出土晚期土器実測図(3)

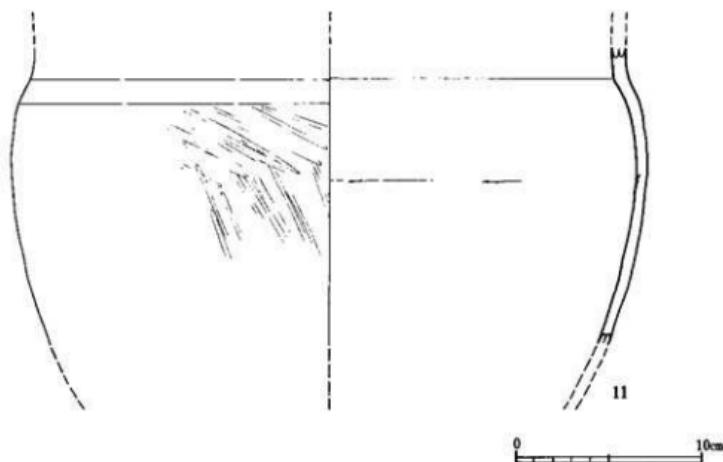


Fig. 16 縄文時代河川跡出土晩期土器実測図(4)

深鉢形土器C 2類 (Fig.15-10, PL.12)

10は口縁部端面にキザミをもつC 2類である。キザミは長さ1.0~1.5cmの長楕円状押圧である。口頭部は大きく外反する。頸部と胴部の境は、強いヨコナデにより稜をもって屈曲する。胴部破片はその傾きが口頭部の傾きと一致しないため、胴下半部として図上復元した。しかし、口頭部の破片と胴部の破片は接して出土しており、出土状況からはこの間にはいるような破片は見いだせなかった。長胴の深鉢形土器として復元しているが、胴下半部としている破片が口頭部とただちに接合し、寸のつまつた器形になる可能性も残されている。外面は口頭部に二枚貝を原体とする条痕が施される。胴部は粗いケズリであるが、その工具は判然としない。内面はナデられるが、口縁部や胴部に条痕がわずかに残る。復元口径は、約48.0cmである。なお、口頭部外面には「吹きこぼれ」と思われる煤が多量に付着している。

深鉢形土器D類 (Fig.16-11, PL.13)

11は頸部を直立させて復元したが、全体的に器形が開いた浅鉢状の器形を呈する可能性もある。器面の調整はミガキであり、胎土にも微砂粒を多量に混え、他の深鉢形土器とは異なる。外面に煤が付着する。口縁形態は不明であるが、あらゆる点において他の深鉢形土器とは異なるためD類と位置づけた。

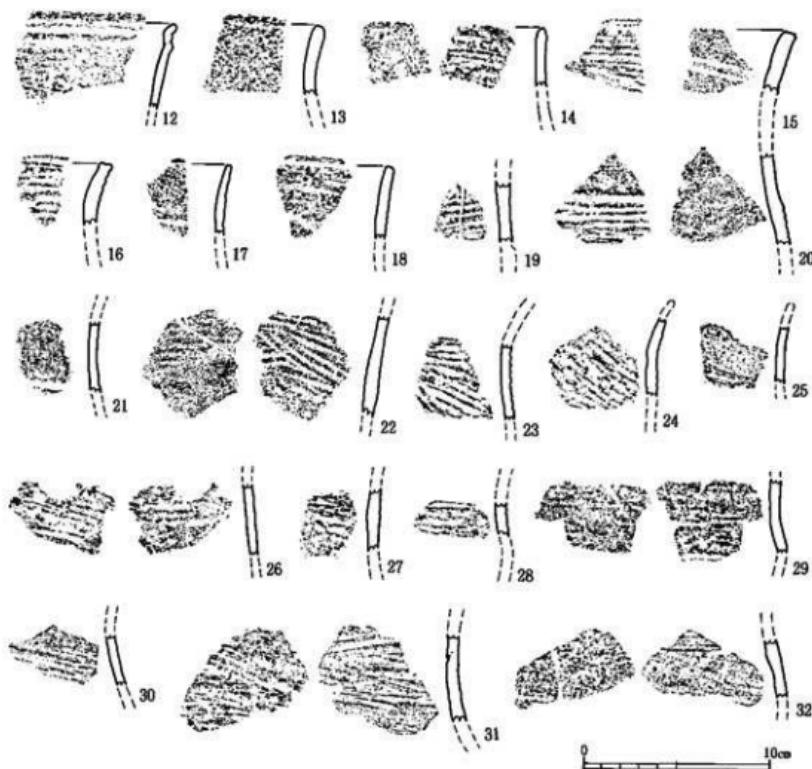


Fig. 17 縄文時代河川跡出土晩期土器実測図(5)

縄文晩期土器口頸部 (Fig. 17-12~32, PL. 14·15)

拓本による表示が可能な、口頸部の破片を一括した。このうち口縁端部まで残存するものについては、その形態により分類が可能である。

深鉢形土器A類 (Fig. 17-12)

外方につまみ出した握り縁に、さらに粘土紐を積み上げ、粘土紐の端部を外面に折り返す。この成形技法により、2段に屈曲した口縁形態を呈する。この特徴は、岩田三類aと類似する。本報告では、これをA類とする。外面の調整は条痕後ナデ、内面の調整はナデである。条痕の原体は、識別不可能である。器壁は極めて薄い。

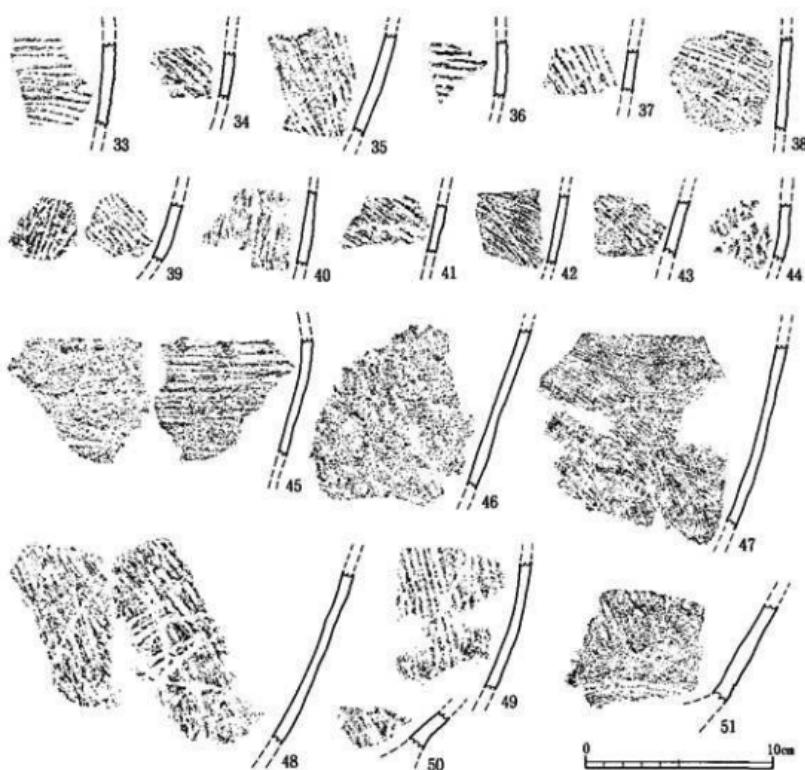


Fig. 18 縄文時代河川跡出土晩期土器実測図(6)

深鉢形土器C 1類 (Fig.17-13~18)

13・14は口縁部を丸く收める。15・16・17・18は口縁端部に面をもち、そのうち15・16・18は施されるナデが強いために、凹線状にくぼんでいる。20は15と同一個体の可能性が強い。19は頸部にヘラ描き文と、頸胴部に沈線を有する。

縄文晩期土器刷部片 (Fig.18-33~51, PL.17・18)

33は8と同一個体の可能性がある。34・35は外面に左上がりの条痕が施される。40の外面条痕原体は、禾本科植物と考えられる。41・42は外面条痕の凹みに、さらに条線が観察でき、条痕原体は巻き貝である可能性が強い。46は内外面ともケズリ後ナデ。

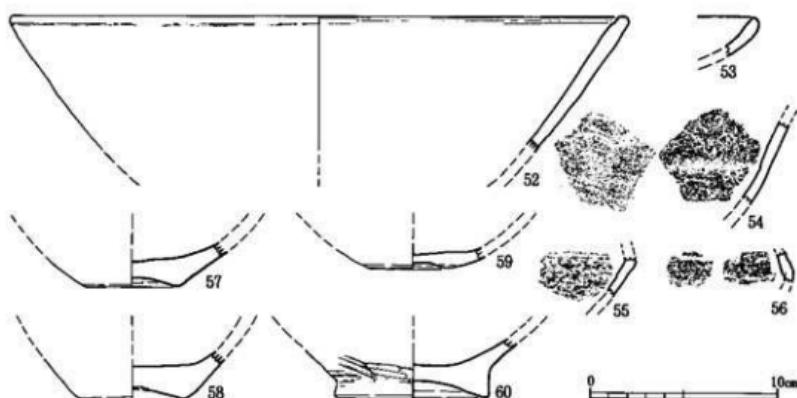


Fig. 19 縄文時代河川跡出土晩期土器実測図(?)

浅鉢形土器 (Fig.19-52~56, PL.18)

52は直口の浅鉢である。胴部の傾斜は強く、直線的に立ち上がる。口縁端部を丸く收めるが、外面には稜線をもち、内面に一条の沈線が施される。内外面風化するが、内面に一部ミガキが残る。胎土は1mm前後の砂粒を、多量に混じえている。復元口径は、約33.0cmである。53も直口の浅鉢である。口縁端部は丸く收めるが、内面に鋭い稜線をもつ。極めて小片で、風化も激しい。

54は口縁部が大きく開く浅鉢である。口縁部を欠くため、形態は不明である。外面の変化は乏しいが、内面には屈曲部をかすかに残す。外面にミガキ痕を残すが、内面の調整は確認できなかった。

55・56は胴部が、くの字に屈曲する浅鉢である。55の外面下半調整は、ケズリ後ナデである。内面の調整は風化のため、観察が不可能である。56は破片の外面上端部に、低い台形状の突出部が巡る。突出部の下端は、浅く幅の狭い凹線によって区画される。

底部 (Fig.19-57~60, PL.19)

57・58は底部が、胴部に向かって直線的に立ち上がるもの。底面はくぼみ、器壁は肉厚である。内外面は風化が激しく、調整は観察不可能である。

59は他の底部と比較して、器壁が薄く胴部の立ち上がりは緩やかである。底面には高台状に、粘土紐の輪を貼り付ける。他の底部との間に著しい形態差があり、浅鉢形土器底部の可能性がある。

60は底面が脣部より突出している。底面はくぼむ。底面側面に条痕が螺旋状に施される。条痕のくぼみに条線があり、巻貝を原体とする可能性がある。

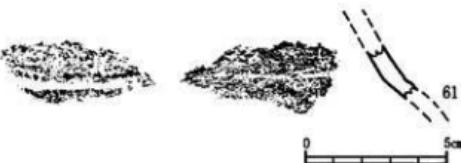


Fig. 20 縄文時代河川跡出土晚期土器実測図(8)

臺形土器 (Fig. 20-61, PL. 13)

61は最大長6.0cm、最大幅2.5cmと小さな土器片である。外面には幅約1.5mmのヘラ描き沈線が一条施されている。この沈線を境にして破片の上端は内側に傾き、破片の下端は外側に張り出す。外面の調整は沈線が施された後に、ミガキが施される。内面の調整は器面上にかすかな凸凹があることから、条痕による成形後ナデが施されたものと考えられる。当破片は以下の理由により、夜白系壺形土器の頸部片であると断定する。

外面のヘラ書き沈線を水平にして導きだした破片の傾きから、頸部は上に向かってすぼまり、胴部の張った器形の肩部分であると想定される。ヘラ書き沈線は、頸部と胴部の境に区画として施されているのである。頸胴間をヘラ書き沈線によって区画する手法は、縄文時代晩期後半の土器に精製・粗製を問わず見受けられる。そして外面に施された丁寧なミガキから、この破片が浅鉢形土器・壺形土器などの精製器種に属することがわかる。ただし、上述の傾きから想定しうる器形は晩期浅鉢形土器のなかにはない。その器形はいわゆる壺形であり、縄文時代晩期に同じものを求めるとするならば夜白式の壺形土器を想定せざるをえない。

特に注目すべきは、そのへラ描き沈線の手法である。沈線をよく観察すると、器面に対してへラ原体が垂直ではなく、やや斜め下方向からあたっていることが見える。ちょうど胸部の上端を削るようにして、頸胸部界に沈線がえぐりこまれている。そして、このへラ描き沈線が文様であるかといえば、そうではない。沈線はミガキの前に施されており、ミガキ調整の際にはつぶされている。むしろ、意識的に沈線部分を磨き締め、段状に整形した可能性がある。

この手法は、愛媛県道後今市遺跡8次調査、実見していないが香川県林・坊城遺跡などで出土している夜臼系壺形土器の区画沈線手法と共通するものである。ただし、連合獣医河原跡から出土した、深鉢形土器はいずれも凸蒂文土器出現以前のもので、夜臼系壺形土器との間には若干時間差がある。

吉田橋内農学部連合獣医学科棟新宮に伴う発掘調査

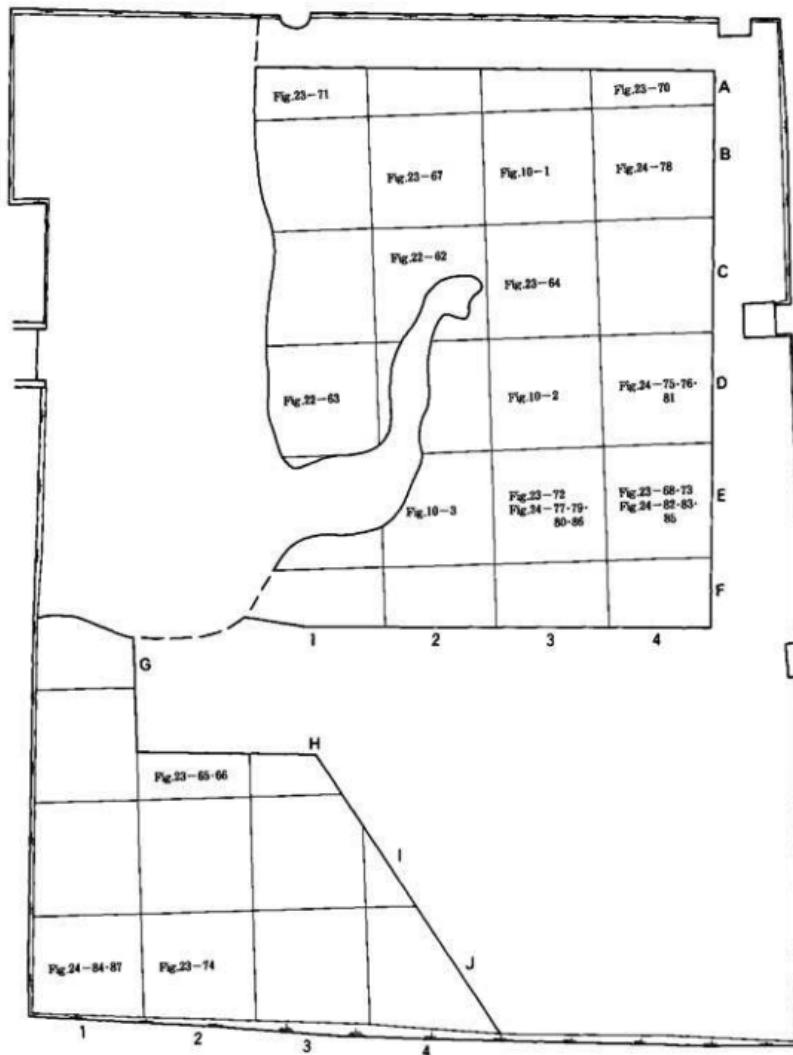


Fig. 21 穂文時代河川跡の石器出土地点図

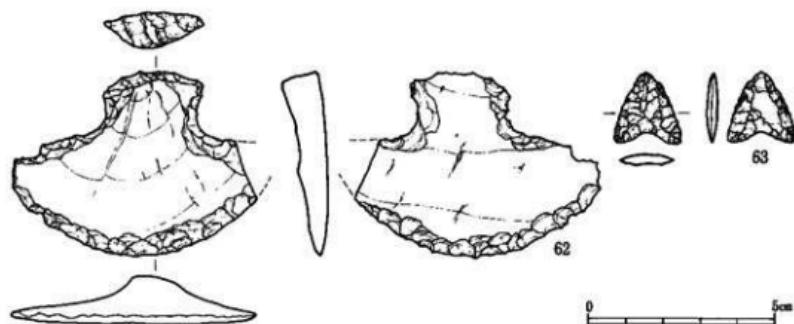


Fig. 22 縄文時代河川跡出土石器実測図(1)

石器 (Fig.22・23・24, PL.20・21)

西岸及び岬状突出部付近から出土する土器片に対して、剥片は土器片の少ない調査区東側から多く出土している。これは単純に土器片に対する剥片の比重の大きさを示すと考えられる。上流から流されてきた土器片・剥片が、比重の軽い土器はより下流に流され、比重の重い剥片は調査区付近に堆積したことが想定される。

これら剥片に対し、石匙 (Fig.22-62) や石鑿 (Fig.22-63) などの製品は、岬状突出部付近からの出土である。石匙の帰属時期に問題が残るもの、土器と同様に岬状突出部付近から製品が出土していることに注意が払われる。縄文時代晩期における水の利用場所となっていた可能性を補強する材料となる。

石匙 (Fig.22-62, PL.20)

62は横型の石匙である。刃部両端部を僅かに欠く。背面には素材剥片のポジティブな面をほぼ完全に残しており、バルブの膨らみもみられる。このことから、素材剥片の形を生かしながら、上部より2カ所の抉り込みを入れることにより、外形を整えたと思われる。つまみ部上端は裏面より、他の縁辺部は両面から調整を施している。特に刃部は丁寧に調整し、整った半月形に仕上げている。サヌカイト製である。

石鑿 (Fig.22-63, PL.20)

63は凹基無茎式の石鑿である。形態は正三角形に近く、基部の抉りは浅い。脚端部は尖り、両側縁は弯曲する。腹面の中央部に、素材面を残す。両面を細かい調整により仕上げており、特に背面では丁寧である。メノウ製である。

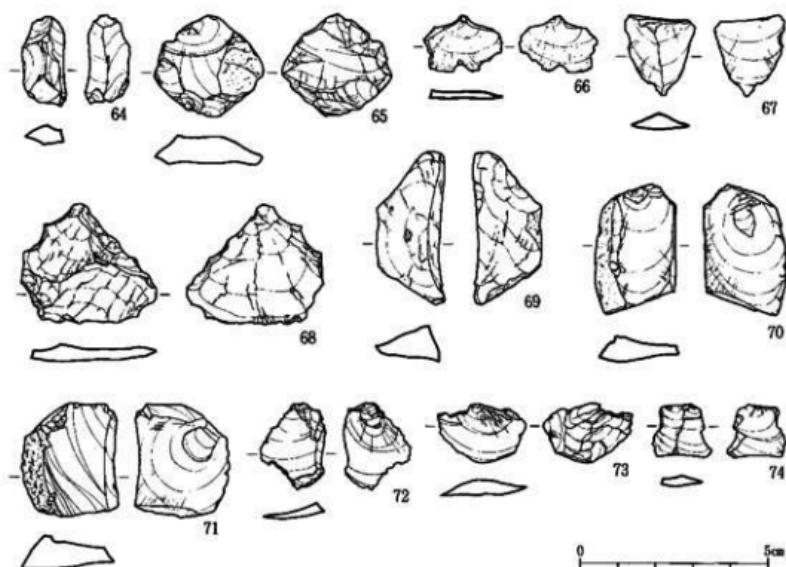


Fig. 23 縄文時代河川跡出土石器実測図2

剥片 (Fig. 23-24-64~87, PL.20・21)

剥片の石材は、水晶、サヌカイト、流紋岩、頁岩、黒曜石、の5種類である。石材ごとにまとめて記述を行う。

水晶 (Fig. 23-64-65, PL.20)

64・65は水晶を石材とする。この他に、本河川跡からは水晶の原石 (PL.20) が出土している。

サヌカイト (Fig. 23-66-67, PL.20)

66・67ともに小さな碎片である。本河川跡におけるサヌカイトの出土頻度は極めて低い。

流紋岩 (Fig. 23-68-69, PL.20)

68・69ともに二次加工および使用痕は認められない。

頁岩 (Fig. 23-70, PL.20)

70は左側縁部に自然面を残す。腹面にはバルブ及びバルバー・スカーが顕著である。

黒曜石 (Fig. 23-71~87, PL.21)

75~87の石材は、灰色を呈する不純物の多い姫島産黒曜石。他は漆黒色を呈する。

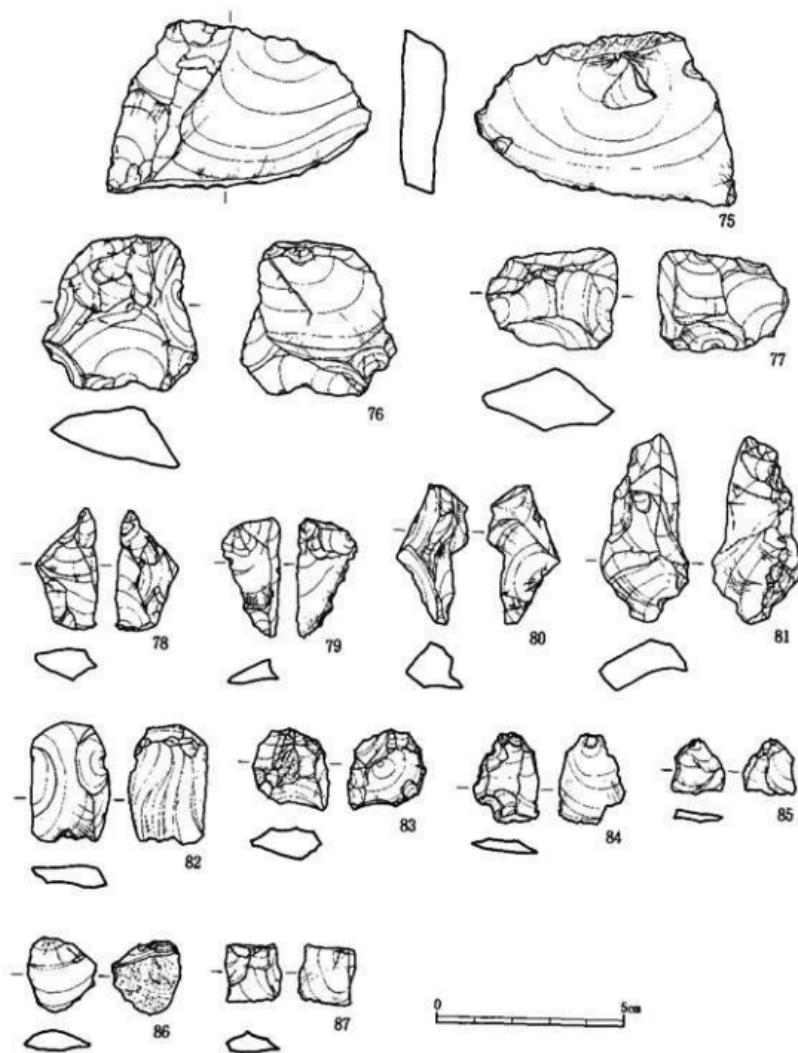


Fig. 24 繩文時代河川跡出土石器実測図(3)

5 近世遺構・遺物

縄文河川跡と同じ検出面で、河川跡の埋土を遺構面として近世遺構が検出されている。遺構は水田に伴う暗渠と、溜池状の土壌である。水田そのものは検出されず、大学造成時に削平されたものと考えられる。暗渠も削平により、検出できなかった箇所がある。これらの遺構の一部は、補修を受け大学統合移転まで、機能していたものと考えられる。

暗渠 (Fig.25, PL.7)

1号暗渠は、調査区北半の中央で南北方向に検出されている。その主軸は構内座標のy軸に対して、約10度西に振れる。検出した暗渠の長さは約12.5mで、幅約50cmである。検出面の標高は北側21.15m、南側20.9mで、暗渠底面の標高は約20.85mである。暗渠は調査区南半にも続いていると考えられるが、配管などの攪乱により検出することはできなかつた。ただし、南壁ではこの1号暗渠より、約6mほど西にすれてy=738付近で暗渠断面を検出している。底面では排水管の役目をしたとおぼしき木片が検出されたが、遺存状態は極めて劣悪であった。遺物は検出されなかつた。

2号暗渠は、調査区北端で東西方向に検出されている。その主軸は構内座標のx軸に対して、約3度北に振れる。検出した暗渠の長さは約14.0mで、幅約50cmである。暗渠はy=748.5付近で北に分岐し、調査区外へと続く。また、東側も調査区外へと続く。検出面の標高は約21.15mで、暗渠底面の標高は約21.0mである。2号暗渠の西端では、長さ2mにわたつて5連に並んだ陶製の土管を検出している。最も西側の土管は、中央で上部に口を垂直に突き出したL字形を呈している。水田の排水を行っていたと考えられる。遺物は検出されなかつた。なお、1号暗渠と2号暗渠は交わっていたものと考えられるが、攪乱のため、その箇所は検出できなかつた。

近世土壌 (Fig.25・26, PL.7)

近世土壌は、調査区の南西端で検出された溜池状の遺構である。土壌は縄文河川理土の砂礫を基盤として掘り込まれている。平面形態は長楕円状を呈し、長軸4.0m、短軸3.5mを測る。検出面の標高は約20.8mである。土壌底面の標高は約20.3mである。土壌の南肩は、多数の木杭を打ち込んで補強している。

層位 (Fig.26) は、大きく3層に分かれる。上層は植物混じりの粘土層、中層は砂礫が混入した粘土層、下層は砂礫層である。上層の植物を含んだ粘土の堆積状況は、この土壌が長い蓄水状態にあり、徐々に埋没したことを示している。これらのことより、水田に伴う溜池施設と判断した。土壌内からは近世陶器などが出土している。

近世遺構

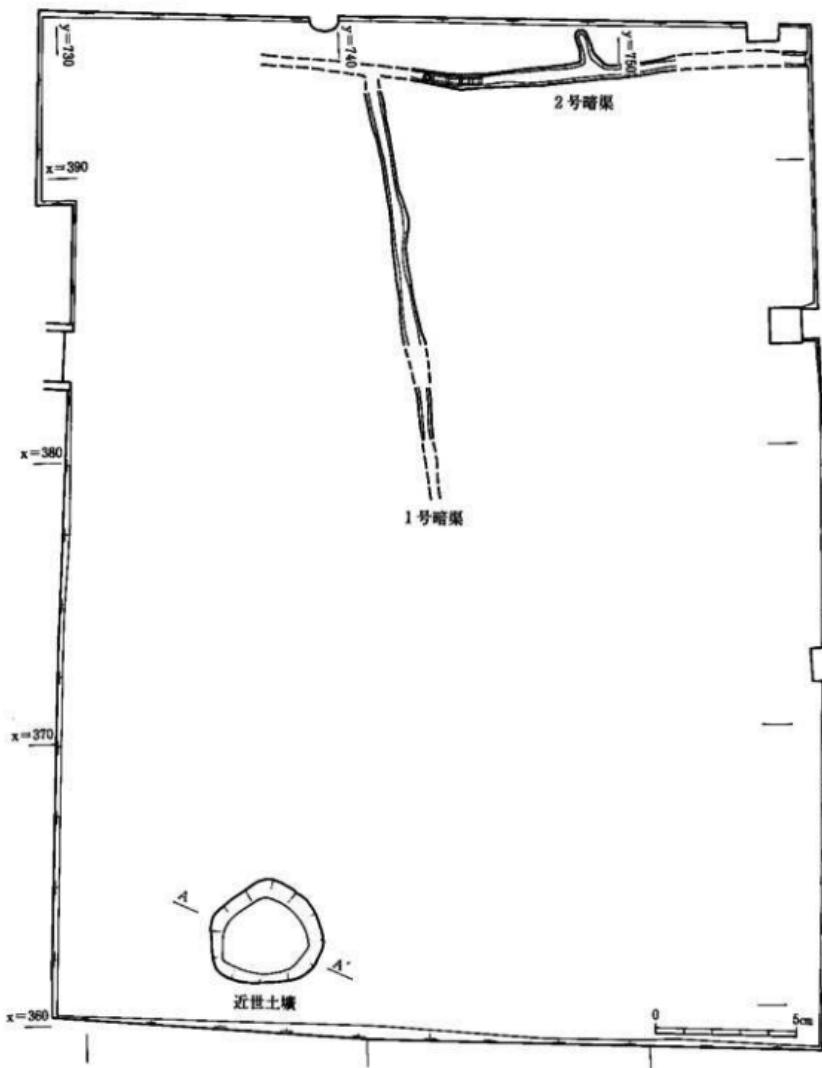


Fig. 25 近世遺構配置圖

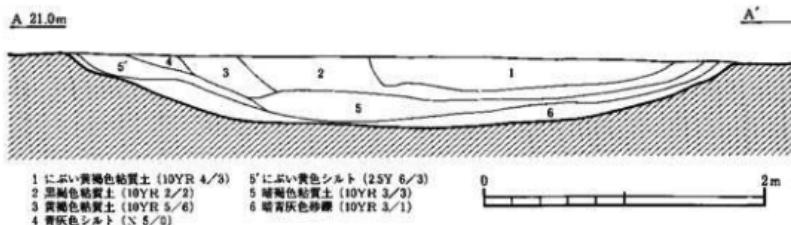


Fig. 26 近世土壌土層断面図

近世土壌出土遺物 (Fig. 27-88~92, PL.22)

88は水甕である。底部は平底。口縁部及び頸部の立ち上がりを欠くが、頸部のしまりはなく、広口を呈すると推定される。外面・胴の張った部分に7条の凹線と2条の凸帯がある。凸帯2条は上3条、下4条の凹線の間に貼付される。凸帯上には、左下がりの連続押圧が施される。突帯は一巡するのではなく、途切れていた可能性がある。内面に斜格子のあて具痕がある。

89はすり鉢である。削り出し高台である。11本を一単位とする原体幅2.1cmの櫛が反時計回りにスリ日を施しているが、使用による摩耗が激しい。

90は徳利か。底面の縁が、高台状に1段高く突出する。釉調は白色で細い貫入がある。また、部分的に鉄釉を流し掛している。

91は萩焼き開口碗である。高台は鋭く削り込まれ、腰部は角張る。胴部が直線的に口縁部に向かって立ち上がる。釉は黄灰釉である。

92は伊万里系紅皿である。高台から胴部が弯曲して立ち上がる。口縁上端に面をもつ。体部外面に菊花文を施文している。釉は内面と外面高台付近まで施される。

近世土壌は91の萩焼き開口碗の特徴から、幕末以降も機能していたことが想定される。しかし、あまり時期が下降する遺物はなく、大学統合移転時には既に埋没していたと考えられる。

旧水田床土、耕作土出土土器 (Fig. 27-93・94, PL.22)

大学統合移転以前に、営まれていた水田の床土及び耕作土中から、わずか2片ではあるが奈良～平安時代の須恵器が出土している。この付近では同時期の須恵器が表採されており、流れ込んだものであろう。

93は壺。高台内端面が接地する。高台はかなり高い。94は壺。高台端部を欠く。

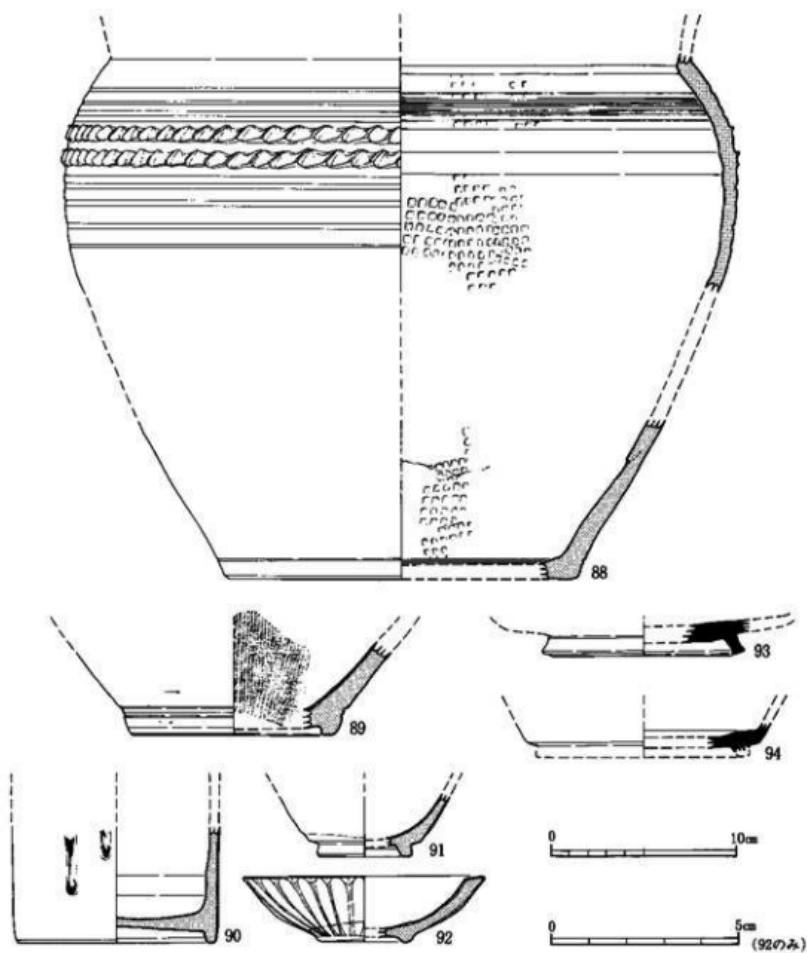


Fig. 27 近世土壤及び包含層出土土器実測図

6 小結

調査の結果、縄文時代河川跡、近世水田遺構が検出された。

縄文時代の河川跡は、試掘調査と同様に東岸を検出することはできなかったが、西南に蛇行していることと、西岸が水流によって抉り取られ、岬状の突出部を呈することが明かとなった。河川跡の規模は、幅17m以上、25m以下で、深さは検出面から0.4~1mを測る。河川跡の流路として、本調査地から北東の谷あいに源があることは年報XIで想定した。さらに今回の調査で、河川が西南に蛇行することから、昭和62年度に調査された教養部複合棟新營地で検出されている縄文河川跡と同一のものである可能性が高まった。吉田構内北東の谷あいに端を発した河川は、地形的に最も低いと考えられる現在の構内中央に向かって流れ込んでいたのであろう。ただし、その流路は度々位置を変え、一定していなかったと考えられる。今後も周辺の調査を行い、流路に関するデーターを蓄積していく必要がある。本調査区の河川跡において、岬状突出部を中心に水場としての利用が認めうるような土器の出土状況があったように、流路に関するデーターの蓄積は自然環境の復元と、それをめぐる人の活動状況を明らかにする一助となろう。

近世水田遺構は、暗渠と溜池状の土壠を検出した。暗渠は東西と南北に走ることが認められた。暗渠は陶製の土管を用いており、大学統合移転直前まで使用されていたものと推定される。土壠は上層に粘土と植物の堆積があり、溝水状態にあったことがうかがえた。

出土遺物には旧石器時代のナイフ形石器・尖頭器、縄文時代の土器・石器・石器などがある。いずれも河川跡からの出土である。このうち、旧石器及び縄文時代晩期以前の土器は、上流の洪積台地より流されてきたと考えられる。原位置をとどめるものではないが、ナイフ形石器と尖頭器の出土は特筆される。吉田遺跡におけるナイフ形石器の出土は、遺跡保存地区に統いて2例目である。

縄文時代晩期の土器は、やや型式幅をもつ。本報告では深鉢形土器の口縁形態より、A・B・Cの3類に分類した。本報告A類は岩田第三類aに、B類は岩田第四類cに、C類は岩田第四類cの新しい部分に相当する。浅鉢形土器は小片のため、型式を判定するまでは至らなかった。この他、夜臼系壺形土器とおぼしき破片が出土しているが、間違いがなければ河川跡の最も新しい出土遺物である。河川跡出土の晩期土器のなかでは深鉢形土器A類が古く前半に位置づけられ、最も新しい夜臼系壺形土器は末に位置づけられる。このうち主体を占めるのは、深鉢形土器C類である。深鉢形土器C類は岩田遺跡の報告において「第四類土器と第五類土器の間を埋めるものの可能性も強く、新しい要素を具えた壺形

土器と考えられる。」として、凸帯文土器の直前に位置づけられている。その見解は正しく、山口県内縄文晚期土器編年における岩田第四類と奥正椎寺ⁱⁱⁱの間に位置する未命名の一型式である。連合歯の調査では深鉢形土器C類のみで浅鉢を欠くが、山口市木崎遺跡^{iv}の浅鉢が加わることによって、この未命名の型式が構成されると考えればよい。今後の資料の充実によって、岡山県原下層式^vや北九州市貫川Ⅲ b 式との比較が可能になるだろう。

〔注〕

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内農学部連合歯医学科棟新宮に伴う試掘調査」
〔山口大学構内遺跡調査研究年報〕Ⅺ、1993年)
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「農学部微生物実験室その他模様替機械設備改修に伴う立会調査」〔山口大学構内遺跡調査研究年報〕Ⅺ、1993年)
- 3) 山口県教育委員会『屋敷遺跡』(1990年)
- 4) 鞍手町埋蔵文化財調査会『新延貝塚』(1980年)。泉拓良氏のご教示による。
- 5) 米子市教育委員会『除田』(1984年)。泉拓良氏のご教示による。
- 6) 泉拓良氏のご教示による。
- 7) 潤見浩「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」〔広島大学文学部紀要〕第18号、1960年)
- 8) 財松山市生涯学習振興財团埋蔵文化財センター「道後今市遺跡8次調査」〔道後城北遺跡群〕、1992年)
- 9) 香川県教育委員会『林・坊城遺跡』(1993年)
- 10) 山口県教育委員会『萩焼古窯』(1990年)
- 11) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内教養部複合棟新宮に伴う発掘調査」
〔山口大学構内遺跡調査研究年報〕Ⅷ、1988年)
- 12) 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和59年度)」〔山口大学構内遺跡調査研究年報〕VI、1987年)
- 13) 山口県教育委員会『奥正椎寺遺跡』I (1984年)
- 14) 山口県教育委員会『朝田墳墓群I 付 木崎遺跡』(1976年)
- 15) 嶽木義昌・高橋謙「瀬戸内」〔日本の考古学〕2、1965年)
- 16) 前山義人「貫川遺跡」2 (北九州市埋蔵文化財調査報告書) 第85集、1989年)

吉田橋内農学部連合歯医学科新幹間に伴う発掘調査

Tab. 2 出土遺物観察表

法規()は復元値

番号	器種	重量(g) (①外径②内径③高さ)	色調 (①外表面②内面)	胎土	出土地点	備考
縄文土器 (Fig.11・13~20)						
4	縄文土器		①褐色 ②灰褐色	黒茎母の砂粒を含む	D 3 区	2条の巻帯が残存
5	縄文土器		黒褐色	2~3mmの砂粒を含む	A 4 区	外面に2段以上の巻帯文
6	縄文土器		①褐色 ②灰褐色	1mm弱の砂粒を含む	E 4 区	外面上にLHの纏文 内面に貝殻文
7	縄文土器		①褐色 ②灰褐色	赤色斑紋を含む	E 4 区	外面の風化の巻帯2条
8	縄文土器 深鉢	①(40.0)	①褐色 ②灰褐色	2~3mmの石英角礫を含む	B 3 区	口縁部は破片をなすと思われる
9	縄文土器 深鉢	①(39.0)	①褐色 ②灰褐色	2~3mmの石英角礫を含む	D 2 区	内部の条件は器具によるものか
10	縄文土器 深鉢	①(47.4)	①褐色 ②灰褐色	2~3mmの石英角礫、小石片を含む	D 1 区	口縁底面に長棒円の押印
11	縄文土器 深鉢		褐色	黒砂粒を多量に含む	H 1 区	浅鉢の可能性がある
12	縄文土器 深鉢		①褐色 ②灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	A 1 区	試掘調査出土
13	縄文土器 深鉢		①褐色 ②灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	C 3 区	外面上の風化が感じられる
14	縄文土器 深鉢		①褐色 ②灰褐色	1mm弱の砂粒を含む	A 4 区	外面上の風化は著しいが内面は程度を残す
15	縄文土器 深鉢		①褐色 ②灰褐色	1mm前後の砂粒を含む	C 1 区	外面上に巻帯20と同一個体か
16	縄文土器 深鉢		①褐色 ②灰褐色	1mm前後の砂粒を含む	B 1 区	口縁端面に凹線
17	縄文土器 深鉢		①褐色 ②灰褐色	黒砂粒を含む	B 3 区	
18	縄文土器 深鉢		褐色	1mm前後の砂粒を多量に含む	B 2 区	
19	縄文土器 深鉢		①褐色 ②灰褐色	1mm前後の砂粒を含む	D 1 区	試掘調査出土
20	縄文土器 深鉢		①褐色 ②灰褐色	1mm前後の砂粒を含む	D 1 区	試掘調査出土
21	縄文土器 深鉢		褐色	黒砂粒を含む	D 2 区	15と同一個体か
22	縄文土器 深鉢		①褐色 ②灰褐色	黒茎母を含む	D 3 区	試掘調査出土
23	縄文土器 深鉢		①褐色 ②灰褐色	黒砂粒及び3~4mmの石英角礫を含む	D 2 区	外面上にナデ
24	縄文土器 深鉢		褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	B 2 区	外面上に条痕
25	縄文土器 深鉢		褐色	1~2mm前後の砂粒を含む	C 1 区	外面上に擦付帶
26	縄文土器 深鉢		灰褐色	2~3mmの石英角礫を含む	C 1 区	
27	縄文土器 深鉢		①褐色 ②灰褐色	1mm前後の砂粒及び2mmの角礫を含む	D 1 区	外面上に条痕
28	縄文土器 深鉢		褐色	2~3mmの砂粒を含む	D 1 区	外面上に条痕
29	縄文土器 深鉢		褐色	黒砂粒を含む	B 1 区	内面にコザキ、浅鉢の可能性あり
30	縄文土器 深鉢		褐色	黒砂粒を多く含む	C 1 区	外面上に擦付帶ナデ
31	縄文土器 深鉢		①褐色 ②灰褐色	2mm前後の砂粒を含む	A 4 区	32と同一個体か
32	縄文土器 深鉢		褐色	2mm前後の砂粒を含む	A 4 区	外面上に擦付帶、板ナデ
33	縄文土器 深鉢		①褐色 ②灰褐色	2~3mmの石英角礫を含む	B 3 区	8と同一個体か
34	縄文土器 深鉢		①褐色 ②灰褐色	1~3mmの石英角礫を含む	D 4 区	8と同一個体か
35	縄文土器 深鉢		①褐色 ②灰褐色	1~3mmの石英角礫を含む	B 2 区	8と同一個体か
36	縄文土器 深鉢		①褐色 ②灰褐色	1~2mmの砂粒を多く含む	G 1 区	
37	縄文土器 深鉢		①褐色 ②灰褐色	1~2mmの砂粒を多く含む	C 1 区	
38	縄文土器 深鉢		①褐色 ②灰褐色	1mmの砂粒及び3~4mmの石英角礫を含む	A 4 区	
39	縄文土器 深鉢		①褐色 ②灰褐色	2~3mmの石英角礫を含む	I 3 区	
40	縄文土器 深鉢		褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	D 2 区	禾本科植物の茎によるとみる
41	縄文土器 深鉢		淡褐色	黒砂粒を多く含む	C 1 区	禾本科植物の茎によるとみる
42	縄文土器 深鉢		①褐色 ②灰褐色	1mm前後の砂粒を含む	D 1 区	禾本科植物の茎によるとみる

出土遺物観察表

括弧()は復元値

番号	器種	計量(cm) (①口幅②底径③高さ)	色と質 (①外面②内部)	粘土	出土地点	備考
43	縄文土器	深鉢	淡褐色	2~3mmの石英角礫を含む	B 1 区	
44	縄文土器	深鉢	①淡赤褐色 ②茶色	2mm前後の砂粒を含む	J 1 区	
45	縄文土器	深鉢	①淡褐色 ②茶色		J 1 区	外面ケズリ状の条痕 内面に条痕
46	縄文土器	深鉢	②褐色 ③暗褐色	1~3mm前後の砂粒を含む	B 1 区	外面ケズリ後ナダ
47	縄文土器	深鉢	暗褐色	微細粒を多量に含む	B 2 区	糸本科植物の系による条痕か
48	縄文土器	深鉢	①灰褐色 ②灰黑色	微細粒及び、3mm前後の砂粒を含む	D 1 区 試掘調査出土	外面ケズリ状の条痕
49	縄文土器	浅鉢	①白色 ②褐色	1~3mmの砂粒を含む	D 1 区 試掘調査出土	50と同一個体か
50	縄文土器	深鉢	①白色 ②褐色	1~3mmの砂粒を含む	C 1 区	49と同一個体か
51	縄文土器	深鉢	①褐色 ②茶色	1mm前後の砂粒を含む	G 1 区	
52	縄文土器	浅鉢	①褐色 ②茶色	微細粒を多量に含む	試掘調査出土	口縁部内面に沈れ
53	縄文土器	浅鉢	淡灰褐色	2~3mmの砂粒を含む	D 1 区 試掘調査出土	
54	縄文土器	浅鉢	①灰褐色 ②褐色	2~3mmの石英角礫を含む	B 2 区	
55	縄文土器	浅鉢	①茶褐色 ②淡褐色	2~3mmの石英角礫を含む	試掘調査出土	
56	縄文土器	浅鉢	②褐色 ③茶褐色	1~2mmの石英角礫を含む	B 1 区	
57	縄文土器	深鉢底部	②淡褐色 ③暗褐色	1~3mmの砂粒を多量に含む	D 4 区	
58	縄文土器	深鉢底部	②淡褐色 ③暗褐色	1~3mmの砂粒を多量に含む	J 1 区	
59	縄文土器	深鉢底部	①乳白色 ②茶褐色	2~4mmの石英角礫を含む	D 2 区 試掘調査出土	高台上に粘土壁を貼付ける
60	縄文土器	深鉢底部	①赤褐色 ②茶褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	A 3 区	
61	縄文土器	壺	淡褐色	1~3mmの石英角礫を含む	A 1 区	腹部部間に段(沈痕を加工)

近世土壙 (Fig.27)

62	陶器	壺 ②(19.0)	赤褐色 新削面	精製粘土		肥前系か
63	陶器	すり鉢 ②(10.8)	①暗赤褐色 ②淡褐色	1~2mmの長石を含む		内面は使用による磨耗が激しい
64	磁器	鉢利 ②(10.4)	本赤色 釉面 底白	精製粘土		
65	磁器	碗 ②(4.8)	本赤色 釉面 底白	精製粘土		外側の緋は腰部まで
66	磁器	紅葉 ①(4.4)②(1.7)③(1.15)	本赤色 釉面 底白	精製粘土		外側の高方に輪はかかる

旧水田用土・耕作土 (Fig.27)

93	粗挽器	壺 ②(10.8)	青灰色	精製粘土		
94	粗挽器	壺	青灰色	長石を含む		

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)	石 質	出土地点	備考
----	----	---------	---------	---------	--------	-----	------	----

縄文河川跡 旧石器 (Fig.10)

1	ナイフ形石器	4.0	1.9	0.9	4.04	黒曜石	B 3 区	全体的に磨滅が激しい
2	ポイント	6.85	2.5	1.25	21.22	サメカイト	D 3 区	全体的に磨滅が激しい
3	石核	4.5	3.3	1.85	24.04	チャート	E 2 区	

縄文河川跡 石器 (Fig.22~24)

62	石匙	4.9	(6.6)	1.05	26.34	サメカイト	C 2 区	刃部両面調整
63	石鏃	1.9	1.8	0.3	0.90	メノウ	D 1 区 試掘調査出土	
64	剥片	2.4	1.2	0.55	1.66	水晶	C 3 区	
65	剥片	2.7	2.9	0.8	6.11	水晶	H 2 区	
66	剥片	1.5	2.1	0.25	0.90	サメカイト	H 2 区	

吉田構内農学部連合獣医学科棟新宮に伴う発掘調査

法量()は復元値

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	出土地点	備考
87	剝片	2.15	1.9	0.45	1.47	サヌカイト	B 2 区	
88	剝片	3.2	3.7	0.5	5.49	流紋岩	E 4 区	
89	剝片	4.1	1.7	0.9	6.85	流紋岩	耕土出土	
70	剝片	3.5	2.15	0.75	5.80	頁岩	A 4 区	
71	剝片	3.0	2.4	0.9	8.02	黒曜石	A 1 区	
72	剝片	2.3	1.75	0.25	0.91	黒曜石	E 3 区	
73	剝片	1.6	2.4	0.4	1.38	黒曜石	E 4 区	
74	剝片	1.9	1.6	0.3	0.55	黒曜石	J 2 区	
75	剝片	4.6	7.1	1.15	33.98	蛇島産黒曜石	D 4 区	
76	剝片	4.1	4.2	1.5	23.05	蛇島産黒曜石	D 4 区	
77	剝片	2.7	3.55	1.65	14.23	蛇島産黒曜石	E 3 区	
78	剝片	3.2	1.65	0.8	2.97	蛇島産黒曜石	B 4 区	
79	剝片	3.2	1.5	0.5	2.18	蛇島産黒曜石	E 3 区	
80	剝片	3.75	1.9	1.15	4.31	蛇島産黒曜石	E 3 区	
81	剝片	5.0	2.35	0.9	10.23	蛇島産黒曜石	D 4 区	
82	剝片	3.2	2.05	0.55	5.51	蛇島産黒曜石	E 4 区	
83	剝片	2.2	2.0	0.8	3.08	蛇島産黒曜石	E 4 区	
84	剝片	2.4	1.7	0.35	1.36	蛇島産黒曜石	J 1 区	
85	剝片	1.5	1.45	0.2	0.51	蛇島産黒曜石	E 4 区	
86	剝片	2.0	1.8	0.5	1.69	蛇島産黒曜石	E 3 区	
87	剝片	1.6	1.5	0.6	1.28	蛇島産黒曜石	J 1 区	

第3章 光構内教育学部附属光中学校武道館新館に伴う発掘調査

1 調査の経過

光中学校武道館の新館が、光構内の南端部に位置するプールの東側に計画された。埋蔵文化財資料館運営委員会の判断により、埋蔵文化財資料館が平成3年12月2日から13日まで試掘調査を実施した。調査の詳細は、年報Ⅺで報告を行っているが概略を再録しておく。

試掘調査は新館予定地の中央部に新館建物の長軸に沿って、幅約1.5m、長さ約25mのトレーナーを設定して行った。地山である黄褐色砂を遺構検出面とする土壌2基、溝状遺構1条、柱穴状遺構1基が検出された。これらの遺構から遺物の出土はなく、時期決定を行うことはできなかった。遺物はこの遺構面より上位に堆積する木炭を含んだ暗褐色砂などから出土している。遺物には、土師器・瓦質土器・国産陶磁器などがある。以上のことより、本調査区には古代～中世の遺物包含層・遺構が埋存していることが明らかになった。

この試掘調査の結果を受けて、埋蔵文化財資料館運営委員会で協議を行った。その結果、新館工事に先立ち予定地約500m²について、事前に発掘調査を実施することになった。発掘調査は、埋蔵文化財資料館が平成4年1月11日から2月12日にかけて実施した。

2. 層位 (Fig.29・30, PL.24)

当調査区の基本層序は、次の順である。

第I a層：明黄灰色砂質土

第I b層：黄灰色砂質土

第II層：暗茶灰色粘土

第III層：茶灰色粘質土

第IV層：明茶灰色砂（包含層1）

第V層：暗褐色砂（包含層2）

第VI層：暗褐色砂（包含層3）

第VII層：淡灰黄色砂（地山）

第I a・I b層は表土層で厚さは10～20cmである。第II・III層の堆積は、旧山口県女子師範学校の建築と使用時の搅乱によって、東側にしか残っていない。

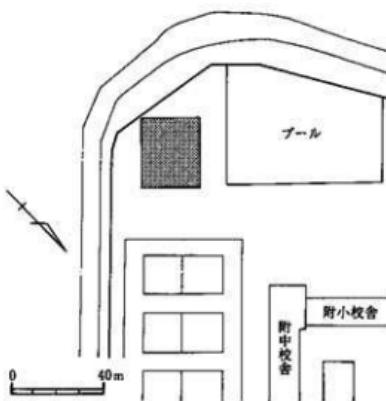


Fig. 28 調査区位置図

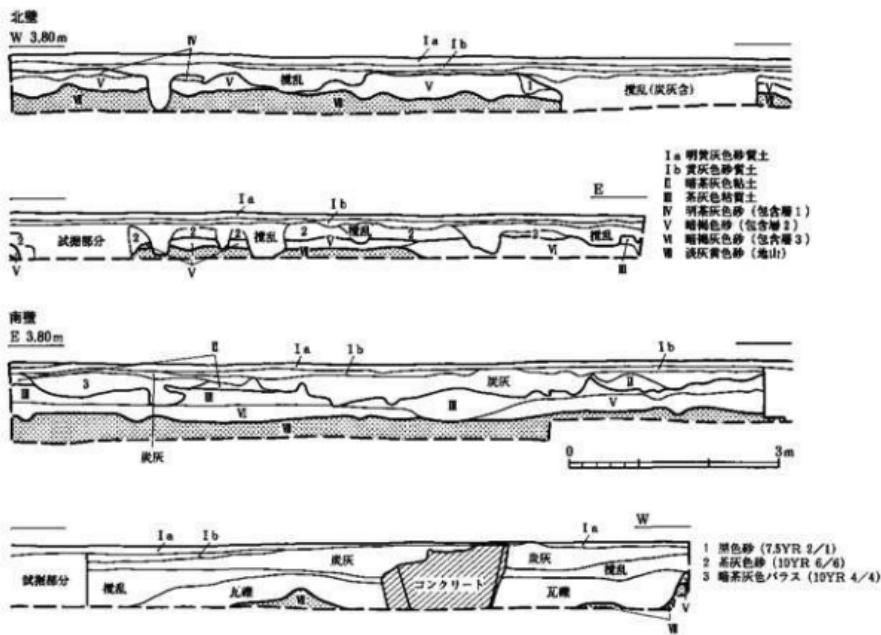


Fig. 29 調査区北壁・南壁土層断面図

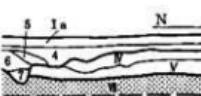
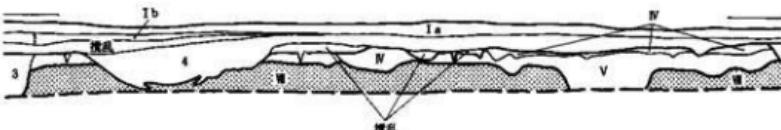
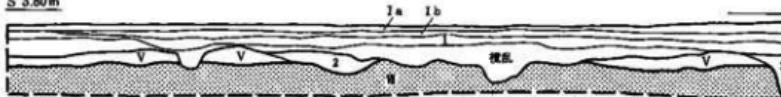
この東側の第Ⅱ層・第Ⅲ層に対応するレベルでの西側の土層は、炭灰及びコンクリートを含んだ暗褐色灰色粘質土の擾乱層である。擾乱のため明かにしえないが、西側は峨嵋山に寄った東側の第Ⅱ層・第Ⅲ層とは異なる土層堆積であった可能性がある。

第Ⅳ層は中世～近世の遺物を含む。調査区西側のみの堆積である。第V層もまた西側のみに堆積する繩文～中世の遺物包含層であるが、この層の上面が第1遺構検出面となる。第VI層は第V層よりも下位の堆積層と考えられるが、峨嵋山よりの東側のみに堆積がみられ、西側に堆積は認められない。第V層と第VI層は、それぞれ供給地の異なった同時堆積である可能性も残されている。これら第V・VI層の下、第VII層地山の上面が第2遺構検出面である。

層位

西壁

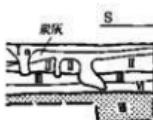
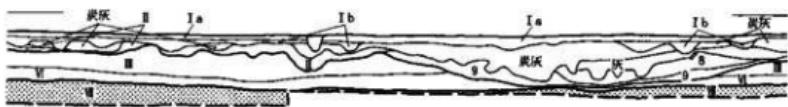
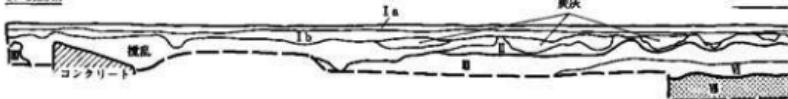
S 3.80m



I a	明黄色砂質土	1 暗褐色粘質土 (2.5Y 5/1)
I b	黃褐色砂質土	2 黑色砂 (7.5Y R 2/1)
II	暗灰褐色粘土	3 暗褐色砂 (10YR 4/4)
III	茶褐色粘質土	4 暗茶褐色粘質土 (10YR 5/2)
IV	明灰色砂 (包含層1)	5 N層+黑灰色砂
V	暗褐色砂 (包含層2)	6 黑褐色砂 (10YR 黑褐3/1)
VI	暗褐色砂 (包含層3)	7 暗茶褐色バラス
VII	淡灰黃色砂 (地山)	8 暗茶褐色粘土泥じり (10G 6/1)

東壁

N 3.80m



0 3m

Fig. 30 調査区西壁・東壁土層断面図

3. 第2遺構面（第VII層上面）の遺構・遺物（Fig.31, PL.25）

本節では、第VII層：淡灰黄色砂（地山）の上面で検出された、遺構・遺物について記述を行う。なお、この第VII層上面は第2遺構面とし、上層である第V層上面の遺構検出面を第1遺構面とする。

当調査地は試掘調査のデーターから、旧山口県女子師範学校により大規模な搅乱を受けていることが、ある程度予想されてはいた。しかし、表土層を重機によって除去した時点で、調査区の東半分を中心として、予想以上の搅乱を受けていることが判明した。このことにより、調査の重点は比較的搅乱の少なかった西半分におかれた。

調査区西半の第1遺構面を検出した時点では、確認のため南北搅乱部分に観察トレンチを設定した。南壁に沿う長さ8m、幅1mの観察トレンチ1と、東壁に沿う長さ12m、幅1mの観察トレンチ2の2カ所である。観察トレンチ1・2とともに、一部包含層（第VI層：暗褐色灰色砂）の残存が認められた。ただし、観察トレンチ1の地点は搅乱が激しく、遺物の包含状況は希薄であった。これに対して、観察トレンチ2では比較的良好な状況での遺物の包含が認められた。そこで、残存する包含層を追って、観察トレンチ2の西側を3.2m×6.0mに拡張した。その結果、第VII層上面を検出面として炭灰の充填した不整円形の土壙（第23号土壙）と、土壙周辺に散らばる古墳時代の須恵器・土師器を検出した。調査区西半においても、第1遺構面の下層に第VII層上面を検出面とする遺構が検出された。これらを同一遺構面のものと判断し、第2遺構面上の遺構として一括する。

第2遺構面の基盤となる第VII層は、調査区の全域で確認される。第VII層の上面は、調査区西側から東側に向かって傾斜している。西壁で標高約3.1m、東壁で標高約2.8mを測り、約30cmの比高差がある。また、第VII層の土質は一定ではなく、海側に面した調査区北半に行くにしたがって、小石が多く混入する。この第VII層上面を遺構面として検出された遺構は、土壙4基に柱穴6基である。なお、第2遺構面上の遺構番号は、頭に20をつけることによって、第1遺構面上の遺構番号と区別することとする。これらの遺構で、遺物が出土したのは、第22・23・24号土壙のわずか3基のみである。第22号土壙から前期縄文土器の小片が出土した他は、第23・24号土壙とともに古墳時代後期の土器が出土している。また、第VII層上面に張り付くようにして、第23号土壙周辺に散らばっていた土器群も古墳時代後期に属するものであった。第VII層の上部に堆積した第V・VI層は、縄文土器・古墳時代の須恵器と土師器・中世土器を包含していた。これらのことより、第2遺構面が古墳時代後期以前の遺構検出面になると考えられる。

第2遺構面（第4層上面）の遺構・遺物

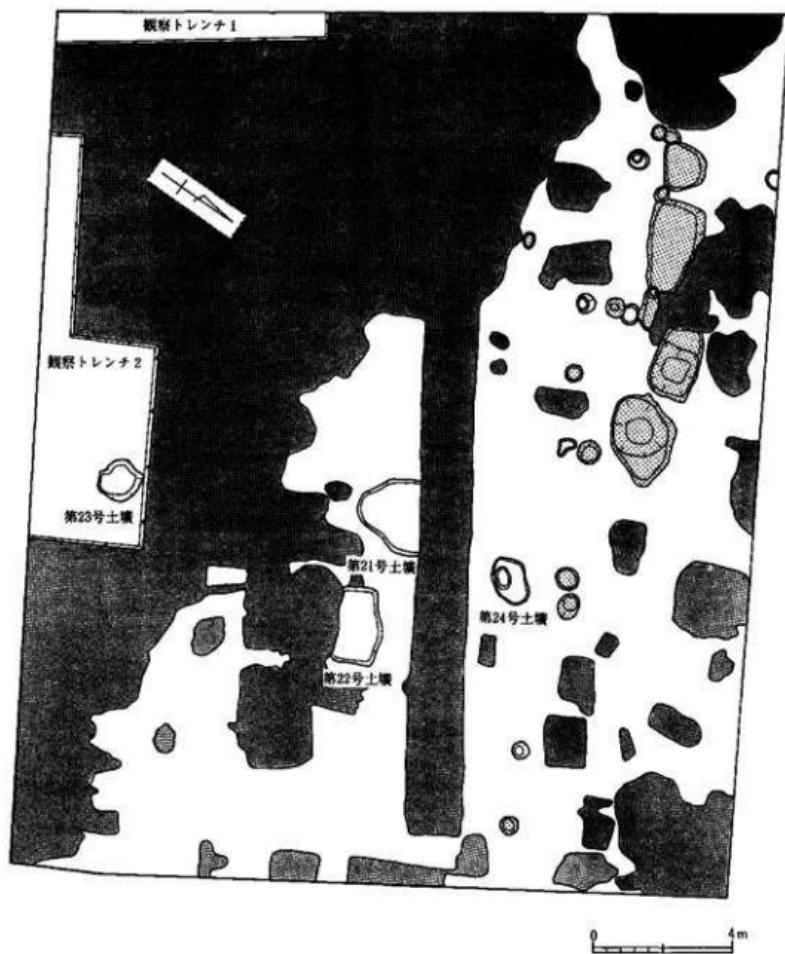


Fig. 31 第2齒槽面造形配図

アミ目 大 第1造橋面道路
小 損乱

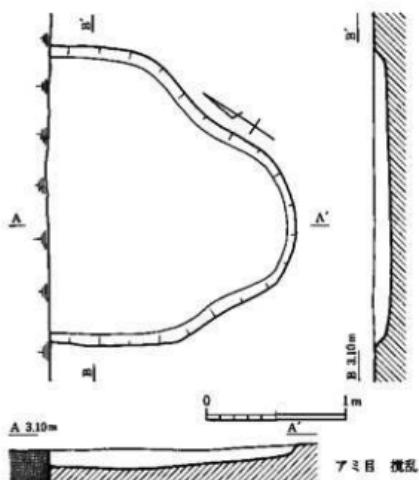


Fig. 32 第21号土壟実測図

第21号土壟 (Fig. 32, PL. 26)

調査区の中央部、平成3年度トレンチの南側に位置する土壟である。土壟の北側が平成3年度トレンチにかかるが、平成3年度の試掘調査では検出されていない。

平面形は浅い皿状を呈し、長軸210cm、短軸176cm以上の規模をもつ。検出面からの深さは13cmである。検出面の標高は約3.00m、底面標高は約2.87mである。長軸方向は西南-東北。

埋土は、上層の第V層と同じ暗褐色砂である。出土遺物はなく、平成3年度調査で検出されなかったことから上層の染み込みの可能性もある。

第22号土壟 (Fig. 33, PL. 26)

調査区の中央部、第21号土壟の東側に位置する。土壟の北側は撥乱によって削られているため、平面形態は明かではないが現状では長方形を呈する。長軸210cm、短軸120cm以上の規模をもつ。深さは、検出面から7cmである。検出面の標高は約3.00m、底面の標高は約2.93mである。長軸方向は、西南-東北。

第21号土壟と同様に暗褐色砂の埋土であり、上層からの染み込みかとも考えられる。ただし、埋土中より小片の前期縄文土器が数片出土しており、第21号土壟とともに縄文時代前期に遡る遺構の可能性も残されている。

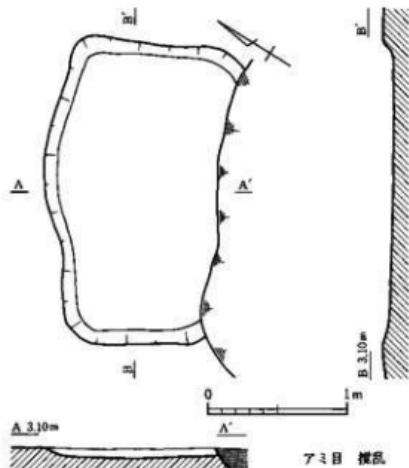


Fig. 33 第22号土壟実測図

第2遺構面(第Ⅴ層上面)の遺構・遺物

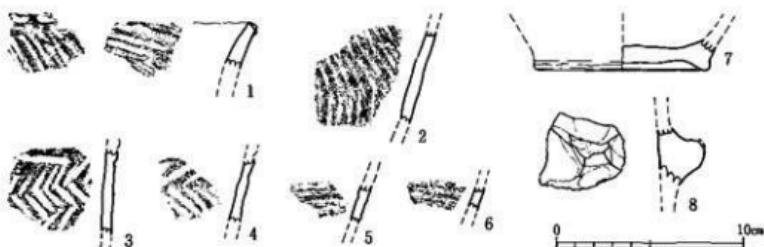


Fig. 34 第22号土壤及び調査区出土縄文土器実測図

第22号土壤及び調査区出土縄文土器 (Fig.34-1~8, PL.31)

遺構に伴ったのは、第22号土壤出土の4と第3号土壤出土の5のみである。このうち、第3号土壤は中世の遺物を包含した第V層上面を遺構検査面としており、5の縄文土器は混入品である。第V層から出土した1~3・6のうち、1~3は第22号土壤出土の4と保存状況・色調などが良く似ている。型式も同じ縄文時代前期の曾畠系であり、第22号土壤に関連した遺物である公算が強い。

1は深鉢形土器の口縁部片である。外反する口縁部の端面を面取りし、貝殻で上面を押圧する。内外面ともに、2枚貝による条痕が施される。外面は左に傾斜する縦位の条痕である。胎土は2~4mmの石英粒を含む。色調は暗赤褐色。第V層出土。2は深鉢形土器の胴部下半片である。外面には縦条痕が上下で施文方向をかえて切り合い、横羽状文を呈する。条痕は2枚貝による。内面の調整はケズリである。胎土は2~4mmの石英粒を含む。色調は暗赤褐色。第V層出土。3は深鉢形土器の胴部上半片である。外面は横線の下に横羽状文を施している。内面の調整はケズリである。胎土は2~4mmの石英粒を含む。色調は暗赤褐色。外面には土中の鉄分により、砂が付着する。第V層出土。4は深鉢形土器の胴部上半片である。外面には羽状文が施される。胎土は2~4mmの石英粒を含む。色調は暗赤褐色。外面には土中の鉄分により、砂が付着する。第22号土壤出土。5は外面に横位の条痕、内面にケズリの調整をもつ小片。胎土は1~2mmの石英粒を含む。色調は暗赤褐色。第V層出土。6は外面に横位の条痕をもつ小片。外面には土中の鉄分により、砂が付着する。第IV層出土。7は底面がくぼむ高台状の底部である。若干、底部側縁部が張りだす。復元底径9.0cm。観察トレンチ1の第VI層出土。8は台形状突起の部位片。胎土には多量の2~4mmの石英粒を含む。

1~4はその文様の特徴より、縄文時代前期の曾畠系土器に属する。

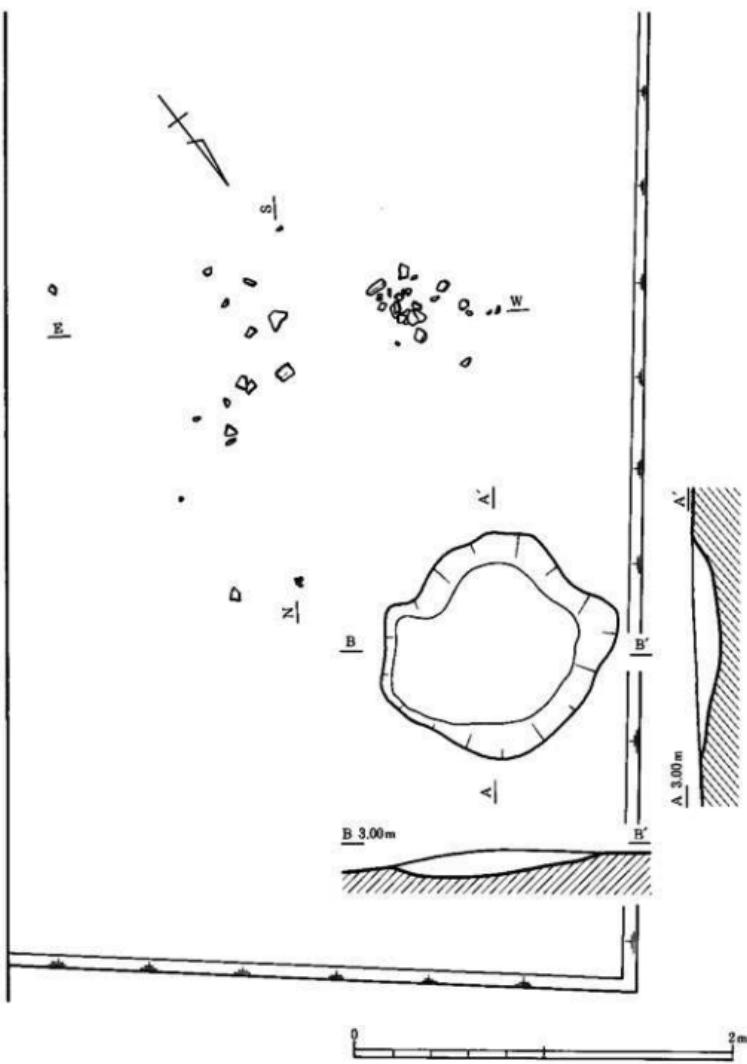


Fig. 35 第23号土壤及び上器集中区配置図

第2遺構面（第Ⅳ層上面）の遺構・遺物

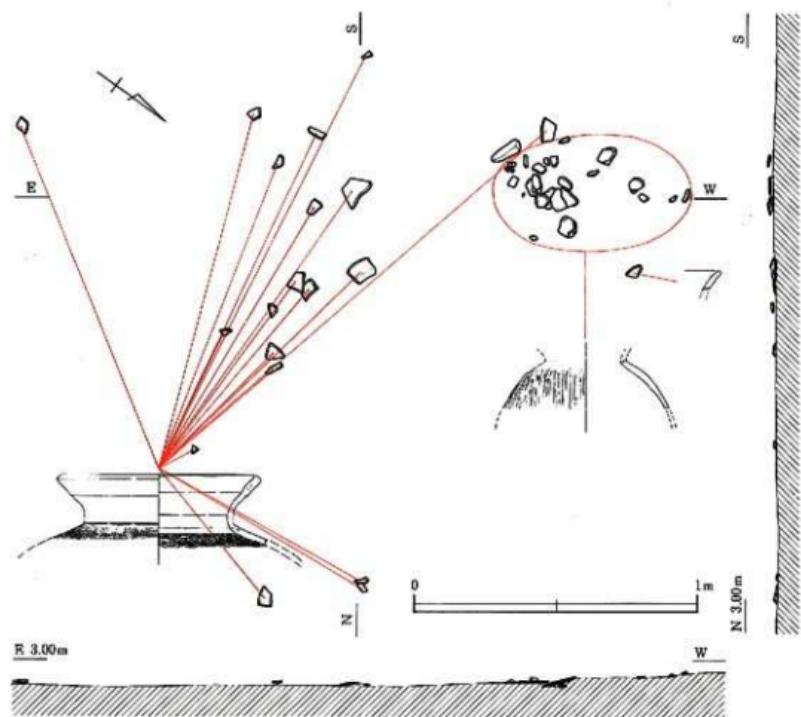


Fig. 36 上器集中区出土状況図

第23号土壙 (Fig.35, PL.27)

観察トレンチ2の拡張区北端で検出された土壙である。平面形態は不整円形を呈し、直径約120cmの規模をもつ。深さは検出面から約14cmである。検出面の標高は約2.96m、底面の標高は2.82mである。土壙内は炭灰で充填されており、壁面の地山は熱により白く変色していた。須恵器片12が1片出土している。

土器集中区 (Fig.35・36, PL.28)

観察トレンチ2の拡張区全域にわたり、第Ⅳ層地山上面に張り付くようにして検出された土器群である。その検出面の標高は2.90mである。土器群は古墳時代の須恵器と土師器からなり、同時期のものと考えられる。10の土師器壺はその位置で潰れたごとく、1カ所

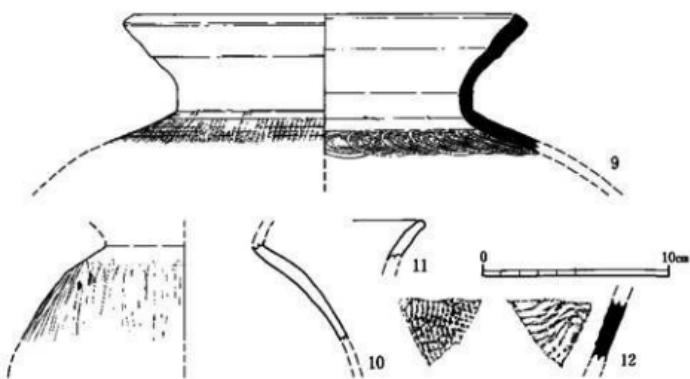


Fig. 37 第23号土壤及び土器集中区出土遺物実測図

にまとまっていた。これに対し、9の須恵器壺は拡張区全域に広く破片が散らばっていた。なお、第23号土壤出土の須恵器片12は、これら土器群と同時期であると考えられる。炭灰が充填した土壤を炉にみたて、土器群を床面に散らばった状況とするならば、住居跡と考えることも可能である。

第23号土壤出土遺物 (Fig.37-12, PL.31)

12は須恵器壺の胴部片である。外面は格子目のタタキ後に、カキ目が施される。内面には同心円のあて具痕を残す。色調は淡青灰色である。

土器集中区出土遺物 (Fig.37-9~11, PL.31・32)

9は須恵器の壺である。口縁部から肩部までが残存する。頸部は外反し、屈曲しながら口縁部へと立ち上がる。口縁部は外面に粘土を貼りたし、肥厚させている。口縁端部は面をもち、内端をヨコナデによってつまみ出す。肩部は頸部より強く張り出す。肩部外面の格子タタキは、カキ目によってナデ消される。内面には同心円のあて具痕を残す。色調は灰青色。復元口径20.4cm。

10は土師器の壺である。しまった頸部に対して、胴部はやや張り気味である。外面の調整は、タテハケ後タテミガキである。内面の調整は風化のため、観察は不可能であった。色調は淡赤褐色。この壺は1個体分が潰れた出土状態であったが、それぞれの破片が著しく風化し、接合は不可能であった。このため、胴部上半のみの図上復元となった。

11は壺の口縁部片である。口縁端部は面をもち、下端がやや肥厚する。外面には強いヨコナデの条線が残る。色調は暗褐灰色。

第2遺構面(第2層上面)の遺構・遺物

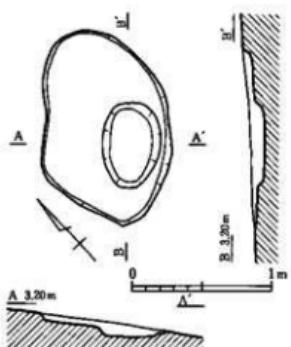


Fig. 38 第24号土壙実測図

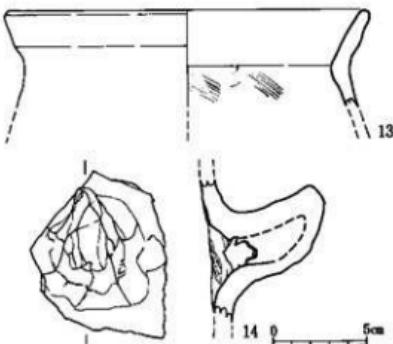


Fig. 39 第24号土壙出土遺物実測図

第24号土壙 (Fig.38, PL.27)

調査区の中央部、平成3年度トレンチの北側に位置する2段掘りの土壙である。平面形は楕円形を呈し、長軸140cm、短軸90cmの規模をもつ。検出面から10cm程の深さに1段目の底面がある。この1段目の底面の南よりに長軸60cm、短軸40cmの楕円形の平面を呈する2段目が掘りこまれる。2段目の底面は、検出面から約18cm程の深さである。検出面の標高は、西側で3.15m、東側で3.00mである。1段目の底面標高は、西側で3.09m、東側で3.01mである。2段目の底面標高は、約2.98mである。長軸方向は南-北。埋土は暗褐色沙である。古墳時代後期と考えられる甌口縁部13が出土している。なお、14は排土からの表探ではあるが、胎土・色調などから13の把手と考えられるものである。

第24号土壙出土遺物 (Fig.39-13-14, PL.32)

13は土師器甌である。口縁部と胴部上半が残存する。頸部には強いヨコナデが施され、口縁部はかすかな稜をもって外方に開く。頸部が強いヨコナデによってくぼむため、口縁部の外面下端はやや肥厚気味である。口縁部は最終調整としてヨコナデが施され、内面のヨコハケは消される。口縁端部は面をもつ。胴部外面はナデ調整であるが、部分的に極めて細かい条線が観察できる。胴部内面もナデ調整であるが、頸部下にはあらいハケの痕跡が残る。胎土は4mm前後の砂粒を含む。色調は暗赤褐色である。復元口径18.6cm。

14は土師器甌の角状把手である。排土の置き場から表探した。胎土、色調が13の甌に類似同一個体と考えられる。外面の調整はナデ。内面把手部分は中空で、その周囲はケズリによる調整を行っている。その特徴より、古墳時代後期に属すると考えられる。

第VI層（包含層3）出土遺物（Fig.40-15~23, PL.32・33）

本来ならば、第VI層と同じく第V層（地山）の上面に堆積し、第1遺構面の基盤となる第V層（包含層2）の出土遺物も報告を行うべきであろうが、第V層からはほとんど図示できるような遺物が出土しなかった。このため、第VI層出土遺物の報告に偏らざるを得なかつた。第VI層は暗褐色を呈する砂層であるが、粘性があり岐阜山からの流れ込みによって、形成されたものと考えられる。第VI層中には、古墳～中世の遺物が含まれている。

古墳時代遺物（Fig.40-15~19, PL.32・33）

15は高環の中空脚部である。縦長円錐形の脚に、強く屈曲し広がった裾部をもつ。脚部外面はかすかに面取りを行う。内面中空部分は、上端に及ぶものではない。内外面ともにハケ調整が施される。外面ハケ調整は、縦方向で基部から裾部にむかって施される。基部のハケは、坏部接合時の強いヨコナデによって消される。内面ハケ調整は、螺旋状に反時計回りで施される。裾部のハケ調整は、強いヨコナデによって消される。完成した脚部に、粘土を貼りたし坏部を形成したのか、脚基部には坏部の剥離痕を残す。胎土は金雲母の混入が目立つ。色調は明褐色。観察トレンチ1出土。

16～18は臺口縁部である。いずれも観察トレンチ2から出土。16は胴部と考えられる破片も出土しているが、接合できなかつた。短く外方に開いた口縁部である。ヨコナデが施されているが、口縁基部にはハケ調整の痕跡を残す。口縁端部は丸く收めている。胎土は1～2mmの砂粒を含む。色調は褐灰色。復元口径17.0cm。17は大きく外弯した口縁部をもつ。口縁端部はヨコナデによって上方につまみあげられ、端面を拡張する。内外面ともにヨコナデが施される。胎土は微砂粒を含む。色調は赤褐色。18も大きく外弯した口縁部をもち、口縁端部は上方につまみあげられる。口縁端部は幅の広い、傾斜した面をもつ。外面はヨコナデ調整であるが、内面にはハケ調整を残す。胎土は1mm前後の砂粒を含む。色調は暗灰色。

19は塊形の坏である。内弯ぎみの口縁部をもつ。口縁端部は幅1cmにわたって、内外面同時にヨコナデが施される。口縁内面はこのヨコナデによってやや凹面をなす。口縁端部は丸く收められるが、外方にわずかに突出する。内外面ともにナデ調整。胎土は微砂粒を含むが、精製の粘土である。色調は灰褐色。復元口径10.4cm。観察トレンチ2出土。

以上、15～19までが古墳時代に属する遺物である。このうち、16～19までが観察トレンチ2からの出土である。これらは、前出の9～11の須恵器や土師器とともに、土器群を形成していた可能性が強い。

第VI層(包含層3)出土遺物

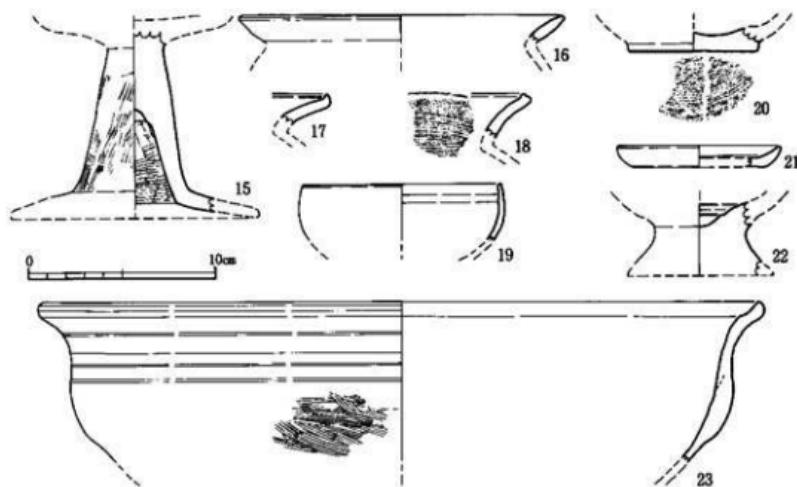


Fig. 40 第VI層(包含層3)出土遺物実測図

中世遺物 (Fig. 40-20~23, PL.33)

20は土師器壺の底部である。胴部からやや突出した、平底の底部をもつ。底面には、糸切りの跡を残す。胎土は1~3mmの砂粒を含む。色調は淡赤褐色。復元底径6.7cm。

21は土師器皿である。平底の底部から口縁部が短く立ち上がり、器高は低い。胎土は精製粘土に、黒雲母を含んだ微砂粒を混じえる。色調は淡赤褐色。復元口径8.6cm、復元底径7.0cm、器高1.15cmを測る。

22は台付皿の脚部である。脚裾部は外側に大きく開くが、その端部を欠いている。底部は平底で、糸切り痕を残す。皿部は欠くが、脚基部の内面中央が指圧によりくぼむ。くぼみは螺旋状の湯をまいており、成形時における皿部引出しの痕跡と考えられる。胎土は精製粘土である。

23は鍋である。胴部下半を欠く。口縁部に最大径をもち、器高に対して口径が大きく上回る。体部外面には、ハケ調整が施される。このハケ調整を切って、頸部から口縁部にかけて強いヨコナデが施される。口縁部は直立する頸部より外反させ、さらに強い横ナデによって端部を上方につまみだす。このため、口縁端部内面は凹面をなす。胴部内面はハケ後ナデ調整である。復元口径37.9cm。

いずれも観察トレンチ2からの出土である。

4 第1遺構面（第V層上面）の遺構・遺物（Fig.41, PL.29）

本節では、第V層：暗褐色砂の上面で検出された、遺構・遺物について記述を行う。この第V層上面の遺構検出面は、第VI層上面で検出された第2遺構面に対して第1遺構面とする。

当調査地の東半は、旧山口女子師範学校により大規模な擾乱を受けていた。このため、調査区東半での遺構は検出できなかった。ただし、第2節でも記述したように第V層の堆積は西半のみで、東半の第VI層と同時堆積の可能性がある。第V層は風積作用によって形成された砂丘状を呈するのに対して、第VI層はその砂丘と畠端山の間に形成された谷地形の堆積を示すといえる。とすれば、安定した第V層上面に対し、第VI層上面には当初より遺構がなかった可能性がある。

第V層上面は最も高い西壁で標高3.3mを測り、周辺に行くにつながって低くなる。特に、擾乱の及んでいた調査区中央での平面的な検出はできず、地山である第VI層上面と同時に検出になった。第V層上面を遺構面として検出された遺構は、土壤4基と柱穴11基である。その埋土には、炭灰を含んだ黒色砂と、第IV層（包含層1）と同じ明茶灰色砂のものがある。これらの土壤や柱穴からは、土器焼成や瓦器焼などの中世の土器が出土している。その土器の特徴からは、12世紀末～13世紀の年代が与えられる。第1遺構面が中世の遺構検出面と考えられる。

光林内では中世土器の包含層ならば附属中学校体育館を始めとして、今までに幾度も確認されてきたが、中世の遺構面が検出されたのは今回が初例となった。過去に遺構面が検出された附属小学校運動場改修に伴う発掘調査では、標高約3.3mと標高約3.0mで2面の遺構面が検出されている。それぞれ、標高的には本調査区の第1遺構面と第2遺構面に対応する。しかし、附属小学校運動場で検出された上層遺構面の土壤からは、6世紀末～7世紀初頭の須恵器が出土している。出土遺物からこの附属小学校運動場の上層遺構面と対応するのは、本調査区の第2遺構面である。このことから、本調査区の北にある附属小学校運動場が砂堆丘の中心で最も高く、中世遺構面は既に削平された可能性が考えられる。そして、砂堆丘の周辺部でやや低くなつた、本調査区の中世遺構面が残されたのであろう。このことは、本調査区の包含層における中世遺物の出土量および、遺構の分布密度の低さからも肯定される。

なお、試掘調査において検出されていた遺構は、その埋土からこの第1遺構面に伴うものと推定される。

第1遺構面（第V層上面）の遺構・遺物

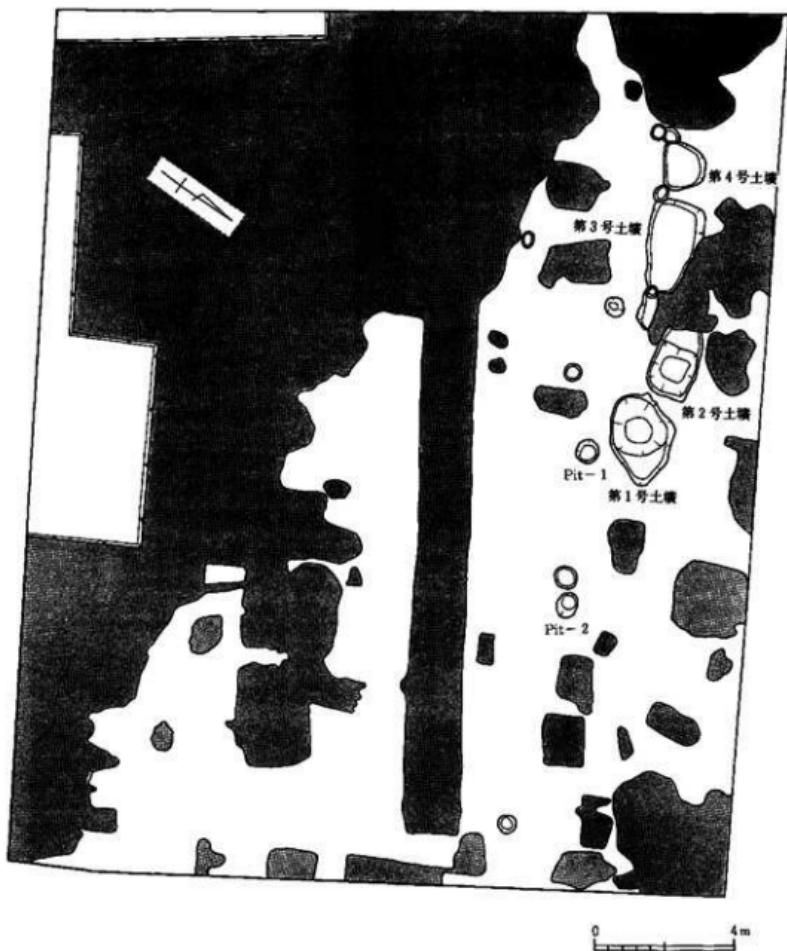


Fig. 41 第1遺構面遺構配置図

アミ目 掘乱

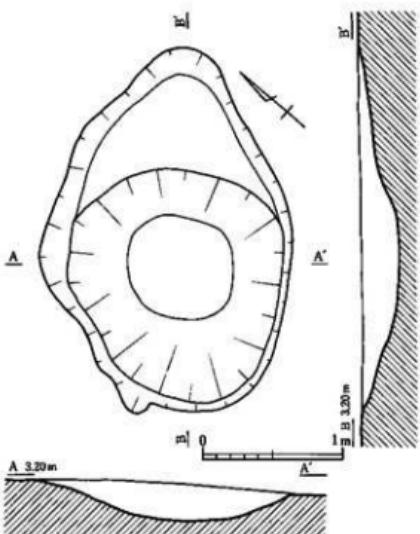


Fig. 42 第1号土壌実測図

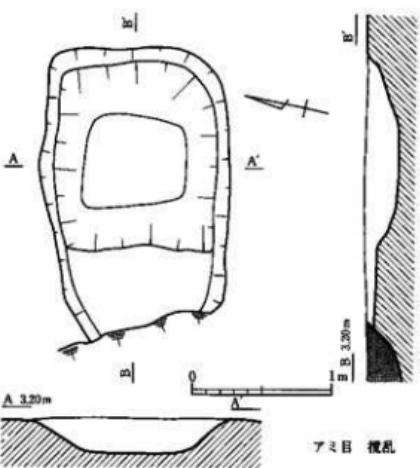


Fig. 43 第2号土壌実測図

第1号土壌 (Fig.42, PL.30)

第1号土壌は調査区西側の中央に位置する。上面の平面形態は不整椭円形を呈し、長軸260cm、短軸180cmの規模をもつ。長軸の東北側が2段掘りになっており、標高約3.05mで幅約60cmの平坦部をもつ。底面での平面形態は円形で、深さは土壤検出面から約30cmを測る。なお、土壤検出面の標高は約3.15m、底面標高は約2.86mである。長軸方向は、東北—西南。埋土は炭灰を含んだ黒色砂である。比較的遺物を多く含んでおり、瓦器塊24、土師器塊25、土師器皿29などが出土している。それら出土土器の特徴は、12世紀後半～13世紀前半を示す。

第2号土壌 (Fig.43, PL.30)

第2号土壌は、第1号土壌の西側に隣接する。西端部は後世の擾乱を受け、検出することはできなかったが、平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸200cm以上、短軸130cmの規模をもつ。長軸の西側が2段掘りになっており、標高約3.05mで幅約60cmの平坦部をもつ。底面での平面形態もまた、隅丸長方形で、深さは土壤検出面から約20cmを測る。なお、土壤検出面の標高は約3.10m、底面標高は約2.89mである。長軸方向は、東—西。埋土は炭灰を含んだ黒色砂である。遺物はほとんど含まれていなかったが、図示できるものとして砥石片38が1点出土している。

第1遺構面(第V層上面)の遺構・遺物

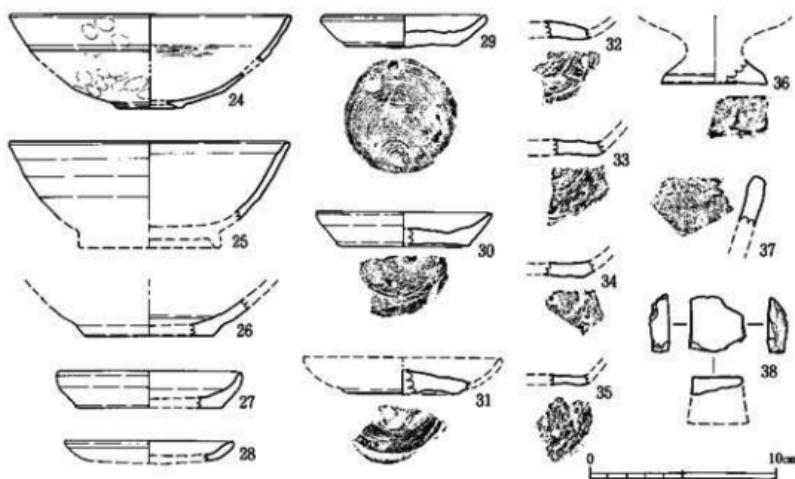


Fig. 44 第1・2号土壌出土遺物実測図

第1号土壌出土遺物 (Fig.44-24~37, PL.34)

24は瓦器塊である。口縁端部は丸い。外面口縁部よりやや下がった位置に、1条の凹線がめぐる。この凹線より下に、指頭圧痕が顕著である。内面に形成時のシワが残る。復元口径14.9cm、復元底径3.4cm。

25・26は土師器塊である。25の体部はゆるく内湾し、口縁部が内面に稜をもって外反する。口縁端部は丸い。外面にはロクロ成形による凹凸面がみられる。底部には、高台をもつと考えられる。26は平底の底部で、底面に糸切り痕を残す。

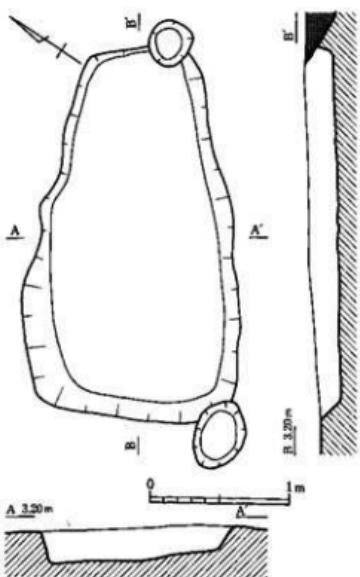
27~35は土師器皿である。29~35は糸切り痕を残す。このうち29~34は、底面中央に厚みをもった器形で同一の形態をもつ。27も同じ形態であるが、破片のため底面糸切り痕の有無を確認できなかった。28は器高が低く、浅い。口縁端部は丸くおさめられる。器壁の厚さはほぼ一定である。底面に糸切り痕は認められない。

36は台付皿の脚部である。外側に突出した裾部分。底部は糸切り。復元底径5.6cm。

37は器種不明の土師器口縁部。器壁が厚く、外面にハケが施されている。

第2号土壌出土遺物 (Fig.44-38, PL.34)

38は砥石である。両端及び下半部を欠く。残存部の上面と両側面の計3面に、使用による摩滅が認められる。石材は花崗斑岩。



第3号土壌 (Fig.45, PL.30)

第3号土壌は調査区の西南に位置する。南側は擾乱を受けるが、平面形態は隅丸長方形を呈していたと思われる。その規模は、長軸260cm以上、短軸160cm以上を測る。検出面からの深さは約20cmである。土壌検出面の標高は約3.12m、底面は標高2.90mである。長軸方向は東北-西南。埋土は炭灰を含んだ黒色砂である。

第4号土壌 (Fig.46, PL.30)

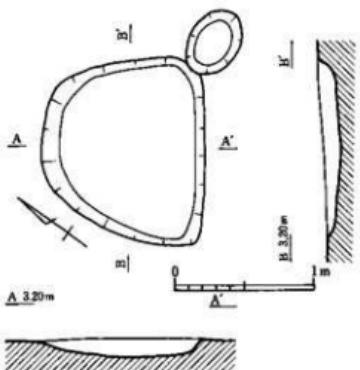
第4号土壌は、調査区の西南に位置する。平面形態は隅丸台形を呈し、長軸130cm、短軸116cmの規模をもつ。土壌検出面からの深さは約10cmである。土壌検出面の標高は約3.05m、底面標高は約2.82mである。長軸方向は東北-西南。埋土は炭灰を含んだ黒色砂である。図示できるような遺物は出土しなかつた。

柱穴群 (Fig.41, PL.31)

第1遺構面で検出された柱穴は、11基である。いずれも直徑60~40cmのものである。遺物が出土したのは、調査区西南のPit-1と南のPit-2のみである。

Pit-1は平面形態が円形で、直徑は約60cmを測る。深さは検出面より約27cmである。土師器碗44、土師器皿44・45などが出土している。

Pit-2は長軸約70cm、短軸約60cmの平面形態が梢円形を呈する。深さは検出面より、約32cmである。須恵器胴部片46が1点出土しているが混入であろう。



第1遺構面(第V層上面)の遺構・遺物

第3号土壤出土遺物 (Fig.47-39~42, PL.35)

39~41は同一個体の破片と思われる。土師質であるが、外面に格子目状のタタキが施されている。内面には粗いハケが施されている。色調は明褐色を呈し、2次焼成を受けた形跡がある。胎土は1mm前後の砂粒と赤色斑粒を含む。器形・時期は判然としない。可能性としては、古墳時代後期の韓式土師器あるいは中世の製塙土器などが考えられる。山口県内の類例として、下関市吉母浜遺跡の赤褐色土器が挙げられる。その報告書において、韓式土師器として位置づけ、年代を5世紀末頃に位置づけている。本例もこの年代に沿うのであるならば、混入品ということになる。

42は土師器の壺である。長胴の形態になると考えられる。頸部外面には、強いヨコナデが施され鋭い稜線がめぐる。胴部外面下半に左上がりのハケ調整が施される。内面はナデ調整である。外面に煤が付着する。

Pit-1出土遺物 (Fig.48-43~45, PL.36)

43は土師器壺である。体部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁部が外反する。口縁端部は丸くおさめる。外面はロクロ成形による凹凸がみられるが、ミガキによって潰される。内面には丁寧なミガキが施される。高台をもつものと思われる。色調は明黄灰色。胎土は精製粘土である。復元口径14.1cm。

44・45は土師器壺の口縁部片である。44は外面にロクロ成形による凹凸を明瞭に残す。口縁端部は丸くおさめる。色調は淡赤褐色。胎土は精製粘土である。45もまた、外面にロクロ成形による凹凸を明瞭に残している。口縁端部は丸くおさめる。色調は淡赤褐色。胎土は精製粘土である。

Pit-2出土遺物 (Fig.48-46, PL.36)

46は須恵器壺口縁部片である。外面に平行タタキが施される。内面のあて具痕はナデ消される。色調は青灰色。胎土には微砂粒を含む。混入品と考えられる。

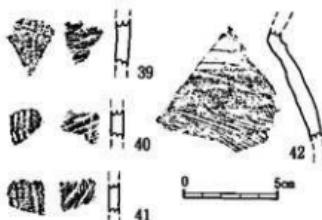


Fig. 47 第3号土壤出土遺物実測図

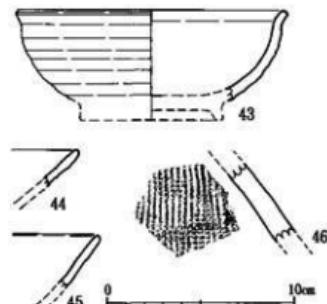


Fig. 48 Pit-1・2出土遺物実測図

第IV層（包含層1）出土遺物（Fig.49-47~49, PL.36）

第1遺構面の上層に堆積した第IV層：明茶灰色砂（包含層1）及び擾乱層から出土した遺物である。いずれも中世の土師器である。

47は土師器壺の底部である。底面糸切りの後、高い突出する高台を貼り付ける。内面には、ミガキ調整の痕跡が残る。色調は淡赤褐色。胎土は多量の微砂粒及び、1~3mmの砂粒を含む。復元底径7.4cm。

48・49は土師器皿である。48は口縁部片である。底面より内寄ぎみに立ち上がり、口縁部が緩く外反する。口縁部には、強いヨコナデの条線を残す。色調は淡赤褐色。胎土は1mm前後の砂粒を含むが、緻密である。復元口径13.0cm。49は底部である。底面は糸切りである。外面底部の壠に圧痕が残る。内面には、ロクロ成形による凹凸を残す。色調は淡赤褐色。胎土には微砂粒及び、1~3mmの砂粒を含む。底径5.85cm。

御手洗窯採集遺物（Fig.49-50, PL.36）

御手洗遺跡が周知されるに至ったのは、昭和25年に小野忠熙氏が光構内に面する海岸線で土師器を採集したことに始まる。現在でも、この海岸線では遺物の散布が見られる。

既に、年報Xにおいて土師器などの一部の採集遺物については報告を行っている。今回、白磁碗を採集したので紹介しておく。

50は白磁碗である。胴部は内寄して立ち上がる。口縁を外側に折り返し、端部は玉縁状を呈する。外面にはロクロ成形による凹凸を残す。白地の素地に、薄緑色の釉薬を施釉する。復元口径は16.2cmである。

5 小結

今回の光附属中学校武道館新營に伴う発掘調査では面積が約500m²と、従来の光構内における調査との間には、その規模において格段の差がある。この面的な調査によって、新たに得られたデーターは、詳細不明であった御手洗遺跡の実態把握の手がかりとなるものである。

今回の調査では、上下2面の遺構面を検出した。第V層：暗褐色砂の上面を検出面とする第1遺構面と、第VI層：淡灰黄色砂の上面を検出面とする第2遺構面である。第2遺構面は古墳時代後期、第1遺構面は中世に位置づけられる。御手洗遺跡では過去に附属小学校運動場で古墳時代後期の遺構面が2面検出されている。うち1面が、今回検出された古墳時代後期の第2遺構面と対応するであろう。また、今回初めて検出されたのが、中世に位置づけられる第1遺構面である。過去に、中世の包含層があることは知られていたが、

第IV層(包含層1)出土遺物

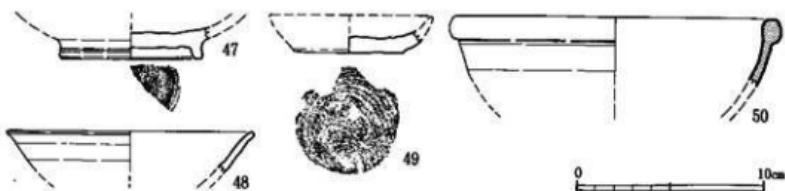


Fig. 40 第IV層(包含層1)出土及び御手洗湾探集遺物実測図

遺構面が確認された意義は大きい。のことより、御手洗遺跡では少なくとも、時期の異なる3面の遺構面が埋存することが明かとなった。御手洗遺跡は砂堆丘上に、古墳時代後期から近世まで継続的に営まれた集落遺跡である。今後の調査によっては、さらに累積した遺構面が検出される可能性がある。

本調査区の遺構分布密度は、第1、第2遺構面とともに希薄であった。わずかな土壌と柱穴が検出されたのにとどまった。柱穴もまとまりがなく、構造物があった可能性はきわめて低い。唯一の可能性としては、第2遺構面の炭灰を充填した第23号土壌とこれを中心として散在していた須恵器及び土師器が、その検出状況から住居跡であった可能性がある。これ以外は包含層中の土器量もわずかであり、御手洗遺跡の縁辺部であったと考えられる。遺跡の中心としては、より海岸部によつた附属中学校体育館あるいは、附属小学校運動場などが想定されよう。今後の継続した調査の成果が期待される。

特筆できる遺物として、第22号土壌及び第V層などから出土した縄文土器が挙げられる。当初より第22号土壌に伴うものであったかは慎重を期したいが、この縄文土器は前期の曾根系土器である。今まで知られていた附属中学校体育館から出土した縄文土器は、晩期に属するものと言われている。御手洗遺跡の上限を、大きく遡らせることとなった。

第1遺構面の第1号土壌は、比較的多くの遺物が出土した。土師器皿を中心とするが、瓦器塊が1点出土している。土師器皿がきわめて地域色の強い土器だけに、瓦器塊から得られる年代をもって土師器皿の位置づけを推測することができる貴重な土壌資料である。

この他、第3号土壌から出土した、39~41の土師質土器片が問題となる。外面に格子目状のタキを、内面には粗いハケが施されている。可能性としては、古墳時代後期の韓式土師器あるいは中世の製塩土器などが考えられるが、定かではない。結論は今後、類似資料の増加に待ちたい。

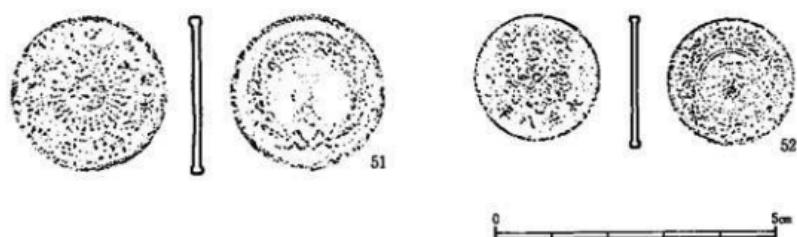


Fig. 50 掛乱層出土貨幣

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「光構内教育学部附属光中学校武道館新館に伴う発掘調査」
(『山口大学構内遺跡調査研究年報』X、1993年)
 - 2) 福本幸夫「舞手洗遺跡」(『先原史時代の光市』、1966年)
 - 3) 山口大学埋蔵文化財資料館「光構内教育学部附属光小学校運動場改修に伴う発掘調査」
(『山口大学構内遺跡調査研究年報』X、1992年)
 - 4) 下関市教育委員会『吉母浜遺跡』(1985年)
 - 5) 小野忠熙「島田川流域の遺跡群」(『島田川』、1953年)
 - 6) Fig.50-51-52は、調査区東側の挂乱層(南壁の瓦礫層に対応)から出土した貨幣である。両者ともかな
り錆斑に覆われており、保存状態は劣悪といえる。
51は明治32年(1899)に発行された権1銭銅貨である。直径約2.8cm、厚さは縁約0.2cm・中央約0.15cm。
52は大正8年(1919)に発行された権1銭銅貨である。直径約2.35cm、厚さは縁約0.2cm・中央約0.1cm。
貨幣が出土した挂乱層は、旧山口県女子師範学校の取り壇し時における廃材を焼却投棄した場所と考え
られる。52の貨幣が、挂乱層形成の上限を示している。
- 日本貨幣商協同組合『日本貨幣型録‘79年版』(1979年)

出土遺物観察表

Tab. 3 出土遺物観察表

法量()は復元値

番号	器種	法量() (①口幅②底径③高さ)	色調 (①外側②内面)	胎土	出土地点	備考
縄文土器 (Fig.34)						
1	縄文土器		暗赤褐色	2~4mmの砂粒を含む	表揮	2.5mm幅の貝殻条痕
2	縄文土器		①暗赤褐色 ②褐色	2~4mmの砂粒を含む		2mm幅の貝殻条痕
3	縄文土器		①暗赤褐色 ②褐色	2~4mmの砂粒を含む		2mm幅の貝殻条痕
4	縄文土器		暗赤褐色	2~4mmの砂粒を含む		2.5mm幅の貝殻条痕
5	縄文土器		暗赤褐色	1~2mmの砂粒を含む	SK-06南北出土	2.5mm幅の貝殻条痕
6	縄文土器		暗赤褐色	1~2mmの砂粒を含む		2mm幅の貝殻条痕
7	縄文土器 底部	②(9.0)	褐色	2~5mmの砂粒を含む		
8	縄文土器		褐色	2~4mmの砂粒を多量に含む		突起か
土器集中区 (Fig.37)						
9	復原器 甕	①(20.4)	灰青色	微砂粒を含む		外表面にタキ痕 内面同心内タキ
10	土器器 甕		淡赤褐色	微砂粒および、1~3mmの砂粒を含む		外表面ハケ痕ミガキ
11	土器器 甕 口縁		暗褐色	1~3mmの砂粒を含む		
第23号土壙 (Fig.37)						
12	復原器 甕脚部片		淡灰青色	微砂粒を含む		2mm角のタキ痕
第24号土壙 (Fig.35)						
13	土器器 甕	①(18.6)	暗赤褐色	4mm前後の砂粒を含む		内面ハケ
14	土器器 甕 把手		暗赤褐色	微砂粒を含む		
第VI層 (包含層3) (Fig.40)						
15	土器器 高环脚部		明褐色	金葉器を含む		内外面にハケ
16	土器器 甕 口縁	①(17.0)	褐色	1~2mmの砂粒を含む		
17	土器器 甕 口縁		明赤褐色	微砂粒を含む		口縁端部ハネ上げ
18	土器器 甕 口縁		褐色	1mm前後の砂粒を含む		内面ハケ
19	土器器 甕 口縁	①(10.4)	灰褐色	微砂粒を含む		
20	土器器 甕 底部	③(6.7)	淡赤褐色	1~2mmの砂粒を含む		底部余切り
21	土器器 甕	①(8.8)②(7.0)③(11.6)	淡赤褐色	黑葉器を含む		
22	土器器 台付皿		淡褐色	粗製粘土		
23	土器器 甕 口縁	①(37.9)	淡褐色	微砂粒及び、1~4mm前後の砂粒を含む		内面ハケ後ナダ
第I号土壙 (Fig.44)						
24	瓦器 瓦	①(14.9)②(3.4)	黒灰色	粗製粘土		器表に衝撃圧痕あり 内面にシリあり
25	土器器 甕 口縁	①(14.8)	黄白色	粗製粘土		
26	土器器 甕 底部	②(6.6)	明褐色	粗製粘土		底部余切り
27	土器器 甕	①(9.5)②(7.8)③(3.0)	淡褐色	粗製粘土		底部に圧痕あり
28	土器器 甕 口縁	①(8.8)	褐色	微砂粒を含む		2次焼成を受ける
29	土器器 甕	①(8.6)②(5.6)③(17.6)	褐色	粗製粘土		底部余切り
30	土器器 甕	①(9.3)②(6.8)③(1.8)	①褐色 ②淡赤褐色	粗製粘土		底部余切り
31	土器器 甕 底部	②(6.2)	褐色	粗製粘土		底部余切り
32	土器器 甕 底部		褐色	粗製粘土		底部余切り
33	土器器 甕 底部		淡褐色	粗製粘土		底部余切り

光林内教育学部附属光中学校武道館新宮に伴う発掘調査

法善()は復元値

番号	器種	底面(①底面②底面③底面)	色調(①外側②内側)	胎土	出土地点	備考
34	土鍋器	底 底部	明褐色	微砂粒を含む		底部未切り
35	土鍋器	底 底部	明褐色	微砂粒を含む		底部未切り後ナダ
36	土鍋器	台付底 ②(5.6)	明赤褐色	精製粘土		底部未切り
37	土鍋器	口縁	明褐色	微砂粒を含む		外面ハケ

第3号土壙 (Fig.47)

39	土鍋質土器		明褐色	1mm前後の砂粒を含む		
40	土鍋質土器		明褐色	1mm前後の砂粒を含む		
41	土鍋質土器		①黒灰色(褐色) ②明褐色	1mm前後の砂粒を含む		
42	土鍋器	裏	暗褐色	微砂粒を含む		内外面ナデ外面ハケ 張付付

Pit-1 (Fig.48)

43	土鍋器	裏 ①(14.1)	明黄灰色	精製粘土		内外面ミガキ
44	土鍋器	裏 口縁	淡赤褐色	精製粘土		外面ナダ
45	土鍋器	裏 口縁	①淡赤褐色 ②褐色	精製粘土		外面ナダ

Pit-2 (Fig.48)

46	甕原器	裏銅部片	①灰青色 ②青灰色	微砂粒を含む		外面2mm角のタキ 痕
----	-----	------	--------------	--------	--	----------------

第IV層(包含層) (Fig.48)

47	土鍋器	底 底部 ②(7.4)	淡赤褐色	微砂粒及び、1~3mm の砂粒を含む		底部未切り
48	土鍋器	底 口縁 ①(13.0)	淡赤褐色	1mm前後の砂粒を含む		内外面ナダ
49	土鍋器	底 底部 ②(5.85)	淡赤褐色	微砂粒及び、1~2mm の砂粒を含む		底部未切り、正面あり

舊手洗溝表探 (Fig.49)

50	白磁	口縁 ①(16.2)	乳白色 基底 白色	精製粘土		
----	----	------------	--------------	------	--	--

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
第2号土壙 (Fig.44)							
38	砾石				7.90	花崗岩	

番号	器種	年号	直徑	最大厚(cm)	重量(g)	発行枚数	備考
機械層 (Fig.50)							
51	錫銅貨	明治32年	2.8	0.2		9,764,028	
52	錫銅貨	大正8年	2.36	0.2		209,969,558	

第4章 平成4年度山口大学構内の試掘調査

第1節 工学部プレハブ研究・実験棟新営に伴う試掘調査

1 調査の経過

常盤構内の西端、電子工学科の西側の空き地にプレハブ研究・実験棟の新営が計画された。常盤構内では過去10度にわたる試掘、立会調査が行われてきたが、顯著な遺構・遺物は検出されていない。しかし、調査は断片的で常盤構内の埋蔵文化財の有無を把握したとはいせず、地下への掘削には慎重な対応が必要とされる。埋蔵文化財資料館運営委員会は、予定地内の埋蔵文化財の分布状況を把握するため、試掘調査の必要があると判断した。

埋蔵文化財資料館は埋蔵文化財資料館運営委員会の決定を受け、7月13日に試掘調査を実施した。新営予定建物の範囲に従い東西32.0m×南北6.5mの四隅に1m×1m、南長辺の中央に2m×1mと、計5カ所のトレンチを設定した。調査総面積は約6m²である。

2 層位

Aトレンチ 標高30.37mの現地表の下には厚さ約30cmのバラス層があり、その下に工学部造成時の山土による埋め土が厚さ約20cmにわたって堆積している。埋め土の下には、厚さ約20cm瓦礫層があり、その下の宇部工業専門学校の校舎コンクリート基礎へと続く。コンクリート基礎はその上面で標高が29.6mである。

Bトレンチ Aトレンチの南側6.5mに設定したため、Aトレンチとはほぼ同じ層序であった。現地表は標高30.24mとAトレンチよりやや低いが、同じく標高29.6mでコンクリート基礎の上面を検出した。

Cトレンチ 標高30.16mの現地表の下には、厚さ約20cmのバラス層があり、その下に工学部造成時の山土による埋め土が厚さ10~20cmにわたって堆積している。埋め土の下には、宇部工業専門学校の旧表土と思われる暗赤褐色粘質土(5YR 5/8)が、明赤黄色粘質土(5YR 7/8)の地山上面に2cmほど堆積している。地山検出面の標高は、東側



Fig. 51 調査区位置図

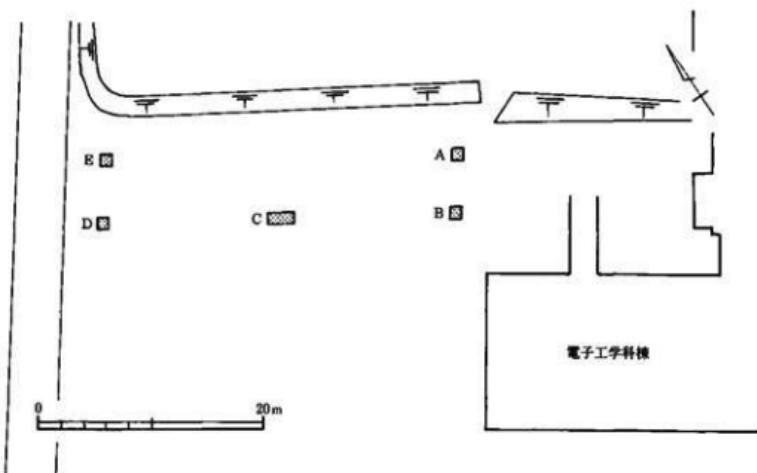


Fig. 52 トレンチ設定図

で約29.76m、西側で29.83mと西側がやや高くなる。

D トレンチ 現地表の標高は東側で30.09m、西側で30.2mと西側がやや高い。地山までの土層堆積にバラスおよび埋め土は認められず、黒褐色粘質土(5YR 3/1)による厚さ約20cmの表土層の下は、すぐに宇部工業専門学校時代の旧表土である。旧表土層は暗褐色粘質土(5YR 5/8)で、約2~10cmほどの厚さがあり、その下はC トレンチとおなじく明赤黄色粘質土(5YR 7/8)の地山である。地山検出面の標高は29.8mである。

E トレンチ 現地表の標高は東側で30.1m、西側で30.21mと西側がやや高い。D トレンチの北側6.5mに設定したため、D トレンチとは同じ層序であった。ただし、表土層や旧表土層は薄い。地山検出面の標高は、東側30.0m、西側30.1mである。

3 小結

各トレンチにおいて遺構・遺物の検出はなかった。A・B トレンチから宇部工業専門学校校舎のコンクリート基礎を検出したことが示すように、本調査区は過去に大規模な造成を受けている。このことは、建物基礎が検出されなかった、C・D・E トレンチでの宇部工業専門学校の旧表土直下が地山という状況からも明らかである。しかし、遺構・遺物が本来なかったと確定できる材料は未だ少なく、データー蓄積のために今後も調査を継続する必要がある。

第2節 工学部・工業短期大学部の改組再編・博士課程設置に伴う建築物等の新営その他工事に伴う試掘調査

1 調査の経過

常盤構内の中央東側、建設工学科実験研究棟の北側のグランドに研究・実験棟の新営が計画された。予定地の西側を走る道路は一段低く切り通されており、その断面より地下の状況はある程度まで推測が可能であった。切り通しの断面には、地表よりわずかな深さで蛇紋岩の岩盤が露出しており、予定地内がかなりの削平を受けていることは予測できた。しかし、常盤構内において東側の調査例はなく、また研究・実験棟の工事面積は約3,490m²の大規模なものであった。埋蔵文化財資料館運営委員会は、予定地内の埋蔵文化財の有無を把握するための試掘調査が必要と判断した。

埋蔵文化財資料館は埋蔵文化財資料館運営委員会の決定を受け、7月23日に試掘調査を実施した。新営予定建物（東西52.0m×南北16.0m）の四隅と両長辺の中間点、分棟（南北25.0m×東西15.0m）の四隅の計10カ所に2m×2mのトレンチを設定して行った。調査総面積は約40m²である。

2 層位

本調査地の現状は、グランドとして活用されており、標高約31.8mを測る広い平坦地である。グランドに使用するため、マサ土（7.5YR 8/4）が厚さ約10cmほど客土されて表土層となっている。この表土層の直下の土層は、Aトレンチで厚さ約10cmの暗褐色粘質土（10YR 4/4）による埋め土を検出した。他は、いずれのトレンチも蛇紋岩の岩盤（7.5YR 8/8）か、地山の明黄褐色粘質土層（10YR 7/6）であった。岩盤及び地山の検出面は、標高約31.7mである。

なお、B・Eトレンチ、同じくC・Fトレンチを貫いて南北に走るグランド排水用の石詰め暗渠を、表土層から掘り込まれた土層状況で検出している。この暗渠の底は、地山にまで達しており、深さは約20cmである。



Fig. 53 調査区位置図

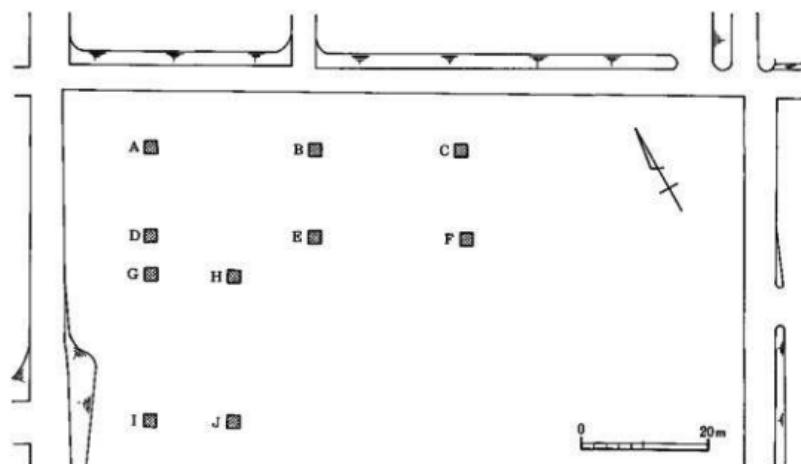


Fig. 54 トレンチ設定図

3 小結

各トレンチにおいて遺構・遺物の検出はなかった。調査前に予測されたように、本調査地の削平は著しいものであった。表土層の直下は蛇紋岩の岩盤あるいは明黄褐色粘質土の地山であり、後世の堆積物は一切検出できなかった。

常盤構内は、東から西に延びる洪積台地上に位置している。構内の平坦地は、この洪積台地を削り取ることによって造成されている。また、侵食谷部分であった西側の運動場は、構内の高所を削り取った土砂で埋め立てられたものである。このように現状での常盤構内の平坦地は、相当手が加わっているものと見なさなければならない。今回の調査区である建設工学科実験研究棟の北側グランドもその例外ではなかった。

建設工学科実験研究棟の北側グランドは、北から南に向かって4段にわたって造成された構内平坦地の下から3段目の高所に位置する。今年度おこなった工学部及び工業短期大学部職員宿舎の立会調査も同じく下から3段目の平坦地であったが、後世の堆積物は一切検出できなかった。これらの調査結果は、本調査区の周辺が大規模な削平を受けていることを明らかにした。

第5章 平成4年度山口大学構内の立会調査

第1節 吉田構内の立会調査

1 交通規制標識及びバリカー設置に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 L-10, S-19・20, P-22, H-23

調査期間 平成4年4月20・21日、同5月7日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 各標識 約5m², 各バリカー 約2.5m²

調査結果 工事は、吉田構内の各入り口に交通規制用の標識及びバリカーを設置するため、標識支柱の基礎となる部分についてはそれぞれ直径70cmの円形に現地表から約70cm、バリカー支柱の基礎となる部分についてはそれぞれ2カ所35cm×35cmの範囲で現地表から約1m掘り下げるというものである。標識は、L-10・S-20・P-22・H-23区に、バリカーはL-10・S-19・P-22区に設置され、これらについて立会調査を実施する事とした。

L-10区の標識設置地点では、現地表より50cm下に黒褐色粘質土の搅乱層があった。バリカー設置地点では、現地表より90cm下に明黄褐色粘土の搅乱層を確認した。S-20区の標識設置地点では、現地表より50cm下に茶灰色粘土の地山を確認した。S-19区のバリカー設置地点では、現地表より南側で50cm下に、北側で70cm下に明黄色粘質土の地山を確認した。P-22区の標識設置地点では、現地表より46cm下に厚さ20cmほどの淡黃灰色粘質土層、そして、緑灰色シルト層が続くことが確認できた。バリカー設置地点では、現地表より80cm下に標識設置地点とおなじ緑灰色シルト層を確認した。H-23区の標識設置地点では、現地表より55cm下に黒灰色粘質土の堆積を確認した。この黒灰色粘質土には摩耗した弥生土器片が含まれており、遺物包含層の可能性がある。

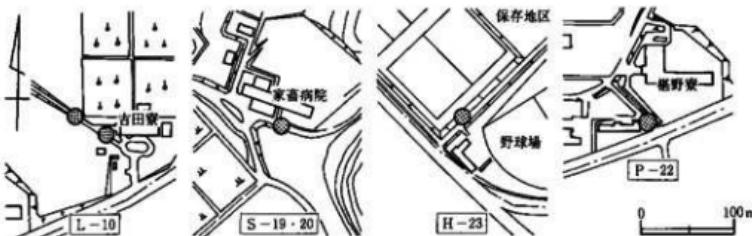


Fig. 55 調査区位置図

2 道路（南門ロータリー）取設に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 H-23

調査期間 平成4年4月28日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約40m²

調査結果 工事は吉田構内交通規制の強化に伴い、無許可の進入車を校外へUターンさせるために、南門と野球場の間にある空き地にロータリーを取設するというものである。起伏のある現地表を機械力により上面掘削の程度で、地下への影響はほとんど及ばないことが予想された。しかし、本調査区の南側で平成元年度におこなった、野球場防球ネット新設に伴う立会調査では遺物包含層を検出していることもあり、状況把握のため立会調査をおこなった。

起伏を平滑にする程度のため、現地表より10~20cm程を掘削するにとどまった。このため、土層は表土及び整地土の上面を確認したのみである。

(注)

1) 山口大学蔵文化財資料館「野球場防球ネット新設に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』
IX、1991年)

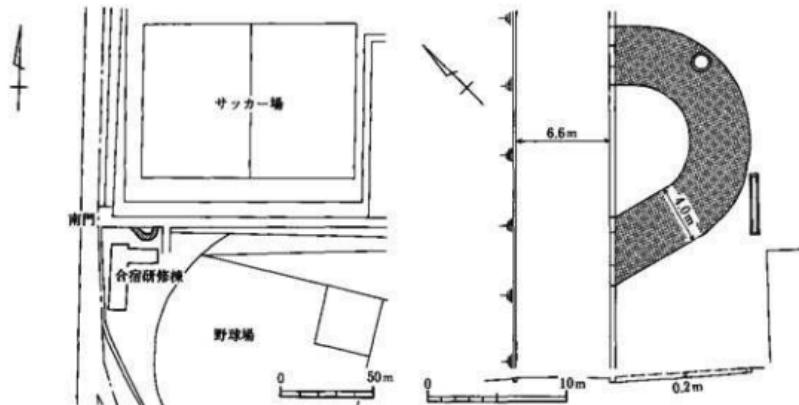


Fig. 56 調査区位置図

3 ボイラー室給水管漏水補修工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 P-16

調査期間 平成4年5月15日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約4m²

調査結果 工事は、吉田構内ボイラー室の北側に埋設されていたボイラー室給水管が老朽により漏水をおこした為、緊急に新給水管に付け替えをおこなったものである。立会調査は、新給水管の埋設工事部分幅約80cm、長さ約5m、深さ1mについて緊急に実施した。

その結果、厚さ約10cmの表土層の下に、約50cmの厚さの構内造成時の埋め土があった。埋め土の下には、これも搅乱土とおぼしき茶灰色粘質土層があり、茶灰色粘質土の下、地表より90cm下に旧水田耕土層である暗褐色灰色粘質土を確認した。

ボイラー室周辺では、昭和60年度にボイラー室南東隅で立会調査が行われている。この調査では、地表下30cmの埋め土と、その下に遺物を含んだ灰黒色砂礫土を確認している。ボイラー室の北側と南東隅の間には高低差があり、ただちに今回の調査と昭和60年度の調査を対応させることは難しい。その他には、本調査地の道を挟んだ東側にある農学部農業環境観測実験施設が、昭和56年度に建設に先だって発掘調査がおこなわれている。高低差や、層の厚さに違いはあるが、旧水田耕土に至るまでの基本層序は、10年の歳月の間に堆積した10cmの表土層を除けば、両者とも同じであると考えられる。昭和56年度におこなわれた農業環境観測実験施設新館に伴う発掘調査では、旧水田耕土の下に遺構が検出されており、本調査地も旧水田耕土の下に遺構が保存されている可能性は高いと言える。

[注]

- 1) 山口大学理蔵文化財資料館「吉田構内農学部農業環境観測実験施設新館に伴う発掘調査」(『山口大学構内道路調査研究年報』X、1992年)



Fig. 57 調査区位置図

4 農学部附属農場ガラス室新営その他工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 S-13

調査期間 平成4年6月8日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約3.5m²

調査結果 工事は、一昨年(平成3年)台風で倒壊し、新営した農学部附属農場ガラス室に、実習棟から新規の電気ケーブルを埋設するというものである。立会調査は、新規電気ケーブル埋設部分である実習棟からガラス室までの長さ約7m、幅約50cmについて実施した。

電気ケーブルの埋設が地表より深さ約35cmであったため、厚さ約25cmの表土とその下の廃材などが混じった山土の埋め土を確認するだけにとどまった。

本調査地より60m程丘陵側の農道で、昭和61年度に立会調査がおこなわれている。この調査でも、地表から地山まで約70cmの厚さで埋め土がつづいていることが確認されている。農場が所在する丘陵西辺部では、大規模な削平が行われていることが予想される。しかし、牛舎の敷地部分の調査では、弥生時代の溝・土壙、古墳時代の竪穴住居を検出したとされており、今後この地域での埋蔵文化財の残存状況を把握していくことが必要である。

(注)

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「農学部附属農場水道管理設に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』VI、1987年)

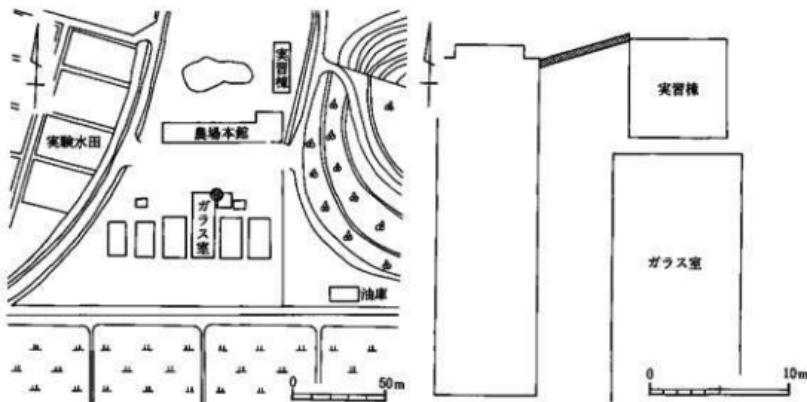


Fig. 58 調査区位置図

吉田構内の立会調査

5 大学会館前記念植樹の植え込みに伴う立会調査

調査地区 吉田構内 L・M-15

調査期間 平成4年6月9日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約3m²

調査結果 工事は上下二段にわたって造成されている大学会館前庭部の下段部分に、記念植樹の植え込みを行うものである。上段との境にはしる下段部の遊歩道に沿って、西側に計3本の記念植樹が計画され立会調査を行った。いずれの掘削も直径1mの円形で、地表より約30cmを掘り下げる程度のものであった。地表より下は厚さ30cmでマサ土が敷かれており、今回の掘削ではマサ土の下に旧表土である茶灰色粘質土の上面を確認するにとどまった。

なお、本地はすでに試掘調査の結果から、遺物包含層及び遺構面の深度データーが提出されている。環境整備の計画は、このデーターをもとにおこなわれることが原則となっている。今回も、埋蔵文化財資料館と大学施設部の間で検討がなされ、遺構・包含層に影響が及ばない場所が選ばれた。今後ともこの基本方針が遵守されていくことが望ましい。また、植物の根の成長による地下への影響も充分配慮したうえでの植樹が必要である。

(注)

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田大学会館環境整備に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』V、1986年)



Fig. 59 調査区位置図

6 泉町平川線緊急地方道路整備工事に伴う立会調査

山口大学吉田団地環境整備（正門周辺）工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 H-11

調査期間 平成4年12月4・22・24日、平成5年1月8日

調査方法 工事施工時に伴う立会調査

調査結果 工事は山口県が行った平川線道路拡幅工事に応じて、山口大学が吉田構内正門道路の拡幅及び、環境整備を行ったものである。

平成4年12月4日は、平川線と正門道路の拡幅に伴って九田川に架かる橋も拡幅する為、吉田構内側の橋台部の掘削について立会調査を行った。掘削は深さ約2mに及んだ。現地表下130cmまでは構内造成時に伴う埋め土(5YR 4/2)、旧水田耕土(10GY 5/1)及び床土(10YR 8/4)であった。その下に厚さ約20cmの黒色粘土層(10YR 2/2)があり、明茶灰色粘土層(10YR 8/8)と続く。黒色粘土層、明茶灰色粘土層ともに無遺物であった。しかし、黒色粘土層が無遺物層でないとは、言い切れない。

平成4年12月22・24日は、正門の横断側溝の付け替え工事(深さ70cm)と山口県による正門のNTT配線工事(深さ100cm)について立会調査をおこなった。本調査区は、構内造成時の埋め土が厚く、旧地表を検出するまでにもいたらなかった。

平成5年1月8日は、正門道路拡幅の為の擁壁工事について立会調査を行った。基礎工事のために現水田畦畔を長さ約50m、幅約1.3m、深さ約1mにわたって掘削した。本調査



Fig. 60 調査区位置図

区は橋台部立会調査区の延長部分であり、橋台部と同様に現地表下約1mは埋め土、旧水田耕土及び床土があり、その下に黒色粘土層(10YR 2/2)が検出された。

今回の調査で、遺構・遺物を検出することはできなかった。また、正門周辺は約1mに及ぶ盛り上がりがなされていることが判明した。

7 泉町平川線緊急地方道路整備工事に伴う立会調査（信号機設置）

調査地区 吉田構内 H-11

調査期間 平成5年3月5日

調査方法 工事施行時に伴う立会調査

調査面積 約7m²

調査結果 山口県が行った平川線道路拡幅工事に伴い、吉田構内正門道路の拡幅が行われ、信号機の移築が必要となった。工事内容は正門道路をはさんだ両わきに、信号機を設置するための穴を2カ所掘削するものであった。周辺の立会調査データより、埋蔵文化財が希薄な地区であることが予想された。埋蔵文化財資料館は上記のデータをもとに、立会調査をおこなった。

東側の調査地点は、2.1m×1.9mの掘削幅で現地表から約2.7mの深さまで掘り下げた。土層の堆積状況は、現地表～70cmが埋土と水田耕土の混合土、70～85cmが暗青灰色粘質土、85～138cmが茶灰色粘質土、138～155cmが黒色粘土（10YR 2/2）、155～230cmが明茶灰色粘土（砂混じり）、230～270cmが茶灰色砂礫である。遺構・遺物は確認できなかつた。西側の調査地点は、2.0m×1.5mの掘削幅で現地表面から約1.7mの深さまで掘り下げた。この地点は、現在の正門前橋台の工事の際に擾乱を受けていた。

本調査地点と、周辺の環境整備立会調査で確認した土層堆積状況はほとんど変わらなかつた。旧水田下に広がる黒色粘土層がいかに堆積したかは不明であるが、吉田地区の低地部に広がっているものと考えられる。この黒色粘土層が遺物包含層であるかの確認はできなかつたが、色調の点からいえば吉田地区台地上の遺物包含層と類似している。今後、この黒色粘土層の広がりと、性格を検討していく必要がある。



Fig. 61 調査区位図

第2節 小串構内の立会調査

焼却棟地盤調査に伴う立会調査

調査地区 小串構内

調査期間 平成4年11月10日

調査方法 工事施工時に伴う立会調査

調査結果 工事は焼却棟新営に先立ち、建設予定地である医学部北端でボーリングによる地盤調査をおこなうものである。ボーリング調査であるため地下への大きな影響は考えられなかったが、位置確認のため埋蔵文化財資料館が立会った。

ボーリングは、No.1（深さ15.31m）とNo.2（深さ25.22m）で行われた。No.1は現地表から2.35mまで造成時の埋土で、埋土下の堆積状況は2.35~5.80m暗青灰色シルト質砂層、5.80~8.80m暗青灰色砂岩風化層、8.80~10.10m空洞、10.10~10.80m黒色炭質頁岩風化層、10.80~11.70m暗茶褐色炭質頁岩層、11.70~12.70m暗灰色頁岩層、12.70~15.31m砂岩である。No.2も現地表から4.00mまで埋土で、埋土下の堆積状況は、4.00~6.00m暗灰色シルト質砂層、6.00~8.10mは暗灰色シルト質砂とシルトの互層、8.10~9.20m白灰色粘土質砂層、9.20~9.70m暗青灰色砂岩風化層、9.70~10.55m石炭層、10.55~11.20m暗茶褐色炭質頁岩層、11.20~11.60m石炭層、11.60~13.50m暗茶灰色頁岩層、13.50~17.30m暗灰色砂岩層、17.30~18.75m石炭層、18.75~25.22m暗灰色頁岩層である。

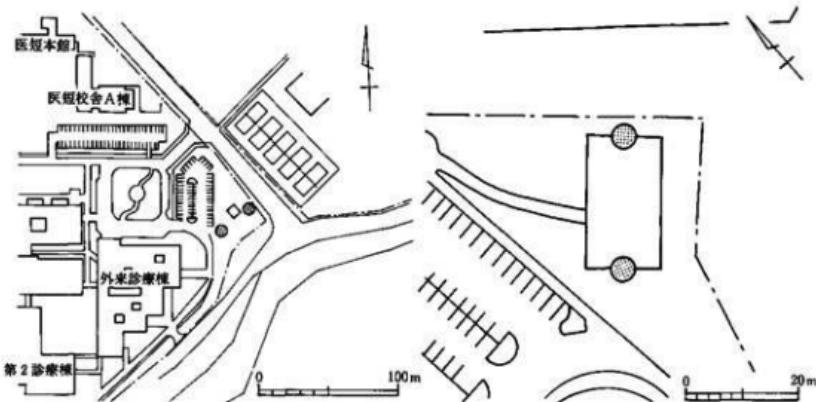


Fig. 62 調査区位置図

第3節 常盤構内の立会調査

1 工学部及び工業短期大学部職員宿舎取り壊し工事に伴う立会調査

調査地区 常盤構内

調査期間 平成4年8月7日

調査方法 工事施工時に伴う立会調査

調査面積 約9m²

調査結果 工事は工学部地域共同研究開発センターの建設を目的として、既存の工学部及び工業短期大学部職員宿舎の取り壊しを行うものであった。その実務内容として建物基礎及び便槽の抜取りを行うもので、地下部分の破壊が予想されたため立会調査を行った。建物の便槽部分及びその周辺の土層を3カ所で確認した。

A地点 パラスなどを含んだ厚さ約30cmの表土層下は、厚さ約20cmの埋め土がある。その下、地表からは約50cm下に黄灰色粘質土の地山がある。なお、黄灰色粘質土の地山上面より74cm下に蛇紋岩の岩盤がある。

B地点 表土層は薄く約1～2cmである。表土層下は、A地点と同じく埋め土が客土されている。西側は厚さ約35cmの埋め土の下はすぐ蛇紋岩の岩盤であるが、東側に行くにしたがい埋め土層は薄くなり、黄灰色粘質土の地山が残されている。東側では、岩盤が下がっているらしく、地表下約46cmで検出される。

C地点 他のトレンチと同じく、厚さ14cmの表土層下に埋め土層があり、約20cmの埋め土層下は黄灰色粘質土の地山である。

西側にある研究・実験棟新営予定地と同じく、遺構・遺物の検出はなかった。当該地区は広い平坦地になっているが、きわめて人為的なものである。工学部が立地する丘陵の頂部では、大規模な削平があったことが考えられる。

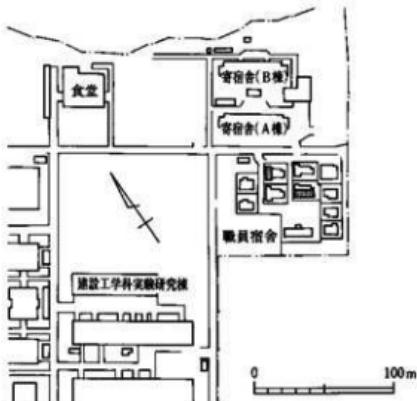


Fig. 63 調査区位置図

2 大学祭展示物設置に伴う立会調査

調査地区 常盤構内

調査期間 平成4年11月16日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約7m²

調査結果 埋蔵文化財資料館は昨年度、工学部大学祭（常盤祭）に伴う模擬竪穴住居製作の掘削に立会った。今年度もまた同じ位置で、竪穴住居の製作が計画された。位置確認のため、今回も埋蔵文化財資料館が立会った。掘削の規模は縦横約2.5m、深さ約25cmで、4個の柱穴の部分はさらに30cm深い。土層の堆積状況は、構内造成時の埋め土が約30cmの層厚で客土されており、その下には基盤である蛇紋岩の岩盤が確認された。

既往の調査の結果から、常盤構内は造成時に大規模な削平が行われており、遺構が存在していたとしてもすでに消失している可能性が高いと考えられる。しかし、常盤構内全体にわたる埋蔵文化財の有無や分布状況を判断するためには、今後も立会調査や試掘調査などの継続的な調査が必要がある。

〔注〕

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「大学祭展示物設置に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報』X、1993年）

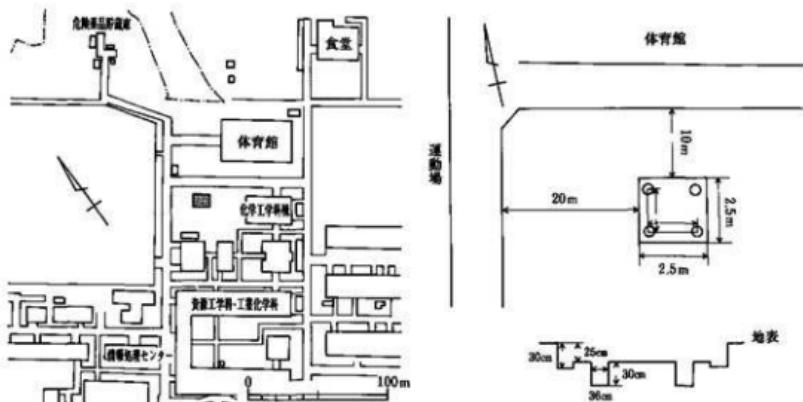


Fig. 64 調査区位置図

第4節 光構内の立会調査

教育学部附属光中学校武道館地盤調査に伴う立会調査

調査地区 光構内

調査期間 平成4年11月4日

調査方法 工事施工時に伴う立会調査

調査結果 工事は附属光中学校武道館新館に先立ち、建設予定地である構内南端のプール東側でボーリングによる地盤調査をおこなうものである。ボーリング調査であるため地下への大きな影響は考えられなかつたが、位置確認のため埋蔵文化財資料館が立会つた。

ボーリング調査は2地点で行われた。第1地点は北側バスケットコートに近い場所で、深さ12.00mまでサンプリングをおこなつた。その堆積状況は、現地表～0.90m埋土、0.90～4.00m黄灰色砂層（貝殻混入）、4.00～4.80m暗灰色砂層、4.80～6.55m黒灰色シルト混じり砂層（貝殻・腐植物混入）、6.55～8.20m暗灰色粘土質砂礫層、8.20～10.00m黒灰色砂質粘土層（腐植物混入）、10.00～12.00m暗灰色片岩風化層である。

第2地点は南端の境界フェンスに近い場所で、深さ8.00mまでサンプリングをおこなつた。その堆積状況は、現地表～0.60m埋土、0.60～2.00m茶灰色砂層、2.00～3.80m暗灰色粘土質砂礫層、3.80～5.30m黒灰色砂質粘土層、5.30～6.70m黒灰色風化片岩層、6.70～8.00m青灰色片岩層である。

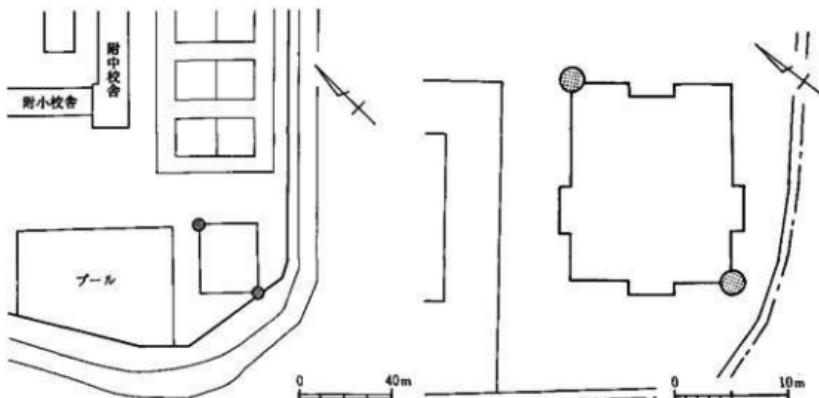


Fig. 65 調査区位置図

第5節 その他構内の立会調査

上堅小路共同下水管布設工事に伴う立会調査

調査地区 山口市上堅小路

調査期間 平成4年5月12日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 7 m²

調査結果 工事は経済学部職員宿舎、及び近隣の住宅などの生活雑廃水等の排出並びに給水のため、共同で公共下水道共用配水管、水道管、雨水排水溝及び污水井を設置するものである。工事面積は小規模であるが、本地区は大内氏館跡と同じ堅小路に面しており、大内氏関連町並遺跡の一部にかかる可能性があった。埋蔵文化財資料館は、既設職員宿舎から共用配水管までの山口大学所有地内における路線、幅約70cm、長さ10mについて立会調査を実施した。

その結果、現地表下約60cmで疊混じりの黃灰色粘土の地山が検出された。遺構・遺物は全く検出されなかった。また、地山の上面には、8~10cmの灰色粘質土層をはさんで、厚さ約40cmの暗灰黄色粘質土層があり、灰色粘質土とともに宅地の整地土層と考えられる。よって、本地区は過去に遺構が存在したとしてもすでに消失している可能性が高い。



Fig. 66 調査区位置図

付 篇

第1章 吉田遺跡第I地区E区の調査

1 調査の概要

吉田遺跡第I地区E区は、吉田構内の中央部からやや北に位置し、現在では第2学生食堂及びその前面の道路となっている。今は構内造成により見る影もないが、当時の地形図と写真(PL.37)によれば、姫山の北から南にのびる支脈である通称「もり山」の南先端、標高24~23mの緩傾斜面である。調査前の状況は、この緩傾斜面が開墾により段状をなし、崖面に包含層が露出していたようである。E区はこの段の上側に設定されている。

E区調査の経緯は、吉田調査団が発行したガリ版刷りの『山口大学構内第I地区E区発掘調査概報』によれば以下のように記述されている。「山口市大字吉田所在の山口大学構内にある第I地区的E区において、学生食堂の建設にあたり、予定地 \times の1,000m²につき、昭和46年9月8日から5日間にわたってトレンチを設け、予察調査を行った。その結果、弥生時代から古墳時代をへて中世にかけての住居跡とみられる遺構の一部を検出した。昭和46年10月16日から11月21日までの21日間、山口大学吉田遺跡調査団は、山口県教育委員会の協力と山口大学文化会考古学部の助力を得て発掘調査を実施した。」

現在、埋蔵文化財資料館にはE区に関連した図面が42葉残されている。また、試掘調査と本調査に関する調査日誌が、それぞれ1冊ずつ合計2冊残されている。調査日誌によれば、まず昭和46年8月24日にボーリングステッキによるE区の土層調査が行われている。この結果を受け、それぞれが平行するa~gまでの7箇所トレンチを設定し、昭和46年9月8日から15日にかけて試掘調査が行われている。トレンチは9月8日に第2学生食堂建設予定地内に、c・d・eの3本が設定されている。9日には第2学生食堂前道路予定地にa・bの2本が設定された。11日にはf・gの2本が設定されている。このうち、包含層及び遺構分布密度の高かったのが、



Fig. 67 調査区位置図

a・b・cのトレーナーであったらしく、この3本のトレーナーが拡張されてE区が設定されている。ここで注意せねばならないことは、包含層の分布密度によって設定されたE区の範囲は、従来いわれてきた第2学生食堂ではなく、第2学生食堂の一部分も含むが、その前面の道路が大部分なのである。第2学生食堂部分の調査については、追加調査として記録図面のみが埋蔵文化財資料館に保管されている。遺物の所在は現在不明であり、図面のみ付箋の第2章で報告を行う。

なお、原図は山口大学吉田遺跡調査団が当時記録したものであるが、今回の掲載にあたっては埋蔵文化財資料館が新たにトレスしたものを使用した。

2 層位

現在、埋蔵文化財資料館が収蔵するE区に関する42葉の図面には、土層断面図が含まれていない。試掘調査の日誌の記述から、層の厚さや深さは判然としないが基本層序を以下のように復原することができる。

第Ⅰ層：褐色土（表土）、第Ⅱ層：暗青灰色土（旧水田耕土）、第Ⅲ層：淡暗褐色土（包含層）、第Ⅳ層：黄褐色土（地山）

第Ⅳ層の地山上面を造構検出面とするが、その上部に堆積した第Ⅲ層の包含層は部分的にしか確認されていない。これと同様なデーターは、E区に接する大学会館前庭部（当時は大学会館新営予定地）の試掘調査でも認められており、本丘陵の耕作による削平は著しいものであったと推定される。

3 造構・遺物

第Ⅰ地区E区は「調査の概要」でも述べたように試掘トレーナーを拡張して設定された、東西約40m、南北約20mの長方形の調査区で約800m²の面積を測る。段状に開墾を受けた緩傾斜面であるため、段状の崖面近くでは造構の残存状態が劣悪である。

検出された主な造構には、竪穴住居跡と溝状造構がある（Fig.68）。『山口大学構内第Ⅰ地区E区発掘調査概報』は、6棟の竪穴住居跡を報告するが、うち1棟は竪穴住居跡としての根拠に薄い検出状態である。出土遺物からは、中世造構の可能性が高い。残りの5棟の竪穴住居跡はいずれも方形のプランをもち、出土土器から古墳時代中期の年代が与えられる。調査区の東側で検出された溝状造構は、出土土器から奈良時代末～平安時代前期に機能していたと考えられる。丘陵の傾斜に沿って北から南への流路方向をもつ逆台形の溝で、底面には小穴が一定の間隔をもって連なっていた。この他、時期不詳の造構として、多数の柱穴、土壤2基がある。柱穴の分布は、上述の溝状造構から西側で密になるが、その関連は判然としなかった。

層位

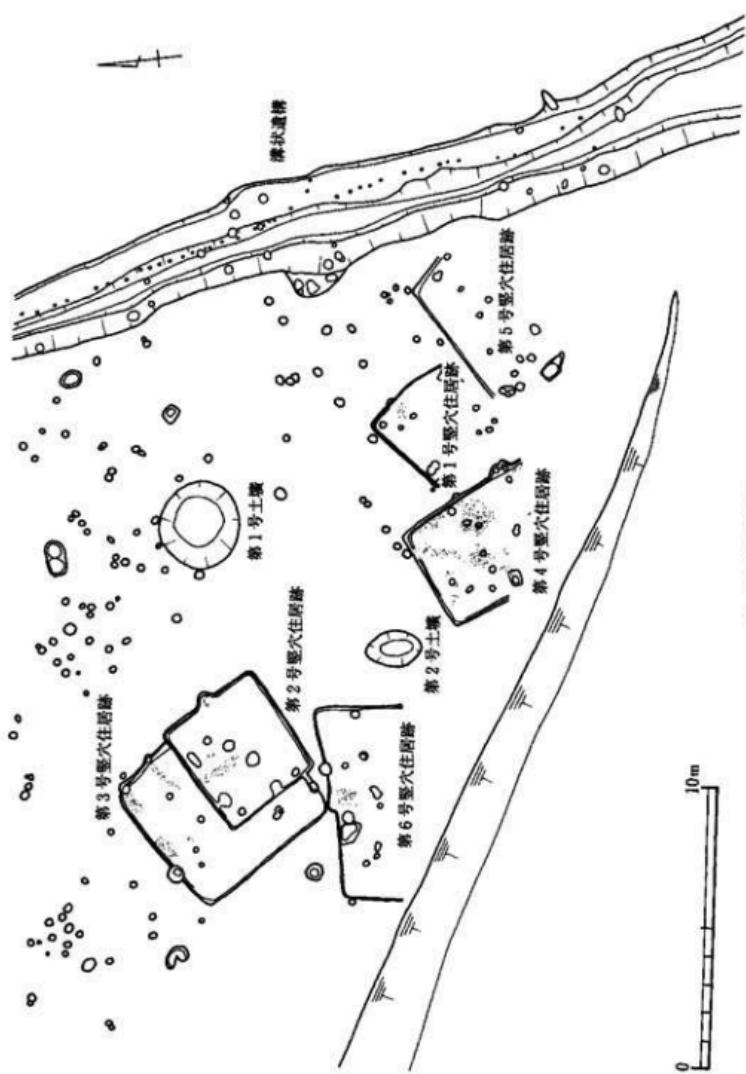


Fig. 66 遺構配置図

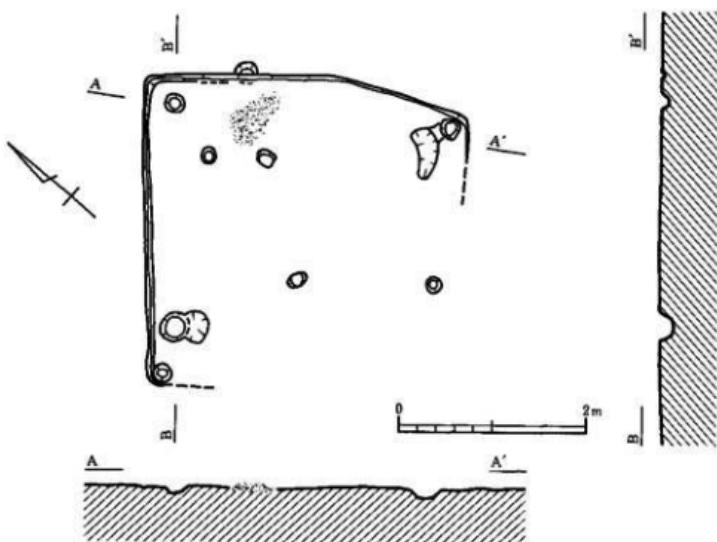


Fig. 69 第1号竪穴住居跡実測図 (標高は不明)

(1) 竪穴住居跡

概報及び図面によれば、第I地区E区からは6棟の竪穴住居跡が検出されている。このうち第2号竪穴住居跡については、「山口県下最古の造り付けのかまど」を設けた竪穴住居として報告され、吉田遺跡の主要遺構の一つとなっている。しかし、竪穴住居跡の年代については概報に「古墳時代前半期」と記述されるのみで、竪穴住居跡の年代を推定するうえで必要な遺物は現在まで未報告である。今回、既に報告済みの遺構とともに、未報告である遺物を報告する。

第1号竪穴住居跡 (Fig.69)

第I地区E区は緩斜面に位置し調査当時は雑草地であったが、それ以前は耕地として利用されていたらしく、斜面等高線の頂部にあたる調査区の南側が段状にカットされた崖面を呈していたようである。第1号竪穴住居跡はこの崖面に近い調査区の東南に位置し、第4号竪穴住居跡の東側に、第5号竪穴住居跡の北側に隣接する。平面形態は方形を呈するが、耕作のため削平を受け、さらに崖に面した南辺と西辺および南隅は土砂の流失が激しく検出されていない。住居跡の残存箇所はそれぞれ北辺約3.2m、東辺約3.4mを測り、推定床

面積は約10.9m²の規模である。

削平のため住居跡の残存状態が極めて悪く、遺構検出面と床面はほぼ同一である。概報には「柱穴は住居址の内に10個、住居址外に4個、計14個を検出したが、それらの位置と太さや深さなどから推して、3個がこの住居址のものと考えられる。」と記述される。原図では住居跡内に10個、南隅付近に4個、住居跡東辺に切られて1個及び外側に4個の柱穴が記録されている。断面図より、おそらく南隅を除く3隅に近接して検出された、直径20cm前後、深さ約10cmの柱穴を指すと考えられる。確かに、直径・深さに共通性があり妥当かとも思われるが、周壁に寄りすぎているきらいがないわけではない。柱穴の出土遺物から推定する方法もあると思われるが、本住居跡を含むE区の柱穴出土遺物は、埋蔵文化財資料館に全く残っていない。壁溝は北辺及び東辺北端で検出され、最も残りのよい部分で上面幅5cm、下面幅2cm、深さ4cm前後と浅い。柱穴及び壁溝の深さは極めて浅く、削平の激しさを物語っている。

東壁の中央からやや北側によった位置で、壁より約10cmばかり内側に、長軸66cm、短軸38cmの平面椭円形を呈した、厚さ3cmばかりの焼土面がある。削平が著しいために、上部に構築物を有していたかは定かではない。遺構平面図には焼土中に土器片が、実測されている。

第1号竪穴住居跡出土遺物 (Fig.70, PL.39)

第1号竪穴住居跡の出土遺物に関して、概報には「この住居址の床面から、黄橙色で、胎土が脆くて磨滅している土師器の破片を4片検出したが、いずれも実測が不可能な類である。」とある。埋蔵文化財資料館の収蔵品で、第1号竪穴住居跡出土遺物と確認したのは数個の小片がつまつた小袋が10袋であり、概報の記述を裏付けるものである。そのうち唯一実測が可能であったのが、1の土師器高坏脚部片である。復元脚据部径13.0cm。色調は淡赤褐色を呈する。内外面ともに風化が著しい。色調・風化の具合から2次焼成を受けた可能性が強い。この破片を収納していたボリ袋には、焼土中との注記があり、遺物観察の所見と一致する。埋土ではなく焼土中という出土地点から、第1号竪穴住居に本来的に伴う遺物であったと考えたい。遺構平面図に描かれた土器片と、同一であるかは不明。

この土師器高坏脚部片から、本住居跡の時期を推定するならば、古墳時代中期前半の年代が与えられる。

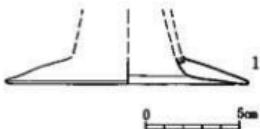


Fig. 70 第1号竪穴住居跡出土土器実測図

吉田遺跡第I地区E区の調査

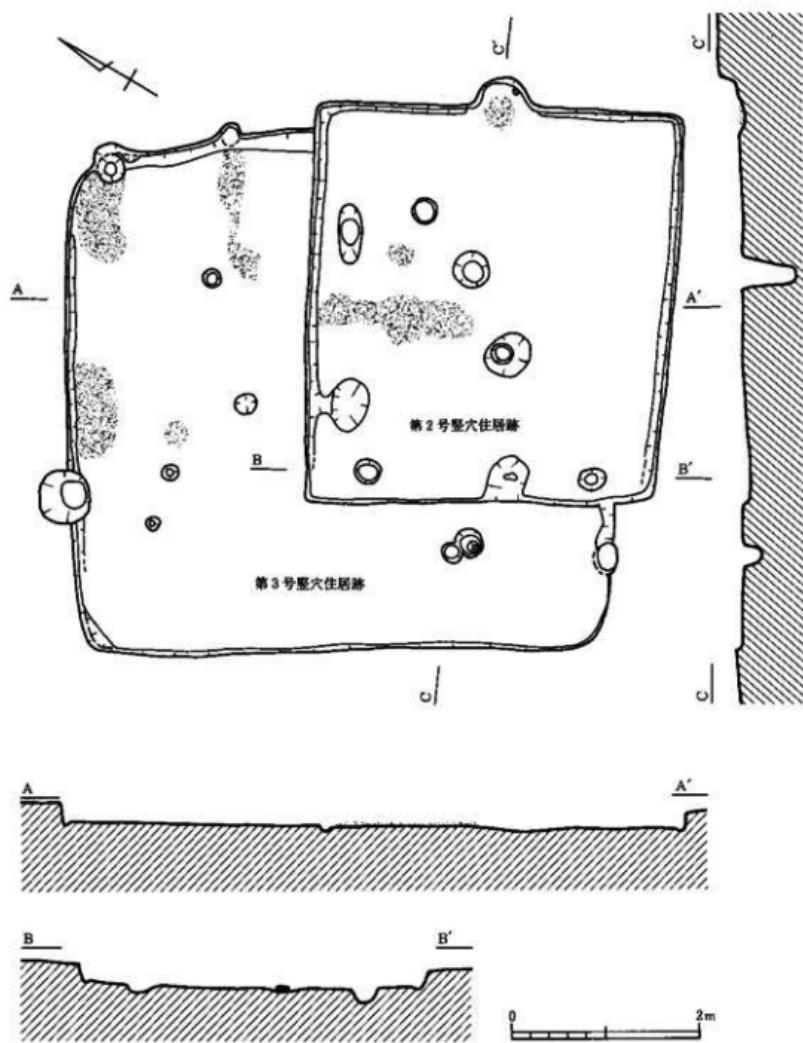


Fig. 71 第2・3号竪穴住居跡実測図 (標高は不明)

第2号竪穴住居跡 (Fig.71, PL.38)

第1号竪穴住居跡の北西約10mの地点にあり、重複する第3号竪穴住居跡と共に第6号竪穴住居跡の北に隣接する。第3号竪穴住居跡のはば南半分を切り込んでいる。平面形態は整った方形で、北辺約4.2m、南辺約4.0m、東辺約3.9m、西辺約3.7m、床面積約15.6m²の規模をもつ。

残存状態は比較的良好で、遺構検出面からの周壁は深さ約30cmを測る。東壁中央部付近には、直径約30cmの半円形の浅く掘り込まれた張り出し部がある。この部分には焼土が充填しており、概報が「山口県下最古の造り付けのかまど」と記述している。削平のため、上部構造は不明であるが、竪と見なすことに間違いはない。山口県下では現在までに、本例よりも時期の遅い竪が検出されているが、比較的古く位置づけられるものである。この他に、北壁内側の中央付近には、長軸150cm、短軸50cmの平面長楕円形を呈した、厚さ約5cmの焼土がある。概報では「これは室内の炉と考えられる。」と記述している。住居跡の1壁面側と中央に焼土面をもつ構造は、保存地区第13号竪穴住居跡でも確認されている。

壁面直下には幅10cm、深さ3cm内外の周溝が、西壁と東壁の炉部分以外に巡らされている。なお、東壁の炉部分と対称の西壁内側の中央に掘りくぼめられた箇所があり、すり石が置かれていた。概報によれば床面は「中央部近くから南西壁部にかけてわずかに低く、この部分に黒褐色土層がたたきしめられた状態で残っていた」という。貼り床であろうか。

柱穴に関しては概報によれば「住居址の内部から直径30から40cm、深さ20~60cmの柱穴を6個検出しているが、位置・深さ・傾きなどから1と2がこの住居址に伴うものとみてよいであろう。」と記述される。西壁内側の両端にある柱穴を示すのであろうが、両者とも床面からの深さが20cmにも満たず疑問の余地が残されている。

第3号竪穴住居跡 (Fig.71)

第2号竪穴住居跡に北東壁と南東壁の大部分を切り込まれている。平面形態は方形を呈するが、北辺約5.4m、西辺約5.0mを測り、推定床面積約27.0m²の規模である。

床面は切り込んだ第2号竪穴住居跡より高く、遺構検出面より深さ20~25cmを測る。北壁と東壁の壁面直下には、幅10cm、深さ5cm内外の断面U字形をした周溝が掘られている。北壁中央付近に接して、半径50cm前後の半円形の焼土が認められる。

柱穴に関しては概報によれば「住居址の内部から直径20~30cm、深さ10cm前後の柱穴を9個、その周辺から直径・深さとも20~30cm内外の柱穴8個、計17個の柱穴を検出したが、重複しているので、どれがこの住居址のものかを指摘することが困難である。」とある。

第2号竪穴住居跡出土遺物 (Fig.72, PL.39)

第2号竪穴住居跡は、第3号竪穴住居跡を切り込んで建築されている。当然のことながら後者よりも前者が新しいわけであるが、新しく掘り込まれた第2号竪穴住居跡は第3号竪穴住居跡の出土遺物を混入させている可能性がある。

2は二重口縁壺頸部である。やや開き気味に直立する頸部をもつ。口縁部は水平方向への屈曲部のわずかな部分を残すが、大半の部分を欠損する。風化しているが口縁屈曲部と頸部に強いヨコナデのあとを残す。3は底部である。破片が小さく、風化も著しいため、器形を推定することは不可能である。ややくほんだ底部は、径2.6cmと底面が小さい。4・5・6は高坏である。4は坏部の破片。口縁への立ち上がり部分全てを欠いている。脚部との接合痕を明瞭に残す。中空の脚部に押し当てられた、坏部側の接合部は円盤充填状に盛り上がる。風化が著しい。5・6は脚部の破片。5は床面出土の注記をもち、住居跡に伴うのが確実なものである。薄手の器壁で、中空の脚部。裾部は強く屈曲し、内面に稜をもつ。風化が著しい。胎土には、赤色斑点を混じえる。6は坏部との基部はすばまるが、裾部は屈曲をもって大きく聞く形態である。風化が著しい。

7はすり石である。外面には使用による条線が観察できるが、全体的には光沢をもつ。先端部分は、蔽打により摩滅している。8は鉄製品である。断片であるとともに、鋒がひどく原形を推定することは困難である。端部が折り曲げられていることにより、方形板状の耕具刀先と判断した。

高坏脚部の形態などから、古墳時代中期前半の年代が与えられる。第1号竪穴住居跡と方向や炉の位置が同じであり同時期の可能性があり、出土遺物からも矛盾はない。

第3号竪穴住居跡出土遺物 (Fig.73, PL.40)

9は壺頸部片である。口縁端部を欠損するが、口縁部の開いた広口の形態をとるものと考えられる。肩部も開きが強く、胴部は張りを持つと考えられる。頸部の最も締まった部位で、復元径11.0cmを測る。風化は著しいが、破片は大きい。包含層の上部より出土しており、第3号竪穴住居跡に本来伴ったものであるか定かではない。10は壺あるいは鉢底部片である。ほとんど丸底化しているが、胴部よりやや突出した部位で径5.0cmを測る。胎土は精製粘土である。風化が著しい。「土器④」の注記があり、床面出土遺物の可能性がある。11は山陰系壺である。口縁の屈曲部が突出する。風化が著しい。混入遺物の可能性が高い。12は小型器台である。坏部は剥離して、欠損する。脚部の裾部も欠損する。坏部内面中心にハケ工具痕がある。13は鉢である。口縁端部は摩耗している。底部は径4.6

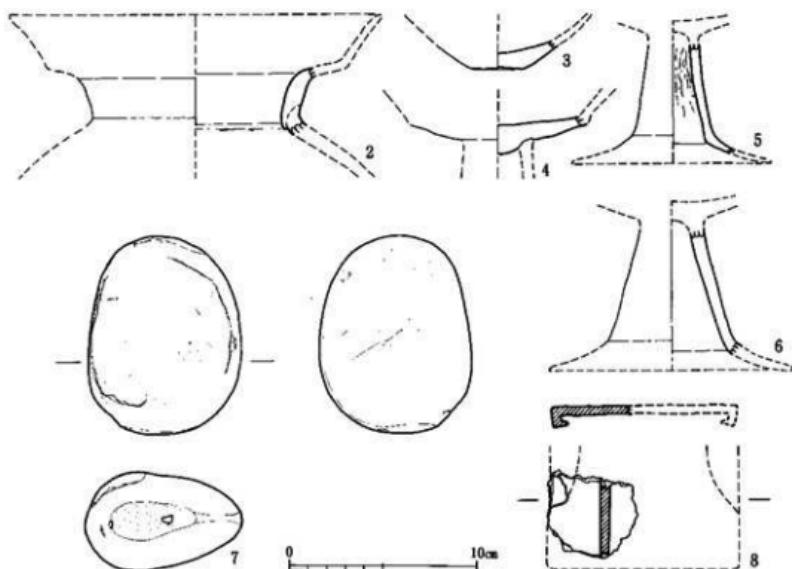


Fig. 72 第2号堅穴住居跡出土遺物実測図

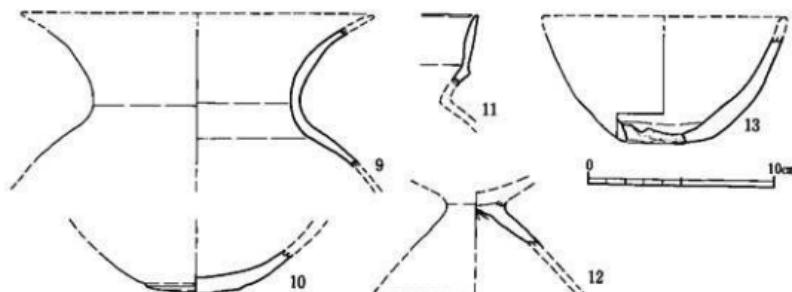
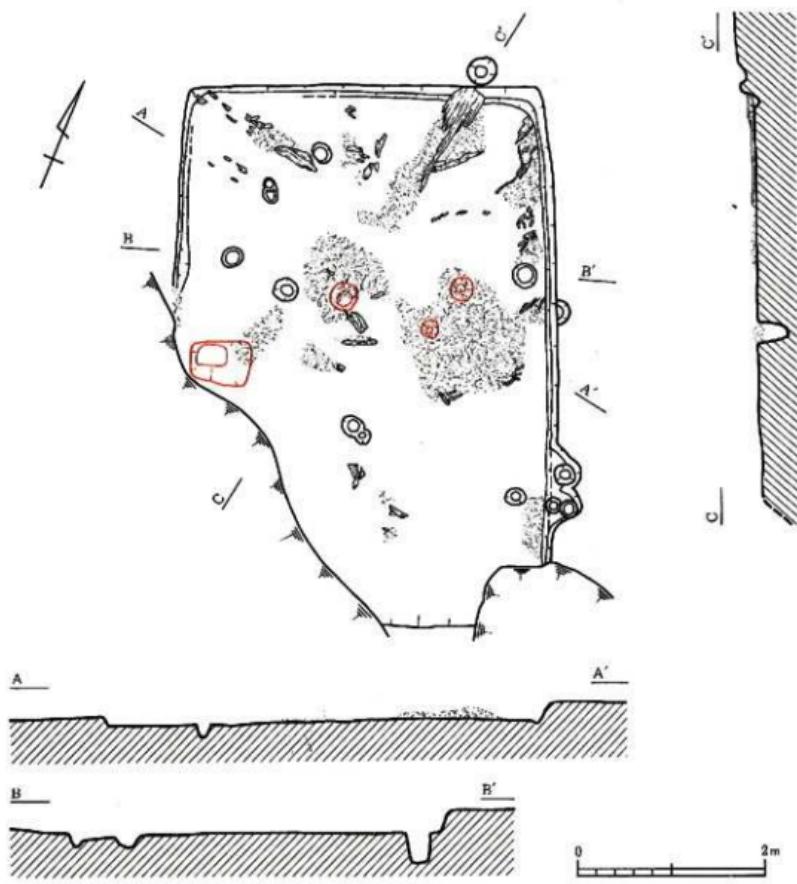


Fig. 73 第3号堅穴住居跡出土遺物実測図

cmを測り、その底面は焼成後に穿孔されたと考えられる。胎土は精製粘土に石英角粒を混じえる。床面出土遺物である。

時期判定に有効な器種は出土していないが、住居跡の切り合い関係から第2号堅穴住居跡出土遺物よりは前と考えられる。



第4号竪穴住居跡 (Fig.74)

第1号竪穴住居跡の西側に隣接する。段状にカットされた崖面に近く、これに面した南壁と西壁の半分が流失してしまっている。平面形態は長方形を呈すると考えられ、長辺にあたる東壁は約5.6m、短辺にあたる北壁は約3.8mを測り、推定床面積は約 21.3m^2 の規模である。床面は検出面より、深さ約25cmを測る。壁面直下に幅約15cm、深さ15cm前後の断

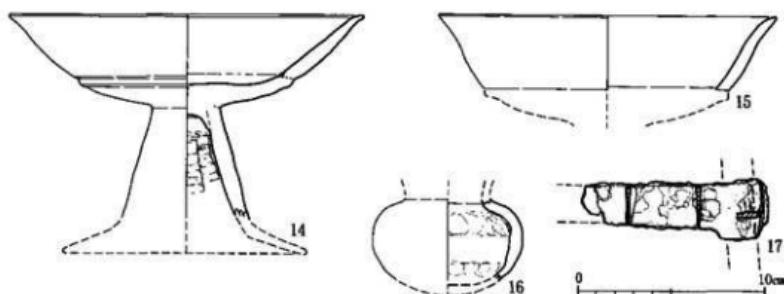


Fig. 75 第4号竪穴住居跡出土遺物実測図

面U字形の周溝が巡る。

概報には「床一面に焼土や炭化物があり、火災を受けた様相を呈していた。」とある。図面にも北壁から床面中央にかけて、横倒しになった炭化材の表現がなされている。ただし、遺存状態はあまり良くなく、上部構造を復原するにまでは至らない。本住居跡は、北壁にも東壁にも焼土面は確認されず、窓の施設は持たないものと推察される。西壁の中央付近で、壁から約10cmばかり内側に長辺約60cm、短辺約30cmの長方形の土壙がある。

柱穴に関しては、「住居址やその付近から直径20~30cm、深さ20~40cm前後の柱穴が7個検出されたが、一棟の家の柱穴としての組み合せはできなかった。」と報告される。確かに図面からも上部構造を支えうるような柱穴の並びは確認できなかった。

第4号竪穴住居跡出土遺物 (Fig.75, PL.40)

14・15は高坏である。14は坏部・脚部ともに全体の1/2を欠損するが、脚裾部を除いて図上復元が可能である。復元口径18.8cm。坏部は屈曲して、口縁部へと移行する。外面屈曲部は強くなられ、突起状になる。口縁部は、外方に開き、端部はヨコナデによって面をもって屈曲する。脚部内面には、反時計まわりのケズリが施されている。なお、坏部と脚部の接合部分には、脚部内側から粘土が貼りたされる。15は口縁部片である。内外面とも風化が著しい。14とは口縁部の長さ、口縁端部の形状から区別したが、同一個体の可能性もある。16はミニチュア壺である。復元で最大胴径8.0cmを測る。内側に指頭圧痕がある。山口市西遺跡などの類例から、直口の形態になると考えられる。

17は鉄鎌である。長方形を呈する鉄板の一短辺を直角に折り返して製品にしており、直刃直角鎌と呼ばれるものに属する。木柄着装部分に、木質の痕跡が残っている。先端は欠損するため、どのような形状であるかは不明。現存長約10.0cm、刃部幅約2.0cm、刃部厚さ約2.5mm。

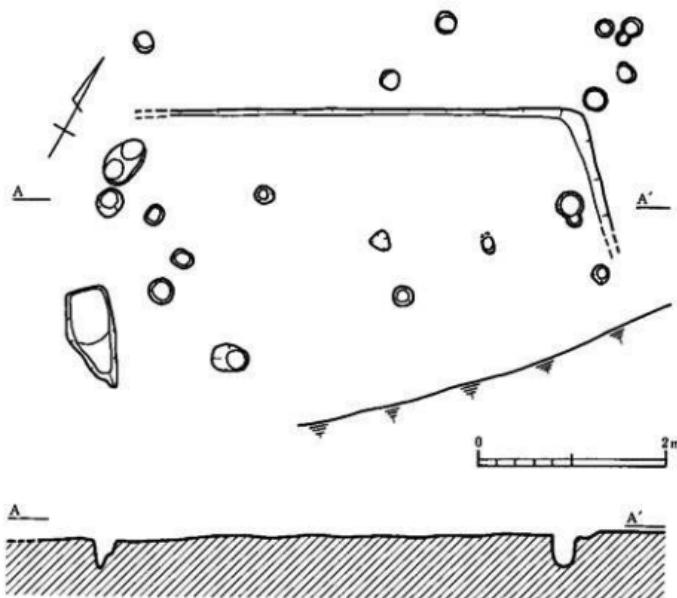


Fig. 76 第5号竪穴住居跡実測図 (標高は不明)

第5号竪穴住居跡 (Fig.76)

第5号竪穴住居跡に関して概報には、「第1号住居址の東に接したこの竪穴住居址は、削剥されて西北壁と東北壁の一部を残しているにすぎないので、全体のプランをつかむことができなかった。なお、住居址やその周辺には、直径・深さとともに20cmから30cmばかりの柱穴を23個検出しているが、どれがこの住居址のものか指摘することができない。」と報告されている。概報の記述通りに住居跡とするならば、崖面に近い南側の土砂を流失しているため、検出されたのは4隅のうちの北東隅のみと、北壁及び東壁のわずかな一部である。周溝は検出されていない。これをはたして、竪穴住居跡とすべきかには疑問の余地が残される。

当時の記録として、埋蔵文化財資料館に残されているのは、概報及び住居跡平面図と断面図のみである。E区が既に消滅している以上、判断は調査者の記述に頼る他はない。し

かし、第5号竪穴住居跡とされる掘り方は、平面の大部分が検出されていない。また、わずかに検出された北東隅は直角ではなく鈍角を呈し、周溝すら検出されていないものを竪穴住居跡と認定しうるであろうか。この疑問は、埋蔵文化財資料館に収納されている第5号竪穴住居跡の出土遺物により、さらに増幅される。

埋蔵文化財資料館には第5号竪穴住居跡の出土遺物が、小袋で4袋のみ収蔵されている。中世の土器がさわめて多く、わずかに弥生・古墳時代の摩滅した土器片が混じる程度である。特に、本遺構の出土遺物中もっとも大きな土器片は、18の羽釜である。これらの遺物がどのようにして出土したかは、明かではない。しかし、以下の可能性があることを指摘しておく。

1. 発掘調査時に、様々な遺構の切り合を住居跡にしてしまった可能性。
2. 第5号住居跡がやはり古墳時代の竪穴住居跡で、中世の遺構に切られている可能性。
3. 第5号住居跡は中世の遺構である可能性。

第5号竪穴住居跡出土遺物 (Fig.77, PL.41)

18は羽釜である。復元口径21.0cm。鉢の側縁部で復元径23.0cmを測る。鉢は、ヨコナデによる貼り付けである。口縁端部は、ヨコナデによって内面に突出する。調整は外面上半はタテハケであるが、下半に斜格子のタタキを残す。この外面の調整と対応するように、内面調整であるハケ工具の原体が異なる。外面タタキに対する位置でのハケは5本で幅4mmと細く、外面タテハケに対応する位置でのハケは5本で幅8mmと広い。外面の鉢から下半に煤が付着する。19は瓦質鉢の底部。かなり摩耗が激しい。外面にハケ痕を残す。20は青磁碗である。内面底部を沈線が円形にはしる。釉が発泡して黄色に変色している。二次焼成を受けているのであろうか。

この他、図示できなかったが、土師壺・皿、瓦質土器などがある。

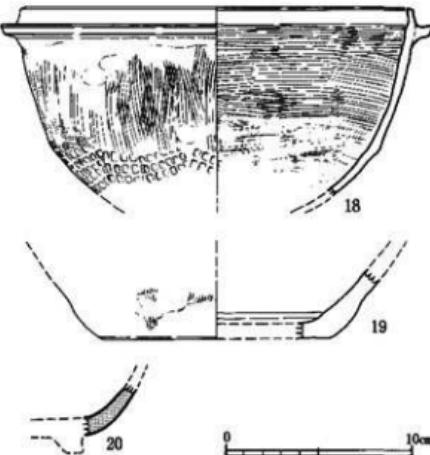


Fig. 77 第5号竪穴住居跡出土土器実測図

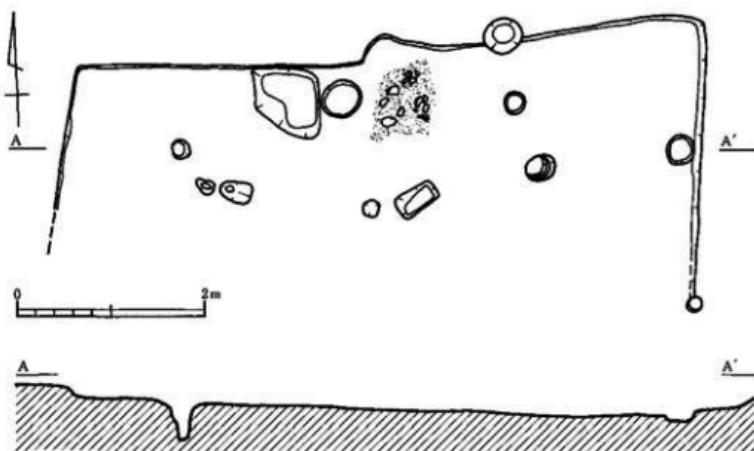


Fig. 78 第6号竪穴住居跡実測図 (標高は不明)

第6号竪穴住居跡 (Fig.78)

第6号竪穴住居跡は第3号竪穴住居跡に隣接し、第4号竪穴住居跡からは北西方向約3mの地点にある。この住居跡も崖面に近く、南壁及び東西両壁の大半を流失している。しかし、長さ6.7mの北壁およびその両隅は残存しており、住居跡であることは確実である。平面形態は、方形あるいは長方形を呈するものと推察される。床面は遺構検出面から、深さ約10cmを測る。周溝をもたない。

北壁の中央部付近に接して、長軸70cm、短軸60cmの範囲に厚さ20cmばかりの焼土が検出されている。焼土部分に接する北壁は、わずかではあるが半円形に外側に張りだしている。上部構造こそ、削平のために確認できないが、第2号竪穴住居跡のものと同じく龜と見なして間違いないであろう。柱穴に関しては概報によれば「住居址やその周辺には、大小さまざまな柱穴が入り乱れていて、これもまたどれがこの住居址のものかを明らかにすることが難しい。」と記述される。

概報には「住居址の内部から石製鋤車・石庖丁・石鎌と弥生式土器や土師器の破片が多数出土し、床面近くから弥生後期の特徴を残す甕や高坏の破片が出土した。」とあるが、石製鋤車・石庖丁の所在は不明である。

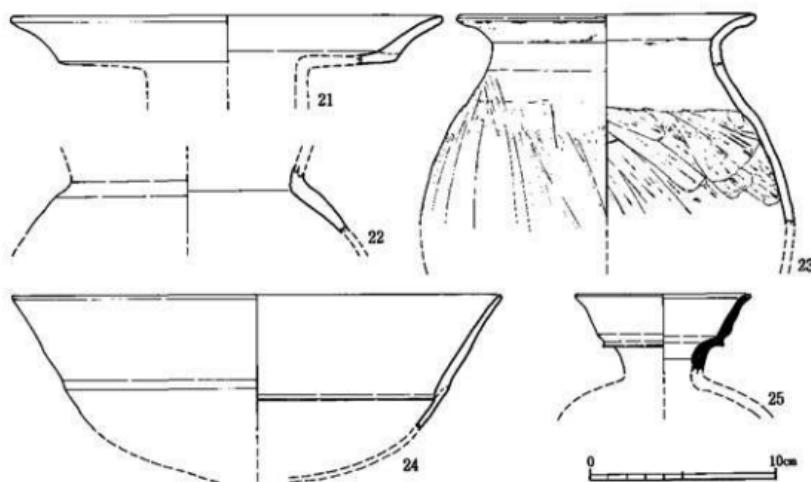


Fig. 79 第6号竪穴住居跡出土土器実測図

第6号竪穴住居跡出土遺物 (Fig.79, PL.41)

21は二重口縁壺である。口縁部とその口縁部への屈曲部分の破片である。復元口径は23.0cmを測る。屈曲部は鋭く折れ、口縁端部は丸い。内外面の風化が著しい。22は壺である。頸部の破片のため、口縁形態が明らかでない。頸部のもっとも締まった位置で径12.4cmを測る。内外面の風化が著しい。23は壺である。長胴の胴部に短いが強く屈曲する口縁部をもつ。復元口径16.0cmであるが、口縁部は極めて小破片であるため、径の復元が可能な胴部との合成により口径を求めている。復元口径の数値に誤差が含まれている可能性は高い。外面調整は、粗いハケ後ナデである。内面は右から左方向へのケズリである。24は高坏である。口縁部の小破片である。内面は明瞭な段をもって屈曲するが、外面は不明瞭である。風化が著しい。弥生時代後期の高坏が混入した可能性が高い。

25は須恵器壺である。復元口径9.4cmを測る。頸部は外反し、さらに外方へ屈曲させ口縁部となる。屈曲部は、強くナデられ、シャープな凸線となる。口縁端部はヨコナデにより、上部に面をもちながら外方に突出する。頸基部は、もっとも締まった位置で径4.2cmを測る。内面は荒れるが焼成はよく、断面セピア色を呈する。以上の特徴は、山口県内出土の壺のなかで最も古い形態と考えられる。田辯昭三氏による須恵器編年の中TK-23まで降りるとは考えられない。TK-208~216に属する山口県内初期須恵器の一例である。

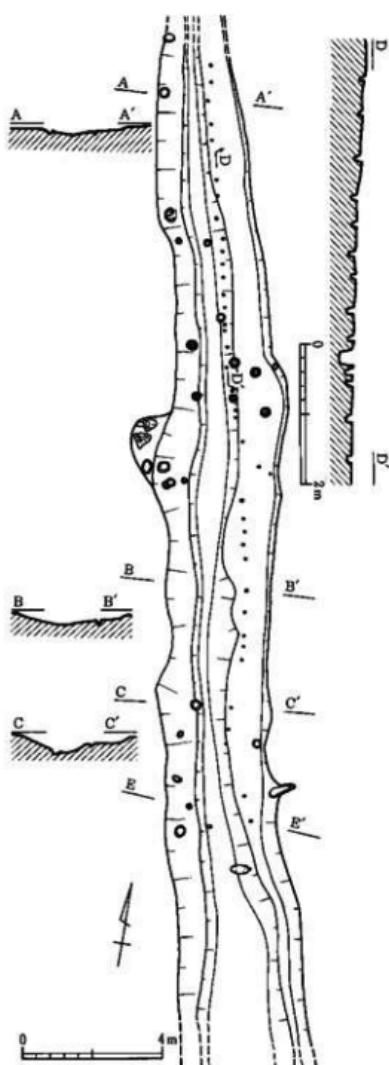


Fig. 80 溝状遺構実測図（標高は不明）

(2) 溝状遺構 (Fig. 80)

本遺構は、調査区の東端で検出された、古代の土器・須恵器を含んだ溝である。地形の傾斜に沿って、北から南方向に掘削され、その両端は調査区外に続いている。調査区内で検出された溝の全長は、約28.0mである。溝幅は、最大約3.6m、最小約2.0mである。標高の高い調査区北端の溝幅が最も狭く、南へと標高が下がるにつれて溝幅を広げようである。また、断面も南に行くにしたがい浅い逆台形から、東側に肩をもつ逆台形の溝となる。その深さは調査区北端で約20cm、南側の最深部で約80cmを測る。地形の傾斜および溝の形態が示すように、流路の方向は北から南である。概報には溝の土層堆積に付いて「この溝の上層には、黒褐色土層、下層には青味を帯びた褐色土層が堆積し、地山との境界近くには厚さ2cmばかりの砂層があって、水が流れたことがあることを示している。」と漏水していたことが記述されている。

なお、この溝状遺構からは、柱穴が検出されている。概報によれば「溝の中には2種類の柱穴群があった。その一つは直径20~30cm、深さ20cm内外のもので、調査地区的全域で検出されたものと同種のものである。他の一群は、溝の最下層の砂層を取り除いた状態で検出されたもので、溝底にあつた槽か垣の跡とみられ4~6cm、深さ8cmばかりの先の尖った穴の跡が約20cm間隔に

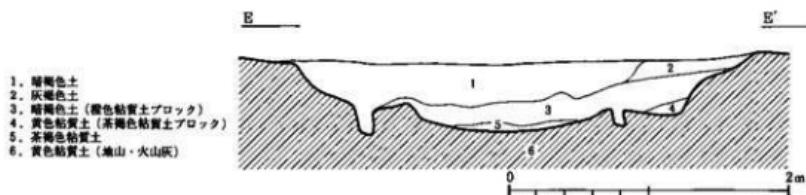


Fig. 81 溝状遺構土層断面図 (E-E')

(標高は不明)

遺存した。』としている。このうち、直径20~30cm、深さ20cm内外の柱穴が1列3本で、それらが2列になって溝と直交する箇所がある。その箇所は、調査区の中央よりやや南側によっている。柱間は柱穴の中心から約1.0mの間隔であり、柱穴列の幅は1.0~1.5mである。この柱穴列に関しての記述は、概報には認められない。しかし、本報告では橋脚遺構の可能性を示唆しておきたい。溝状遺構が何らかの施設を区画するものであり、柱穴列の橋脚遺構はその出入口と考えられる。この溝状遺構をはさんだ調査区の東側と西側では、柱穴の分布密度が著しく異なる。東側はほとんど柱穴が検出されないが、西側では多數検出されている。これらの柱穴から出土した遺物は、今のところ埋蔵文化財資料館では見あたらない。このため、溝状遺構との柱穴が時期的に対応するものか検証のしようがないが、柱穴の分布密度からいっても溝状遺構の西側に建築物があったことは確かであろう。

また、溝状遺構の東肩で検出された直径4~6cm、深さ8cmばかりの先の尖った穴の跡については、概報では櫛か垣の可能性を推定している。確かに20cm間隔で並ぶ小穴は、垣などの施設をほうふつさせる。しかし、注意せねばならないのは、西肩にも直径約20~30cmの柱穴が並ぶ可能性があるということである。この柱穴が西側の建築物を囲んだ板塀などの柱であるとするならば、板塀の外にさらに垣があったとは考えがたい。また、先に橋脚としたその下の部分にまで、この小穴が続くことからも櫛や垣の可能性は低下する。むしろ東肩護岸のための杭の可能性が高いのではないだろうか。

溝状遺構の機能年代として、その出土遺物から9世紀前半~10世紀前半の年代が考えられる。溝状遺構は調査区外に広がるため、どのような形状をとるのかは定かではない。しかし、西側の施設を区画しているようであり、橋や護岸の杭などからも、単なる平安時代前期の溝とは考えがたい。あるいは、本調査区よりもやや北にあがった、大学会館の新營に伴う発掘調査で出土した石碑帯や須恵器の硯あるいは木簡などとの関連を想定すべきなのかもしれない。

出土遺物

土師器壺 (Fig.82-26~30, PL.42)

高台はなく、円盤状の底部のものを壺として一括した。26は内湾しながら立ち上がる体部をもつ。内外面の風化が著しいが、底面にかすかにヘラ切り痕が観察できる。復元底径5.8cm。27は底部のみ。内外面の風化が著しい。復元底径6.1cm。28は底部のみ。底面のヘラ切りは、ナデ消される。底径6.3cm。29はやや内湾しながら立ち上がる体部をもつ。内外面の風化が著しい。復元底径7.0cm。30は外方に開く体部をもつ。底面にはヘラ切り痕を残す。復元底径6.2cm。

土師器壺 (Fig.82-31~38, PL.42)

高台をもつものを一括した。31・32は高台の幅が薄く、突出が極めて高いもの。31は底面ヘラ切り痕をナデ消す。復元底径7.6cm。32は高台端部を欠損する。

33~38は高台の幅が厚く、突出が低いもの。胎土に砂粒を多量に含むが、36・38はあまり砂粒を含んでいない例外品である。そのうち38は胴部が弯曲をもって立ち上がり、高台も丸い。時期の下降する混入遺物であろう。復元底径7.4cm。36は精製粘土を使用する。高台は胴立ち上がりの屈曲部よりも、内側に貼り付けられる。器形は極めて9世紀後半の須恵器壺に似る。須恵器工人の手によるものか。底径6.8cm。33は胴部が直線的に開く。復元底径7.1cm。34の高台は断面三角形を呈するが先端がつぶれている。底径6.7cm。35の高台は断面逆台形を呈する。復元底径6.0cm。37の高台は断面三角形を呈する。復元底径6.2cm。

土師器壺 (Fig.82-39~43, PL.42)

口縁部がわずかに外反する長胴の壺である。39は器壁が8mmと厚く、肉厚の口縁端部は丸く収められる。大粒の砂粒を多量に混じえる。器面の風化が著しいが、外面くびれ部に煤の痕跡を残す。弥生時代後期終末の壺の可能性もある。復元口径26.0cm。40は外面の頸部から胴部にかけて、ヨコナデの凹凸を残す。砂粒を多量に混じえる。色調は淡赤褐色で、2次焼成によるものと考えられる。復元口径27.0cm。41はほとんど頸部に屈曲をもたない。胴部より口縁部は徐々に開き、口縁端部はヨコナデによって外方に突出する。外面には多数の指頭圧痕を残す。復元口径26.0cm。42はやや胴部が張り、頸部に屈曲をもつ。口縁端部は、ヨコナデによって丸く収められる。器壁は3.5mmと薄い。復元口径21.4cm。43は胴部が張り、口縁部が屈曲する。口縁部は胴部に対して、やや長い。胴上半部の外面には、シボリによってヒビが入る。弥生時代後期終末の壺の可能性もある。復元口径18.8cm。

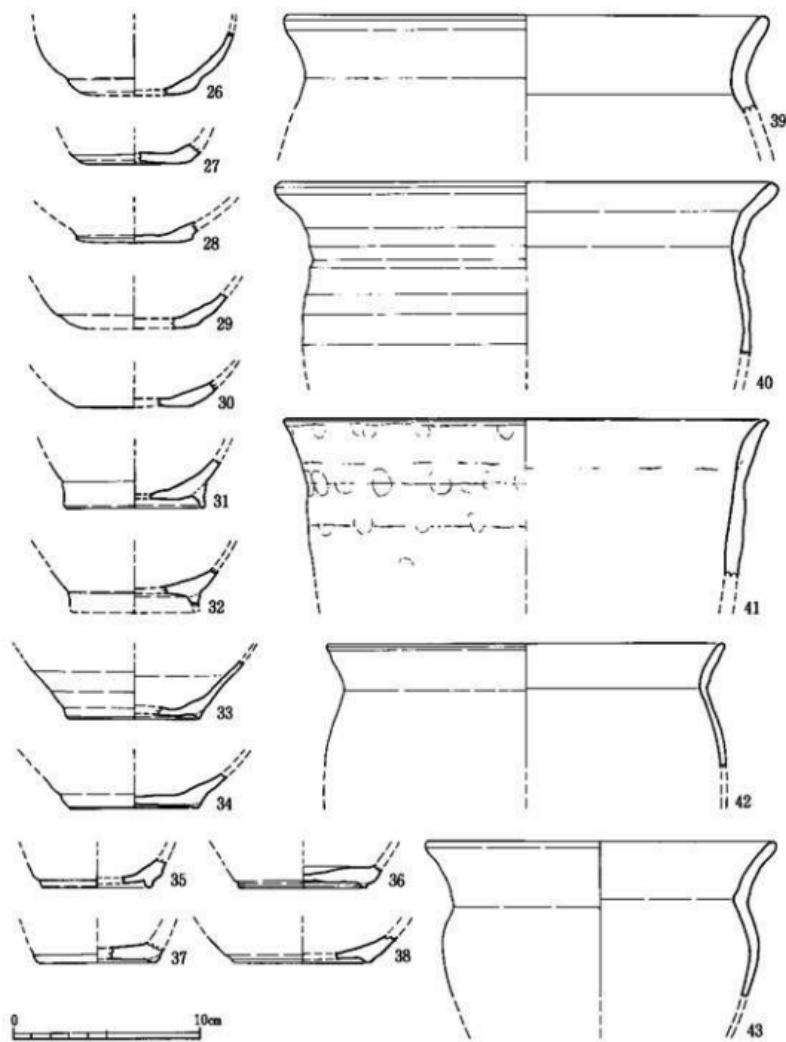


Fig. 82 溝状遺構出土土器尖測図(1)

須恵器坏 (Fig.83-44~66, PL.43)

44~59は高台をもつ坏である。高台には2種類の形態がある。

44~47・51・52は高台内端が下方へ突出し、接地面となるものである。このうち、44~47は底径が8.0cmを超える大型のもので、51・52は底径が8.0cm以下の小型のものである。44は高台が底部と胴部の屈曲部に接して貼り付ける。復元底径10.8cm。45はやや摩滅する。復元底径8.8cm。46は復元底径9.8cm。47は高台が低い。復元底径9.8cm。51は復元底径6.4cm。52は復元底径7.4cm。48~50、53~59は高台が内端・外端とも接地、あるいは外端だけが接地するものである。このうち、48~50は底径が8.0cmを超える大型のもので、53~59は底径が8.0cm以下の小型のものである。48は高台内端接地の名残をとどめ、高台内側が突出する。復元底径8.4cm。49もわずかに高台内端接地の名残を留める。復元底径9.5cm。50は底面にヘラ切り痕を残す。復元底径11.0cm。53は高台の外端面が接地する。器壁がやや厚く、蓋底部の可能性もある。復元底径6.6cm。54は高台が底部中心よりに貼り付けられる。復元底径7.1cm。55は高台が底部中心よりに貼り付けられる。復元底径6.0cm。56は復元底径6.6cm。57は高台が低く、坏部がやや外方に開く。復元底径6.4cm。58は低い高台を、底部と胴部の屈曲部に貼り付ける。焼成が極めて悪い。底径6.0cm。59は1/2を欠損するが全形のわかる個体である。底部から、やや膨らみをもって斜めに立ち上がる胴部をヨコナデによって外反する口縁部をもつ。低い高台を底部と胴部の屈曲部に接して貼り付ける。器高4.7cm、復元口径11.9cm、復元底径7.4cm。

60~66は高台をもたない坏である。60は直線的に聞く胴部をもつ。口縁部内面はヨコナデによってやや面をもつ。底面にはヘラ切り痕のうえに、板敷状の圧痕がつく。底部内面に不定方向のナデが施される。器高3.3cm、復元口径12.5cm、復元底径6.1cm。61は胴部がやや内弯しながら立ち上がる。復元底径7.7cm。62は蓋形七器の可能性もある。底面にヘラ切り痕が残る。復元底径8.0cm。63は底部にヘラ切り痕を残す。復元底径7.4cm。64は底部側面に、ヘラがあたって沈線状になる。復元底径8.0cm。65は極めて焼成が悪い。底面にヘラ切り痕を残す。復元底径6.4cm。66は底面に板敷状の圧痕を残す。復元底径6.9cm。

須恵器坏蓋 (Fig.83-67-68, PL.43・44)

67・68は坏蓋である。67はつまみ部分である。つまみは直径2.6cmの扁平で、中央部が凸形をなす。外面に緑色の自然釉が付着する。68は全体の約1/2が残存する。水平に近い天井部と2段階に屈曲した端部をもつ。円盤状のつまみを有していたと考えられる。復元口径約13.0cm。

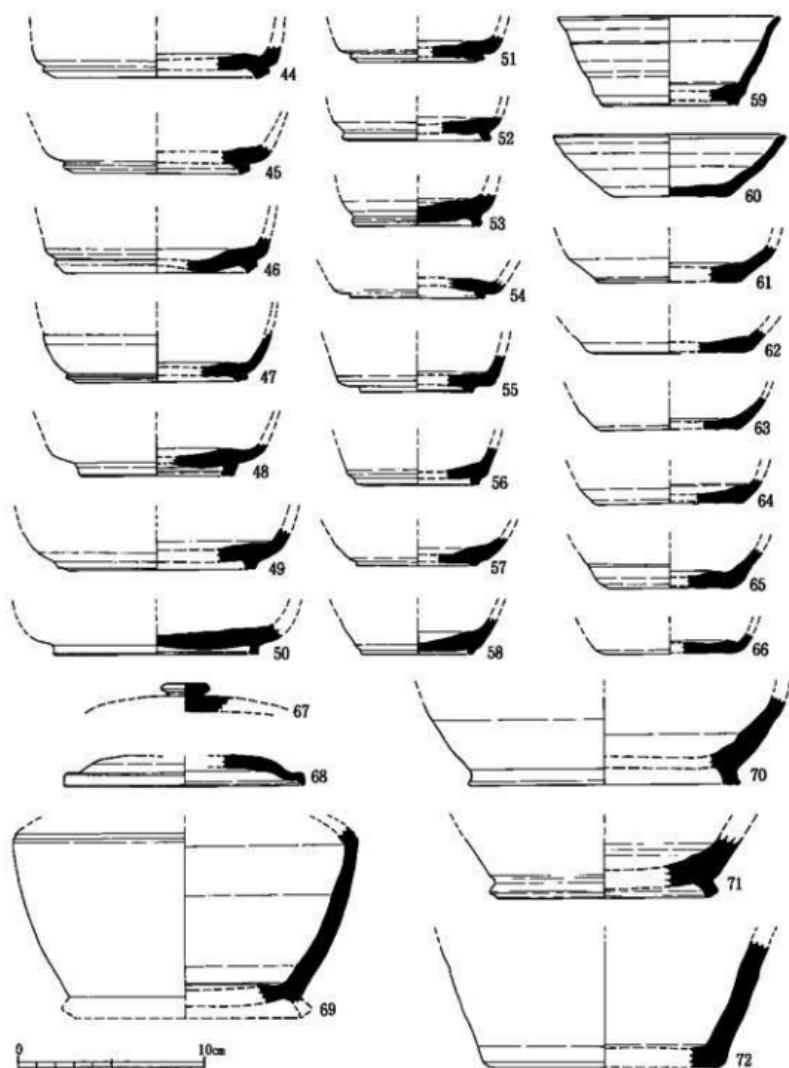


Fig. 83 潛状遺構出土土器実測図(2)

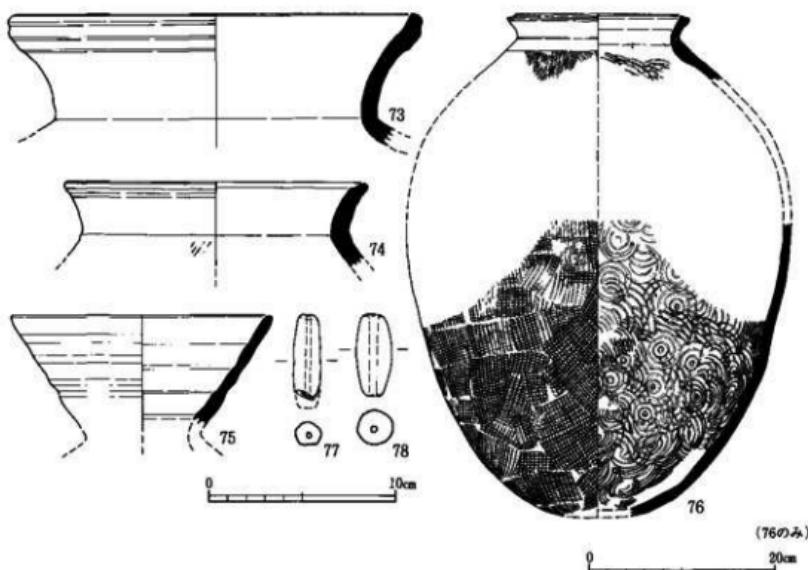


Fig. 84 溝状造構出土遺物実測図(3)

須恵器壺 (Fig. 83-69~72, 75, PL. 44)

69~72・75は壺である。69は長頸壺の胴部と考えられる。脚端部と胴部上半を欠損し、残存する下半部も1/2を欠く。肩部は張りをもち、張った部分に沈線をめぐらす。高台は底部と胴部の屈曲部分に貼り付け、外方に突出している。70は底部と胴部の屈曲部分に、外側に張り出す高台を貼り付ける。高台端部は、内端をつまみ出す。復元底径14.6cm。71は外面に自然軸が付着する。復元底径12.2cm。72は高台をもたない平底のもの。外面に時計まわりのケズリ後にナデ調整がみられる。75は口縁部である。直口で頸部に対して口縁部がやや開き気味である。内外面に、ロクロ成形による凹凸を明瞭に残す。復元口径14.0cm。

須恵器壺 (Fig. 84-73, 74, 76, PL. 44・45)

73・74・76は壺である。73は2段階に屈曲しながら口縁端部が立ち上がるもの。復元口径21.2cm。その形態から、溝状造構が機能した時期よりも若干遅る混入遺物の可能性が高い。74は短い口頸部が直立するもの。口縁上端はナデによって幅広い凹面をもつ。口縁内

面に、2本の直線によるヘラ記号を有する。復元口径16.3cm。76は鶴卵形の腹部に、短くやや外反する口縁部をもつ。底部は丸底である。口縁上端はナデによって、幅広い凹面をもつ。外面には格子の叩き、内面には同心円のあて具痕を残す。

土錐 (Fig.84-77-78, PL.44)

77・78は管状の土錐である。77は一方の端部を欠損する。残存長4.55cm、太さ1.3cmである。孔の径は3mmである。摩滅する。78は、長さ4.4cm、太さ1.8cmである。孔径は4mmである。いずれも胎土は精良な粘土であるが、摩滅する。

砥石 (Fig.85-79, PL.44)

79は凝灰岩を用いた砥石である。すり面を上面とするならば上面の長辺が5.9cm、短辺5.2cmで、厚さは5.35cmのいびつな立方体を呈している。上面は度重なる使用によって光沢をもつ。下面も安定のためか、あるいは一時的な使用のためか平坦面をもつ。重量は246.58gである。帰属年代は不明である。

(3) 土壙 (Fig.68)

E区からは、2基の土壙が検出されている。第1号土壙は調査区のほぼ中央、第2号竪穴住居跡の東側に検出されている。直径約3.0m、深さ0.8mの円形を呈する。第2号土壙は第6号竪穴住居跡の東側で検出されている。長径4.5m、短径2.75m、深さ1.1mの不整規円形を呈する。いずれ土壙も住居跡と同じ、黒褐色土の埋土であった。遺物は全く見当たらなかつたらしいが、その埋土から住居跡と同じあるいは近い年代が想定される。

(4) 柱穴群 (Fig.68)

柱穴は、竪穴住居跡内部のものも含めて総数約182個を数えるという。概報によれば「調査地区全域にわたって分布するが、三つの群を形成しているようである。」とされる。第1号土壙の北側の1群、第3号竪穴住居跡の北西側の1群、第1号竪穴住居跡付近の1群を指すのであろうか。ただし、そのまとまりに意味があるかは、柱穴出土遺物が不明のため検証のしようがない。さらに概報は「弥生時代から古墳時代を経て中世にいたる各時代の柱穴が重複しているらしいので、組み合せがはなはだ困難である。なお、この柱穴から弥生式土器や瓦器の破片が出土した。瓦器が出土するものがあるところから、その多くは中世の柱穴群とみてよいであろう。」とするが、溝状遺構との関連が問題となろう。現在の埋蔵文化財資料館が有する資料では、掘立柱建物を復元することは不可能であった。

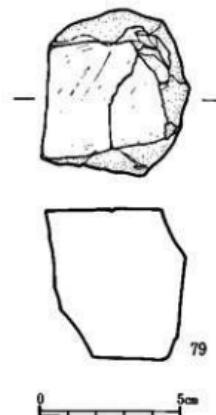


Fig. 85
溝状遺構出土砥石実測図

(5) 遺構に伴わない遺物 (Fig.86-80~99, PL.45・46)

E区出土遺物で、包含層あるいは遺構に伴わないもの、また遺構に伴うが明らかに遺構とは異なる時期のもの、あるいは注記が不明なものをまとめて報告する。該当する時期の遺構はない(?)が、弥生時代の土器や石器が多数出土している。

80・81は前期弥生土器有文壺である。80は文様帯の下端を3条の沈線で区画し、縞模様が施されている。文様帯の上端区画は破片のため明かではない。文様及び沈線は、鋸歯状圧痕のつく貝殻による施文。第2号竪穴住居跡包含層中出土。81は羽状文を有する。鋸歯状圧痕のつかない貝殻による施文。包含層出土。

82は垂下口縁壺である。口縁部と垂下部の屈曲部分が強いヨコナデによってつまみ出され、跳ね上げ状の口縁端部となる。垂下部外面は、板状工具による山形文が施される。出土地点不明。83は複合口縁壺。口縁部が受け口になるが、外面の屈曲部が垂下口縁状に突出する可能性があり、弥生時代中期末に属するのではないかと考えられる。口縁部外面は、板状工具による山形文が施される。出土地点不明。84は水平口縁高坏か。鈍状に突出した口縁部分の破片である。端部は面をもち、竹管による刺突文が施される。口縁上面はミガキが施されている。第4号竪穴住居跡西側トレンチ出土。

85は複合口縁壺である。開いた口頭部の端部上面に粘土を積み上げ、受け口状の口縁をなすもの。屈曲部は、鈍状に突出する。口縁部外面には波状文が施される。口縁端部は面をもつ。第2号竪穴住居跡包含層中出土。86は小型器台である。基部の破片である。胎土は精製粘土を使用する。出土地点不明。87は土師器高坏である。坏部と脚裾部を欠損する。内面はケズリ、風化が著しい。第2号竪穴住居跡包含層出土。

88~91は前期弥生土器壺底部である。88は底部側面に、貝工具か板工具かは不明であるが2条の押圧沈線をめぐらせる。内外面ともに風化が著しい。出土地点不明。90は底面の器壁が厚い。風化が著しく、外面に砂粒が吹き出している。第6号竪穴住居跡包含層中出土。89・91は前期弥生土器壺底部と思われるが、中期の可能性もある。89は風化が著しく外面の器面は剥落するが、内面にミガキを残す。第2号竪穴住居跡包含層出土。91は弯曲しながら立ち上がる胴部と、突出した底部をもつ。内面の底面に、ハケ痕を残す。外面の底面には、砂粒の圧痕を明瞭に残す。出土地点不明。92~95は前期弥生土器壺底部である。92は風化が著しく、器面には砂粒が吹き出す。第2号竪穴住居跡床面出土。93も風化が著しく、破面の摩耗も激しい。第6号竪穴住居跡包含層中出土。94もまた風化が著しいが、外面には胴部接合痕を残す。第6号竪穴住居跡包含層中出土。95は外面に一部ハケの痕跡を残す。

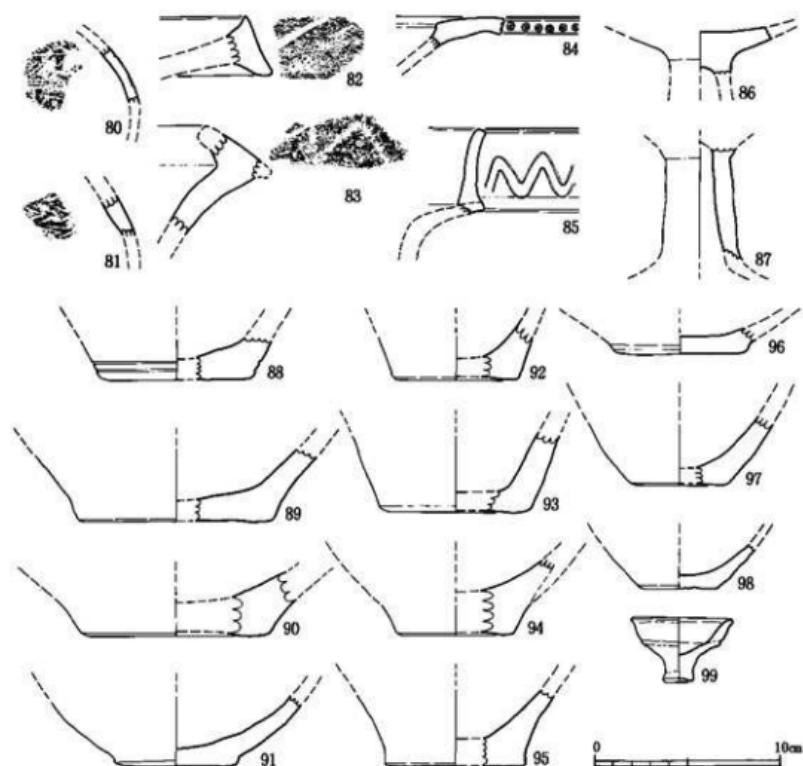


Fig. 86 遺構に伴わぬ土器実測図

出土地点不明。96は中期弥生土器壺底部である。風化が著しい。第4号竪穴住居跡西側トレンチ出土。97は後期弥生土器壺底部である。風化が著しい。第6号竪穴住居跡包含層中出土。98は土師器鉢の底部か。胎土は精製粘土を使用する。溝状遺構包含層出土。

99はミニチュア高坏である。脚部は指でつまんで作り出す。脚底面と脚端部側面をつまんでヨコナデし、わずかに丸く突出した裾部を成形する。このため、脚底面はくぼむ。坏部は大きく開いて屈曲し、口縁部へと立ち上がる。この屈曲部は作業工程上において小休止があつたらしく、擬口縁状に口縁部が剥離する。口縁端部はわずかに屈曲する。なお、上下逆として蓋形土器のミニチュアという考え方もある。出土地点不明。

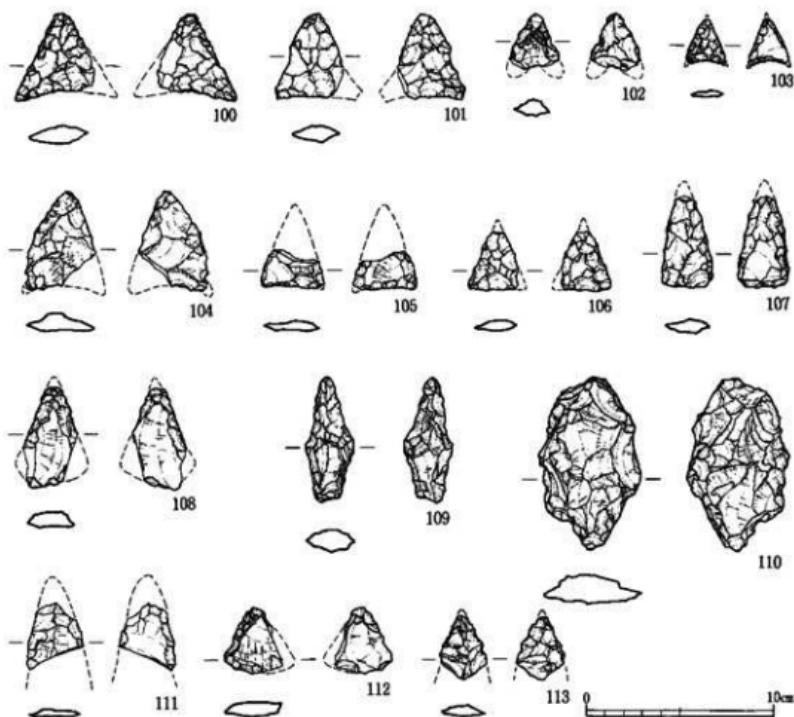


Fig. 87 遺構に伴わない石鏃実測図

石鏃 (Fig.87-100~113, PL.47)

第I地区E区からは、多数の剥片や石鏃が出土しているが、いずれも遺構に伴うものではない。剥片は剖愛するが、石鏃はすべて図示した。

100・101は巣島産黒曜石。102~106・108~113はサヌカイト。107は結晶片岩を石材とする。形態は100~105が凹基式、106・107が平基式、108・109が凸基式、110が有茎式に分類される。なお、111~113は損傷のため、形態が明かでない。103・105・108・111・112は周縁部の細部調整のみで、主要剥離面を残している。103は長さが1.2cm、重量0.21gと極めて小形である。これに対して、110は長さが4.6cm、重量9.08gという大形のものである。110は大形化、また有茎式という形態的特徴から弥生時代中期後半のものと考えられる。

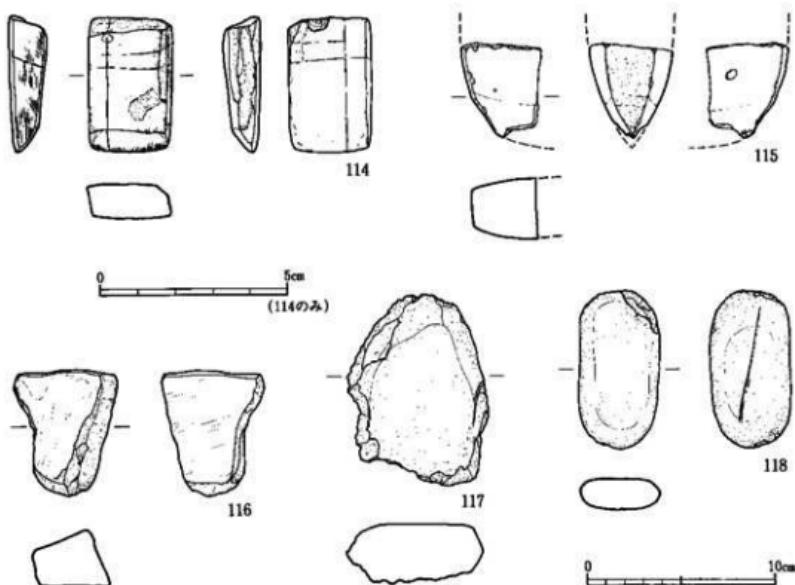


Fig. 88 遺構に伴わない石器実測図

扁平片刃石斧 (Fig.88-114, PL.46)

側面の片側に、自然面を残す。基部の側面形は平坦ではなく、下部が突出する。幅は2.25cmと小形である。石材は緑色の泥岩。溝状遺構出土。

太形蛤刃石斧 (Fig.88-115, PL.46)

太形蛤刃石斧の破片と考えられる。刃部先端であろうか。側面がやや面をもち、太形蛤刃石斧とすれば整いすぎるくらいがある。損傷が激しい。石材はひん岩。溝状遺構出土。

砥石 (Fig.88-116, PL.46)

両面を使用している。片面は平坦であるが、もう一面は使用によりくぼむ。石材は結晶片岩。出土地点不明。

用途不明石器 (Fig.88-117-118, PL.46)

117は平坦な面を有し、焼成を受ける。石材はディサイト。118は扁平な安山岩であるが、片面に線刻をもつ。117と118は出土地点が不明であるが、同じ袋に収納されており同一地点出土と考えられる。火を受けることから、住居跡出土の可能性がある。

6 小結

遺構・遺物

弥生時代

図示できないような、小片で摩耗した弥生土器が多数出土している。石鎌や石斧もあり生活の痕跡を残している。しかし、明確な弥生時代の遺構はなく、古墳時代の住居跡の残存状態から考えるならば、調査時には既に消失していた可能性がある。

古墳時代中期

5棟の竪穴住居跡について、出土土器から変遷順位を決定することは困難である。といふのも各住居跡とも出土土器が少ないうえ、山口県内における土師器編年は完成していないからである。須恵器を出土した6号住居跡のみが、陶邑編年によって時期決定を行えるのであるが、E区竪穴住居群での相対的な年代を求める事はできない。変遷順位で唯一判明しているのは、3号竪穴住居跡が2号竪穴住居跡に切り込まれていることである。各竪穴住居跡の変遷順位は、その構造差および占地状態から推定する他はない。

5棟の竪穴住居跡は、2号と3号の切り合いに代表されるように、同時並存が不可能なほど近接し合うものがある。近接し合うもの同士をグルーピングすると、1・4号住居跡のA群と2・3・6号住居跡のB群にまとまる。同時並存が不可能な以上、同じ群内の竪穴住居跡には、必ず先後関係がなければならない。A群の1号竪穴住居跡と4号竪穴住居跡を比較すると、両者はその構造において著しい差がある。1号竪穴住居跡は正方形プランで東側に竈をもつが、4号竪穴住居跡は長方形プランで竈をもたない。この差から、4号竪穴住居跡よりも1号竪穴住居跡に新出的要素を見いだすことができる。

B群では、切り合いから確実に3号竪穴住居跡よりも2号竪穴住居跡が新しいことが分かる。6号竪穴住居跡は、2・3号竪穴住居跡が保有しない須恵器をもつことから、B群で最も新しいと考えられる。ただし、6号竪穴住居跡の須恵器亂は、TK-216~208併行の地方窯成立以前の古式須恵器であり、2・3号竪穴住居跡が6号竪穴住居跡以後としても須恵器の供給体制が完成されておらず入手できなかった可能性がないわけではない。これに対しては、次のように判断される。棟方向の一貫などから3号住居跡と2号住居跡の連続性が考えられる以上、6号住居跡は3号住居跡より以前か2号住居跡の以後に位置づけざるを得なくなる。3号住居跡出土の土師器は、6号住居跡出土の須恵器が示す年代以後のものとは考えられない。とすれば6号住居跡は、2号住居跡以後に位置づけざるを得ないのであり、6号住居跡のみ古式須恵器が出土した状況とも一致する。以上のことから、

B群は3号住居跡、2号住居跡、6号住居跡の順で変遷が考えられる。

同時に並存がおこりうるA群とB群の関係であるが、A群1号住居跡とB群2号住居跡に注目したい。住居跡の規模、棟方向、東壁に設けられた竪の位置が同じで、両者が並存した可能性は強い。このことより、E区における竪穴住居跡の変遷は次のように考えられる。
3・4号住居跡（両者の前後・並存関係は不明）→1・2号住居跡（両者並存）→6号住居跡

なお、6号住居跡から出土したTK-216～208併行の須恵器による5世紀中頃の年代を下限とし、竪穴住居跡の耐用年数を約20年とするならば、3・4号住居跡は4世紀末～5世紀初頭、1・2号住居跡には5世紀前半の年代が与えられる。

古代

溝幅2mを超える溝状遺構が、丘陵の傾斜に沿って南北に検出されている。この遺構は最深約80cmを測り、橋脚状の6本の柱穴をもつ。また、溝底の東側テラスで検出された杭列は護岸の為と考えられ、堅牢な作りである。本遺構から出土した土器には年代幅があり、溝の機能期間を示すものと考えられる。

溝状遺構出土の須恵器坏で最も古いタイプには、高台内端面の接地するものがあり、8世紀前半の年代が与えられる。ただし、これらは小片で摩滅しており、混入遺物と考えられるものである。主体となる須恵器坏は、斜めに立ち上がる胴部をもち低い高台を底部と胴部の屈曲部に接して貼り付けるものと、斜めに立ち上がる胴部をもち平底のものである。これらの特徴から、9世紀前半以降の年代が与えられる。これら須恵器の一群とは別に、高く突出した高台をもつ塊と円盤状に突出した底部をもつ坏からなる土師器の一群がある。塊の底面にはヘラ切り痕を残すものがある。おそらく地方須恵器生産が終焉した10世紀前半に属するものであろう。以上のことから溝状遺構の機能期間としては、9世紀前半～10世紀前半の年代が考えられよう。それらは奇しくも、大学会館の新営工事で出土した石碑等や須恵器の硯、巣書土器、縁釉陶器の年代と一致するものである。庄家などの可能性を再考する余地がある。

中世

概報では5号住居跡とよばれていたものが、出土土器より推察すると中世の遺構であった可能性がある。なお、この遺構から出土した青磁碗（Fig.77-20）と、大学会館から出土した底部（年報Ⅲ、Fig.27-14）が接合した。

吉田遺跡第I地区E区の調査

〔注〕

- 1) 山口大学吉田調査団「山口大学構内第I地区E区発掘調査概報」(山口大学、1976年)
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「大学会館新宮予定地M-14・15区の試掘調査」(「山口大学構内遺跡調査研究年報」Ⅱ、1985年)
- 3) 山口大学吉田調査団「山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報」(山口大学、1976年)
- 4) 山口市教育委員会『西進路』(1986年)
- 5) 田辺昭三『須恵器大成』(1982年)
- 6) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新宮に伴う発掘調査」(「山口大学構内遺跡調査研究年報」Ⅲ、1985年)
- 7) 平井 勝『弥生時代の石器』(『考古学ライブラリー』64 ニューサイエンス社、1991年)
- 8) 周陽考古学研究所『山口県の土師器・須恵器』(1981年)

出土遺物観察表

Tab. 4 出土遺物観察表

番号	器種	法量(㎤) (①口径②底径③高さ)	色調 (④外面⑤内面)	胎土	注記	備考
第1号堅穴住居跡 (Fig.70)						
1	土器	高坪 ②(13.0)	淡赤褐色	黒墨微の微砂粒を含む	P.D.1 ⑥ 焼土中 S46.10.23	風化が激しい
第2号堅穴住居跡 (Fig.72)						
2	土器	二重口縁壺 ②(2.8)	①淡赤褐色 ②赤褐色	2mm前後の石英角礫を含む	P.D.2 包含層中 S46.10.21	
3	土器	壺 ②(2.6)	乳白色	2~3mmの角礫を含む	P.D.2 包含層中 S46.10.21	風化が激しい
4	土器	高坪	淡褐色	1mm前後の砂粒を含む	P.D.2 包含層中 S46.10.21	風化が激しい
5	土器	高坪	黄白色	赤色斑点を含む	P.D.2 深部 S46.10.23	風化が激しい
6	土器	高坪	黃色	2~4mmの石英角礫を含む	P.D.2 包含層中 S46.10.21	風化が激しい
第3号堅穴住居跡 (Fig.73)						
9	土器	壺 ②(5.0)	淡赤褐色	赤色斑点を含む	P.D.3 包含層上部 5cmまで S46.10.28	風化が激しい
10	土器	壺 ②(5.0)	①淡赤褐色 ②赤褐色	精製粘土	P.D.3	風化が激しい
11	土器	壺 ②(5.0)	淡黃白色	微砂粒を含む	P.D.3 上層 S46.10.28	風化が激しい
12	土器	器合 ②(4.8)	淡黃白色	精製粘土に2~3mmの砂粒を含む	P.D.3 上層 S46.10.28	風化が激しい
13	土器	鉢 ②(4.6)	淡赤褐色	精製粘土に2~3mmの石英角礫を含む	P.D.3 土部① 71.11.5	底部焼成後の穿孔
第4号堅穴住居跡 (Fig.75)						
14	土器	高坪 ①(18.8)	①淡灰色 ②赤褐色	精製粘土に4mm前後の石英角礫を含む	P.D.4 71.11.5	風化が激しい
15	土器	高坪 ①(18.0)	淡褐色	精製粘土に1mm前後の砂粒を含む	P.D.4	14と同一個体の可能性あり
16	ミニチュア土器		淡黃白色	黒墨母を含む	P.D.4 包含層中-15cm	風化が激しい
第5号堅穴住居跡 (Fig.77)						
18	瓦質土器	鍋 ①(21.0)	①淡灰色 ②灰褐色	精製粘土	P.D.5 71.10.22	外面に苔が付着する
19	瓦質土器	盃鉢 ②(12.2)	①淡灰色 ②淡灰褐色	微砂粒を含む	P.D.5 S46.10.22	風化が激しい
20	青磁	碗 ②(9.4)	青灰色 青褐色 緑黄色	精製粘土		
第6号堅穴住居跡 (Fig.79)						
21	土器	二重口縁壺 ①(23.0)	灰色	2mm前後の石英角礫を含む	P.D.6	風化が激しい
22	土器	壺 ②(18.0)	淡褐色	精製粘土に微砂粒を含む	P.D.6	風化が激しい
23	土器	壺 ①(18.0)	淡褐色	2mm前後の大粒の砂粒を含む	P.D.6 包含層上部 S46.10.27	外面輕いハケ後ナダ
24	土器	高坪	淡赤褐色	精製粘土に微砂粒を含む	P.D.6 71.10.28	風化が激しい
25	銀器	皿 ①(9.4)	暗青灰色	微砂粒を含む	P.D.6 中上部	断面セピア色
遺物通鑑 (Fig.82 - 83 - 84 - 85)						
26	土器	坪 ②(5.8)	乳白色	赤色斑点を含む	S46.11.3	風化が激しい
27	土器	坪 ②(6.1)	赤褐色	1mm前後の砂粒を多量に含む	S46.11.3	風化が激しい
28	土器	坪 ②(6.3)	黒灰色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S46.11.3	風化が激しい
29	土器	坪 ②(7.0)	①淡褐色 ②灰褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	東濃状遺構71.10.21東濃次遺構2-3トレンチ	風化が激しい
30	土器	坪 ②(6.2)	①乳白色 ②灰褐色	1~3mmの砂粒を多量に含む	東濃状遺構 断7トレンチ S46.10.20	風化が激しい
31	土器	皿 ①(7.8)	乳白色	微砂粒及び、2~3mmの砂粒を含む	東濃状遺構71.10.21トレンチ S46.10.20	ヘラ切り歯
32	土器	皿 ①(7.8)	乳白色	1mm前後の砂粒を多量に含む	東濃状遺構71.10.21トレンチ S46.10.20	風化が激しい
33	土器	皿 ①(7.1)	①淡赤褐色 ②灰褐色	微砂粒及び、赤色斑点を含む	東濃状遺構71.10.21トレンチ S46.10.20	内面に模様の付着
34	土器	皿 ①(6.7)	①淡赤褐色 ②灰褐色	微砂粒及び、2~3mmの砂粒を含む	東濃状遺構 2~3トレンチ S46.10.20	風化が激しい
35	土器	皿 ①(5.0)	乳白色	微砂粒を多量に含む	東濃状遺構第13~第14トレンチ S46.11.1	風化が激しい
36	土器	皿 ①(6.8)	淡赤褐色	精製粘土	遺物収集地トレンチの東濃状遺構第13~第14トレンチ	風化が激しい

吉田遺跡第Ⅰ地区E区の調査

注量()は復元量

番号	器種	法量(=) (①口縁②底面)最高)	名 国 (①外観②内面)	胎 土	注 記	備 考
37	土師器	塊 ②(6.2)	赤褐色	微砂粒を多く含む	東濃状遺構	風化が激しい
38	土師器	塊 ②(7.4)	①淡褐色 ②灰褐色	精製粘土に2~3mmの石英角砾を含む		風化が激しい 或人遺物か
39	土師器	塊 ①(26.0)	①淡褐色	3~4mmの石英角砾を含む	東濃状遺構	風化するが外面に 部層を残す
40	土師器	塊 ①(27.0)	①淡赤褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を多く 含む	東濃状遺構 包含層 S46.10.21	風化が激しい
41	土師器	塊 ①(26.0)	①灰褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		風化が激しい
42	土師器	塊 ①(21.4)	①淡褐色	1mm前後の砂粒を多 く含む	東濃状遺構 13トレ ンジ 包含層中	風化が激しい
43	土師器	塊 ①(18.8)	①褐色 ②黑色	微砂粒及び、3~4mm の石英角砾を含む	東濃状遺構 第2第3 トレンジ S46.11.1	
44	須恵器	环 ①(10.8)	灰青色	微砂粒を含む	塊 S46.11.5	高台は内端面で接地 する
45	須恵器	环 ②(8.8)	淡青灰色	微砂粒を含む	塊 71.11.3	高台は内端面で接地 する
46	須恵器	环 ②(9.8)	青灰色	1~2mmの砂粒を含む	塊 71.11.3	高台は内端面で接地 する
47	須恵器	环 ③(9.8)	青灰色	精製粘土	東濃状遺構 16トレ ンジ S46.10.21	高台は内端面で接地 する
48	須恵器	环 ③(8.4)	青灰色	微砂粒を含む	東濃状遺構 12トレ ンジ 包含層中S46.10.21	
49	須恵器	环 ③(9.5)	灰青色	微砂粒を含む	淡灰褐色 第3トレン ジの間 S46.11.1	
50	須恵器	环 ③(11.0)	①灰褐色 ②淡青灰色	精製粘土	東濃状遺構 第15トレ ンジ 包含層 S46.10.21	ヘラ切り底
51	須恵器	环 ③(6.4)	淡青灰色	精製粘土	東濃状遺構 第2第3 トレンジ S46.11.1	高台は内端面で接地 する
52	須恵器	环 ③(7.4)	青灰色	微砂粒を含む	東濃状遺構 第12トレ ンジ 中 S46.10.21	高台は内端面で接地 する
53	須恵器	环 ③(6.6)	青灰色	1~2mmの砂粒を含む	東濃状遺構 第6トレ ンジ S46.10.20	高台は外端面で接地 する
54	須恵器	环 ③(7.1)	青灰色	微砂粒を含む	東濃状遺構 第8トレ ンジ 中 S46.10.20	高台は外端面で接地 する
55	須恵器	环 ③(6.0)	青灰色	1mm前後の砂粒を含 む	東濃状遺構 第2第3 トレンジ	高台は外端面で接地 する
56	須恵器	环 ③(6.6)	灰青色	微砂粒を含む		高台は内端面で接地 する
57	須恵器	环 ③(6.4)	暗灰青色	1~2mmの砂粒を多量 に含む	塊 71.11.3	高台は外端面で接地 する
58	須恵器	环 ③(6.0)	淡青灰色	微砂粒を含む	東濃状遺構 第7トレ ンジ	焼成不良
59	須恵器	环 ①(11.9)②(7.4)③(4.7)	青灰色	1mm前後の砂粒を含 む	東濃状遺構 71.10.20	ヘラ切り底
60	須恵器	环 ①(12.5)②(6.1)③(3.3)	暗灰青色	1~2mmの砂粒を含む	東濃状遺構 第2第3 トレンジ S46.11.1	ヘラ切り底
61	須恵器	环 ③(7.7)	青灰色	1mm前後の砂粒を含 む	東濃状遺構 第7トレ ンジ	ヘラ切り底
62	須恵器	环 ③(8.0)	淡灰青色	1~2mmの砂粒を含む	東濃状遺構 第2第3 トレンジ S46.11.1	壺の可能性あり
63	須恵器	环 ③(7.4)	淡青灰色	精製粘土	東濃状遺構 0トレン ジ	
64	須恵器	环 ③(8.0)	灰青色	微砂粒を多量に含む	塊 S46.11.1	ヘラ切り底
65	須恵器	环 ③(6.4)	淡青灰色	1mm前後の砂粒を多 く含む	淡灰褐色 第3トレン ジの間 S46.11.1	焼成不良
66	須恵器	环 ③(6.9)	淡灰青色	微砂粒を含む	東濃状遺構 第2第3 トレンジ S46.11.1	底面に板状灰痕
67	須恵器	壺 ①(13.0)	外側に緑色の自然物が 付着 素燒淡青色	精製粘土	東濃状遺構 第15~第1 4トレンジ S46.11.1	
68	須恵器	壺 ①(13.0)	青灰色	1mm前後の砂粒を含 む	S46.11.3	つまみをもつ
69	須恵器	壺 ②(14.6)	青灰色	1mm前後の砂粒を含 む	東濃状遺構 第2トレ ンジ S46.11.1	
70	須恵器	壺 ②(12.2)	①淡灰青色 ②灰青色	精製粘土	東濃状遺構 第12トレ ンジ 中 S46.10.21	内面に自然物付着
71	須恵器	壺 ②(12.2)	青灰色	2~3mm前後の砂粒を含 む		外側に自然物付着
72	須恵器	壺 ②(12.2)	青灰色	2~3mm前後の砂粒を含 む		
73	須恵器	壺 ①(21.3)	淡青灰色	精製粘土に微砂粒を含 む	塊 S46.11.3	古墳時代の個人遺物 か
74	須恵器	壺 ①(16.3)	①青灰色 ②灰青色	精製粘土に微砂粒を含 む	東濃状遺構 第7トレ ンジ S46.10.20	口縁部内面にヘラ記 号
75	須恵器	直口壺 ①(14.0)	①灰青色 ②灰青色	2~3mm前後の砂粒を含 む	東濃状遺構 第2第3 トレンジ S46.11.1	
76	須恵器	壺 ①(19.5)丸底	青灰色	2~3mm前後の砂粒を多 量に含む	東濃状遺構 第3トレ ンジ S46.11.1	

出土遺物観察表

法量()は復元値

番号	器種	法量(α) (①口徑②底径③高さ)	色調 (①外面②内面)	胎土	注記	備考
遺構に伴わない遺物 (Fig.86)						
80	陶生土器	高	褐色	2~3mmの砂粒を含む	P.D.2 S46.10.25	側面状況のつづく貝殻による押付繊維支
81	陶生土器	高	①褐色 ②灰褐色	2~3mmの砂粒を含む	包含層中 1971.11.4	側面状況のつかない貝殻による押付状況
82	垂下口縁壺		褐色	2~4mmの砂粒を含む	71.11.3	風化が激しい
83	複合口縁壺		①淡青灰色 ②灰褐色	3~4mmの砂粒を含む	未	口縁に複数工芸の押付による山形文
84	高环口縁?		①暗青灰色 ②褐色	2~3mmの砂粒を含む	P.D.4 71.10.28	内面ミガキ
85	複合口縁壺		①淡青灰色 ②灰褐色	2~3mmの砂粒を含む	P.D.2包含層中 S46.10.17	風化が激しい
86	土器器	高環	①淡青褐色 ②淡青灰色	粗粒粘土		
87	陶生土器	高環	淡灰褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	重複状遺構 第2等3トレンチ S46.11.1	風化が激しい
88	陶生土器	壺底部	①褐色 ②灰褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む	S46.11.3	底部無頭に押付沈殿2本
89	陶生土器	壺底部	明褐色	2~4mmの砂粒を多量に含む	P.D.2(上層) S46.10.22	風化が激しい
90	陶生土器	壺底部	淡黄褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	P.D.6中層 S46.10.26	
91	陶生土器	壺底部	淡褐色	1mm程度の砂粒を多量に含む		底面に黒斑
92	陶生土器	壺底部	①淡赤褐色 ②褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む	P.D.2底部 S46.10.22	
93	陶生土器	壺底部	①赤褐色 ②淡褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む	P.D.6	風化が激しい
94	陶生土器	壺底部	①淡青灰色 ②淡灰黑色	2~3mmの砂粒を多量に含む	P.D.6下層 71.10.27	風化が激しい
95	陶生土器	壺底部	赤褐色	微砂粒を含む		
96	陶生土器	壺底部	①褐色 ②淡赤褐色	赤色砂粒を含む	P.D.4 71.10.28	風化が激しい
97	陶生土器	壺底部	①赤褐色 ②淡褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む	P.D.6中上部	風化が激しい
98	土器器	壺底部	①赤褐色 ②褐色	粗粒粘土に2~3mmの砂粒を含む	重複状遺構第15トレンチ 包含層中S46.10.21	
99	ミニチュア	高環	①褐色 ②淡灰褐色	1~2mmの砂粒を含む		蓋の可能性あり

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考
遺構遺物 (Fig.84)							
77	土錐	(4.5)	1.4	1.4	0.25	(9.44)	精良な胎土
78	土錐	4.2	1.9	1.9	0.35	13.37	精良な胎土

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
第2号住居跡 (Fig.73)						
8	鍔具刃先				37.05	
第4号住居跡 (Fig.75)						
17	鉄鎌	(10.0)	2.0	2.5	32.29	

吉田遺跡第Ⅰ地区E区の調査

法量()は復元値

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
第2号竪穴住居跡 (Fig.72)							
7	すり石	10.6	8.5	5.2	660.6	サヌカイト	両端部に敲打面をもつ
唐状遺構 (Fig.85)							
79	砥石	(5.9)	(5.1)	5.3	246.52	凝灰岩	-
遺構に伴わない遺物 (Fig.87-88)							
100	石錐	2.3	(2.1)	0.5	1.53	黒島産黒曜石	-
101	石錐	2.3	1.85	0.5	1.25	黒島産黒曜石	-
102	石錐	(1.5)	(1.35)	0.45	0.55	サヌカイト	-
103	石錐	(1.2)	(1.05)	(0.2)	0.21	サヌカイト	-
104	石錐	2.7	(1.8)	0.5	1.74	サヌカイト	-
105	石錐	(1.0)	1.7	0.3	0.48	サヌカイト	-
106	石錐	(1.6)	1.35	0.3	0.57	サヌカイト	-
107	石錐	(2.5)	1.35	0.35	1.32	結晶片岩	-
108	石錐	(2.7)	(1.45)	0.4	1.82	サヌカイト	-
109	石錐	(3.4)	1.3	0.6	2.04	サヌカイト	-
110	石錐	4.6	2.75	0.75	9.08	サヌカイト	-
111	石錐	(1.8)	(1.5)	0.2	0.54	サヌカイト	-
112	石錐	(1.8)	(1.35)	0.35	1.02	サヌカイト	-
113	石錐	(1.7)	(1.25)	0.3	0.90	サヌカイト	-
114	扁平片刃石斧	3.6	2.25	0.95	14.52	凝岩	-
115	太形船刃石斧	(4.85)	(4.35)	(3.25)	120.76	ひん岩	-
116	砥石	6.7	5.5	2.95	144.06	結晶片岩	-
117	燒成を受けた石	(10.2)	(7.5)	(3.15)	289.11	デイサイト	表面をもろ焼成を受けた
118	磨刻をもつ石	8.35	4.2	1.6	86.76	安山岩	片面に線刻をもつ

第2章 吉田遺跡第I地区E区の追加調査

1 調査の概要

吉田遺跡第I地区E区の大部分は、第2学生食堂を含まず食堂前面の道路部分であった。E区の調査は、食堂の建設に伴う事前調査であったはずであるが、いかなる経緯によるものか食堂敷地内をずれている。食堂敷地内はE区の調査期間である昭和46年10月16日～11月21日の間には、調査が行われていなかったようである。E区図面中には、昭和46年12月15日の日付と「食堂敷地」の地区名が記入された調査区平面図がある。この調査区平面図の西端には、E区で検出された溝状遺構の南端部が記入されている。このことより、「食堂敷地」の注記をもつ調査区が、E区の東側に隣接していたことが推定された。まさしく第2学生食堂敷地内の調査であり、E区の調査終了後に行われた追加調査であつたらしい。

吉田遺跡調査団が発行したガリ版刷りの『山口市山口大学構内吉田遺跡調査概報』に解説された第I地区E区の調査概要には、追加調査についての記述がある。「なお追加調査で、東部から隔丸長方形の堅穴住居と土壙各1基を確認した。」との一文である。第I地区E区調査後に発行されたと思われる『山口大学構内第I地区E区発掘調査概報』には、追加調査に関する記述は見あたらない。

この追加調査に関して、埋蔵文化財資料館に残された記録は、調査区平面図(1/100)1葉、住居跡平面図(1/10)1葉、住居跡断面図(1/40)1葉のわざか4葉の図面だけである。図面の中には日付の入ったものがある。調査区平面図には昭和46年12月15日、住居跡平面図には昭和46年12月16日と記述されている。また、出土遺物に関して、その所在は不明である。

E区追加調査の出土遺構に関しては、埋蔵文化財資料館に残された4葉の図面、縮図が1葉含まれているから実質3葉の図面から想定していくしかない。



Fig. 89 調査区位置図

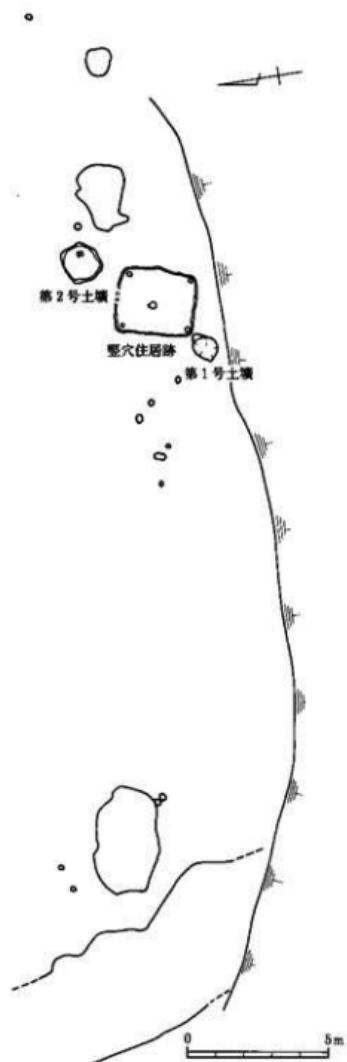


Fig. 90 造構配置図

2 層位

E区追加調査に関して、土層断面図は残されていない。しかし、隣接するE区の土層堆積は試掘調査時の日誌に記録されている。おそらく同じ丘陵上で調査区が隣接する以上、土層堆積はほぼ同じものと考えられる。

第I層：褐色土（表土層）、第II層：暗青灰色土（水田耕土層）、第III層：淡暗褐色土（包含層）、第IV層：黄褐色土（地山）

3 造構

竪穴住居跡 (Fig. 91)

平面形態は方形で、北辺約2.2m、南辺約2.0m、東辺約2.5m、西辺約2.5m、床面積約5.3m²の規模をもつ。遺構検出面より、床面は深さ約10cmを測る。壁溝をもたない。本調査区は遺構の分布密度が低く、他遺構と切り合わないため、良好な状況で本住居跡に伴う柱穴が検出されている。方形の住居跡の4隅に対応するように、4個の柱穴が配列されている。直径15~20cmであり、床面からの深さは約30cmを測る。これらは、桁材を支えた主柱穴と考えられる。また、この住居跡は中心にも、柱穴がある。直径約25cm、深さ約40cmと他の柱穴に比べて一回り大きい。東壁の中央に接して、焼土が充填した直径約25cm、深さ約3cmの土壤がある。焼土はこの土壤を中心として、周間に広がっていたようである。この土壤に接した、東壁部分は外側にやや張り出しており、窓であった可能性もある。また、北壁中央で壁の不明瞭な一部分があり、調査者は入口を想定している。

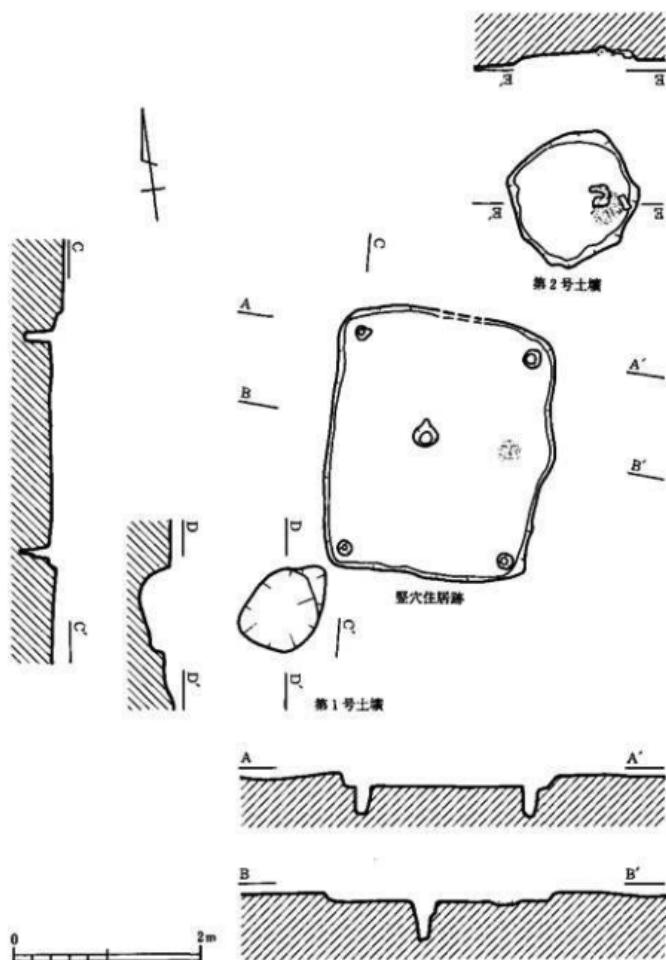


Fig. 91 堅穴住居跡及び第1・2号土壙実測図 (標高は不明)

土壙 (Fig. 91)

本調査区からは、5基の土壙が検出されたようである。しかし、詳細な平面図が残されている土壙は、住居跡に接した2基のみである。この2基に関して報告を行うが、これら

も遺構断面図は残されているものの、土層堆積の図面は残されていない。

1号土壙

1号土壙は、住居跡の南西隅に接する。本土壙は、長軸約0.9m、短軸約0.83mの平面形態が不整円形である。深さは遺構検出面から、約30cmを測る。平面図及び断面図からは、これ以上のデーターは読み取れない。

2号土壙

2号土壙は、住居跡の北東隅から北に約80cmの距離に位置する。本土壙は、長軸約1.4m、短軸約1.3mの平面形態が不整円形を呈する。深さは遺構検出面から、約15cmを測る。この浅い土壙内の東に偏って、焼土層の広がりが認められる。焼土層と土壙東肩の間に、石が置かれている。支脚の役目をはたしたのであろうか。また、この焼土層下には、コの字状の浅い掘り込みがあったようである。

柱穴 (Fig.90)

住居跡の西側に、柱穴が散在していたようであるが、詳細は不明である。

4. 小結

E区の追加調査（食堂敷地内）では、1棟の竪穴住居跡と5基の土壙及び柱穴が検出された。遺構の密度はE区に比較して希薄であり、遺跡の中心からは外れた箇所と考えられる。

竪穴住居跡は方形のプランを呈するが、床面積は約5.3m²ときわめて小形である。しかし、4隅には主柱穴を配し、東壁には竈を有しており、住居の構造としては正規なものである。棟方向と竈の位置からすれば、E区の1号、2号竪穴住居跡と関連するものである可能性がある。しかし、出土土器がないため、時期決定はおこなえないので推定の域に留まる。

この竪穴住居跡に接近した位置にあり、附属施設の可能性も考えられるのが2号土壙である。2号土壙は浅い皿状を呈し、東に偏った焼土層の広がりが認められる。この焼土層の東端には石が設置されており、竈の構造に類似する。図面の注記には、この焼土層中からの須恵器の出土が記されている。現在この須恵器は、所在不明である。この2号土壙と竪穴住居跡は1m以内の近接した位置にあり、2号土壙が火を使用したことを考えるならば両者の同時並存は困難であるかもしれない。ただ、両者とも竈状の構造物が同じ東側にあることを考えるならば、全く関連がないとは断言できない。関連があるとするならば、竪穴住居跡に付随したその性格が問題となる。竪穴住居跡の床面積が小さいことに関わるのであろうか、屋外調理施設の可能性を想定したい。

造標・小結

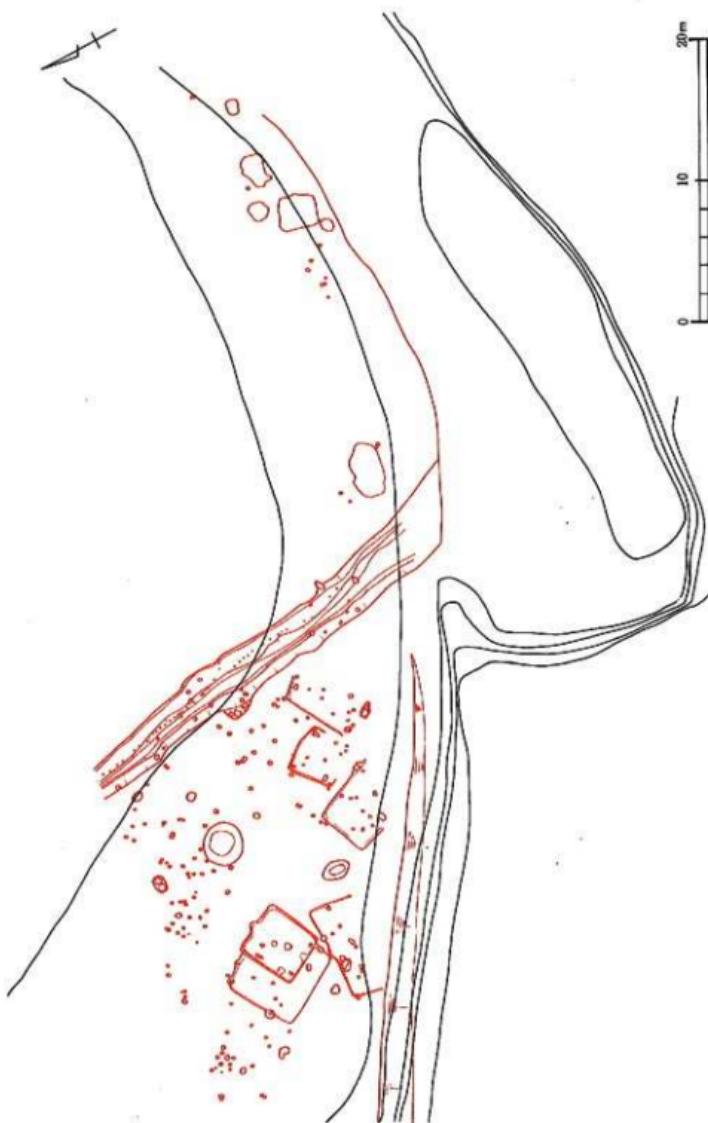


Fig. 92 第1地区E区の地形及び全体図

5 第Ⅰ地区E区の総括

吉田遺跡第Ⅰ地区E区は、大学会館前庭部遺構群の一部として包括される。姫山の北から南にのびる支脈の南先端、緩傾斜面にこれらの遺構群は立地している。E区及び追加調査地からは方形堅穴住居跡が6棟検出されているが、昭和58年度大学会館新営予定地M-14・15区の試掘調査でも1棟の方形堅穴住居跡が検出されており、この斜面上が古墳時代中期の安定した居住区であったことは疑いない。ただし、7棟が同時期に建ち並んでいたわけではなく、3・4棟で構成される自然発生的な小部落であったと考えられる。

山口大学構内の吉田遺跡は、現在のところ大きく3つの居住区があったであろうと想定されている。このうち、構内東部の微丘陵（第Ⅳ地区）の実態は明かではなく、実質的には保存地区（第Ⅲ地区）と大学会館前庭部（第Ⅰ地区）の2カ所に大きく区分される。注目すべきは、保存地区集落と大学会館前庭部集落の時間的関係である。保存地区集落が円形堅穴住居跡を主体として一部の方形堅穴住居からなるのに対して、大学会館前庭部集落は全てが方形堅穴住居跡で構成されている。さらに、保存地区集落における方形堅穴住居跡はベッド状遺構を有しないが、大学会館前庭部集落の方形堅穴住居跡はベッド状遺構をもたず竪を有するという違いがある。この堅穴住居跡の構造から判明することは、保存地区集落が弥生時代中期から古墳時代前期まで継続的に営まれているのに対して、大学会館前庭部集落の確実な居住は古墳時代中期からということである。（ただし、大学会館前庭部からは、わずかではあるが弥生時代の遺構や住居跡が検出されており概には古墳時代中期以前の居住を否定できない。）保存地区集落は古墳時代前期以降には廃絶されたものと考えられ、古墳時代中期に明確となる大学会館前庭部集落への移住も想定しうる。

9世紀～10世紀の須恵器・土師器を含む堅牢な溝状遺構は、古代における吉田遺跡の性格を考えていく上で重要である。大学会館から出土した特殊な遺物は、官衙的な性格を帯びるものであった。しかし、遺構には保存状態の良いものが多く、不明な点が多かった。E区において、橋脚状の遺構をもった区画的な溝が検出されていたことが明かとなり、より具体的に官衙など役所的な遺跡としての可能性を議論しうるようになった。

[注]

- 1) 吉田遺跡調査団『山口市山口大学構内吉田遺跡調査概報』
- 2) 吉田遺跡調査団『山口大学構内第Ⅰ地区E区発掘調査概報』
- 3) 山口大学埋蔵文化財資料館「大学会館新営予定地M-14・15区の試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究報』Ⅱ、1985年）
- 4) 河村古行「考察」（『山口大学構内遺跡調査研究年報』、1982年）

山口県内出土の紡錘車からみた弥生社会 —角閃石安山岩製紡錘車の分布から—

豆 谷 和 之

はじめに

本論が題材とする遺物は、山口県内の弥生遺跡から出土する紡錘車である。紡錘車とは概説書が述べるように、糸をつむぐ際のはずみ車に用いられた円板のことである。遺跡から発見される様々な材質による穴の開いた小型の円板は、たいてい紡錘車と呼ばれている。つむぎ棒とセットで遺跡から出土することは稀であるから、本当にそれとして用いられていたかは確実ではない。穴のあいていない未製品と呼ばれるものを含めると、さらに怪しい。しかし、判定基準といったものはないわけであるから、とりあえずは5mmを前後とする円板を未製品も含めて集成する。この集成は当時製作・使用されていた紡錘車全てに及ぶものではない。当然ながら腐朽した鉄・有機質を材質に用いた紡錘車は欠落し、土製品・石製品のみに限定される。また、手元の資料のみによったため、網羅できなかったものがあることを予め断わっておきたい。

集成の次の一般的な手順として、本来ならば形態分類を行うわけであるが、紡錘車は機能が装飾に優先するためか形態変化は乏しい。時代を弥生に限定するならば、形態のほとんどは円板形で型式学的操作は意味をなさない。山口県内の紡錘車もまた例外ではなく、その形態に特徴があるといったものではない。しかし、その材質に目を向けるならば、山口県内の紡錘車には特徴のある石材を用いたものがある。角閃石安山岩を材質とする一群である。使用されている角閃石安山岩には、長柱状の角閃石の斑晶を多く含むという特徴があり、報告書の写真だけで他の石材と区別することが容易である。この角閃石安山岩製紡錘車と、その他の石材・土製品に分類する。

角閃石安山岩製紡錘車は特徴的な為、他の材質の紡錘車に比べて時間的・空間的な分布を把握することが容易である。山口県内でも東部の周防と呼ばれる地域のみに、時間的にも中期後半から後期後半に限られて分布していることが判明している。比較的座標の固定された角閃石安山岩製紡錘車を軸に、他の材質による紡錘車との時間的・空間的な関わりを検討する。この時、何の変哲もない紡錘車は、周防中期弥生社会における流通機構を、そして、古墳時代への変動を雄弁に語り始めるのである。

1 山口県内の弥生紡錘車

本章では、山口県内の弥生紡錘車の集成を行う。最初に断わったように、穴のあいていない未製品と呼ばれるものも含めた、5cmを前後とする円板の集成である。載頭円錐形のものは、古墳時代後期に属する可能性が高いので除外される。分類は材質から、石製品と土製品に2大別する。さらに、石製品は角閃石安山岩と、その他の石材に区分する。また、円板形の土製紡錘車には、土器片を転用しているものがあり、佐原氏の分類にしたがい当初より紡錘車として製作されたA種と、土器片転用のB種に区分する。石製品におけるA種とB種は、今のところ山口県内でのB種が見あたらないため、特別には区分を行わない。時期決定に関しては型式学的操作が意味をなさない以上、紡錘車そのものから行うのは不可能なので、同一遺構内の伴出土器をもって一応の帰属時期とする。

次に、集成された紡錘車は水系単位での把握を行う。この方法は、山口県の地形の特性に基づいたものである。山口県の地形は、山塊が海岸部に迫り広大な平野は認められない。また、弥生時代において海岸線はより入り込んでいたとされ、当時の平野面積は現在よりもさらに縮小されたものである。山と海に分断されて点在する小平野や盆地は閉鎖された空間となり、この空間内において周辺の丘陵あるいは台地上には、中小規模集落が立地している。中央の低地部では、周囲の丘陵あるいは台地上から流れ出た小河川が合流し主要河川となるが、その主要河川沿いには拠点的な大規模集落が立地している。この立地状態から、主要河川に沿った大規模集落を核とする閉鎖された空間での地域統合が考えられる。山口県弥生遺跡・遺物の動態を捉えていく上で、主要河川単位での把握は有効な手段と考える。

(1) 角閃石安山岩製紡錘車

角閃石安山岩製紡錘車の分布範囲は河村吉行氏が、「県中央部から東部にかけての中後半の遺跡で紡錘車の石材は付近に石材分布域をもたない、角閃質安山岩をほとんど例外なく選択的に使用している」と指摘するように、山口県東部いわゆる周防と呼ばれる狭い範囲に限られる。現在のところ、その東限は田布施川流域の明地遺跡（河川でとらえるよりは、古柳井水道の関連を考えるべきか）であり、西限は権野川流域の吉田遺跡である。

各遺跡における伴出土器が示す年代は、中期後半から後期後半である。唯一、突抜遺跡の11号土壙の伴出土器が前期末であるが、報告書に掲載された土器には中期後半の臺も含まれており注意が必要である。上限を示す確実な資料は、大崎遺跡1号溝の垂下口縁壺出現期の土器に伴出したものであろう。下限は宮原遺跡7号住居跡の後期終末の丸底化しつつある臺などに伴出したものが考えられる。

山口県内出土の紡錘車

Tab. 5 県内出土角閃石安山岩製紡錘車一覧表

遺跡名	所在地	番号	直径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	出土遺物	時期	文献
田布施川流域									
明治遺跡	毛呂郡田布施町大字大庭野	1	5.0	0.9	0.6		25号住居跡	後期後半	1
鳥川流域									
清水遺跡	秋河郡秋河町宇清水	2	4.6	0.7	0.7		2号窓跡	後期後半	2
		3	3.4	0.6	0.6		3号段状遺構	後期前半	2
天王遺跡	毛呂郡毛呂町大字安田字天王	4	5.2	0.6	0.6				3
		5	5.5	0.9	未製品				3
		6	(5.4)	0.65			理塗	中期後半	4
岡山遺跡	毛呂郡毛呂町大字安田字岡山	7	4.3	0.65	0.8	13.1	表塗		4
		8	(5.4)	0.7	(0.6)		2号住居跡	後期前半	4
		9	4.7	0.7	0.6		15号住居跡	後期後半	5
道迫遺跡	毛呂郡毛呂町大字安田	10	4.5	0.5	0.6		26号住居跡	後期後半	5
		11	(4.8)	0.6	(0.8)		29号住居跡	後期前半	5
		12	5.0	0.5	未製品		30号住居跡		5
末武川流域									
宮原遺跡	下松市大字末武上字宮原	13	4.7	0.8	0.4~0.5		7号住居跡	後期後半	6
		14	4.6	0.6	0.4~0.7		7号住居跡	後期後半	6
円光寺遺跡	徳山市大字久米字円光寺	15	4.7	0.6	0.6		4号住居跡	後期前半	7
		16	4.6	0.8	0.4		4号土塁	後期前半	7
		17	(5.0)	0.5	(0.7)		1号住居跡	後期後半	7
佐波川流域									
右田・一丁目遺跡	防府市大字下右田	18	4.7	0.7	0.7~0.8	24	8号住居跡	後期後半	8
		19	4.1	0.6	0.5~0.7	20	14号住居跡	後期後半	8
		20	4.7	0.7	0.5~0.7	22	21号住居跡	後期後半	8
		21							8
下右田遺跡	防府市大字右田	22	4.6	0.8	0.8				9
		23	(5.5)	0.7	(0.6)				9
		24	4.9	0.5	1.0	17.4	5号住居跡	中期	10
大崎遺跡	防府市大字東大崎	25	4.1	0.6	0.6	12.3	1号溝	中期中頃	10
		26	(4.6)	0.6			1号溝	中期中頃	10
		27	5.0	0.8	0.7	24	包舍塗		11
		28	(5.0)	0.6	0.7	20	9号住居跡	後期前半	11
井上山遺跡	防府市寿町	29	4.6	0.7	0.7	20	5号住居跡	後期後半	11
		30	5.5	0.5~0.6	0.6~0.8		表塗		11
		31	(5.6)	0.6	0.6~0.8		表塗		11
		32	6.0	0.5	未製品	21	表塗		11
楊野川流域									
赤堀遺跡	山口市錦町	33	6.0	1.2	未製品		60号土壤		12
神郷大聖遺跡	山口市大字吉田	34	5.5~5.8	1.0	未製品	60.6			13
		35	(4.3)	0.8	(1.0)		2号住居跡	後期前半	14
		36	(4.9)	0.7					15
吉田遺跡	山口市大字吉田	37	4.85	0.8	未製品	23			15
		38	6.0	1.1	未製品	41.8	河川跡	奈良時代	16
		39	6.0	0.95	未製品	49.3			17
		40	5.3	0.65	0.6	31.4			
		41	4.9	0.75	0.6	31.0			
大内氏墓山遺跡	山口市大字上野小路	42	(4.4)	0.6	(0.6)		1号住居跡	後期後半	18
弘徳遺跡	山口市大字内有裏字下弘徳	43	(5.0)	0.75	(0.75)		49号土壤	中期後半	19
阿武川流域									
宍族遺跡	阿武郡阿東町大字宍族上	44	5.0	0.7	0.6	22.7	11号土壤	前期末	20
		45	4.6	1.0	0.6	27	20号住居跡	中期	20
板手沖尻遺跡	阿武郡阿東町大字板手上	46	5.0	0.8	0.7		3号溝	古墳後期	21
		47	3.3	0.7	0.4	10	2号住居跡	後期前半	22
		48	3.7	0.8	0.5	10.2	1号住居跡	後期前半	22
羽波遺跡	阿武郡阿東町大字羽波下	49	(4.0)	0.8	(0.6)		8号住居跡	後期前半	22
		50	4.0	0.9	0.5	16.8	5号住居跡	後期前半	22
		51	(4.6)	0.4	(0.6)		8号住居跡	後期前半	22
		52	4.6	0.7	0.6	17.8	7号住居跡	後期前半	22
		53	(4.6)	0.8	(0.6)		2号住居跡	後期前半	22

山口県内出土の紡錘車からみた弥生社会

Tab. 6 県内出土石製紡錘車一覧表

遺跡名	所在地	番号	直徑(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	材質	出土遺物	時期	文献
佐波川流域										
右田遺跡	防府市大字下右田	54	6.1	0.9	0.7		?	滑石		8
		55	4.5	0.6~0.8	1.1		?	滑石		9
井上山遺跡	防府市寿町	56	5.0	0.4	0.6	20	黑色頁岩	灰陶		11
柳野川流域										
朝田墳墓群	山口市大字朝田	57	4.6	0.8	0.5		滑石	1号建物		23
小野遺跡	山口市大字黒川	58	(5.0)	0.6			砂岩	大型住居跡	前期前半	24
		59	4.7	0.7	0.7		?	河川壁	古代	25
吉田遺跡	山口市大字吉田	60	4.05	7.5	0.65	23.1	滑石		17	
		61	5.4	0.8	0.75	36.2	滑石	1号土壙	後期後半	17
摩東川流域										
北込遺跡	宇部市大字川上字坂塚	62	3.8	1.2	0.8		滑石	1号住居跡	後期前半	26
神田遺跡	美祢郡美東町大字長瀬字神田	63	4.2	0.7	0.6	19.3	滑石	4号住居跡	後期	27
		64	4.3	1.0	0.6	36.2	閃緑岩	4号住居跡	後期	27
中村遺跡	美祢郡秋芳町大字劉村中村	65	5.4	0.6	0.8		粘板岩	住居跡		28
		66	(5.0)	0.6	(0.7)		安山岩	12号住居跡	中期前半	28
		67	3.7	0.5	0.6		粘板岩	4号住居跡	中期前半	28
那杵川流域										
砂地岡遺跡	美祢市於福町下字砂地	68	(4.6)	1.2	(0.6)		滑石			29
		69	5.2	0.5	0.6		砂岩	15号住居跡	後期	29
原遺跡	那杵郡山陽町大字原	70	4.6	0.8	0.7		頁岩	3号住居跡	中期	30
掛瀬川流域										
荒人遺跡	大津郡池田町大字久富字荒人	71	(3.9)	0.6	0.4		砂岩	2号住居跡	後期後半	31
木屋川流域										
下七見遺跡	島根郡宍道町大字七見	72		1.0			砂岩	25号土壙	前期末	32
		73	4.0	0.6	0.6		砂岩	3号住居跡		32
		74	6.0	1.1	未製品		砂岩	29号土壙	前期末	32
		75		0.7			泥岩	29号土壙		32
		76	2.9	0.8	0.3	8.5	泥岩	1号壙		33
		77	3.7	1.3	未製品	22.0	泥岩	105号土壙		33
		78	4.3	0.6	未製品	31.5	泥岩	2号住居跡	中期末	33
		79	4.9	0.5	0.45	19.5	泥岩	13号土壙	前期末	33
		80	3.5	0.8	未製品	12.1	泥岩	38号土壙	前期後半	33
		81	4.3	0.5	0.45	14.7	泥岩	9号住居跡	中期末	33
		82	6.0	1.6	未製品	68.0	泥岩	46号土壙		33
綾羅木川流域										
綾羅木遺跡	下関市大字綾羅木	83	(6.8)	0.6	0.6		粘板岩			34
		84	5.4	0.55	0.5	31.4	黑色頁岩			34
		85	4.5	0.7	0.4		粘板岩			35
石原遺跡	下関市大字石原	86					?			36

(2) 石製紡錘車

角閃石安山岩以外に山口県内で紡錘車に用いられる石材には、黒色頁岩・粘板岩・泥岩・滑石などがある。角閃石安山岩製紡錘車の分布範囲が山口県東部の周防であったのに対し、他石材を用いた紡錘車の分布範囲は、角閃石安山岩製紡錘車の分布範囲の西端を含みながらも山口県西部の長門にその中心がある。角閃石安山岩製紡錘車と他石材紡錘車は、その分布範囲を異なる。

時期的には前期から後期まで、全般的に用いられていたようである。このうち、滑石の利用は後期以降であり、中期には遇らない。特に滑石製紡錘車で注目すべきは、角閃石安

山口県内出土の紡錘車

Tab. 7 県内出土土製紡錘車一覧表

遺跡名	所在地	番号	直径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	加工	出土場所	時期	文献
詫尾遺跡	毛都平生町大字大脇字松尾	87	(6.2)	0.9	0.8		A	1号住居跡	後期後半	37
<u>島田川流域</u>										
岡山遺跡	熊毛郡熊毛町大字安田字岡山	88	4.3	1.2	0.4	?	A			3
		89	3.3	0.5	0.7	6.0	B	環塹	中期後半	4
		90	4.8	0.6	0.8	16.8	B	環塹	中期後半	4
		91	5.0	1.5	0.8	35.8	A	63号土壙		4
追追遺跡	熊毛郡熊毛町大字安田	92	3.2	2.3	0.4	?	A	39号住居跡	後期後半	5
今井遺跡		93	3.8	1.0	0.4	?	A	42号住居跡	中期	5
		94	4.8		0.6		A			38
<u>葛野川流域</u>										
赤堀遺跡	山口市錦町	95	9.1	1.2	未製品	?	B	73号土壙	前期末	12
		96	6.0	1.2	未製品	?	B	包含層	前期末	12
		97	4.0	1.2	未製品	?	B	60号土壙		12
小路遺跡	山口市大字黒川	98	3.4	0.7	0.3	9.3	B	堅穴住居跡	前期前半	24
		99	(4.3)	0.8			A	堅穴住居跡	前期前半	24
		100	4.1	0.5	未製品	9.9	B	堅穴住居跡	前期前半	24
吉田遺跡	山口市大字吉田	101	(5.7)	1.15		16.0	A			15
大内氏築山跡	山口市大字上要小路	102	2.9	0.4	0.45	?	B			16
岡田片川遺跡		103	4.3	2.2	0.6	34.5	A			39
島田遺跡	山口市大字下小郷	104	(4.0)	1.5			A	包含層		40
<u>阿武川流域</u>										
穴抜遺跡	阿武郡阿東町大字地堆上	105	5.5	0.6	未製品	?	B	1号窓	中期前半	20
		106	4.6	0.6	未製品	?	B	32号土壙	前期末	21
		107	4.3	1.0	未製品	?	B	32号土壙	前期末	21
惣の尾遺跡	阿武郡阿東町大字惣の尾上	108	4.2	0.5	未製品	?	B	32号土壙	前期末	21
		109	4.4	0.9	未製品	?	B	32号土壙	前期末	21
		110	6.5	0.8	未製品	?	B	32号土壙	前期末	21
		111				?	A	32号土壙	前期末	21
<u>木屋川流域</u>										
下七見遺跡	豊浦郡南川町大字七見	112	5.8	1.1	未製品	?	B	8号土壙	前期後半	32
		113	6.4	1.1	未製品	?	B	8号土壙	前期後半	32
		114	6.1	1.2	未製品	?	B	10号土壙	前期	32
		115	5.5	1.4	未製品	?	B	22号土壙	前期後半	32
		116	6.3	0.9	未製品	?	B	22号土壙	前期後半	32
		117	4.5	0.9	未製品	?	B	31号土壙	前期後半	32
		118	6.2	0.9	未製品	?	B	1号土壙	前期後半	32
		119	6.6	0.9	未製品	?	B	11号土壙	前期後半	32
		120	6.7	1.3	未製品	?	B	2号土壙	前期	32
		121	4.4	1.0	未製品	?	B	6号土壙	前期末	32
		122	4.7	1.1	未製品	?	B	33号土壙	前期	32
		123	4.2	1.2	未製品	?	B	20号土壙	前期	32
		124	3.6	0.9	未製品	?	B	4号土壙	前期	32
		125	4.6	0.9	未製品	?	B	1号土壙	前期	32
		126	4.5	0.9	未製品	?	B	1号土壙	前期	32
		127	2.6	0.9	未製品	?	B	29号土壙	前期後半	32
		128	3.6	0.9	未製品	?	B	29号土壙	前期後半	32
		129	3.7	0.6	未製品	?	B	179号土壙	前期後半	32
		130	5.1	1.0	未製品	?	B	99号土壙	前期末	32
		131	4.4	1.0	未製品	?	B	99号土壙	前期末	32
		132	4.1	1.3	未製品	?	B	14号土壙	前期後半	32
		133	3.8	1.2	0.4	?	A	98号土壙	前期後半	32
		134	4.5	1.3	0.5	?	A	202号土壙	中期前半	33
		135	3.1	0.9	未製品	?	B	14号土壙	前期後半	33
		136	5.8	0.9	未製品	?	B	34号土壙		33
山ノ口遺跡	豊浦郡南川町大字古賀	137	3.6	1.2	0.5	?	A	1号窓		41
<u>黑井川流域</u>										
大門遺跡	豊浦郡疊波町大字里井	138	4.2	0.8	0.6	?	B	42号土壙	前期後半	42
		139	5.6	1.0	未製品	?	B	42号土壙	前期後半	42
		140	4.8	1.0	0.5	?	A	43号土壙	前期後半	42
		141	5.4	1.0	未製品	?	B	46号土壙	前期後半	42
		142	4.8	1.2	未製品	?	B	46号土壙	前期後半	42
		143	4.6	0.9		?	A	46号土壙	前期後半	42
		144	7.2	1.2	未製品	?	B	46号土壙	前期後半	42

山口県内出土の紡錘車からみた弥生社会

沖田川流域								
下 吉 田 遺 跡	島崎郡長崎町大字吉津上	145	4.2	1.7	0.7	?	A	包含層
宝 廟 寺 遺 跡	島崎郡長崎町大字川瀬	146	4.1	1.1	未製品	?	B	
		147	4.4	0.9	未製品	?	B	土壌層
櫛野木川流域								
後 木 遺 跡		148	4.2	1.65	0.38	?	A	
		149	4.5	1.5	0.45	?	A	
		150	4.1	1.4	0.5	?	A	
		151	3.6	1.05	0.45	?	A	
		152	3.75	1.13	0.23	?	A	
		153	3.5	1.13	0.45	?	A	
		154	4.65	0.9	未製品	?	B	
		155	4.2	1.0	0.22	?	B	
		156	3.0	1.05	0.38	?	B	
		157	6.0	1.05	未製品	?	B	
		158	5.9	0.8	未製品	?	B	
		159	5.25	0.75	未製品	?	B	
		160	3.4	0.75	未製品	?	B	
		161	3.75	1.05	未製品	?	B	
		162	4.05	0.9	未製品	?	B	
		163	4.65	0.83	未製品	?	B	
		164	4.8	1.05	未製品	?	B	
		165	6.0	0.98	未製品	?	B	
		166	3.4	0.6	0.5	?	B	
		167	4.5	0.75	未製品	?	B	
岩谷古墳		168	7.1	2.8	0.4	?	A	

山岩製紡錘車の分布範囲の西端である櫛野川流域での出現時期である。吉田遺跡から後期後半の遺構に伴って滑石製の紡錘車が出土している。弥生紡錘車そのものの解体期である後期後半に、角閃石製紡錘車が流通した地域の一端に滑石製紡錘車が食い込んでいるのである。これは、それまでの角閃石安山岩製紡錘車が流通していたシステムの崩壊を意味するものであろうか。

(3) 土製紡錘車

土製紡錘車は、山口県全域で出土している。時期も、前期から後期の全般にわたるようである。しかし、山口県西部での前期弥生遺跡の調査例が多いためか、県西部と前期に数量的な偏りが見られる。特に、県西部の土製紡錘車は土器片再利用のB種が目立つ。

角閃石安山岩製紡錘車の分布範囲である山口県東部の土製紡錘車には、以下の傾向が見られる。角閃石安山岩製紡錘車の分布範囲において土製紡錘車が出土する地域は、島田川流域と櫛野川流域のみである。このうち、櫛野川流域で時期が判明する土製紡錘車はB種が大半で、いずれも前期の特徴をもち角閃石安山岩製紡錘車が普及する以前のものである。角閃石安山岩が流通し始めると、B種土製紡錘車は姿を消したと考えられる。

島田川流域の土製紡錘車は、中期から後期のものであるが、数量的には限られている。また、櫛野川流域の前期紡錘車がB種を主体としていたのに対して、島田川のものはA種が主体である。

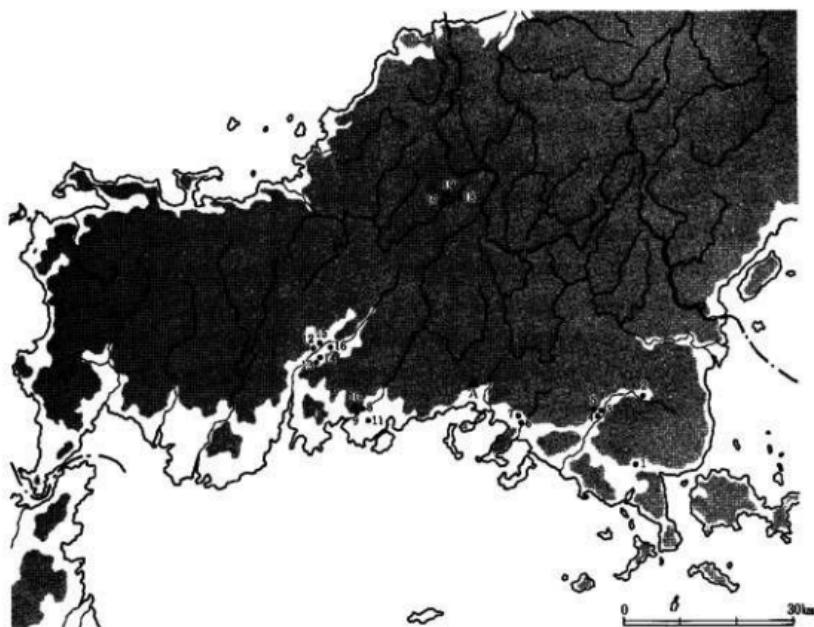


Fig. 93 山口県内における角閃石安山岩製紡錘車の分布図

A. 西郷ヶ庄	5. 退道	10. 大崎	15. 大内氏堀山跡
1. 明地	6. 宮原	11. 井上山	16. 佐久田
2. 浦木	7. 円光寺	12. 赤瀬	17. 空庭
3. 天王	8. 右田一丁目	13. 神嘗大塚	18. 墓手沖尻
4. 関山	9. 下右田	14. 吉田	19. 羽波

2 角閃石安山岩製紡錘車の流通

角閃石安山岩製紡錘車は、裸眼観察でも容易に識別しうる特徴を有している。第1章の集成により、他の材質の紡錘車とは排他的に弥生時代中期後半から後期後半まで山口県東部の周防の地域で流通していることが明かとなった。この限られた分布範囲に石材の採石地があろうことは想像に難くない。地質学的見地からすれば一口に角閃石安山岩といっても、山口県内の産出地は青野山火山群と阿武單成火山群の2つに分かれるとのことである。このうち、弥生遺跡から出土する紡錘車に用いられる角閃石安山岩には、角閃石の斑晶が長柱状を呈する特徴があり、阿武單成火山群のものは除外され、青野山火山群の産出物と限定することが可能とされる。しかし、青野山火山群は、島根県青野山から山口県四

熊ヶ岳を結んで、山口県内を南北に縱断するように分布している。今のところ、青野山火山群から更に細かく採石地を設定することは、多くの資料分析が必要であるという。

考古学的には、分布の面からいえば阿武川流域を除いて、角閃石安山岩製紡錘車を出土するいずれの水系も瀬戸内海に面しており、瀬戸内海に最も近い新南陽市四熊ヶ岳が有力な採石地の候補であろう。一方、阿武川流域に関しては、県境にある青野山火山群の野坂山などが近いといえる。このように、弥生時代の紡錘車に用いられた角閃石安山岩の採石地は一つの山に限定できるものではない。しかし、時期的には弥生時代中期後半から後期後半に限られ、角閃石安山岩製紡錘車が流通した周防の地域では、他の材質による紡錘車がきわめて希であることには注意が促される。周防の地域内で何らかの規制が働いた可能性は大きい。先にも述べたように、山口県内の集落立地には特徴があり、閉鎖された地域内で水系をおさえる大規模集落と周辺の中小規模集落といった構成をとっている。この場合、個々の集落が独自に角閃石安山岩を求めたとは考え難く、大規模集落が入手して各地域内で分配していた公算が強い。それならば、角閃石安山岩はそれぞれ水系の大規模集落が独自に求めたのか、それとも採石地に角閃石安山岩を配布し交易する集団が存在したのか、といった疑問が生じる。

現在のところ、有力な採石地と推定される四熊ヶ岳周辺には顕著な弥生遺跡が見あたらないが、見あたらないから遺跡が存在しなかったと断言するには躊躇がある。供給源となる遺跡が限定できない場合、各々の集落における角閃石安山岩の搬入状態によって、その有無を考える方法がある。原材のまま搬入されているのか、ある程度まで加工されているのか、それとも完全な製品として搬入されているのかを、検討するのである。加工を受けて搬入されていたのならば、供給し交易する集団が存在した可能性は強いといえよう。それを判断していく実務的な作業は、角閃石安山岩の原材、加工剥片、あるいは未製品の各遺跡における出土の把握を必要とする。現在のところ、これらの報告例は極めて少ない。しかし、これを無批判にうけとつてよいかは疑問である。まず角閃石安山岩の性質を知る為に、角閃石安山岩の入手から始まる紡錘車製作の実験を行った。

(2) 紡錘車製作実験

石材の入手手段を考えた場合、火山岩ならばその供給源である火山そのものに目が向いてしまいがちである。小田村宏氏は中世墳墓群である山口市瑠璃光寺遺跡から出土した角閃石安山岩製石塔の産出地を四熊ヶ岳に求め、四熊ヶ岳南西稜の7~8合目付近から頂上にかけての母岩の露出と切り出しのクサビ目を報告している。確かに、今回の踏査でも四熊ヶ岳では山中に角閃石安山岩の母岩にクサビ跡を確認することができた。現在でも四熊ヶ岳周辺では、角閃石安山岩を用いて製作された江戸時代の石造物を確認することができる。

少なくとも、四熊ヶ岳の角閃石安山岩の露頭は近世には石切り場となっていたのだろう。ところが、四熊ヶ岳に登らざとも、平坦地での角閃石安山岩の入手は可能である。四熊ヶ岳の裾を流れる神代川は角閃石安山岩を下流へと運び、富田川との合流点では多量の角閃石安山岩を採集することが可能である。それらはいずれも偏平な川原石である。楷野川流域の赤妻遺跡や神郷大塚遺跡から出土した未製品もまた、角閃石安山岩の偏平な川原石であった。遺跡での石材の状態は、弥生時代における角閃石安山岩の利用が、切り出すのではなく、川原石の採集を示すものといえる。

紡錘車の製作実験は神代川で採集した、手ごろな石材でおこなった。側縁荒削りの未製品が吉田遺跡から出土していることもあり、まず側縁の荒削りを行った。角閃石安山岩は極めて軟質で、打撃を加えると剥離するのではなく打点部分が粉碎した。粉々になった石屑は雨に溶けてしまい、発掘による検出がほぼ不可能であることを示した。

次に、研磨による整形はコンクリートのたたきにこすりつけて行った。実験考古学にコンクリートを用いたことに反対する声もあるが、今回求めているのは加工時における角閃石安山岩の特性であって、完全な製作工程復原ではない。自然界には、コンクリート以上の硬度をもった石材はいくらでもあるわけである。全てをその通りに復原するのではなく、目的に応じて代替物を使用することは許されよう。角閃石安山岩は荒削りの時点でも明らかなようにきわめて軟質であり、研磨による加工もたやすいものであった。荒削りからわずか30分で、紡錘車としての形は整った。

紡錘車の製作過程において、角閃石安山岩の特性が明かとなった。荒削の段階で出る石屑は、発掘による検出がほぼ不可能なこと。荒削からの加工にはほとんど手間がかからず、すぐに紡錘車の形が整ってしまうことである。

(3) 角閃石安山岩製紡錘車の意義

既往の発掘データーからは、角閃石安山岩を供給し交易する集団の有無を判断することは事实上不可能である。ただし、楷野川流域から川原石の原材料が出土していることを考えると、原材料で各集落に搬入されていた可能性は強い。とすれば、供給集団が介在した可能性は低くなるのであろうか。筆者はそうではなく、周防の広い地域で角閃石安山岩が、紡錘車以外の用材にはほとんど用いられなかった事実に着目すべきと考える。各水系毎に独自に角閃石安山岩を入手したのであれば、紡錘車以外の石器が製作され、その用途にバラツキが見られるのではないだろうか。供給する集団が、あらかじめ紡錘車製作に手ごろな大きさの石材を選別し、搬出するがゆえに角閃石安山岩の用途は規定されるのではない

か。

石庵丁や太形蛤刃石斧のように使用すれば消耗する利器ではなく、石材が特殊であり目につきやすい角閃石安山岩製紡錘車で、ここまで議論することに危険性がないわけではない。確かに、過大評価は慎まねばならない。しかし、過小評価にとどまつてはならない。何の変哲もない紡錘車が広く分布することは、石材の特殊性による判別のしやすさを差し引いたとしても異常な状態である。特殊な石材による大型蛤刃石斧や石庵丁などは時として、製作上の効率や製品としての性能の優位性から、産出地を遠くはなれた広域分布の説明が行われる。¹⁰ しかし、紡錘車には改良の余地はなく、実際に角閃石安山岩製であろうがなかろうが単なる円形である。効率に関する土器片を再利用した方が、原材を他所に求める必要もなく、加工も角閃石安山岩と同程度の労力であろう。ならば、弥生前期には各集落が独自に行っていいた土器片再利用の技術を捨ててまで、角閃石安山岩製紡錘車に移り変わる必然性は性能や効率の面からは認められなくなる。この点からしても、もはや各地域の大規模集落が独自でわざわざ角閃石安山岩を入手していたとは考え難い。供給集団を介在させた広域流通システムの存在なしには、およそ説明のつかない現象であろう。ここに、四熊ヶ岳を中心して海上交通を利用する角閃石安山岩供給集団が介在していたことを認めたい。

これらが、政治的要因によるものか、自然発生的な弥生社会体制維持の必要性に応じたものかは明かではない。しかし、この角閃石安山岩製紡錘車が流通した範囲こそ、周防中期弥生社会に独自の垂下口縁壺の分布範囲であり、土版型分銅形土製品の分布範囲に一致するのである。これらは、隣接する他地域と比較しても、極めて独自性の強い遺物である。弥生中期における周防地域の水系単位を超えた、瀬戸内海を通しての集落間の結合を示す例証といえよう。この周防弥生中期社会における生活の基本単位である衣食住の衣を担っていたのが角閃石安山岩製紡錘車なのである。けれども、所詮は紡錘車である。周防弥生中期集落システムに組み込まれている限り、交易による供給集団の飛躍発展は得られなかつたのである。日本全国的に紡錘車は、古墳時代の開始に前後して一旦その姿を消す。この周防の地域もまた例外ではない。その傾向は弥生時代後期後半に強くなり、角閃石安山岩製紡錘車が流通する西端の檜野川流域に滑石製紡錘車（円板形）の流入が見られ、弥生中期流通システムの解体がうかがえる。社会体制が大きく変動していくなか、角閃石安山岩の供給集団はいかなる運命を迎えたのであろうか。

おわりに

四熊ヶ岳山頂に立ち、眼下の瀬戸内を望めば、直線距離にして5km先の海上には現在は工場の埋め立てによって地続きとなった竹島が見える。この竹島の最高所に位置する前方後円墳こそ、「古い相の鏡群」をもった御家老屋敷古墳なのである。この竹島御家老屋敷古墳の主体部である竪穴式石室に用いられていた石材は角閃石安山岩である。竹島御家老屋敷古墳を築いた集団は、角閃石安山岩の利用法を知っていたといえる。

西部瀬戸内の小島に突如として出現した発生期の前方後円墳は、大和政権が大陸交渉のために把握した海上交通の証として説明されるが、なぜ竹島の地に出現したかの必然性を説明してはいない。周辺には該当時期の集落の存在すら明確でない小島である。むしろ、当時の山口県内では、古柳井水道をおさえた田布施の地域に、明地遺跡などに代表される大規模集落が控えていた。石走山方形台状墓から国森古墳はまさしく弥生からの在地首長墓の系譜を示すものであろう。国森古墳に陪葬された連弧文昭明鏡は、周防弥生社会が入手した最高の品であり、それを保有した古柳井水道を中心とする集団への力の集中が窺える。ところが、竹島に前方後円墳が築かれた古墳時代に至っては、古柳井水道を中心とする集団が築いた国森古墳は在地色の強い方墳であり、それまでの弥生社会を飛躍するものではなかった。それではなぜ、集落の存在すら明確ではない竹島の地に前方後円墳は築かれたのか。筆者はその必然性は、古墳時代開始間際まで流通しつづけた角閃石安山岩製紡錘車にあると考える。

周防の地域で弥生時代終末まで流通した角閃石安山岩製紡錘車と、その産出地の近くに築かれた古墳出現期の前方後円墳の主体部が同じ角閃石安山岩であることは単なる偶然とは言えない。おそらく、四熊ヶ岳の供給集団が角閃石安山岩の供給を通して蓄積された西部瀬戸内海における海上交通のノウハウは、大陸交渉を重大な政策とする大和政権にはなくてはならないものであったはずである。また、弥生後期に至り周防の中期弥生社会システムが解体し、角閃石安山岩の需要が低下するなかで、その供給集団は強力な後ろだてなくして存続し得なかつたのである。そして、大和政権は周防弥生社会におけるそれまでの有力勢力とは結び付かず、その一歯車である角閃石安山岩の供給集団と結び付くことによって旧社会にクサビを打ち込んだのである。かくして、角閃石安山岩供給集団は大和政権傘下の証しである前方後円墳を築き、それまでの周防弥生社会から飛躍発展することができたのである。

最後に我田引水になりかねないが、角閃石安山岩が流通していた周防地域の弥生時代中

期後半を代表する垂下口縁壺が、奇しくも竹島後家老屋敷古墳と同じ「古い相の鏡群」をもつ大分県赤塚古墳に近接する野口遺跡から出土している。竹島御家老屋敷古墳と赤塚古墳をつなぐ海上ルートは、既に弥生中期の段階で成立していた公算が強い。とすれば、周防中期弥生社会が交易によって築いた海上航路を、大和政権がそのまま取り込んだとする考えもあながち的はずれではあるまい。角閃石安山岩製紡錘車や垂下口縁壺などの地方特色の出る遺物に目を向け、その移動に注意することは周防弥生社会を研究していくうえで必要不可欠である。

引用文献

1. 山口県教育委員会『明地遺跡』(1993年)
2. 山口県教育委員会『清水遺跡』(1989年)
3. 山口大学島田川遺跡学調査団『島田川』(1953年)
4. 山口県教育委員会『岡山遺跡』(1987年)
5. 山口県教育委員会『追迫遺跡』(1988年)
6. 山口県教育委員会『宮原遺跡・上広石遺跡』(1973年)
7. 山口県教育委員会『円光寺遺跡』(1987年)
8. 山口県教育委員会『防府市右田・一丁田遺跡・徳山市の場・宮ノ馬場遺跡・徳山市久米市遺跡』(1973年)
9. 山口県教育委員会『下右田遺跡第3次調査概報』(1979年)
10. 山口県教育委員会『南大崎ニュータウン奥正雄寺遺跡・大崎岡古墳群・山崎遺跡』(1985年)
11. 井上山遺跡発掘調査団『井上山』(1979年)
12. 山口県教育委員会『赤妻遺跡』Ⅱ(1993年)
13. 山口市教育委員会『神郷大塚遺跡』(1991年)
14. 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報』(1982年)
15. 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報』V(1986年)
16. 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報』VI(1987年)
17. 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅷ(1990年)
18. 山口市教育委員会『大内氏築山跡』Ⅳ(1990年)
19. 山口県教育委員会『仏供田遺跡』(1993年)
20. 山口県教育委員会『宍抜・馬場遺跡』(1985年)
21. 山口県教育委員会『坂手沖尻遺跡・惣の尻遺跡』(1978年)

22. 山口県教育委員会『羽波遺跡・片山遺跡』(1989年)
23. 山口県教育委員会『朝田墳墓群II・鴻ノ峰1号墳』(1977年)
24. 山口市教育委員会『小路遺跡』(1988年)
25. 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報』II (1985年)
26. 宇都地域遺跡群学術調査研究報告『宇都の遺跡』(1968年)
27. 山口県教育委員会『神田遺跡』(1990年)
28. 山口県教育委員会『中村遺跡』(1987年)
29. 山口県教育委員会『砂地岡遺跡』(1993年)
30. 山口県教育委員会『妙慈寺山古墳・妙徳寺山経塚・栗遺跡』(1991年)
31. 山口県教育委員会『荒人遺跡・柏石遺跡』(1990年)
32. 菊川町教育委員会『下七見遺跡』I (1989年)
33. 菊川町教育委員会『下七見遺跡』II (1992年)
34. 下関市教育委員会『綾羅木遺跡発掘調査報告』第I集 (1981年)
35. 山口県教育委員会『綾羅木郷台地遺跡(明神地区)』(1988年)
36. 山口県教育委員会『下関市坂本古墳・秋桜遺跡・石原古墳』(1974年)
37. 山口大学人文学部考古学研究室『西部瀬戸内における弥生文化の研究』(1984年)
38. 山口県教育委員会『今井遺跡』(1979年)
39. 山口市教育委員会『間田片川遺跡』(1985年)
40. 山口県教育委員会『畠田遺跡』(1992年)
41. 山口県教育委員会『山ノ口遺跡』(1991年)
42. 山口県教育委員会『大門遺跡』(1991年)
43. 山口県教育委員会『下岡田遺跡』(1989年)
44. 豊浦町教育委員会『宝藏寺遺跡』(1993年)
45. 山口県教育委員会『綾羅木郷台地遺跡－明神地区・久保之上田地区－』(1989年)
46. 山口県教育委員会『下関市岩谷古墳発掘調査報告』(1972年)

(注)

1) 鹿村淳子「紡錘車」(『弥生文化の研究』5、1985年)

2) 東大阪市の鬼虎川遺跡からは、木製の軸を装着した状態の石製紡錘車が出土している。

宇本隆裕「紡織具・雑具」(『鬼虎川の木質遺物』東大阪市文化財協会、1987年)

- 3) 山口県内から鉄製紡錘車が数点出土しているが、いずれも中世のものと考えられる。
山口県教育委員会『桜島遺跡』(1991年)
- 山口県教育委員会『土井ヶ浜南遺跡』(1992年)
- 山口県教育委員会『仏供田遺跡』(1993年)
- 4) 他府県の出土例より、木製・骨角製の紡錘車の存在が想定される。
- 5) 弥生時代の土製裁頭円錐形紡錘車の出土例は、板付遺跡1区70号竪穴に出土例がある。
中間研志「紡錘車の研究－我国稻作農耕文化の一要因としての紡織技術の展開について－」(『石崎曲り田遺跡』Ⅲ 福岡県教育委員会、1985年)
- 6) 佐原真「紡錘車」(『紫雲出』香川県三豊郡鈴間町文化財保護委員会、1964年)
- 7) 山口県内弥生遺跡を水系単位で把握する方法は、既に小野忠熙氏や河村吉行氏らが行っている。
小野忠熙『山口県の考古学』1986年
河村吉行「考察－弥生時代竪穴住居跡の各属性について－」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』V、1996年)
- 8) 河村吉行「周防と長門の弥生時代」(『山口県史研究』第2号、1994年)
- 9) 永尾慶志「山口県の火山をたずねて－青野山火山群、阿武單成火山群－」(『山口地学会誌』第28号、1992年)
- 10) 水尾隆志氏の御教示による。
- 11) 小田村宏「石塔に関する問題」(『瑞光寺遺跡』山口市教育委員会、1988年)
- 12) 下條信行「北九州における弥生時代の石器生産」(『考古学研究』第22巻第1号、1975年)
- 13) 西田守夫「竹島御家老屋敷古墳出土の正始元年三角縁階段式神獣鏡と三面の鏡」(IMUSEUM No.357 東京国立博物館、1980年)
- 14) 山口県教育委員会『石走山遺跡』(1993年)
- 15) 乗安和二三『国森古墳』(田布施町教育委員会、1988年)
- 16) 小倉正五「野口遺跡・橋尻道遺跡」(『宇佐地区面場整備関係発掘調査概報』宇佐市教育委員会、1981年)

吉田遺跡第Ⅰ地区A区出土の未報告遺物について

中村幸弘

昨年度の年報XIにおいて、吉田遺跡第Ⅰ地区A区の出土遺物の報告を行った。報告後、埋蔵文化財資料館の遺物収蔵室から、「平川」や「1966.7.8」などの注記をもつ遺物が3点見つかった。「平川」の注記は、吉田遺跡の最初の発掘である第Ⅰ地区A区の遺物のみに用いられ、それ以降の調査の遺物には使用されていない。「1966.7.8」は、第Ⅰ地区A区の調査期間中にあたる。これらの理由により、3点の遺物は第Ⅰ地区A区からの出土と判断した。既に第Ⅰ地区A区の報告は終了しているが、この3点の遺物について追加報告を行う。

なお、「第4トレンチ」出土の注記をもつ太型蛤刃石斧（2）は、年報V「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）」に、トレンチ出土遺物（Fig.86-234）として報告されているものである。しかし、「平川吉田遺跡」の注記があり、第Ⅰ地区A区出土と訂正しておく。おそらく、過去の度重なる収蔵場所移動の際に、「保存地区」コンテナに混入し、そのまま報告されたのであろう。このような遺物は、他にもまだ多く未整理のコンテナに含まれているものと思われる。今後の整理の進展過程において明らかとなろう。隨時追加報告を行う予定である。

1の坏身は受け部径12.4cm、口径10.4cm、器高3.4cmを測る。灰白色を呈し、胎土は精良で1mm程度の砂粒を含む。焼成は良好である。成形はマキアゲ・ミズビキ手法を用いている。立ち上がりは短く、内側に傾斜しており、端部は丸みを帯びており、段は退化している。底部に回転ヘラ切りが未調整のままで残っている。他の部分には回転ナデ調整が見られる。また、底部内面には不定方向のユビなでが施されている。立ち上がりや受け部の一部が欠損しているものの、ほぼ原形をとどめている。なお立ち上がりの形態や口径の大きさなどから、陶邑編年のⅡ型式6段階にあたると考えられる。したがって7世紀第1四半期という絶対年代が比定される。

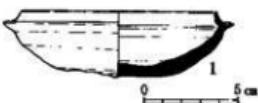


Fig. 94 A区出土須恵器実測図

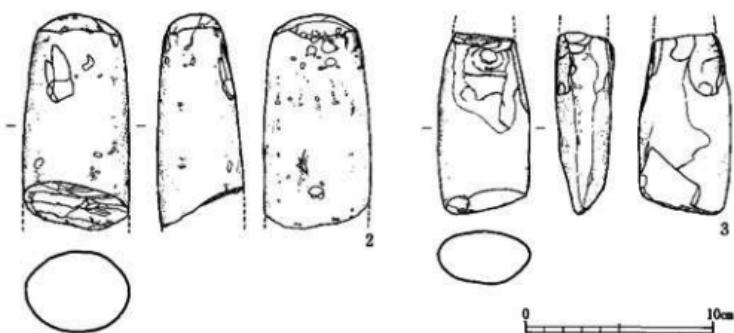


Fig. 95 A区出土石器実測図

第3トレンチ出土の2は大型蛤刃石斧である。刃部が破損している。現存長12.2cm、幅5.7cm、厚さ4.4cm、現重量470.6gを計る。石材は安山岩である。表面には調整または使用痕と思われる研磨痕、擦痕が所々に認められる。また、全面に敲打調整の跡が見られる。一部に表面剥離が見られるものの比較的表面の調整痕等は良く残っている。基部は円基であり、部分的に欠損しているがほぼ原形をとどめている。側縁は平行であり、断面は正円に近い梢円形を呈しているので平井氏の蛤刃石斧の形態分類によればⅢB類に属する。

第4トレンチ出土の3も、大型蛤刃石斧である。基部が破損している。現存長9.6cm、幅4.9cm、厚さ3.0cm、現重量223.7gを計る。石材は結晶片岩である。表面の剥離がひどく、調整痕を確認するのが困難である。側面には粗削によるものと思われる剥離面がある。また刃部に見られる大きな剥離面（3.3cm×1.3~2.3cm）は石器製作時のものではなく、後世のものである。基部右上には自然面が残っており、全体的に粗雑な感をうける。基部が破損しており、全体の形態は明かではないが、現存する形から判断すると長三角形か長台形状を呈していたと推定される。また断面の形状は扁平な梢円形を呈しており、前述の形態分類によればⅠA類あるいはⅡA類に属すると推定される。

3の石斧に比べて、2の石斧は大型で表面の調整も丁寧に施されている。さらに2の石斧は、断面が正円形に近くなっていることや側縁が平行になっていることなど、3の石斧よりも新しい要素が見受けられる。

〔註〕

1) 平井勝『弥生時代の石器』(『考古学ライブラリー64』ニューサイエンス社、1991年)

山口大学構内遺跡調査要項

山口大学埋蔵文化財資料館規則

(設置)

第1条 山口大学に山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）を置く。

(資料館の業務)

第2条 資料館は、学内の共同利用施設として、次の各号に掲げる業務を行なう。

- 一 山口大学構内等から出土した埋蔵文化財の収蔵・展示および調査研究
- 二 山口大学構内等における埋蔵文化財の発掘調査並びに報告書の刊行
- 三 その他の埋蔵文化財に関する必要な業務

(運営委員会)

第3条 資料館に関する事項を審議するため、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

2 委員会に関する規則は、別に定める。

(館長)

第4条 資料館に館長を置く。館長は委員会の議を経て学長が委嘱する。

2 館長の任期は2年とし、再任を妨げない。

3 館長は、資料館の業務を掌理する。

第5条 資料館には調査員若干名を置く。

2 調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

3 調査員は、資料館の業務を処理する。

(特別調査員)

第6条 埋蔵文化財に関する特別な分野の調査研究を行なうため、資料館に特別調査員若干名を置くことができる。

2 特別調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

(雑則)

第7条 この規則に定めるもののほか、資料館に必要な事項は別に定める。

山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則

(趣旨)

第1条 この規則は、山口大学埋蔵文化財資料館規則（以下「資料館規則」という。）第3条第2項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）に關し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 委員会は次の事項を審議する。

- 一 山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）に関する基本的なこと。
- 二 資料館の管理運営に關すること。
- 三 資料館の整備充実に關すること。
- 四 資料館の運営に要する経費に關すること。
- 五 その他必要な事項

(組織)

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 資料館規則第4条第1項の館長
- 二 各学部および教養部の教官各1名
- 三 事務局長

2 前項第2号の委員は、それぞれの部局の推薦に基づいて学長が委嘱する。

(任期)

第4条 前条第1項第2号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選とする。

2 委員長は委員会を召集し、その議長となる。

(幹事)

第6条 委員会に幹事を置き、庶務部長、経理部長及び施設部長をもって充てる。

(委員以外の出席)

第7条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を委員会に出席させることができる。

(事務)

第8条 委員会の事務は、庶務部庶務課において処理する。

(雑則)

第9条 この規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

Tab. 8 山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員

(平成4年度)

部局名	氏名	官職	任期	備考
工学部	島 敏史	教授	平3.4.1～平5.3.31	委員長
人文学部	近藤喬一	教授	平3.6.7～平5.6.6	館長
人文学部	八木 充	教授	平3.5.29～平5.5.28	
教育学部	川村博忠	教授	平3.4.1～平5.3.31	
経済学部	見野貞夫	教授	平3.4.1～平5.3.31	
理学部	永尾隆志	助教授	平3.4.1～平5.3.31	
医学部	福本哲夫	教授	平2.4.1～平4.3.31	
農学部	平尾重太郎	教授	平3.4.1～平5.3.31	
教養部	森 茂曉	教授	平3.4.1～平5.3.31	
事務局	萱沼 一	事務局長	平4.4.1～	

(平成5年度)

部局名	氏名	官職	任期	備考
教育学部	小川國治	教授	平5.4.1～平7.3.31	委員長
人文学部	中村友博	教授	平5.6.7～平7.6.6	館長
人文学部	八木 充	教授	平5.5.29～平7.5.28	
経済学部	及川順	教授	平5.4.1～平7.3.31	
理学部	志磨裕彦	教授	平5.4.1～平7.3.31	
医学部	福本哲夫	教授	平4.4.1～平6.3.31	
工学部	水田義明	教授	平5.4.1～平7.3.31	
農学部	平尾重太郎	教授	平5.4.1～平7.3.31	
教養部	森 茂曉	助教授	平5.4.1～平7.3.31	
事務局	萱沼一	事務局長	平4.4.1～	

Tab. 9 山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員

学部等	氏名	官職	専攻等	備考
人文学部	中村友博	教授	日本考古学	平成4年度

山口大学構内の主な調査

吉田構内

Tab. 10 山口大学構内の主な調査一覧表

調査 年度	旧調査地名	構内地図割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査 区分	備考	文献
昭和 41年	第 I 地区 A・B 区	L・M・N-15	1	30?	先生式堅穴住居・井 穴	先生土器、土師器、 須恵器	事前	調査担当 小野志郎	年報 Ⅱ
	第 II 地区家畜病院新宮	S・T-19 R・S-20	2	2,000	溝、柱穴	先生土器、土師器、 瓦質土器、須恵器	*	*	
	第 III 地区	P・Q-19・20	3			先生土器、土師器	試掘	*	
	第 IV 地区牛舎新宮	S-10	4	300	弥生塗・土塙、 古墳堅穴住居、 中世住居跡・溝	先生土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 陶器器	事前	*	
	第 V 地区	S・T-9-13	5				試掘	*	
昭和 42年	第 VI 地区杭羽区	E-20	6	1,000	杭羽	先生土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 瓦板状木枕	事前	*	①
	第 VII 地区南区	G・H-22・23	7		河川跡、柱穴	縄文土器、弥生土器、 木器、石器	*	*	
	第 VIII 地区北区	I・J-20・21	8	1,400	堅穴住居・溝、土塙、 井穴		*	*	
	第 IX 地区東南区	H-23 I・J・K-24	9		弥生堅穴住居	弥生土器	*	*	
	第 X 地区野球場	I-22・23 J-21・22・23 K-22・23	10		中世柱穴	瓦質土器	試掘	*	
昭和 43年	第 V 地区学生食堂	I・J-19・20	11		弥生塗、古墳土壤	弥生土器、土師器	事前	*	調査担当 山口大学吉田 道路調査团
	第 V 地区	H-1・J・K- L・M・N- 18-19-20	12		河川跡、柱穴、土塙	弥生土器、土師器	試掘	*	
昭和 44年	第 I 地区 C 区 大学本部新宮	K-L-14	13	600	堅穴住居、溝、土塙	土師器、須恵器、瓦 質土器	事前	*	
昭和 45年	第 V 地区教育学部				河川跡	弥生土器、土師器、 須恵器	試掘	*	
昭和 46年	第 I 地区 D 区第 1 地点	K-13	14		溝	弥生土器、木炭屑	*	*	①
	第 I 地区 D 区第 2 地点	L-13	15			弥生土器、土師器、 瓦質土器	*	*	
	第 I 地区 D 区第 3 地点	L-M-13	16		堅穴住居、土塙、 柱穴	土師器	*	*	
	第 I 地区 D 区第 4 地点	M-N-13	17		弥生堅穴住居、溝、 土塙	弥生土器、土師器、 瓦質土器	*	*	
	第 I 地区 D 区第 5 地点	L-13	18		弥生溝	弥生土器	*	*	
	第 I 地区 D 区第 6 地点	M-13	19		古墳堅穴住居、 弥生塗	弥生土器、土師器、 石器	*	*	
	第 I 地区 D 区第 7 地点	M-13	20		溝	弥生土器	*	*	
昭和 49年	第 I 地区 E 区 第 2 学生食堂新宮	N-O-15	21	900	弥生・古墳堅穴住居、 土塙、溝、柱穴	弥生土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 石器、執製品	事前	*	年報 Ⅲ
	第 II 地区					弥生土器	試掘	*	
昭和 51年	第 III 地区				堅穴住居	弥生土器、土師器、 須恵器	*	*	①

調査年度	調査名	境内地区別	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和53年	人文学部校舎新堂	M・N-21	22	160			試掘	調査担当 近藤義一	年報X
	教育学部附属施設 養護学校新宮	A・B・C・D- 20-24	23	410	溝、土塁	绳文土器 弥生土器	*	山口大学埋蔵 文化研究科然 ・山口市教育 委員会	年報X
昭和54年	理学部校舎新宮	O-18・19	24	250			*		年報X
	農学部動物舍新宮	P-18・19	25	380			*		年報X
	本部管理棟新宮	L-14	26	740	溝、土塁、柱穴、 中世井戸、土壙基、 住居跡	弥生土器、土師器、 石製品	事前		年報X
昭和55年	経済学部校舎新宮	K・L-21	27				試掘		
	農学部農業系施設 実験施設新宮	Q-15	28	50	溝、土塁		事前		
	本部環境整備	E・F-15・16 F-20・21 G・H-12・19	29				立会		
	農学部環境整備	L・M-12・13 N・O・P- 10-12 P・Q-17・18	30				*		
昭和56年	教育学部校舎新堂	H-19	31	400	弥生堅穴住居 土塁、溝、柱穴	弥生土器、石製品	事前		
	教育学部音楽練習室	H-16	32	100	溝		*		
	教育学部美術科・ 技術科実験室新宮	J-19・20	33	130	旧河川、溝、柱穴	绳文土器、先史土器、 須恵器、土師器	*		
	正門横脚新堂	H-11	34				立会		
	時計場施設	I-14	35				*		
	本部構内構築取扱	K-14	36				*		
	教養部構内構築取扱	J-16・17	37				*	工法等変更	
	構内看護道施設	J・K・L・M-18 M・N-16	38				*		
	農学部中庭整備	O-17	39				*		
	職務施設改修	O-16	40				*	工法等変更	
昭和57年	学生部文化会館新宮	L-8	41				*	工法等変更	
	学生部運動場整備	M・N-8・9	42				*		
	附属図書館増築	M-16	43	600	弥生～古墳唐、 土塁、柱穴、杭列	弥生土器、土師器、 須恵器、石器	事前		
	大学会館新宮	M-14・15	44	130	弥生堅穴住居、溝	弥生土器	試掘		
	教育学部附属養護学校ブール新宮	B-22	45				立会		
	放射性同位元素検査合 実驗室排水水槽新宮	O-18	46				*		
	教養部白板平野場 昇降口新宮	K・L-17	47				*		
	教養部中庭整備	J・K-16	48				*		
昭和58年	大学会館新宮	M・N-13	49	2,800	古墳井戸、土塁、 柱穴、中世井戸、 植立柱建物	弥生土器、土師器、 須恵器、輪入陶器、 圓窓陶器、瓦質土器、 絞胎陶器、木簡、石器	事前		年報X
	ラグビー場 陸上競技場新宮	G・H-19	50	120	弥生唐、弥生～古墳 堅穴住居、土壤	弥生土器、土師器、 石製品	*	堅穴住居は工 法変更により 現地保存	年報X

調査年度	調査名	境内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	理学部大学院会議室	M - N - 20 O - 19 - 20	51	410			立会		年報Ⅲ
	正門・南門二輪車置場 および正門花壇新設	H - I - 23 I - 12 - 13 J - 13	52	180			*		
	学生部アーチェリーキャンプ台・電柱設置	M - 8	53	30			*		
	学生部更衣室整備	L - 7	54	2			*		
	学生部野球場敷水栓取設	J - 21 K - 22	55				*		
	教養部環境整備	I - 16 - 17 J - 17 K - L - 17 - 18	56	80			*		
	学生部テニスコート改修 フェンス改修	C - 18, D - 17 E - 16	57	12			*		
昭和59年	大学会館ケーブル布設	N - 12 - 14	58	160	弥生土器、柱穴	弥生土器	事前		年報Ⅳ
	大学会館排水管布設	K - L - 13	59	180	弥生～中世遺物包含層、古墳土壤、古代～中世土壤、溝、柱穴	弥生土器、土器群、須恵器、青銅、白銅、瓦質土器	*		
	学生部テニスコートフェンス改修	B - 17 - 18 C - 16 - 17 - 18 - 19 D - 15 - 16 - 17 E - 15 - 16	60	25	古墳以降の遺物包含層	土器群	試掘		
	経済学部樹木移植	K - 19 - 20 - 21	61	8			立会		
昭和60年	大学会館環境整備	L - 14 L - M - N - 15	62	560	弥生～中世遺物包含層、弥生整穴住居、防護穴、土壤、古代～近世土壤、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、土器群、須恵器、瓦質土器、輸入器物、固有陶器群、土器群、石斧、原石、鐵器、鐵劍	試掘		年報V
	経済学部環境整備(樹木移植)	K - 21, L - 20	63	5			立会		
	農学部附属農業研究科 樹木移植復旧整備	R - 16 - 19	64	30	古代末～中世河川跡	須恵器、土器群、輸入陶器、輪口、石器、鐵鋤	*		
	農学部附属農業研究科農道改修	V - 15 - 16	65	325			*		
	教育学部附属環境整備(樹木移植)	I - J - 19 - 20	66	430			*		
	中央ボイラー推車止設置	O - P - 16	67	2.6		須恵器	*		
	大学会館環境整備 (樹木移植)	L - M - 15	68	9		弥生土器、土器群、須恵器、石器、砾石、鐵鋤	*		
	交通標識設置	J - 20, N - 14 O - 18	69	3			*		
	農学部附属農業研究科周辺環境整備 (実験動物運動場設置)	P - Q - 17 - 18	70	16			*		
	理学部環境整備(藤棚設置)	N - 20 - 21	71	4			*		
昭和61年	農学部附属農業研究科病院舎	S - T - 19	72	270			*		年報VI
	国際交流会館新設	N - 22 - 23	73	70	弥生～古墳時代中期～近世	弥生土器、上部器、須恵器、瓦質土器、須恵質土器、輪窓器、鐵鋤、鐵鋸工、加工板ある鉄片	試掘		
	山口銀行現金自動支払機設置 (電線路埋設)	I - J - 19 - 20	74	11	包含層(河川跡)	弥生土器	立会		

調査年度	調査名	調査内地区割	施点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和 61年	農学部附農場農道整備	S-20, U-19	75	165	中世磚、柱穴	土師器、瓦質土器	立会	工法等変更	
	農学部附農場農道 交 通 規 制 (複数ポール設置)	L-10 Q-15・16	76	2			*		
	正門横(水田内) 墓群 設 置	I-10	77	0.25	包含層か		*		
	経済学部農場整備 (柳木移植・紀念碑建立)	M-20	78	3			*		
	吉田村内交通通 緑 織 改 修 施 工	H-23, J-9, P-22, S-20, W-16	79	3		磁器器	*		
	市道神郷1号線および 同田神郷線の 排水管埋設		80	2,100	古墳・古代窯、古代 河川跡、弥生包含層	弥生土器、土師器、 須恵器(器物のある もの含む)瓦質土器、 製塗土器、石斧、板 石	*	山口市教育委 員会 山口大学附属 文化財資料館	
	教養部自動観光機埋設 (複数設置および駆駆席移動)	K-L-18	81	3.5			*		
	教養部身体障害者用 スロープ取設	L-15・16	82	3			*		
	経済学部教水栓取設	L-M-20	83	4			*		
	吉田村内水泳プール 修 等	E-F-16 H-15	84	26.5	包含層		*		
	農学部附農場 水道管埋設	S-12	85	3			*		
	吉田佛内汚水管水 管 改 修	M-18 D-15・16	86	15.5		土師質土器	*		
	本部身体障害者用 スロープ取設	L-14	87	12			*		
	経済学部身体障害者用 スロープ取設	K-20 L-18~20	88	60	弥生~古墳柱穴		*	工法等変更	
	附属書類荷物運搬用 スロープ取設	L-16	89	8		弥生土器	*		
	教養部3番教室改修	K-16	90	1			*		
	教育学部附農場教育実践 研究指導センター新設	K-18	91	240		プランク、削器、 植物遺体	事前		
	教養部複合施設新設	J-K-17-18	92	35	埋甕土器、磚、柱穴	土磚器、須恵器、 土師質土器、石斧	試掘		
	教養部農場整備	I-J-16	93	30	隋状遺構	弥生土器	立会		
	教養部複合施設新設	J-K-17-18	94	900	落し穴、河川跡、堅 穴往復、土壤、溝、 井戸、堀裏土器、獨立柱 遺物等、谷状遺 構、柱穴	陶文土器、土師器、 須恵器、土師質土器、 陶器器、石器、本品 石器、石斧、本品	事前		
	九田川河川改修	B-C-17	95	20			立会	新教金、 山人推文	
	医療交流会館新設	M-23 N-22・23	96	195			*		
	教育学部附農場学校 自動車便場修設	B-21	97	45			*		
	農学部附農場E-7農場 排水管埋設及び E-6農場進入路改修	L-N-12	98	45	中世土器墓か	弥生土器、土師器、 須恵器、輸入白磁、 阿美磁器、敲石	*		
	農学部園芸 栽培	N-17	99	3			*		
	経済学部農水耕取設	K-20	100	0.5			*		

年報
8年報
8

調査年度	調査名	調査内訳	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和63年	教委部複合施設新堂に伴う白鳥車両場移設	I-16	101	1	包含層		立会		年報Ⅷ
	國際交流会館新堂に伴う井手水管改設	O-22	102	35	河原跡(唐土), 包含層	弥生土器, 頸項器	*		
	教委部複合施設新堂に伴うケーブル埋設	J-18	103	1			*		
	サッカー・ラグビー場修復改修	F-19, G-19, H-19・20	104	25	性地不明	弥生土器	*		
	消防用木造倉庫	K-L-M-22	105	7.5			*		
昭和元年	水景灯新堂	K-L-15	106	4	古墳溝状遺構 柱穴	弥生土器, 土師器, 須恵器, 六連式瓦塼 土器	事前		年報Ⅸ
	福野寮ガイドー設備改修	O-P-20-21	107	25			立会		
	野球場防球ネット新設	I-J-K-21 H-I-K-22	108	7	包含層	弥生土器, 土師器, 須恵器, 水質土器, 陶器	*		
	防火水槽配管有底	K-21-22	109	15	柱穴		*		
	吉田寮ガイドー設備改修	L-8	110	4			*		
	体育施設系給水管改修	G-H-15	111	50		陶器	*	工法等変更	
	大学会館前記念植樹	M-13	112	6			*		
	吉田寮ガイドー排水F 町治排水改修	L-M-8	113	45	包含層	土師器, 頸項器, 上 部質土器, 陶器, 刃 片, 二次加工のある 製片	*		
	第二武道場排水溝新設	G-H-15-16	114	2	溝		*		
	室内標識設置	I-14, L-18	115	0.5			*		
平成2年	本部车库給水管改修	L-13	116	0.5		弥生土器	*		年報X
	大学会館前記念植樹	L-M-N-14-15	117	35	中性流		*		
	大学会館前庭環境整備	M-15	118	2			*		
	第一学生食堂設備改修	J-19-20	119	7			*		
平成3年	教育学部附属附属学校 家内校設置	E-20	120	1			*		年報XI
	農学部連合歯研医学科施設新堂	O-P-17	121	76	鶴見川河川	縄文土器, 石器	試掘		
	農学部仮設プレハブ食宿設置	P-Q-17	122	21		須恵器	立会		
	農学部職生宿舎施設その他の 桿替機械設備改修	P-16	123	8			*		
	大学会館前庭記念植樹	L-M-16	124	2			*		
平成4年	サークル棟新堂	E-F-14	125	1			*		年報XII
	農学部連合歯研医学科施設新堂	O-P-17	126	900	鶴見川河川	縄文土器, 石器	事前		
	交通施設橋樋及びバリカー 壁	L-10, P-22, H-23, S-19-20	127				立会		
	道路(南門ロータリー)取設	H-23	128	40			*		
平成5年	ガイドー室排水管漏水補修	P-16	129	4			*		年報XIII
	農学部附設農場ガラス室新設	S-13	130	3.5			*		
	大学会館前記念植樹の植込み	L-M-15	131	3			*		
	東町平川線緊急地方道路整備 工事及び山口11大字吉田町地 震災設備(正門周辺)	H-11	132				*		
	東町平川線緊急地方道路整備 (松葉機設置)	H-11	133	7			*		

小串構内

年 代	調査名	構内地割	地點	面積 (m ²)	遺 情	遺 物	調査区分	備 考	文獻
和 平	医学部体育館新堂		1	260		土師器、瓦質土器、石器	試掘		年報 Ⅳ
	医学部圖書館増築		2				立会		
	医学部体育館新堂		3				*		
和 平	医学部淨化槽新堂		4		近世廣	土師器、瓦質土器、磁器	事前		年報 Ⅴ
	医学部体育館新堂		5	65		土師器、瓦質土器、磁器	*		
	医学部基幹整備 (野高受電設置)		6	28		動物遺体(貝殻)	試掘		
和 平	医学部臨床講義棟・ 病理解剖棟新堂		7	38			*		年報 Ⅵ
	医学部外來診療棟新堂		8	409		土師質土器、瓦質土器、陶磁器	*		
	医学部基礎研究棟新堂		9	11		近世陶器	*		
和 平	医学部看護婦宿舎改修		10	25		近世陶器	立会		年報 Ⅶ
	医学部看護婦宿舎改修		11	20			*		
	医学部環境整備 (樹木移植)		12	40			*		
和 平	医学部附属病院外來病 院新堂		13	5			*		年報 Ⅷ
	医学部附属病院外來病院 周辺環境整備等(雨水樹埋設)		14	18			*		
和 平	医学部附属病院駕駕場改修		15	6			*		年報 Ⅸ
	医学部附属病院新堂		16	104		削器、ナイフ形石器 磨石刃核	試掘		
和 平	医学部附属病院 病棟新堂		17	300		二次加工のある削片、 使用痕のある剥片、 鉋片、敲石、礫、卵石、 土師器、土師質土器、陶 磁器	立会		年報 Ⅹ
	医学部附属病院運動場整備		18	230			*		
成 年	医学部附属病院 M R I 檢査新堂		19	45		削器、細石刃、一次 加工のある削片、剥 片、石核	試掘		年報 Ⅺ
	医学部附属病院動物・ R I 実験棟新堂		20	40		剥片	*		
成 年	医学部臨床実験施設新堂 工事		21	0.5			立会		年報 Ⅻ
	発却棟地盤調査		22				*		

常盤構内

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	工学部校舎新築		1	70		頸椎骨	試掘		年報Ⅲ
	工学部図書館増築		2	70			+		
昭和59年	工学部尾山宿舎 排水管敷設			20			立会		年報Ⅳ
昭和60年	工学部尾山宿舎 排水管取扱等			65			+		年報Ⅴ
	工学部受水樋改修		3	1.5			+		
昭和61年	工学部尾山宿舎 排水管改修			6			+		
	工学部身体障害者用 入り口一括取扱		4	29			+		年報Ⅵ
	情報処理センター (常盤センター) 空調設備取扱		5	30			+		
昭和63年	工学部先端炉上屋新築		6	225			+		年報Ⅷ
平成元年	工学部夜間用明装置 および防球ネット設置		7	2			+		年報Ⅸ
	工学部記念植樹		8	2.5			+		
平成2年	工学部ガス管改修		9	45			+		年報Ⅹ
平成3年	大学祭展示物設置		10	7			+		年報Ⅺ
平成4年	工学部ブレハブ研究・ 実験棟新築		11	6			試掘		
	工学部・工業短期大学部の改 組内編・博土課程設置に伴う 建物等の新設		12	40			+		
	工学部及び工芸短期大学部 職員宿舎改築		13	8			立会		
	大学祭展示物設置		14	7			+		

龜山構内

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属山口小・ 幼稚園運動場整備		1	60	古墳堅穴住居、 壺状遺構	土器器、頸椎骨、瓦、 實土器、瓦、石製品、 木製品	試掘		年報Ⅲ
昭和60年	教育学部附属山口小学校 改修		2	1			立会		
	教育学部附属山口中学校 球技コート整備		3	2			+		年報Ⅴ
	教育学部附属幼稚園 環境整備（樹木移植）		4	1			+		
昭和61年	教育学部附属学校改修 排水管敷設	幼稚園・小学校 部分	5	57	中耕土壤か 板状	鰐文土器、筒生土器、 土器器、須恵器、瓦、 實土器、土師質土器、 陶器器、不明焼製品、 石器、剣片、植物遺 体	試掘		年報Ⅵ
		中学校部分	6	20	河川階か 板状				
	教育学部附属山口小学校 電柱移設		6	0.5			立会		

調査年度	調査名	調査地区別	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和52年	教育学部附属幼稚園 施設改修		7	40			*		年報Ⅷ
昭和53年	教育学部附属山口中学校 屋内消防栓設備改修		8	35	包合層	土器器、磁器、陶片	*		年報Ⅸ
平成元年	教育学部附属幼稚園・ 山口小学校 汚水排水管布設		9	260	弥生～古墳時代住居、 土塹、溝、柱穴、河 川跡	縄文土器、弥生土器、 土器器、須恵器、瓦 質土器、風呂敷陶器、 黑色土器、猛器、二 次加工のある陶片、 使用痕のある陶片、 刺片、石核、砾石	事前		年報Ⅹ
	教育学部附属幼稚園 パレーコート支柱設置		10	0.3			立会		
	教育学部附属幼稚園・ 山口小学校汚水管布設		11	175	弥生層状遺構	弥生土器、土器器、 打製石斧、削器、刺 片、石核	*		
平成2年	教育学部附属山口中学校 汚水排水管布設		12		溝状遺構		事前		年報Ⅹ
			13				立会		

光構内

調査年度	調査名	調査地区別	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属光小学校 自転車置場移設		1		近世～近代石垣	瓦質土器、陶器器、 瓦	試掘		年報Ⅺ
昭和59年	教育学部附属光小・中学校 施設改修新堂		2				立会		年報Ⅻ
昭和60年	教育学部附属光小学校 外灯改修		3	1		土解谷	*		年報Ⅴ
昭和61年	教育学部附属光小学校創立 記念事業(ブロンズ像建立)		4	2.5		土器器、須恵器	*		年報Ⅶ
昭和62年	教育学部附属光中学校 グラウンド防球ネット設置		5	2		弥生土器、土器器、 瓦質土器、土質瓦土 器、瓦	*	手洗探集	年報Ⅸ
昭和63年	教育学部附属光小学校 運動器具移設		6	10		土解谷、土質瓦土器、 陶器器	*		年報Ⅹ
	教育学部附属光小学校 屋外スピーカー設置		7	0.5		土器器、土質瓦土器、 須恵器、瓦器、瓦質 土器、陶器器、土核	*	手洗探集	
平成2年	教育学部附属光小学校 運動場改修		8	25		縄文土器、土器器、 須恵器、瓦質土器、 施釉陶器、磁器、土 核、刺片、藍帶	試掘	手洗探集 遺物合計	年報Ⅹ
	教育学部附属光小学校 運動場改修		9	15	土壤	土器器、須恵器、須 恵器傾倒土器器	事前		
平成3年	教育学部附属光小学校 施設新堂		10	38	土壤、溝状遺構	土器器、磁器、陶器	試掘		年報Ⅺ
	教育学部附属光小学校 屋外施設設置		11	18		土器器、石核	立会		
	教育学部附属光中学校 バッカネット新設		12	0.5		土器器	*		

調査年度	調査名	境内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成4年	教育学部附属光中学校 武道館新築			13	500	土壤、柱穴	縄文土器、須恵器、 土師器、瓦器	事前	年報 XII
	教育学部附属光中学校 武道館地盤調査			14				立会	

その他の構内

調査年度	調査名	境内地区割	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和59年	学生部ポートサイド宿舎 合宿研修所整備	宇都宮大字小野字土井	0.5			立会		年報 V
	学生部コットサイド宿舎 合宿研修所整備	古賀郡秋穂町東字中道			*			
昭和60年	黒野荘始湯機器取扱	山口市鹿野町3-21	7			*		年報 V
	番田宿舎給水管改修	山口市湯田温泉六丁目8-29	35	杭		*		
昭和61年	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市船通り二丁目3-32	1		土師質土器	*	6号宿舎	年報 VI
		山口市水の上町6-9	7		瓦	*	2号宿舎	
昭和63年	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市白石二丁目9-7	1		須恵器、土師器、土 師質土器、瓦質土器、 陶磁器	*	7号宿舎 採集	年報 VII
		山口市水の上町6-1	1			*	1号宿舎	
平成元年	本部職員宿舎 公共下水道切替	山口市水の上町6-1	1			*		年報 VIII
		山口市石鏡台町1-25	0.5		陶磁器	*	7号宿舎	
平成2年	人文・理学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市香山西町3-1				*	3号宿舎	年報 IX
		山口市石鏡台町1-25	0.5			*		
平成3年	番田宿舎A棟給排水管 その他の整備	山口市湯田温泉6丁目	27			*		年報 X
	経済学部6号職員宿舎 改修	山口市船通り 二丁目1937-1	0.5			*		
	人文・理学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市天花832-2	1			*		
平成4年	上野小路共同下水管布設		7			*		年報 XI

*文献① 山口大学古田遺跡調査団「吉田遺跡発掘調査概報」(山口大学、1976年)

*昭和41年以降、吉田構内においては、工事に際し随時継続的に調査を実施しているが、昭和52年以前の吉田遺跡調査団の関与した調査については、調査名をすべて把握しているわけではなく注意されたい。

Summary

This volume contains two parts of archaeological research works, one is on salvage excavations carried out in fiscal year 1993, the other is laboratory works to the objects from Yoshida Campus site, already deposited in the Museum.

Ch. I The construction of building was planned on two archaeological site. For each plan a sounding was carried out.

Ch. II According to a plan for a new building of the department of agriculture, an archaeological excavations was operated in the neighborhood of the mainbuilding, by a trenches with 27m. in east-west direction and 36m. in north-south direction, before its construction, since 8 September to 13 November. As for the excavations, the river in Jomon age and the paddy field in recent age were found. The river was more than 17m. and less than 25m. in width. Latest Jomon wares in variety were found. It was able to divide deep bowl into three types, A, B, C, by the difference of shape in mouth-rim. The majority is type C. The association with a shallw bowl at Kisaki site in Yamaguchi city suggests its appearance at Iwata site, uncertain in the report in 1960, is composed.

Ch. III Military art gymnasium was planned in Mitarai archaeological site, now in the Hikari campus. An archaeological excavations was operated on the east side of the swimming pool, by a trenches with 25m. in length and 20m. in wide, since 11 January to 12 February. Two horizontal surfaces of structural remains were identified successively. The lower surface were formed in the late Tumulus age, and the upper one were formed in the medieval age. As to site, former research identified two different horizons. It is sure, however, that there are at least three surfaces in this site. In this trenches, remains were not so full, and a only small pit and post holes were confirmed. The caracteristic remains was pit No.33 on the lower plan, with scattered Sue and Haji wares around the pit. Another features were early Jomon ware, which identifiable Sobata groupes, from pit No.23 and the fifth layer.

Ch. IV The constructions of two buildings were planned on Tokiwa campus. For each plan, a sounding was carried out in order to examine the existence of cultural properties.

Ch. V Examinations were executed on 12 spots in case with few afraid of destructing the remains.

Appendix

I This is a final report of the past excavations that carried out by the Research Organization for Yoshida site in 1971. Area I was subdivided into Area IA, IB, IC, ID, IE, and IF. Area IC is attributable to a site between present a common for preservation area in front of University hall and the refectory of University. This area was excavated according to a plan for the refectory which has been standing there. Sounding were executed from 8 to 13 September. Archaeological excavations were operated from 16 October to 21 November. And additional excavations were executed about 15 December, materials have never been left but only four drawings left. Researchs trenches were dug out 40m. in length and 20m. in wide. On main excavations, remains dating from Yayoi to Tumulus age were identified. Mainly structural remains were five pit-dwellings in Tumulus Age, that subdevided three short term. Sue and Haji ware, iron tools were found in these pit-dwellings. Another pit-dwelling in middleval contained a few bowls. Another structural remains was ditch, dating Kodai, over 2m. in wide, running in north-south direction along the slope, had six pole pits like a brige, and had protecting terrac. In this ditch, the materials were as folows; Sue wares of bowl with fitted cover, jars, pots, Haji ware of bowls, pots, and clay net sinkers. These ware tells this ditch dating 9th and 10th C.

II Mameguchi examined spindle wheels dating from Yayoi to Tumulus age, found in Yamaguchi prefecture. He offered a notion to spindle wheels made of Hornblendee Andesite especially, which had a wide distribution in western part of Yamaguchi prefecture, and datable from middle Yayoi to late Yayoi. Arranging its distributeal maps and its final transition, he suggested the changes of social structure in case of Yamaguchi prefecture from Yayoi to Tumulus age.

Note

The remains of Area IA in Yoshida site have already reported in this compilation series Vol.XI published last year. But because of three newly discovered remains in labolatory works of this year, this report is added. These were a Sue ware in late tumulus and two Yayoi stone axes.

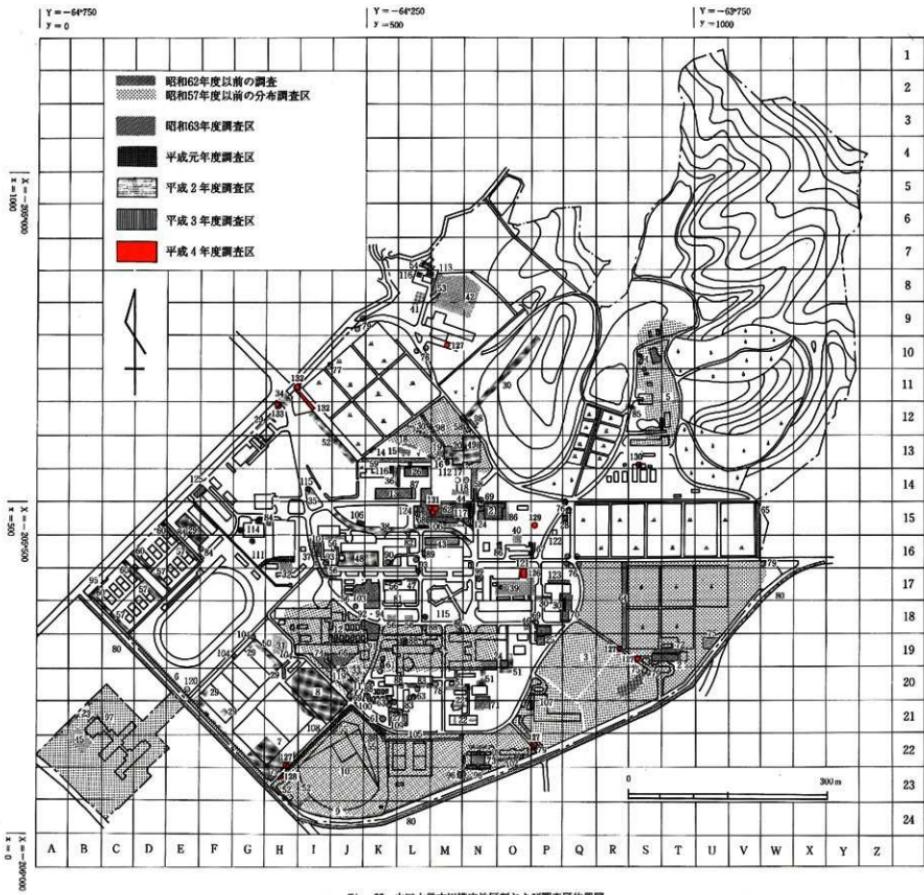


Fig. 96 山口大学吉田構内地区割および調査区位置図

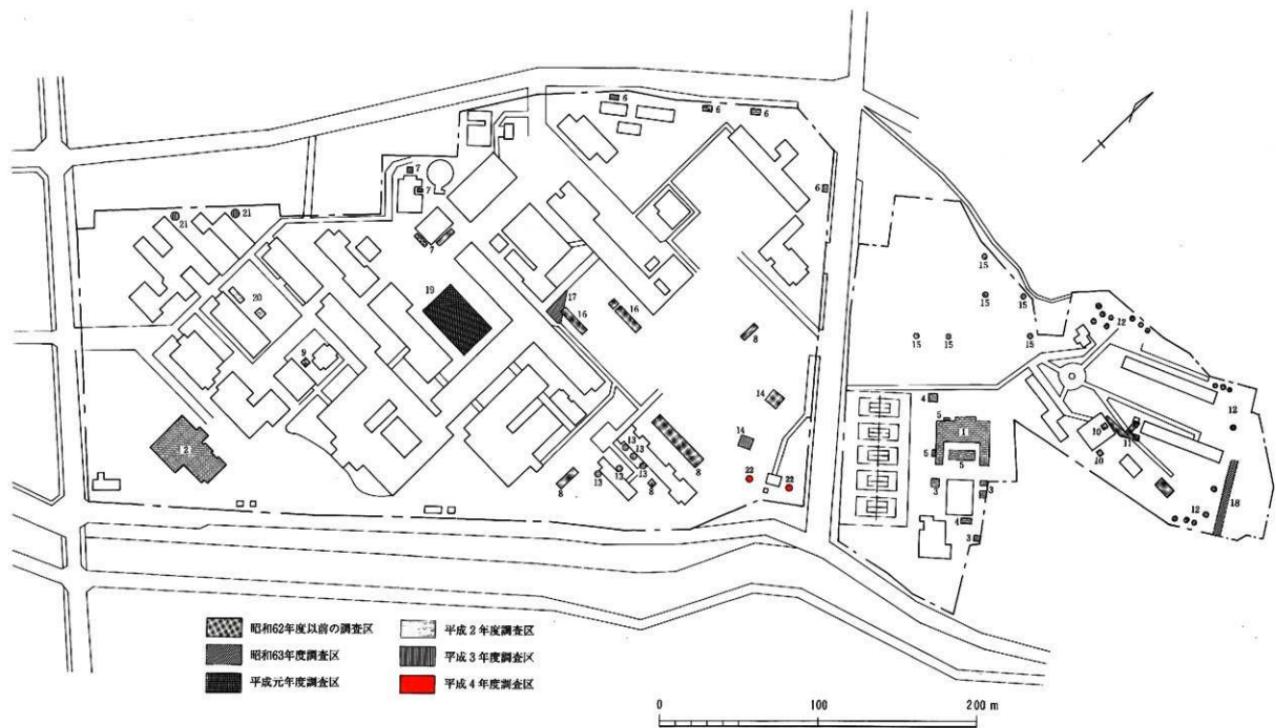


Fig. 97 山口大学小串構内調査区位置図

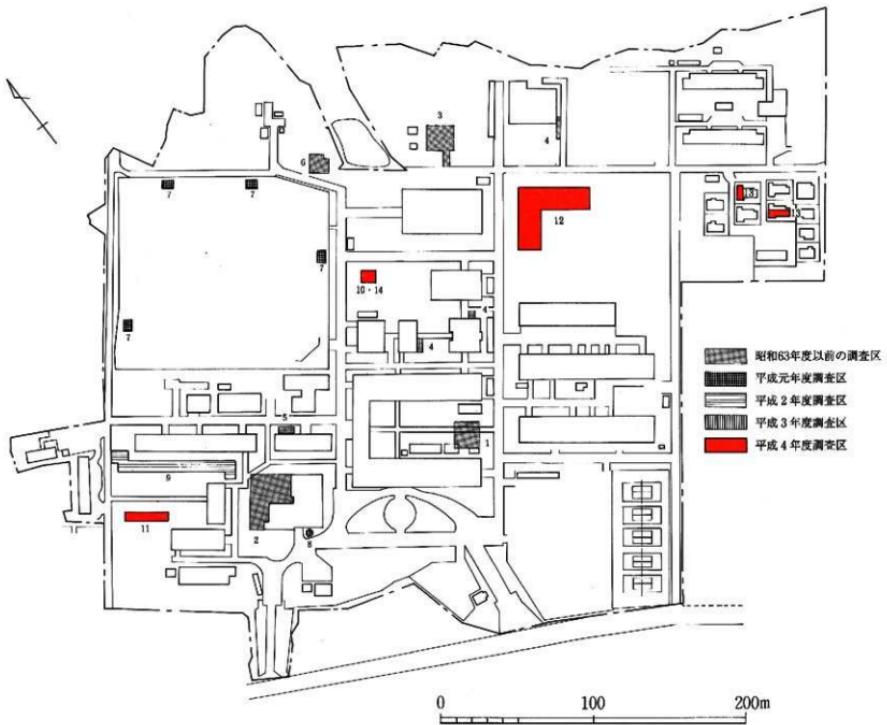


Fig. 98 山口大学常盤橋内調査区位置図



 昭和60年以前の調査区
 昭和61年度調査区
 昭和62年度調査区
 平成元年度調査区

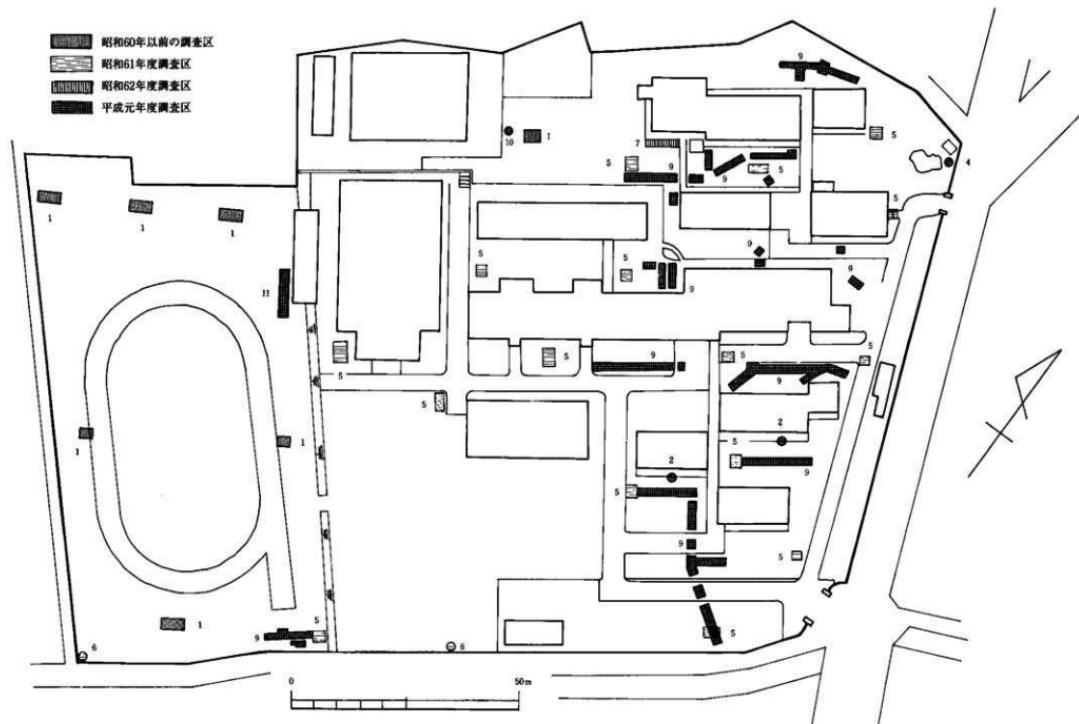


Fig. 99 山口大学亀山構内（幼稚園・小学校）調査区位置図

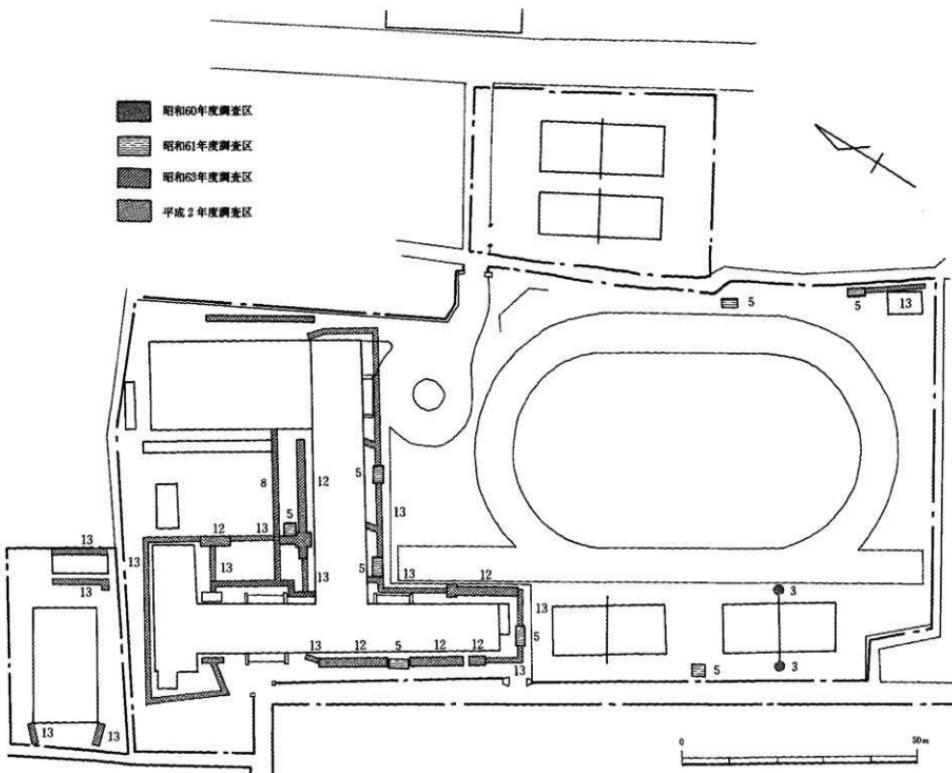


Fig. 100 山口大学亀山構内（中学校）調査区位置図

昭和62年度以前の調査区
 昭和63年度調査区
 平成2年度調査区
 平成3年度調査区
 平成4年度調査区

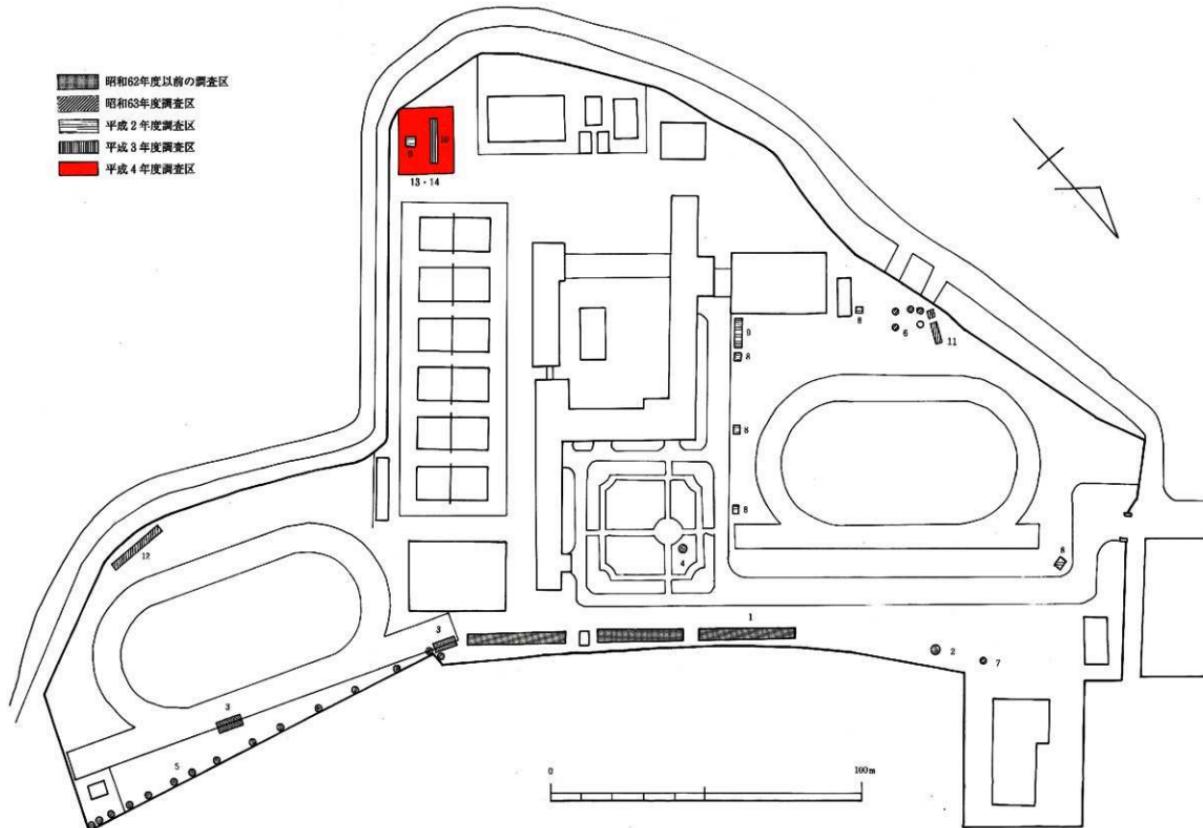
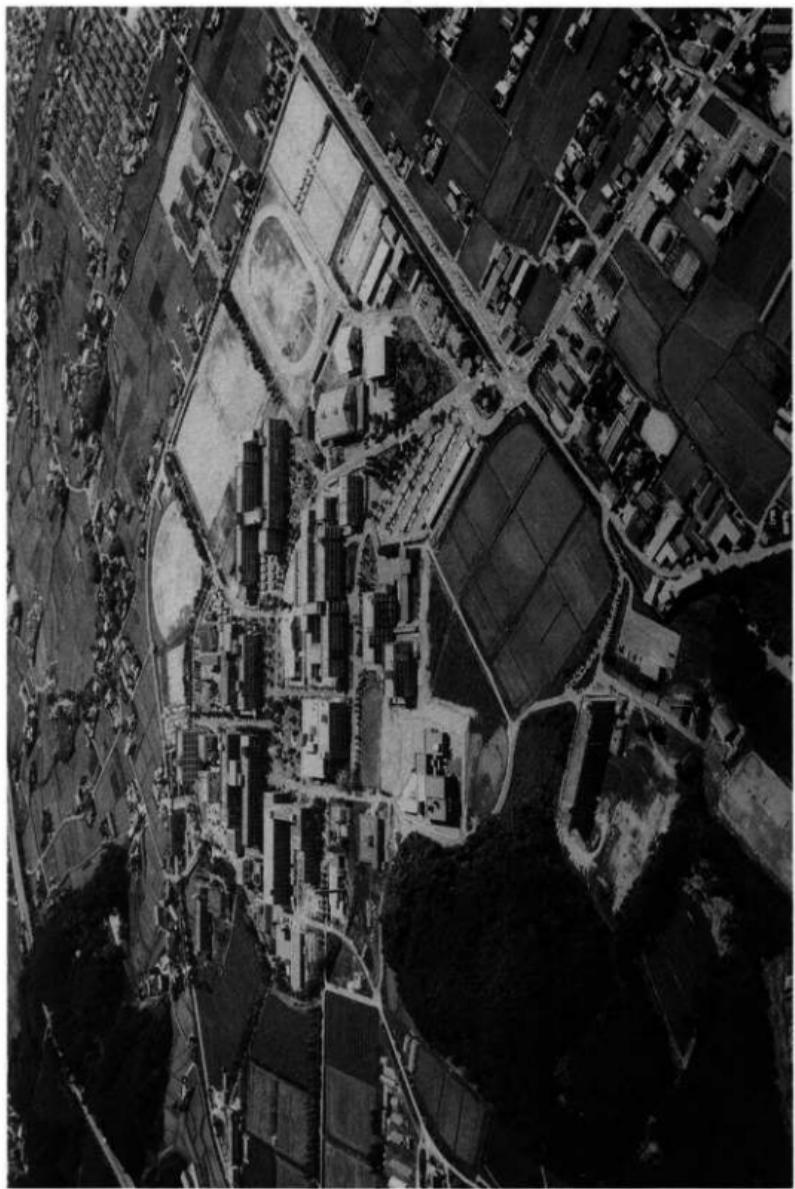


Fig. 101 山口大学光構内調査区位置図

PLATES



吉田佛内全景（北西から）

吉田構内農学部連合獣医学科棟新設に伴う発掘調査

(1)



(1) 調査前全景（南から）



(2) 繩文時代河川跡検出状況（南から）



繩文時代河川跡発掘状況（南から）

吉田構内農学部連合歎医学科棟新設に伴う発掘調査

(3)



(1) 縄文時代河川跡検出状況（西から）



(2) 縄文時代河川跡完掘状況（西から）



(1) 桶文時代河川跡西脇・北壁土層断面（南から）

(2) 桶文時代河川跡西脇・
網織トレンチ2土層断面（北から）

(3) 桶文時代河川跡北壁断面剥り（西から）



(4) 桶文時代河川跡北壁断面剥り（東から）

吉田構内農学部連合歎医学科棟新宮に半つ発掘調査

(5)



(1) 河川跡西壁及び縄文土器の出土状況



(2) 縄文土器の出土状況(近景)



(3) 縄文土器の出土状況



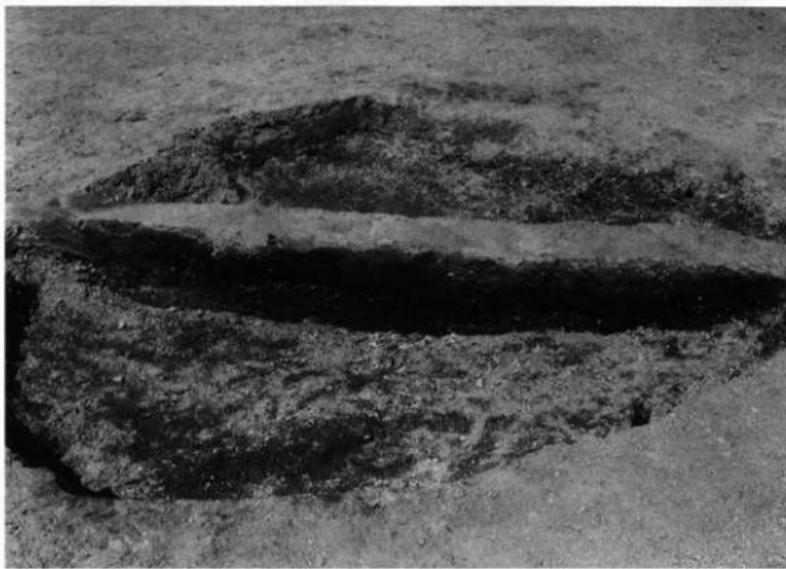
(4) 河川跡(縄文以前) 木の出土状況



(1) 1号暗渠（南から）



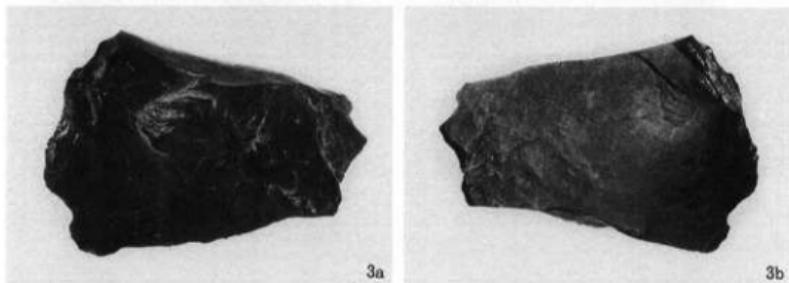
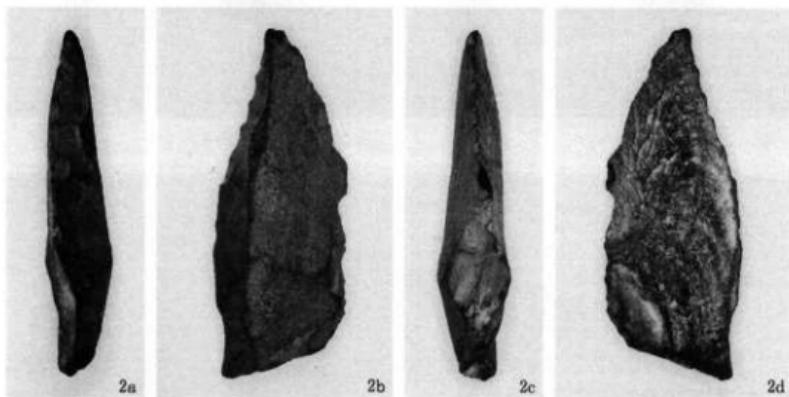
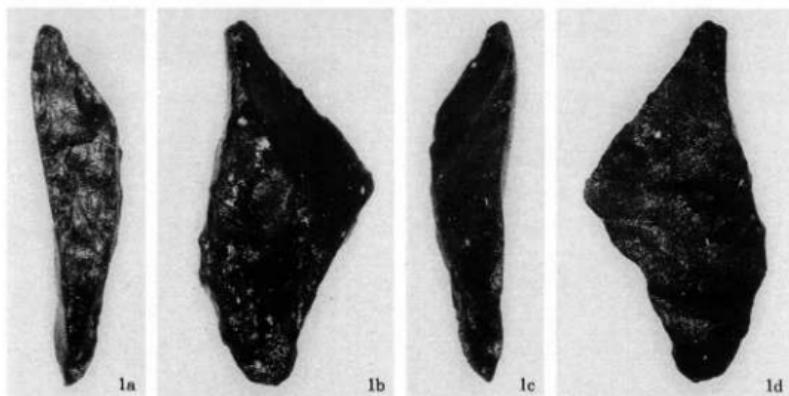
(2) 2号暗渠（西から）



(3) 近世土壤（南から）

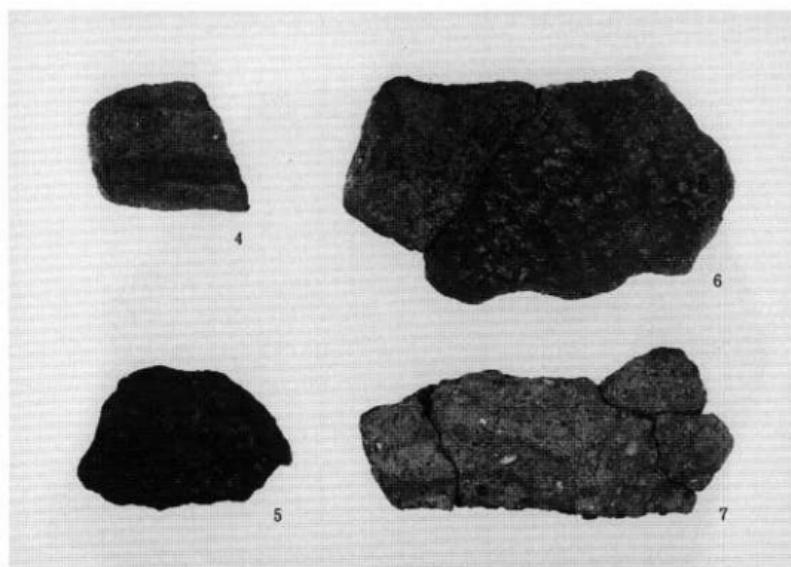
吉田構内農学部連合獣医学科棟新宮に伴う発掘調査

(7)

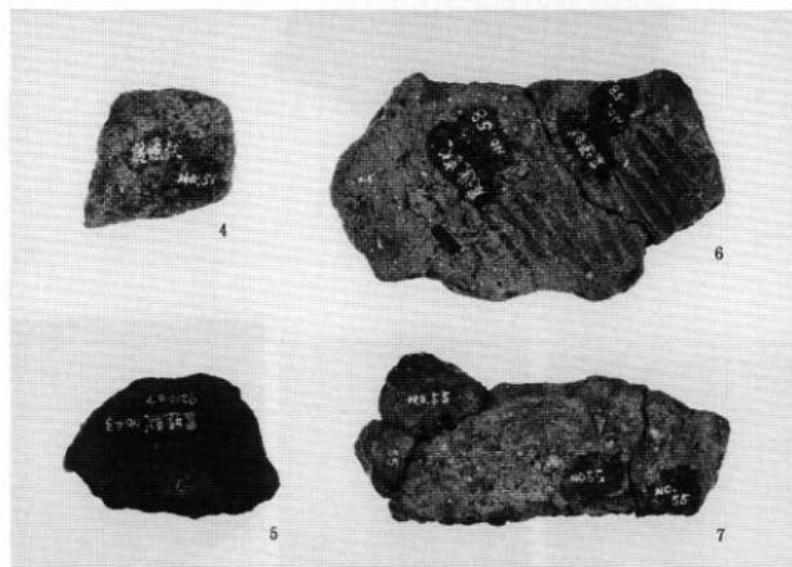


縄文時代河川跡出土遺物(1) 旧石器

吉田構内農学部連合獣医学科棟新營に伴う発掘調査
(8)



(表)



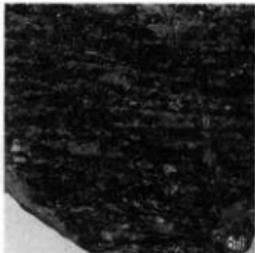
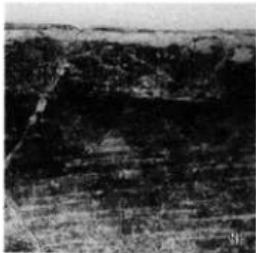
(裏)

吉田構内農学部連合獣医学科棟新嘗に伴う発掘調査

(9)



8a

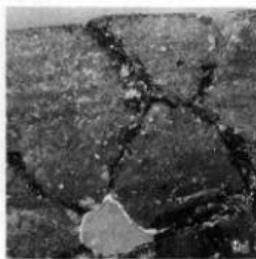
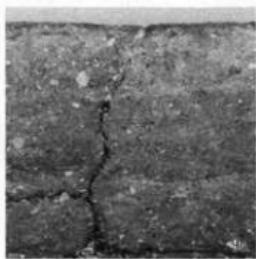
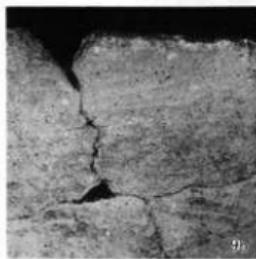
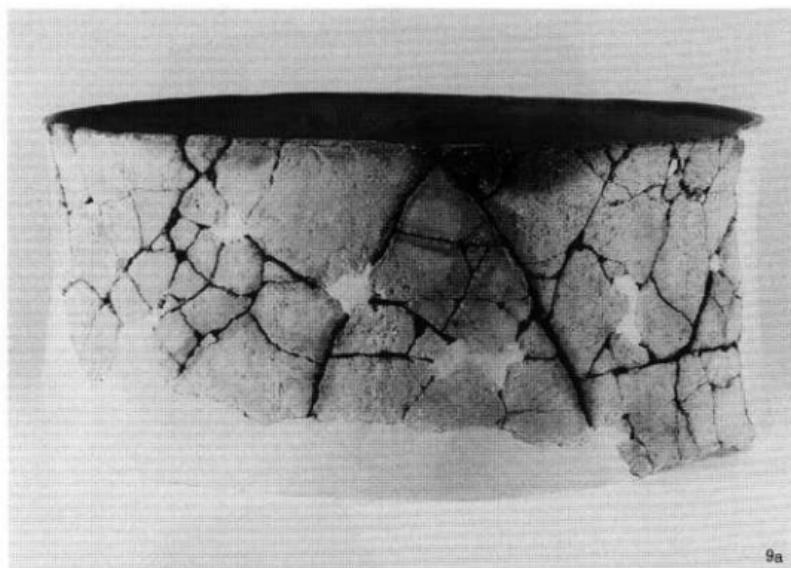


縄文時代河川跡出土遺物(3) 晩期土器深鉢B類 (b 口縁端部外面、c 口縁端部内面、d 頸部外面)

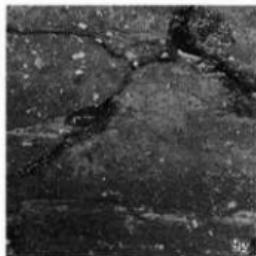
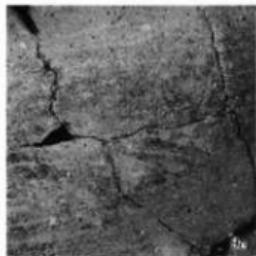
吉田構内農學部連合獸医学科棟新嘗に伴う発掘調査

(10)

9a



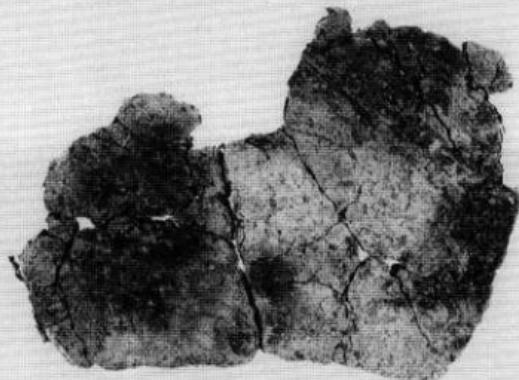
(b) 口縁端部外面、c-d 口縁端部内面



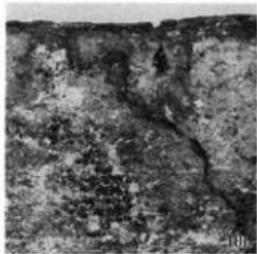
繩文時代河川跡出土遺物(4) 晩期土器深鉢C 1類 (e 脚部内面、f 脚部内面条痕、g 脚部内面)

吉田構内農学部連合獣医学科棟新嘗に伴う発掘調査

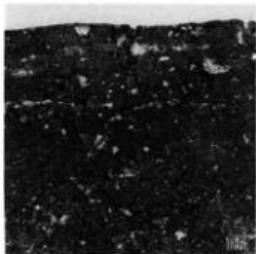
(1)



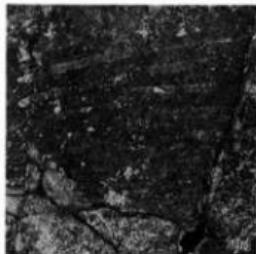
10a



10b



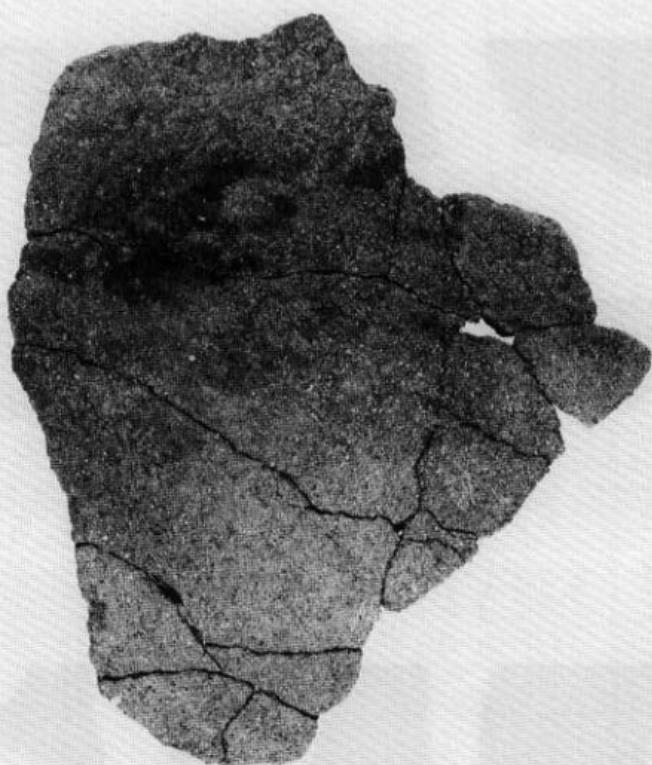
10c



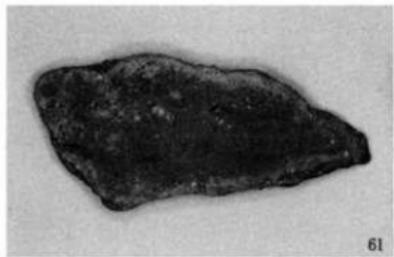
10d

縄文時代河川跡出土遺物(5) 晩期土器深鉢C 2類 (b 口縁端部外面、c 口縁端部内面、d 前部外面)

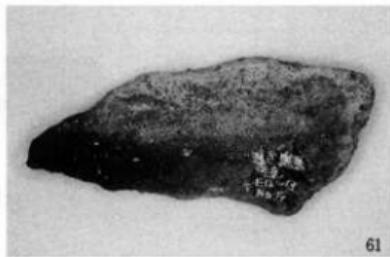
吉田構内農学部連合歎医学科棟新宮に伴う発掘調査
(12)



11



61

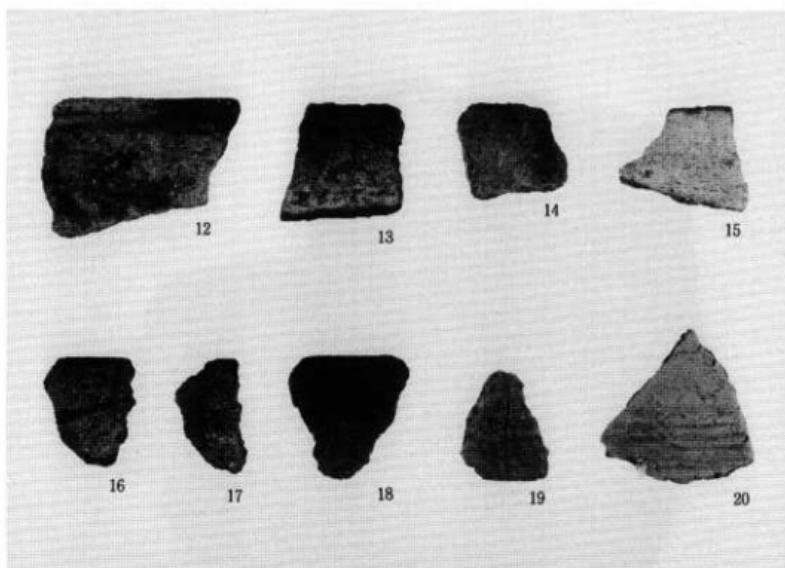


61

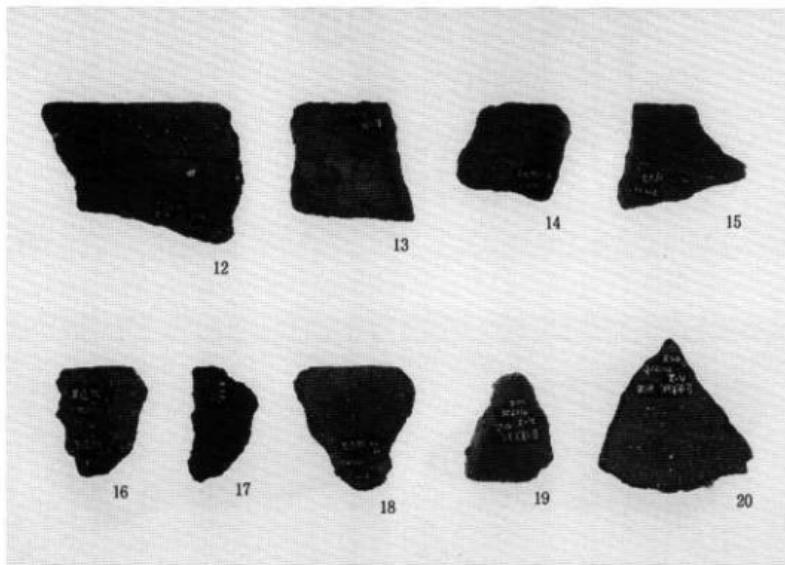
縄文時代河川跡出土遺物(6) 晩期土器深鉢D類・壺

吉田構内農学部連合獣医学科棟新嘗に伴う発掘調査

(13)



(表)

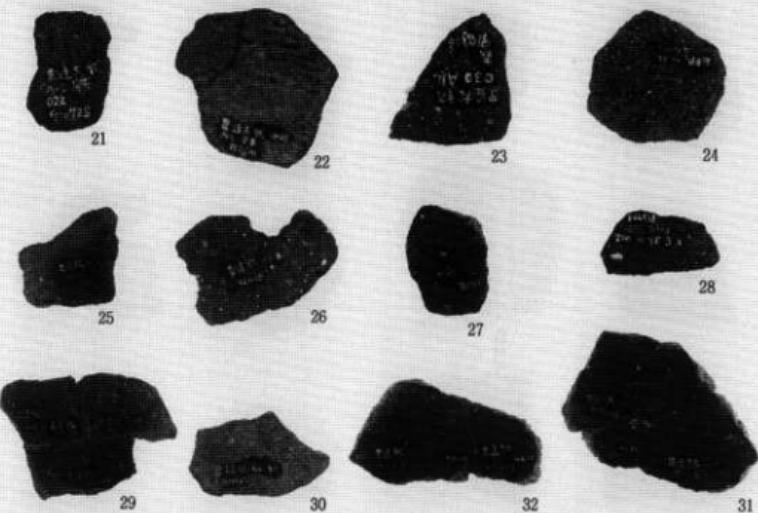


縄文時代河川跡出土遺物(7) 晩期土器深鉢口頭部

(裏)

吉田構内農学部連合歯医学科棟新嘗に伴う発掘調査
(14)

(表)

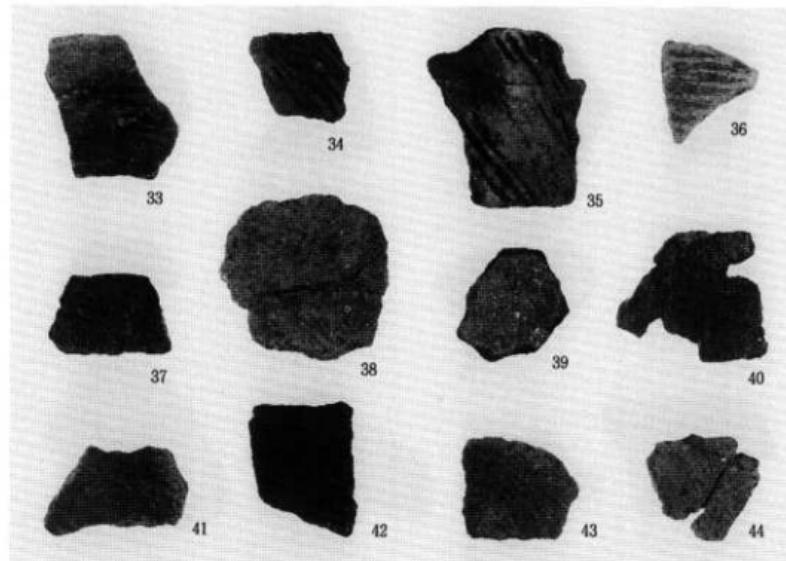


縄文時代河川跡出土遺物(8) 晩期土器深鉢頭部

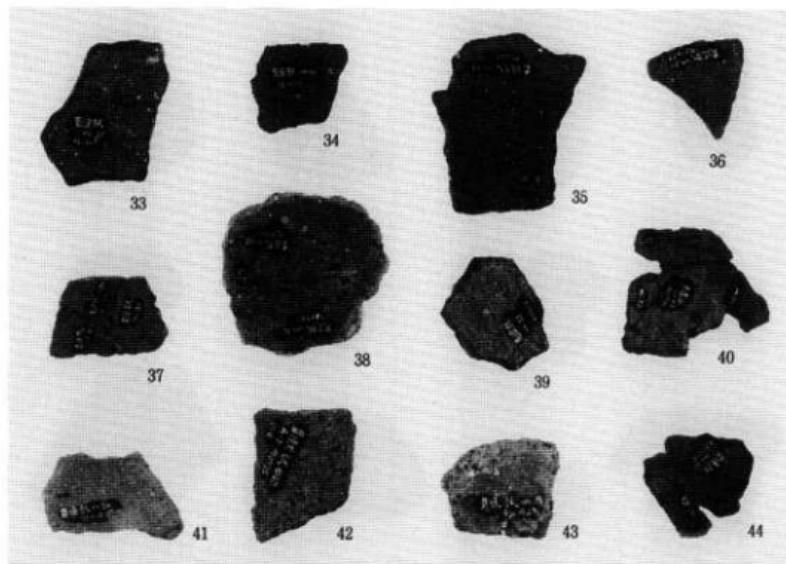
(裏)

吉田構内農学部連合歎医学科棟新營に伴う発掘調査

(15)



(表)

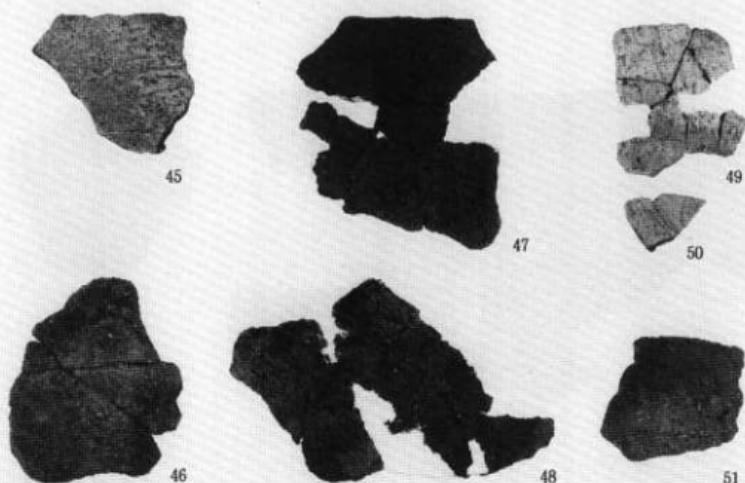


縄文時代河川跡出土遺物(9) 晩期土器深鉢胴部

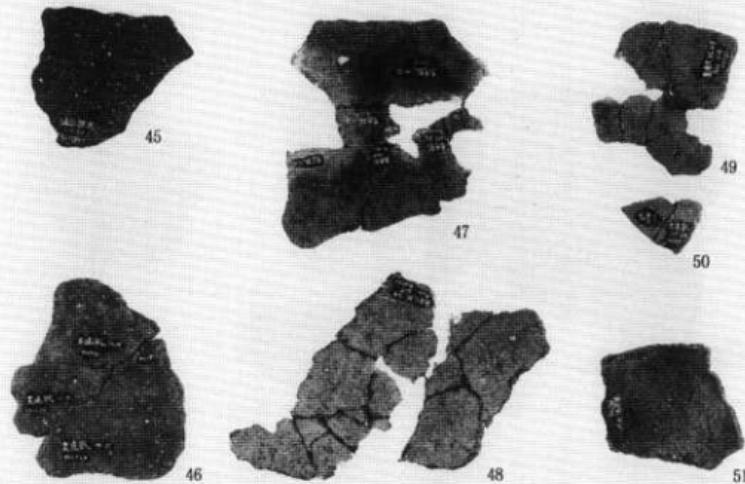
(表)

吉田構内農学部連合歎医学科棟新嘗に伴う発掘調査

016

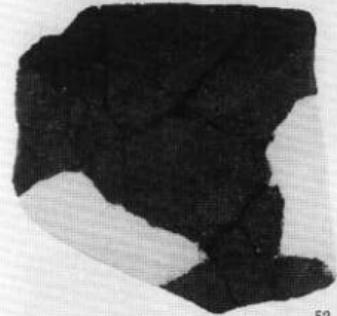


(表)



吉田構内農学部連合歯医学科棟新嘗に伴う発掘調査

(17)



52



53



54



55



56

(表)



52



53



54



55



56

縄文時代河川跡出土遺物(1) 晩期土器浅鉢

(裏)

吉田構内農学部連合獣医学科棟新嘗に伴う発掘調査
(18)

(表)



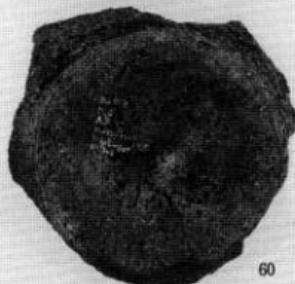
57



58



59



60



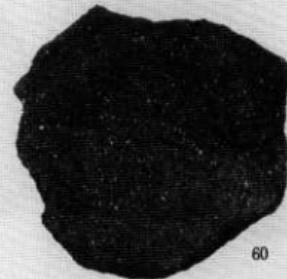
57



58



59



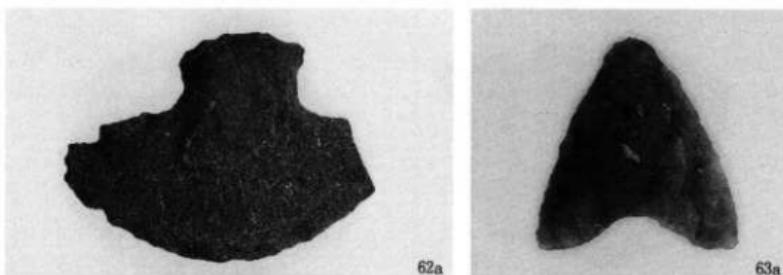
60

縄文時代河川跡出土遺物32 晩期土器底部

(裏)

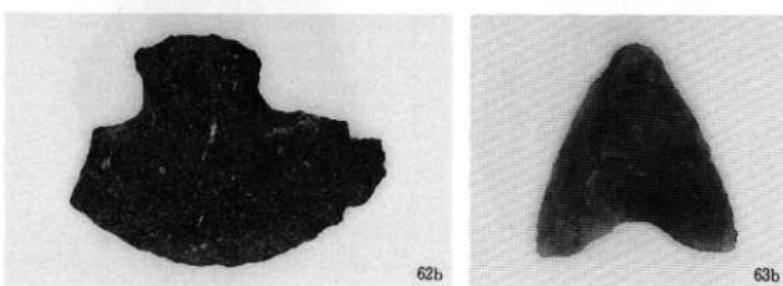
吉田構内農学部連合獣医学科棟新宮に伴う発掘調査

(19)



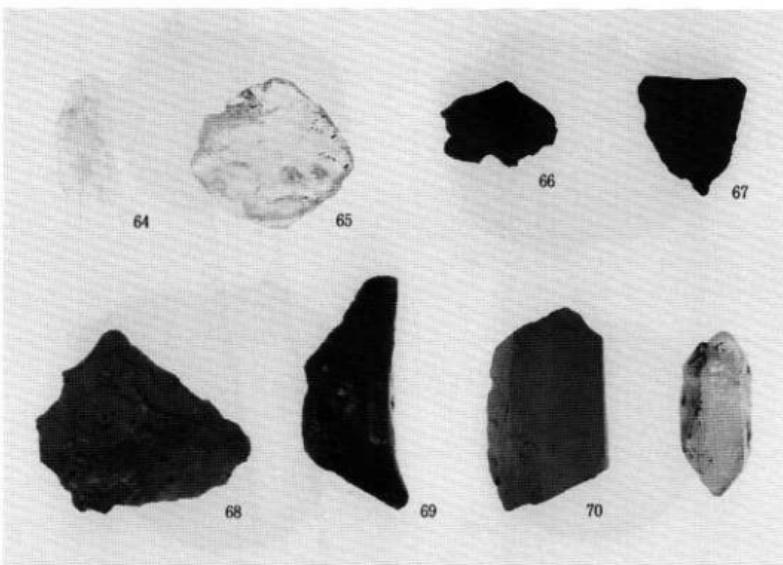
62a

63a



62b

63b



64

65

66

67

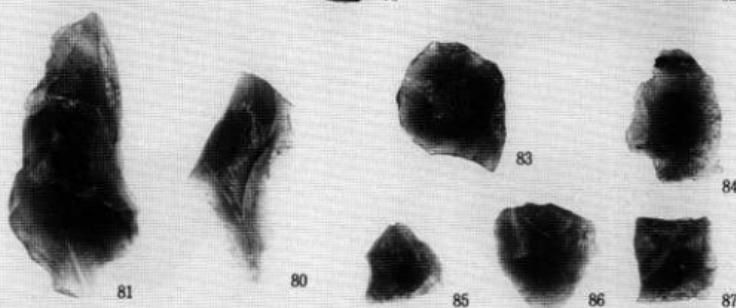
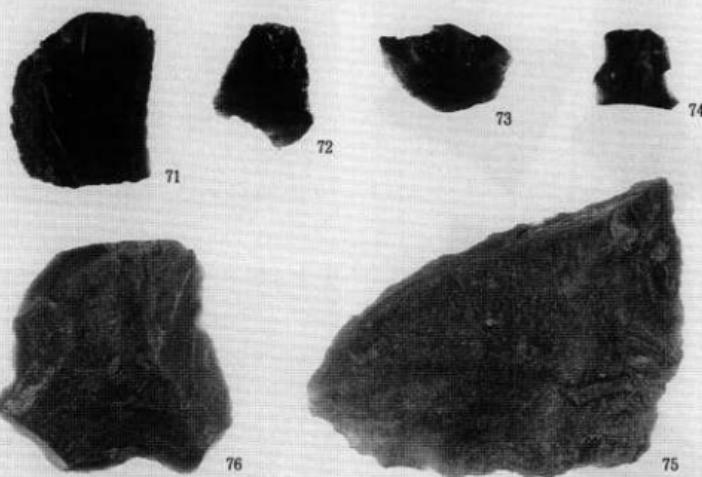
68

69

70

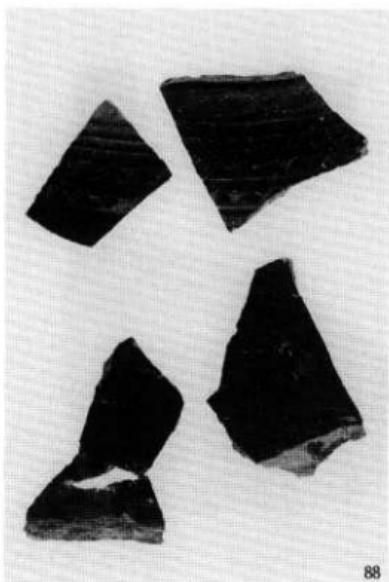
縄文時代河川跡出土遺物03 石匙・石鎌・各種石材剥片

吉田構内農学部連合歎医学科棟新嘗に伴う発掘調査
20

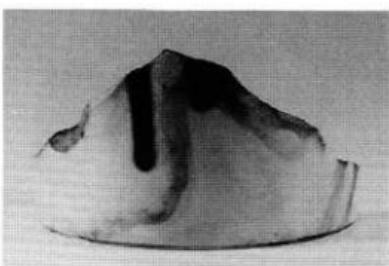


绳文時代河川跡出土遺物04 黒曜石剥片・姫島産黒曜石剥片

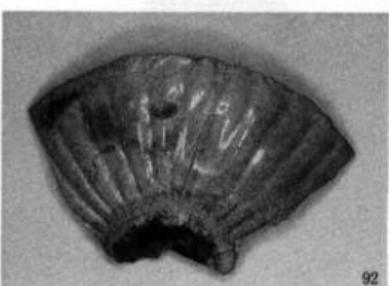
吉田構内農学部連合歯医学科棟新宮に伴う発掘調査
(2)



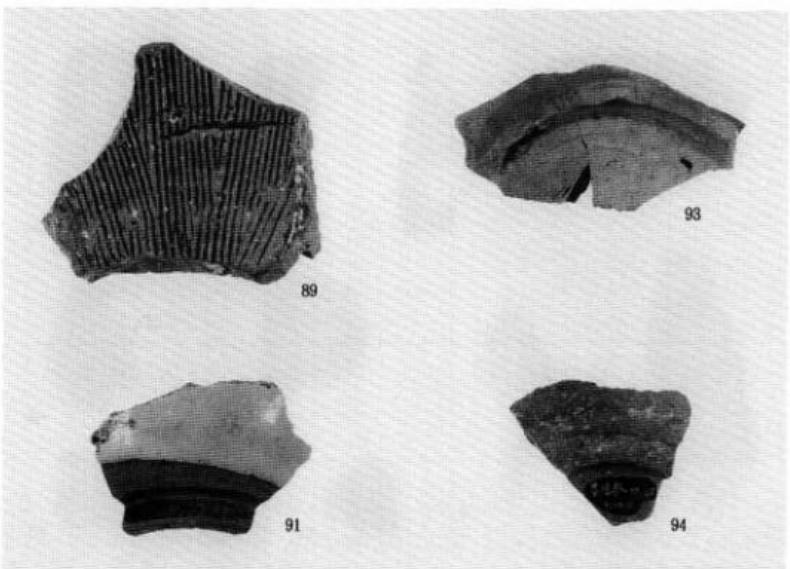
88



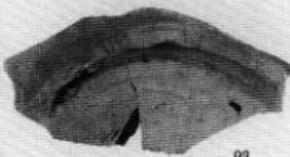
90



92



89



93



91



94

近世土壤及び包含層出土遺物



光橋内（教育学部附属九小学校・同光中学校）全景（北東から）

光構内教育学部附属光中学校武道館新館に伴う発掘調査



(1)

調査区南壁土層断面（西から）



(2) 調査区東壁土層断面（南から）

光構内教育学部附属光中学校武道館新營に伴う発掘調査

(2)



(1) 調査前全景（北から）



(2) 第2遺構面完掘状況（北から）

光構内教育学部附属光中学校武道館新館に伴う発掘調査

(3)



(1) 第21号土壤（西から）



(2) 第22号土壤（東から）

光構内教育学部附属光中学校武道館新宮に伴う発掘調査



(1) 第23号土壤検出状況（東から）



(2) 第23号土壤完掘状況（東から）



(3) 第24号土壤検出状況（東から）



(4) 第24号土壤完掘状況（東から）

光構内教育学部附属光中学校武道館新館に伴う発掘調査



(5)

(1) 土器集中区出土状況（東から）



(2) 土器集中区須恵器出土状況（近景）



(3) 土器集中区土師器出土状況（近景）

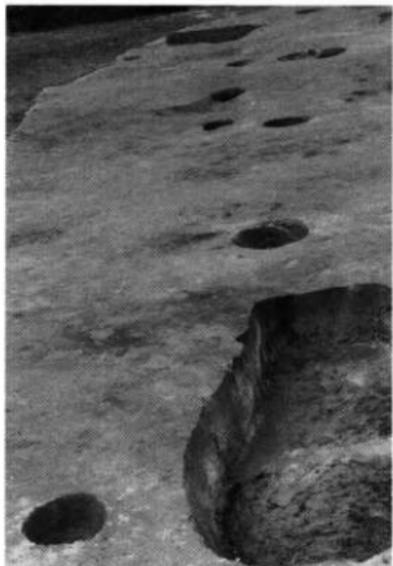


(1) 第1造構面検出状況（北から）



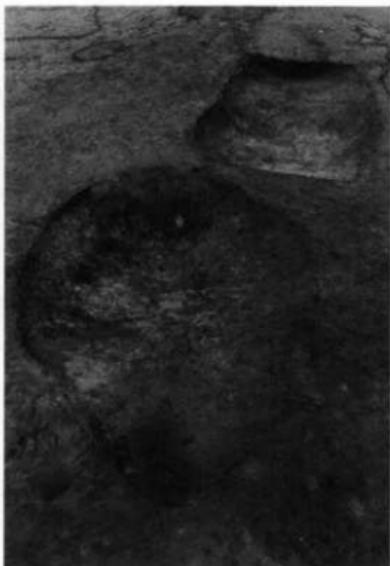
(2) 第1造構面完掘状況（北から）

光構内教育学部附属光中学校武道館新館に伴う発掘調査



(7)

(1) 柱穴群完掘状況



(2) 第1・2号土壤（北から）



(3) 第3・4号土壤（北から）

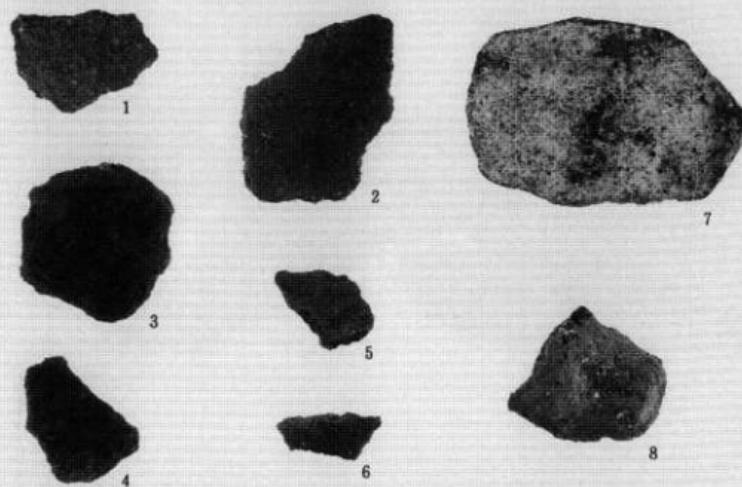


(4) 第3・4号土壤（南から）

光構内教育学部附属光中学校武道館新館に伴う発掘調査

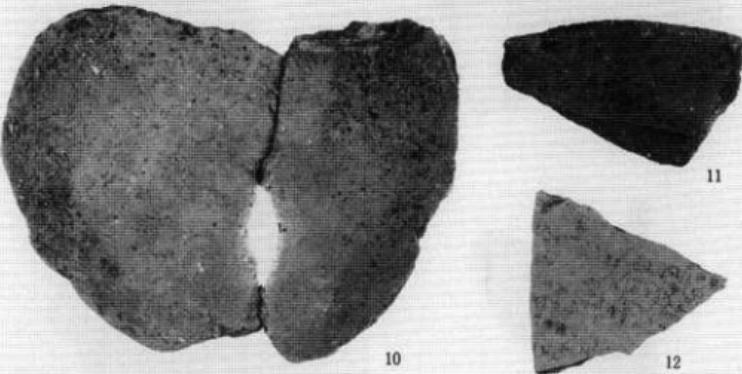
(8)

(1) 第22号土壤及び調査区出土純文土器



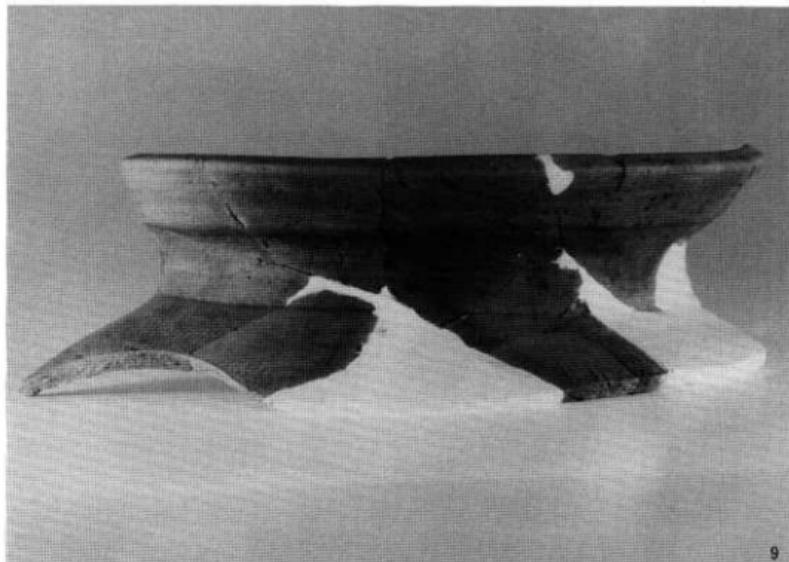
(8)

(1) 第22号土壤及び調査区出土純文土器



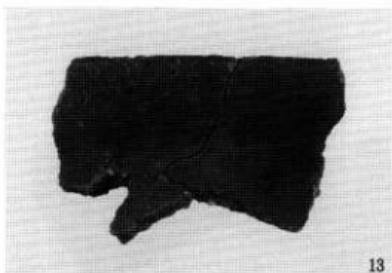
(2) 第23号土壤及び土器集中区出土遺物

光構内教育学部附属光中学校武道館新嘗に伴う発掘調査



(9)

(1) 土器集中区出土遺物



13



14

(2) 第24号土壤出土遺物



15

(2) 第VI層（包含層3）出土遺物

光構内教育学部附属光中学校武道館新館に伴う発掘調査



22a



22b



23 (10)



17



18



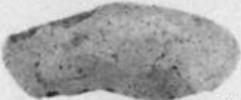
20



16



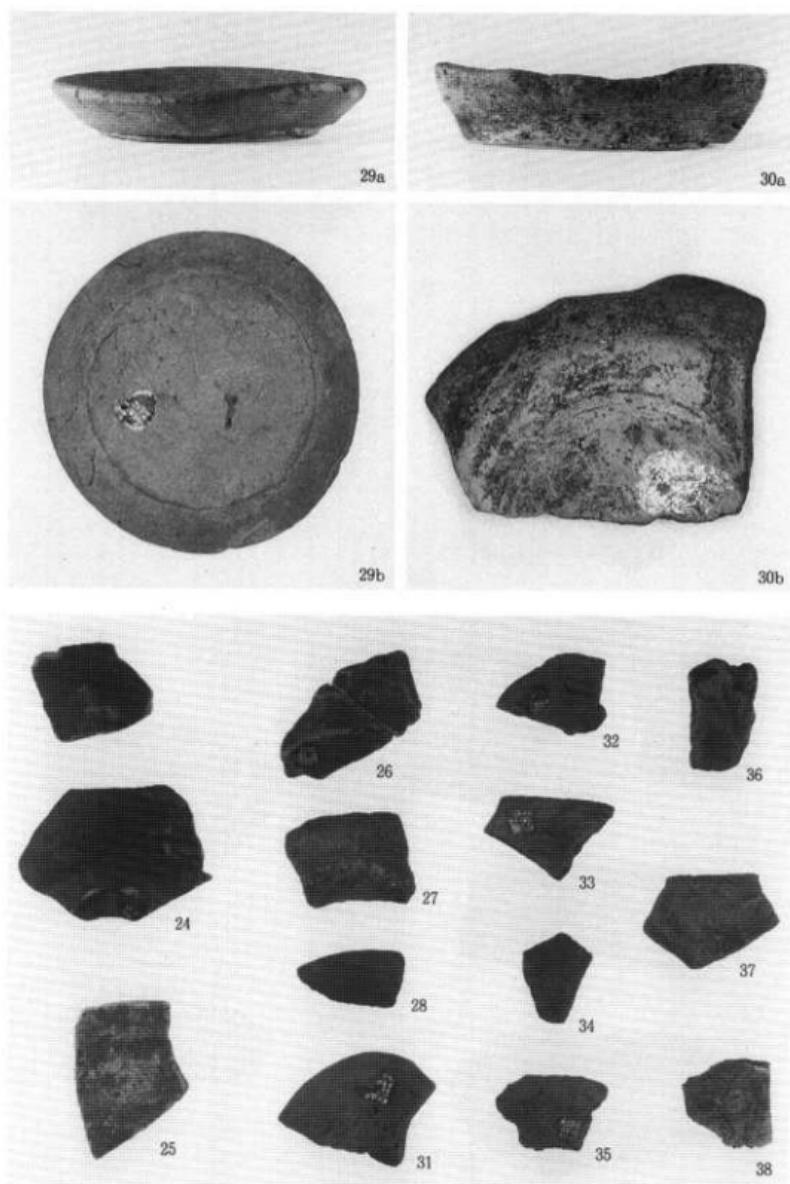
19



21

光構内教育学部附属光中学校武道館新館に伴う発掘調査

(II)

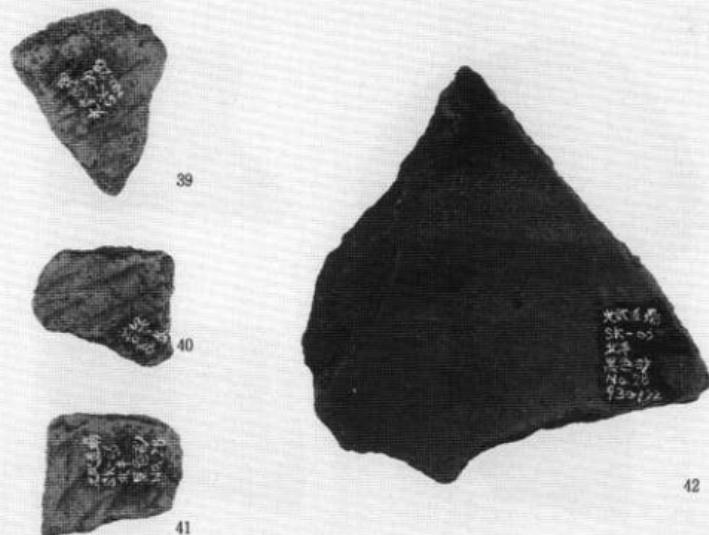
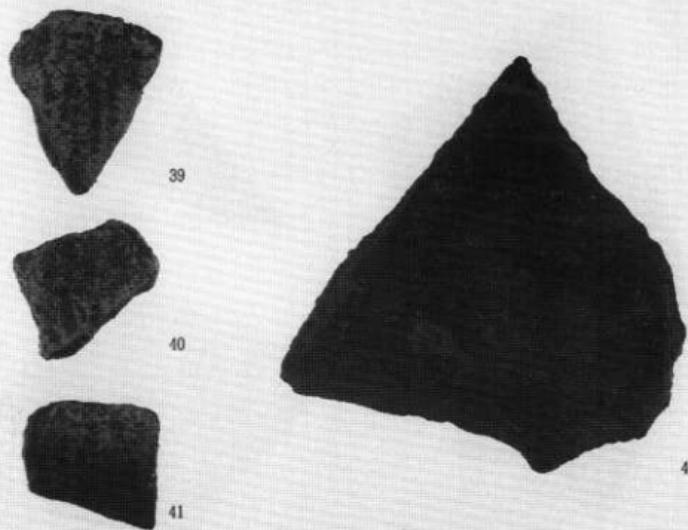


第1・2号土壤出土遺物

光構内教育学部附属光中学校武道館新營に伴う発掘調査

(12)

(表)

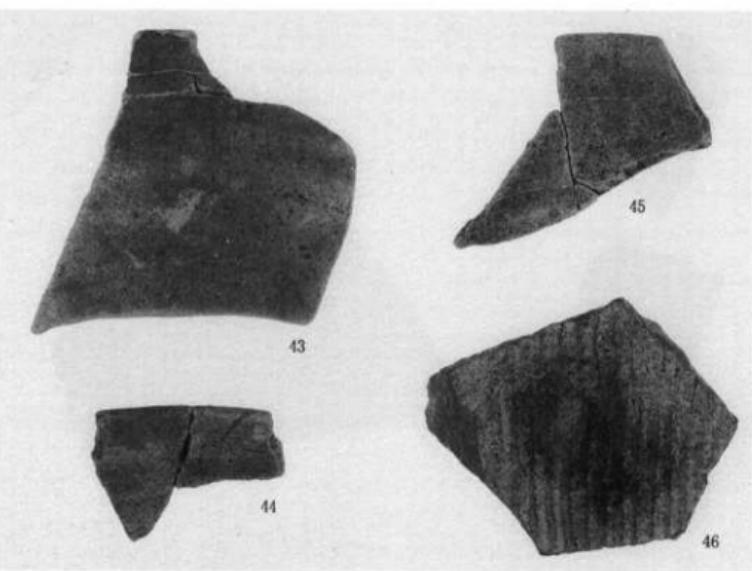


第3号土壤出土遺物

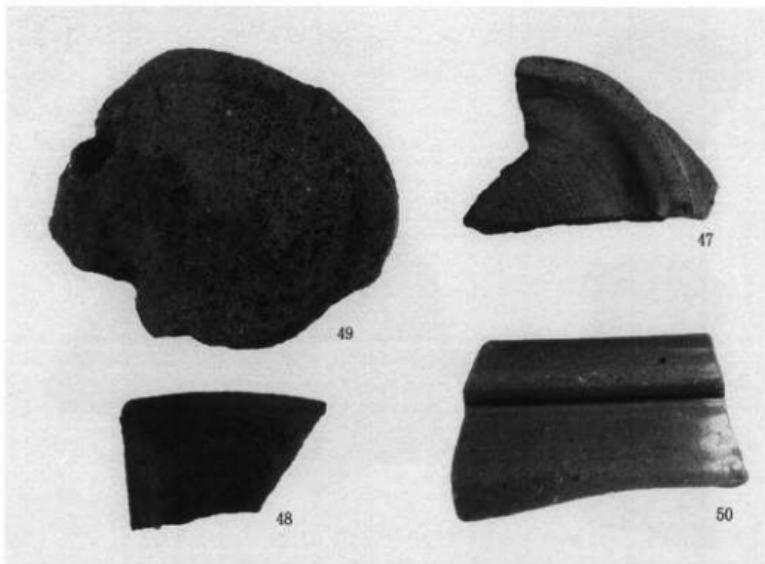
(裏)

光構内教育学部附属光中学校武道館新營に伴う発掘調査

(13)



(1) Pit-1・2 出土遺物



(2) 第IV層(包含層1)出土遺物及び御手洗湾採集遺物



吉田構内統合移転当時全景（昭和40年頃）

吉田遺跡第I地区E区の調査

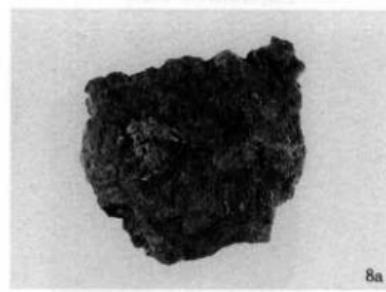
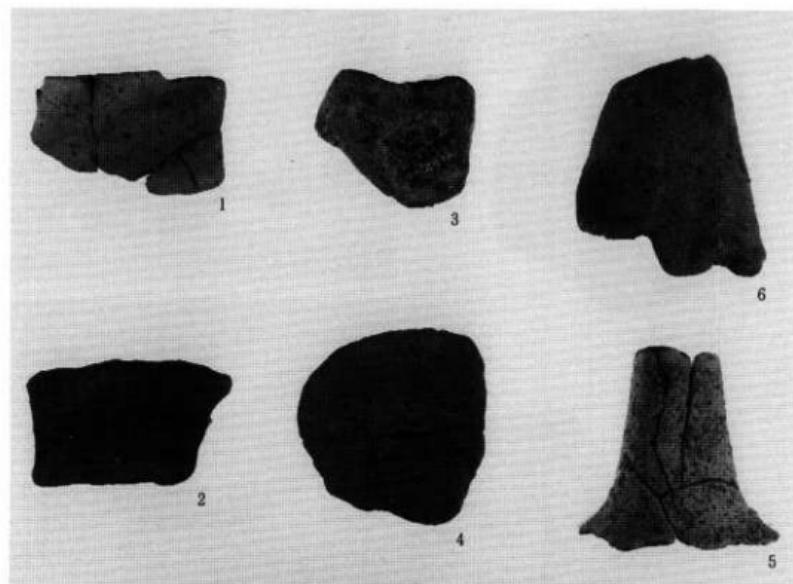
(1)



(1) 調査前全景（西から）



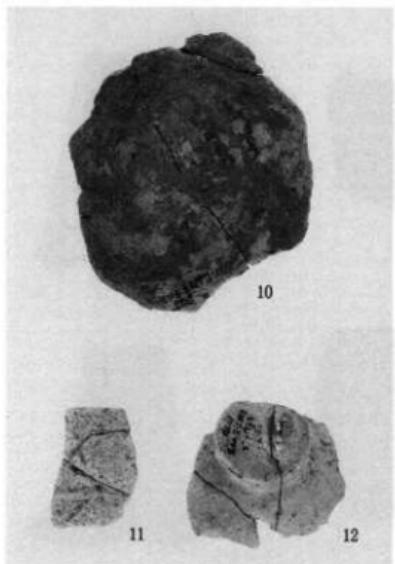
(2) 第2号竪穴住居跡（西から）



第1・2号竪穴住居跡出土遺物

吉田遺跡第I地区E区の調査

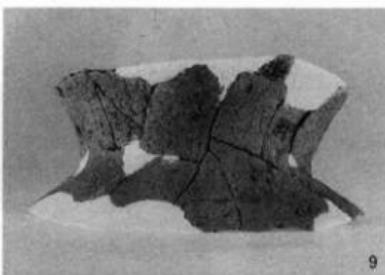
(3)



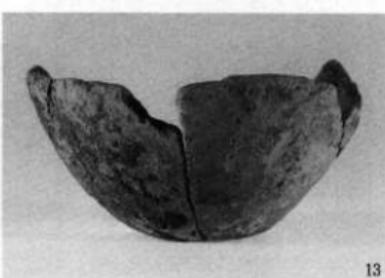
11



12

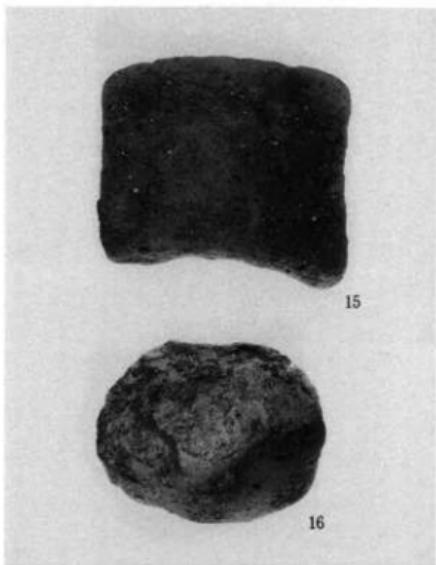


9



13

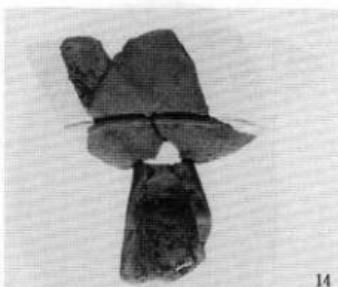
(1) 第3号竪穴住居跡出土遺物



15



16



14

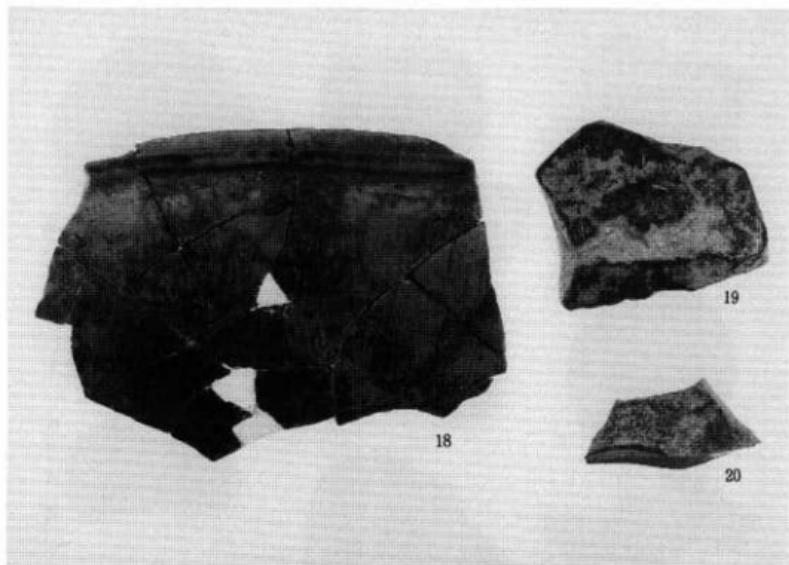


17a

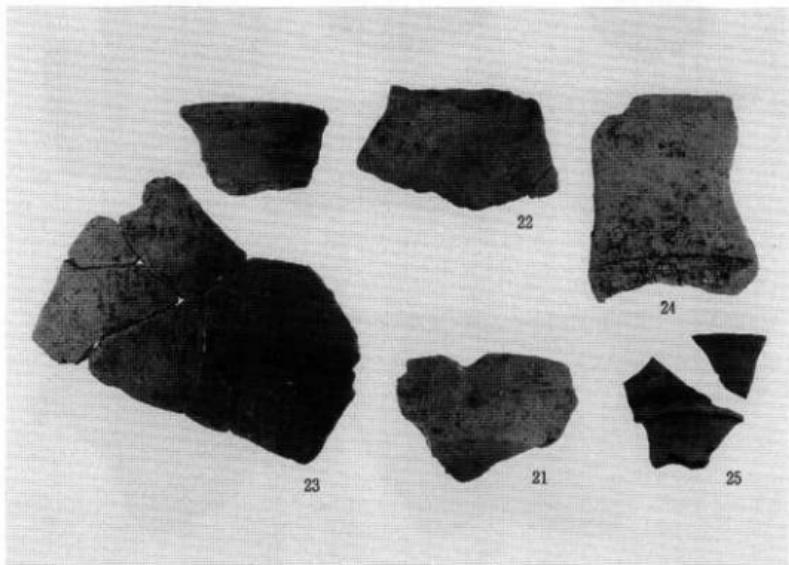


17b

(2) 第4号竪穴住居跡出土遺物



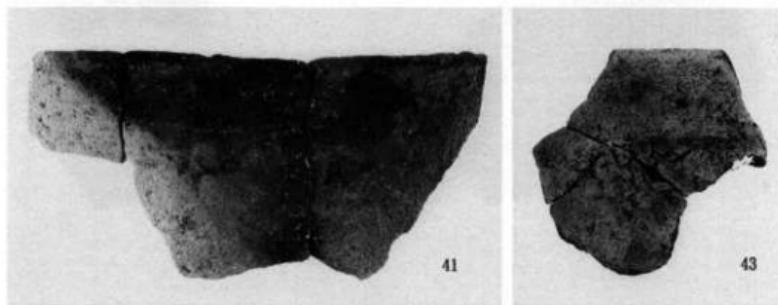
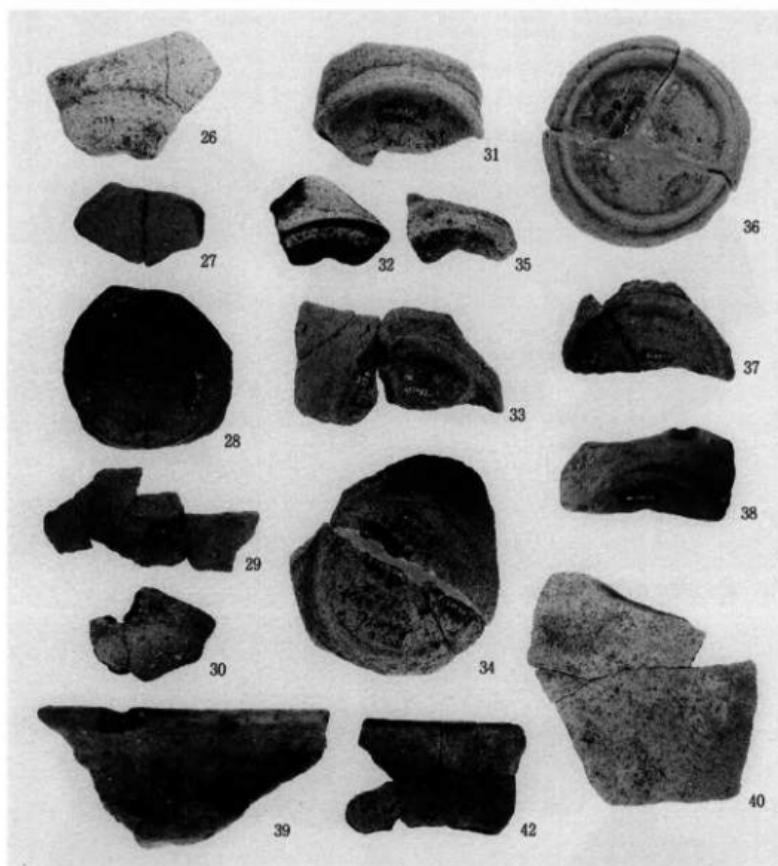
(1) 第5号竪穴住居跡出土遺物



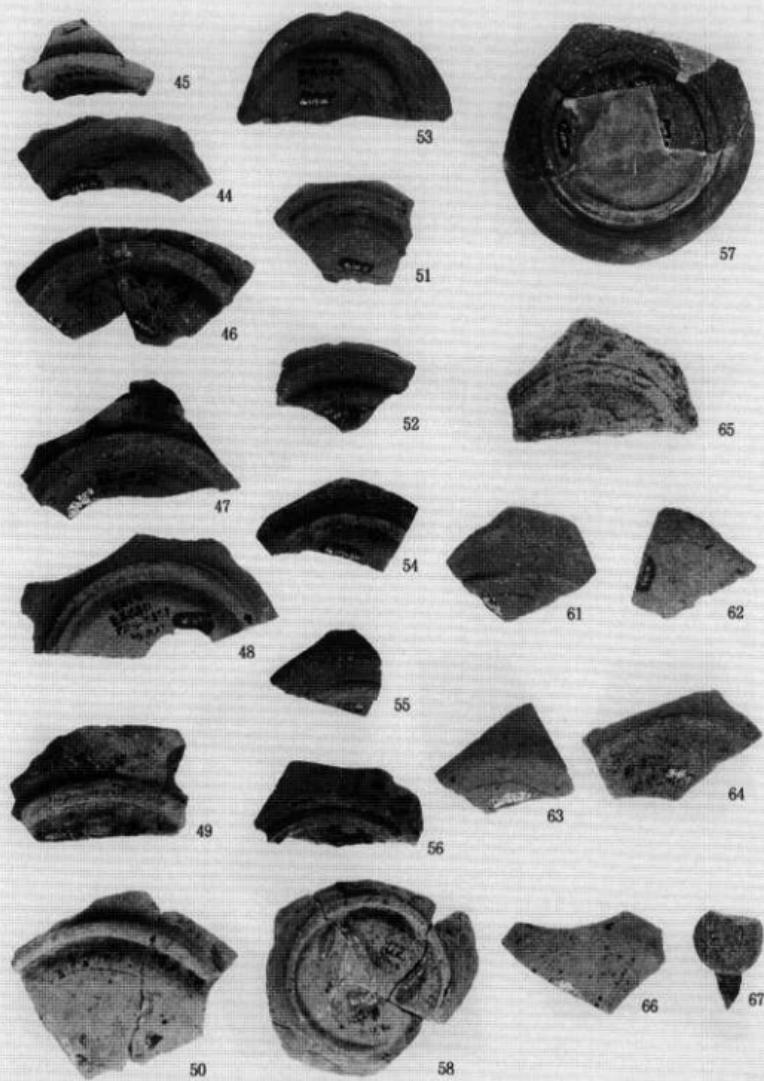
(2) 第6号竪穴住居跡出土遺物

吉田遺跡第I地区E区の調査

(5)



溝状遺構出土遺物(1)



吉田遺跡第I地区E区の調査

(7)



59



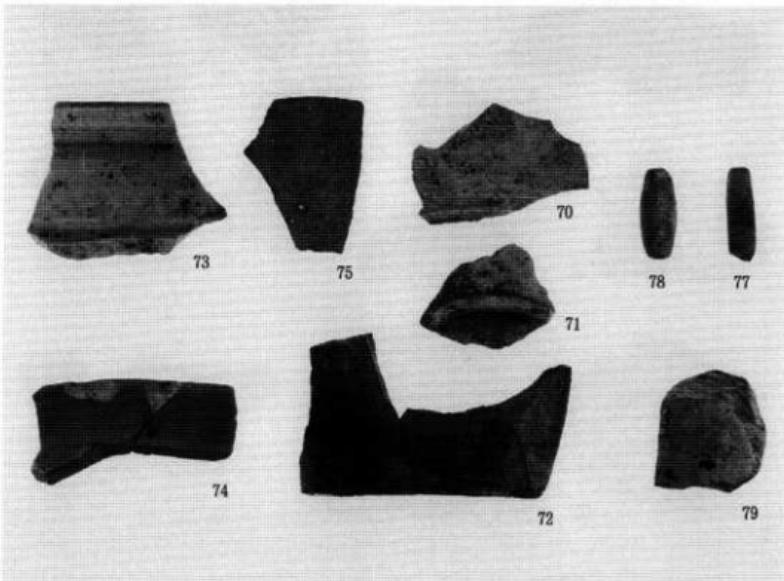
68



60



69



70

78

77

71

73

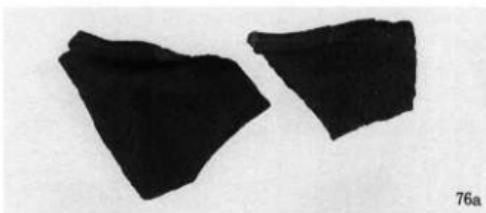
75

74

72

79

溝状構出土遺物(3)



76a



80



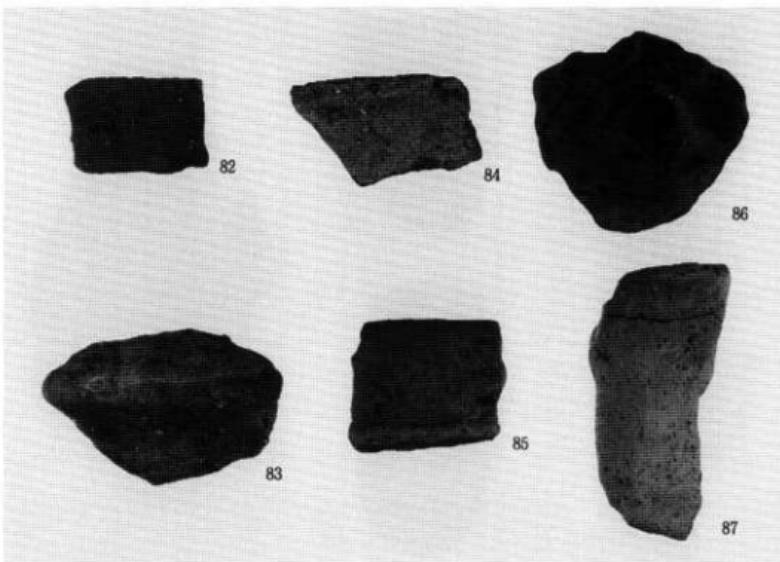
76b



81

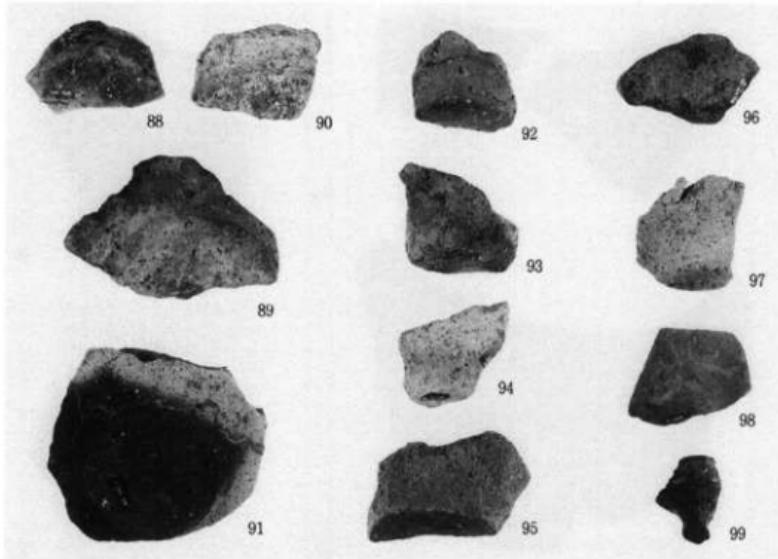
(1) 溝状造構出土遺物(4)

(2) 造構に伴わない前期弥生土器

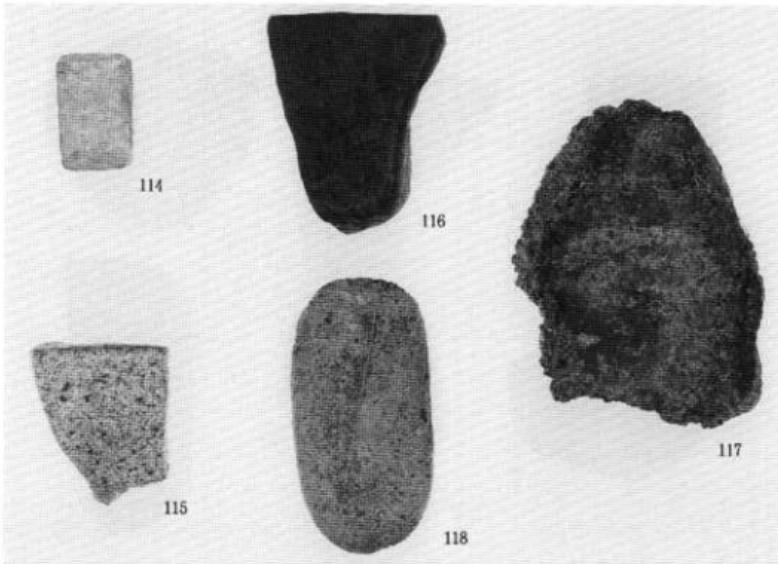


(3) 造構に伴わない土器

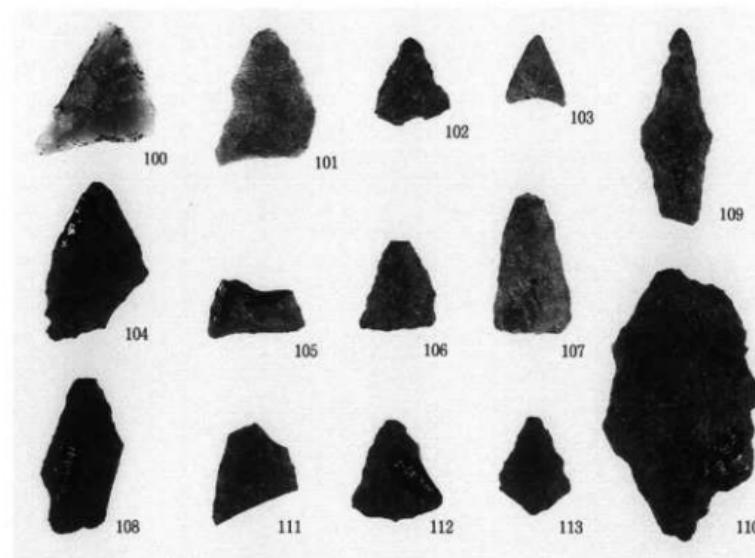
吉田遺跡第一地区E区の調査



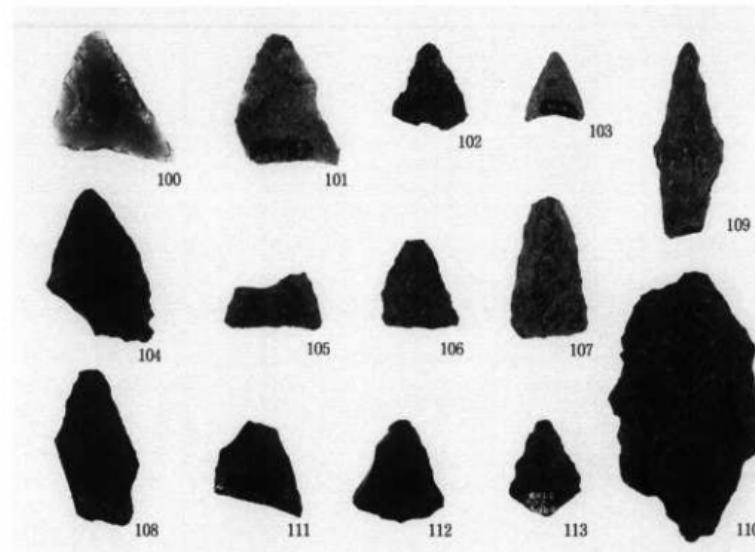
(1) 遺構に伴わない土器底部



(2) 遺構に伴わない石器



(表)



遺構に伴わない石器

(裏)

山口大学構内遺跡調査研究年報XII

平成6年3月

編集 山口大学埋蔵文化財資料館

発行 山口大学

〒753 山口市大字吉田1677-1

印刷 南三共印刷

〒755 宇部市西中町11-11

ARCHAEOLOGICAL RESEARCHERS AND STUDIES
AT YAMAGUCHI UNIVERSITY Vol.XII

CONTENTS

Chapter

I	General outline of the project on the Yamaguchi University campus in 1993	1
II	Archaeological excavations in relation to the Construction of the Building of leagued postgraduate for veterinary medicine, the Department of Agriculture on the Yoshida campus	5
III	Archaeological excavations in relation to the Construction of Hall for Military art at the Hikari Junior High School on the Hikari campus ...	37
IV	Soundings under construction performed on the Yamaguchi University campus	61
V	Examination under construction performed on the Yamaguchi University campus	65

Appendix

I	Archaeological research for Area IE at Yoshida Site	77
II	Spindle wheel at case of Yamaguchi prefecture	117

Note

Newly noticeable remains on the excavation in Area IA at Yoshida Site	131
---	-----

The gist of researches and studies at Yamaguchi University

Regulations of Yamaguchi University Archaeological Museum	133
Regulations of Yamaguchi University Archaeological Museum Management Committee	134
List of researches in Yamaguchi University	136
Summary	145

Published by

Yamaguchi University Archaeological Museum

Yamaguchi, 1994